

子供のころから人間の残酷さと下劣さを目のあたりにしてきた孤児カラマーノフ。彼らに憎しみを抱き、自分を人間の一人とみなすことを嫌ったカラマーノフは、人間の欠陥を明らかにする旅を始めた。世の中を良くし、進化のスピードをあげ、知的生命体の高度な新しい種の登場を可能にするにはどうすればいいのか？

主人公の意識の流れに乗せて人類の新たな進化の道を見つけるための地獄遍歴に読者を引き込む現代のカラマーゾフの物語。

Александр Потёмкин

Я

Повесть



アレクサンドル・ポチヨムキン
コツクリル浩子訳

群像社

目次

私^ヤ
9

解説 — 現代に蘇るドストエフスキー —
254

私^ヤ

人が神になるために

神は人となった！

聖大ワシーリイ、四世紀

『急がなければならなかったのだ。ついにすべてが明白になった。すべてが整然と論理立てられ、意識も落ち着いた。これまでの固有の私の探求は、子供のころからあれほど待ち望んでいた平安を得たように見えた。真実がこれほど思いがけなく意識の中に飛び込んでくるとは思いもよらないことだった！ 多くのことはたいていそうしたものだが、すべてのことが簡単に、そして、急速に進行した。どうしたわけか、朝自分のマットレスの上で目が覚めると、今後のあり方についての独自の決断が文字通りわたしに襲いかかってきたのだ。まるで誰かの賢明な声が神秘的なたぐらみでも秘めているかのように、このわたし、辛酸をなめつくしてうちひしがれた三十歳の男ワシーリイ・カラマーノフに、あの秘密の使命を遂行し、急いで自己実現すべきだとささやいたのだ。ロシアのどこか辺鄙な田舎町ではなく、シバーヤ・マスカでもスルグトでもアルダンとベルカキートを結ぶヤクーツク幹線自動車道に沿ったニュータウンのひとつでもなく、首都のスタロヴァガニコフスキイ横丁の掃除夫のあばら屋でのことだ。わが祖国の件の住人によってしっか

り踏みつけられた通りで、ついさつきわたしの燃えさかる頭脳にもたらされたものとはまったく別物の知識を人が獲得する首都の建物、国立図書館の窓の向かいで、それは起こったのだ。もし図書館の閲覧者たち——学生や教授といった知識層の代表者たち——が、わたしが突然何をそれほど熱烈に望んだかを知っていたとしたらどうだろう！ わたしがこれほど大胆に決定したことが何であるかがかれらに理解できたとしたらどうだろう！ わたしがこんなに急いで何をしていたのか、何に和解を見出そうと望んでいるのか理解できたとしたら！ かれらは神秘的な力にわたしに影響を与えているに違いないと考えるだろうし、極度の強迫観念なしにはこのような行動に出ることを独自に思いつくはずはないと公然と証明しにかかるにちがいない。わたしは悪魔にとりつかれておかしくなったのだ、完全に気が狂っているのだ、わたしの目前に迫った行動計画にはとても高い報酬が払われているのだ、わたしは自分自身と現在と未来の世界に、わたし個人の特異性をなんとしても証明したいと願っているのだ、社会の法廷に科学的に裏付けられた真実ではなく、ワシーリイ・カラマーノフの精神と意志とを示したがつているのだ、と思うにちがいない！ だがそれがわたしにとって何だというのか。ナンセンス！ わたしは絶対に自分の考えを遂行する。この世にはわたしを引き止めることができる者などいない。わたしの決断は実際思いがけないものだった。一週間前、いや昨日でさえこのような解決策があるうとは思ってもよらなかった。それにしても、いままで何があったのか。これまでの日々、そしてわたしの人生には何があったのか。いや、これまでのわたしの人生こそがこのような思いがけない方法で自分を探し出すのを助けてくれたのではなかったのか？ わたしのこれまでの人生が社会に弾劾され

るこの探求をわたしにせよと教えたのではなかったのか？ 自分の好きなように行動せよと教えたのではなかったのか？ ある日、まだほんの子供だったころ、わたしは教会の門の前でわたしに向けて憎しみをこめて投げつけられた『忌々しいガキ！』という言葉聞いた。このあとわたしは自分が『忌々しいガキ』である事を立証するあらゆる事件を記憶することにした。わたしが五歳の時、父はフィンランド人の女性旅行者を強姦し、その夫にひどい肉体的な危害を加えた。北方の隣人と自らの祖国の市民にソヴェエトの司法機関の絶対性と厳格さを示すために、共産党の掟テの女神は父に最高の刑を宣告した。父は銃殺された。すると、近所の人々はわたしを『変質者の末裔』と侮蔑的に呼びはじめた。六歳の時わたしは母を失った。母はこうした家族の恥辱のあと麻薬、つまり、近所の空き地のどこにでもはえていたケシの実を砕いたものに急激に依存するようになった。そして二十八歳の時、ケシの実の碎片さいへんの過剰服用であるアヘン中毒で死亡した。その時このような家族の歴史を知る人々がみな——それは町の大多数だったが——わたしを『忌々しいガキ』と呼び始めた。七歳になると、わたしは正統派ユダヤ教の人々が仕事をする事を厳しく禁じられる土曜日ごとに自分の地区のユダヤ人の家族を訪ねまわって、暖炉に火をくべたり、石油コンロや灯あかりに火をつけたり、薪まきを割ったり、お茶を入れたりした。するとユダヤ人たちはスパイス入りの糖蜜菓子をくれたり、時には小銭をくれたりした。なんとも素敵な体験だった！ 「あいつの家族はもちろん犯罪者だ。それにしてもあの低能児はユダヤ人の家でいったい何をしているんだ？ まったく忌々しいやつだ！」まわりの人は口々に言った。そのころまでには同年代の子供らがわたしと話すのを禁じられているのがわたしにはとてつもなく気に入ってしま

っていた。かれらにはわたしと遊ぶことも、わたしを家に呼ぶのも、わたしと食べ物を共有するのにも許されなかったのだ！ 校長が土曜日ごとにユダヤ人の家でおまえはといった何をしているのかと問いただすのを、わたしは自慢にするようになっていた。異教徒の家には行くなと言う教師たちを心の中でひそかに笑って見送った。ちなみに、幼いわたしの安息日ごとの訪問は人々の心の内に好奇心はおろか、何かを理解しよう、何か意味を見出そうという気持ちも起こさせず、ただ嫌悪感と軽蔑を呼び起こしたばかりであった。人々の憎悪を、わたしはいたるところで感じた。どこでも、そしてすべての人の心の中にも、祝日にも平日にも。毒のある馬鹿にしたような人々の視線の中に、思わず口をついてもれる悪口にも、そして数限りない禁止事項の中に。五点満点をとることも四点を取ることも、学校の食堂でのおかわりも、プレゼントをつめた新年の紙袋も、ウズラをパチンコで打つのもわたしには許されなかった。わたしが復活祭のお祭りに教会に行くのと、「いやなガキだ、ここに何の用があるんだ！ とっとと出て行け！」と言って何度も追いかかれた。わたしを憎んだのは人々ばかりではなかった。血統書付きの犬ばかりか、町を徘徊する雑種の犬までが、ものすごい憎しみをこめてわたしに吠えかかり、犬どもの牙はわたしの貧弱で病弱な体にあやうく触れそうになった。意地の悪いスズメバチどもは小麦畑を飛び回るバツタのように、わたしのまわりをぶんぶん飛び回った。履きつぶされた靴の中にはサソリが隠れていて刺そうとし、ガチョウは首をもたげて羽を振り回しながら幼いわたしのむきだしの足をつつき、腹黒いカラスどもはカーカーと鳴き立てながらわたしの赤毛をいやというほど引っ張った。そして今、こうした自分の過去の何ページかを開くとき、子供の時にもそうであったように、自

分への心からの敬愛の念がわたしを包みはじめる。わたしは七歳の時にもうすでにこの世界と衝突しはじめていたのだ！ どうしてこんなことが起こったのか？ こんなことがどうして普通の子供の意識の中でおこり得たのだろうか？ 確かにあのころのわたしの世界は巨大な共産主義帝国にうずもれたちっぽけな田舎町の空間に限られてはいた。だが、そこに住む人々の情念は地球上の最大の巨大都市の住民たちの情念にもまして熱く燃え上がっていたのだ。わたしは成長した。そしてわたしは年とともに大胆になった。九歳になると、自分に対する人々の新しい憎悪の波をかきたてるために、夏休みに屠殺場で働くことにした。わたしはそのころまでにはすでに意識的に、また計画的に人々の憎悪をかきたてることができるようになっていた。こうした仕事はたいていはよそ者がすることになっていったが、なぜかわたしは採用された。当初わたしには小口径ライフル銃を持つのは許されなかった。だが、ある日の昼食時のこと、衛生員たちがウォッカの入ったコップをかたかた鳴らしていた時、わたしは自ら銃をつかみとると、雄犬に向けてドンと射ちはなった。そいつの獐猛さは、はつきりしていた。犬はキャンキャンと鳴き始め舗装道路にどさりと倒れた。男たちは「ブラボー！」と喚声をあげた。この時以来わたしは大胆になり、町の通りで自信たっぷりになるようになった。もしも規則が主のいない野良犬だけを射殺するようにならしたら、わたしはすべてのものを、いやわたしを侮蔑したやつらを真っ先に撃ち殺しただろう。いったい自分以外に誰が孤児を守ってくれるというのか！ ところで、わたしが望んだのは復讐することだけではない。まわりの人々すべてがわたしに激しい憎しみを抱くようにと望んだのだ。あのころ、わたしは自分もまた町中を徘徊する孤独な野良犬でありたいとよく思

った。誰もが石つぶてをなげつけ、悪態をあげせかける野良犬でありたいと。これがすべての始まりだった！ たった今着手することを決定したわたしの困難な道のりはこうして始まったのだ。わたしはほんの小さな子供のころから自分と社会との衝突に我を忘れた。どうやら、この興奮状態は今にいたるも続いているようだ。十歳の時、わたしはまた別のとんでもない悪さをしでかした。そのあと、同年齢の子供たちまでがわたしを憎みはじめた。わたしの町のサッカーチームとオボヤニ市の『穂』^{コロス}との試合はシーズンの始まりから観衆の人気を集めた。スタンドは満員になった。この町のサッカー場のスタンドは西側と東側に二つあった。南側はゴールの先にサッカー場の幅いっぱい三メートルのレンガの壁がそびえ、北側のゴールの方は五メートルもの鉄条網が張りめぐらされていた。わたしにはどうあがいてもサッカー場に入れないことはわかっていった。孤児のわたしに入場券を買う金がどこにあるというのか！ この日わたしは靴職人の使う鋭い錐^{きり}を用意すると、南側のレンガの塀から八メートルぐらいのところにある野菜の地下貯蔵所の朽ちかけた木戸のかげに隠れて、試合の開始を待った。シーズンの開幕時には選手たちはよくシユートでゴールをはずすということを十歳のこのわたしワシリー・カラマーノフは見越していたのだ。試合開始から数分後にはもう、ボールは壁を飛びこえてわたしの手の中に文字どおりずとんと落ちた。わたしはすぐさま錐でボールを三、四回突き刺したあと、目の前の空き地にボールと投げ返して、木戸のかげに身を隠した。そうするのに一分とかからなかった。そのあとすぐに線審が壁際に現れた。空気のぬけたボールを見つけると、線審は若手の選手にボールを取りに行かせ、自分はボールが何か鋭いもので傷ついたことを主審に知らせに行った。試合は続行され

た。十分後に同じことが繰り返された。言いようのない喜びを感じながらわたしは錐でボールに新しい穴をあけた。そのあと、急いでさっきの隠れ家に身をひそめた。線審がまた現れて、再び新しいボールが必要だと叫んだ。試合の前半にこうしたことが四度も繰り返された。後半が始まる前に壁の上にスポーツマン風の男が登場した。『なんだ、ボールを警備するつもりなのか？』とわたしは考えた。『それなら新しい手を考えなくては！』五個目のボールが競技場の壁を越えて飛んで来ると、壁の上に立っていた『警備員』はすると下り始めた。もちろんボールを取りに降りて来たのだ。つまり、わたしの方に背を向けて下りてきたのである。わたしは、やにわにボールを引っつかんで、そばにあった高いポプラによじ登って、四月の若葉の影に身をひそめた。長い探索のあと、スポーツマンは木の中のわたしを見つけると言った。「おい、がきっちょ、聞こえるか。ボールがどこへ行ったか見なかったか？」わたしはたわんだ枝の間にボールを隠すと、ポプラの木からすべり下りてわざと従順なふりをして、両手を広げて見せた。この時はうまく注意をそらせたというわけだ。木の中の位置を変えて、わたしはこう思った。『競技場にも入れてくれなかった。みんなぼくを憎んでいるんだ。ぼくを苦しませたいんだ。今度はあんたたちが苦しむ番だ』『おい、聞こえるか』スポーツマンは言った。「おれは壁をのぼる。おまえはここでボールを見張るんだ。ボールはあと一つしか残っていないんだ」「じゃあ、ぼくはサッカーは見られないってわけ？」わたしは純情ぶって聞いた。「てめえ、頭をひっぱたかれないのか？ ここで番をするんだ。さもないと耳をひっぱるぞ！ おまえが屠殺場^{とさつば}で働いてるユダヤ人の手先だってことぐらいわかってるんだ！」スポーツマンは命令口調で言った。わたしは思った。『こうなること

はわかってたんだ！ いまに見ろ、思い知らせてやる』だが、口ではこう言った。「わかったよ。おじさん、ぼくボールを見張ってるよ。どうかたたかないでくれよ」そして、頭の中には全く別の考えがよぎるのだった。『手でも上げてみる、おれはおまえを壁から投げ落としてやる！』とんだ英雄だ、子供をぶつなんて。おれはたった二十五キロしかないんだぞ！ 今に見てろ、英雄のやつめ！』スポーツマンは壁をよじ登ると、ボールは見つからなかったが、警備は強化された、と、大声でどなった。二十分後にボールがまたわたしの方に飛んできた。わたしはボールに駆けよって、それを手に取った。錐を持っていなかったのも、わたしはボールを木の上に置いた。ボールは使い古されたもののように見えた。革はすっかりすり減り、わたしの手のひらにはざらざらした触感が残った。「最後のボールだって言いましたね？」わたしはそう聞いた。「早く、投げるんだ！ こっちのチームは負けてるんだぞ。二十分しか残ってないんだ。早くしろ！」わたしはスポーツマンの方を向いて聞いた。「スタジアムには何人はいってるんですか？」「くそがき、ボールを投げるんだ！ 三千人のファンが待ってるんだ。投げろ、さもないと、今すぐ下りて行って……」『三千人って言ったね？』わたしは続けた。「そうだ、三千だ。ひよつとしたらもっと多いかもしれん。おい、投げるんだ！」「あんたらは三千人の中に、このワシーリイ・カラマーノフの席一つも見つけてくれなかったんだ！ いやだ、ボールはぜったいにわたさないぞ！ これでもくらえ！」わたしは人差し指と中指の間から親指を出してそう叫ぶと、やにわに駆け出した。わたしはその時すでに目的を果たしていたのだ。試合は中止になった。一週間以上にわたって、カラマーノフ狩りが続けられた。トゥールという^{あだな}綽名の地元のサッカーコーチはわたしをやった

けたものには十ループリやると約束した。わたしは夜は公園のボートのブランコの中で眠り、昼は町外れのハシバミの木茂みの中にひそんだ。九日目に警察の少年課のポドベード巡査長がわたしの居所をつきとめた。巡査長はわたしをオートバイで自分の傾いたオフィスに連れて行くと、あらんかぎりの憎しみをこめてわたしの耳を引っ張った。わたしは今でもこの訓戒をはっきり覚えてる。わたしの耳が大きな餃子^{ペリメニ}のようにふくれあがったあと、巡査長はやり方を変えて、わたしが一緒に暮らしている伯母を説得して、養育する力も金もないから孤児院である子供の家に入れてくれという申請書を出してもらえと言いだした。「その子供の家ってどこにあるの？」わたしは涙ながらにたずねたが、その時はすでに別のことを考えていた。ともかく自分と世界とのつながりを最小限にしたいと強く願ったのだ。いままでぼんやりとしかいだいていなかった孤独への渴望を警察の取り調べ室で初めてはつきりと認識したのだ。周囲はわたしとはまったく無縁だったし、あまりにも敵意のあるものだったから！ 「ぼくの伯母さんはそういう申請書は書かないと思う」わたしはさも残念そうにポドベード巡査長に言った。「ほう、どうしてだ？」丸々とふとった醜い男は、ラードとにんにくと自家製のウオッカのまじったゲップをしながら、耳をそばだてた。「ぼくがいなきや、誰が空き瓶を集めてあげるの？ 伯母さんの『ショウガのウオッカ』がちゃんと足りてるように、誰が空き瓶を持って行くの？ 伯母さんはウオッカなしには一日だって生きていけないんだ。ぼくはいままで休みにはいつもユダヤ人にもらったお金でウオッカを買ってあげてたんだ。ウオッカなしでは伯母さんは死んじゃうよ。ぼく、平日は通りで空き瓶を集めてるんだ」巡査長はどこといって特徴のない頭をかきながら何か考えていたが、いくつか電話

をかけたあと、わたしに新しい提案をしてきた。「このろくでなし、それじゃ、警察署長名義で、自分で申請書を書くんだ。おばさんが、おい、なんとかいったな……ペラゲーヤ・スビヤー・ジスカヤ、まあこの先は、^{ペーエス}ΠCとでもしておきな。その^{ペーエス}ΠCは後見人の義務もはたさず、毎日飲んばかりいる。つまりは、アルコール中毒でおまえはいつも着るものもなく、はだしで、いつも腹をすかしているって。わかったな？ おまえにはちゃんとした子供の家をさがしてやるし、おばさんとやらは近くのアルコール中毒治療施設に送ってやる。そしたら、おばさんもアル中が治るかもしれない。おまえのおばさんはいくつだ？」「もうおばあさんだよ」わたしは言った。「ぼくの死んだ母さん^{かあ}よりいくつか年上だったと思う。三十は越してるよ。でもぼくはぜつたいに伯母さんを施設なんかにはやらないよ。子供の家にはほんとうに行きたいけど。でもだからといって、実の伯母さんを裏切るつもりはぜつたいたいになからね。いやだ！ どんな犠牲を払ってもいいことなんて何もないんだ。特にぼくには！」「ほう、なんで『ぼくには』なんだ？」ちびのポドベードは好奇心満々で訊いてきた。「ぼくはちゃんと自分ひとりで作ってるんだ。こういう人間を空想に耽らせるのは危ないんだ」巡査長は何もわからなかったとみえて、もう一度つるりとはげた後頭部をかくと、また何回か電話をかけたあと、宣告した。「ニエドリガイロフの青少年コロニーに行くことになった。スームイから何キロか南に行ったところだ。ふつうは十三歳以上のもんが行くことになっているが、おまえはまだ十一歳にもなつとらん。じゃが、添付書類に別の生年月日を書いておくから、問題はない。じき新しい出生証明書が届くじやろう。おまえの伯母のペラゲーヤ・スビヤー・ジスカヤは速^{すみ}やかにジズドラのアル中治療施設に護送されることになった。

おまえたちのアパートには新しい住人が入る。党の教えのとおり、みんなの暮らしが向上するとうわけだ！ 一番大切なのはだな、この町からごみを掃きだすことができるちゆうことだ」こうして、四月の十四日に、わたしは自分の故郷プチブリを永遠にあとにすることになった。愛すべき永遠のアルコール中毒患者の伯母に直接別れを告げることもなく。ポドベード巡査長はわたしが自分の所持品を取りに家に帰るのも許さなかった。所持品はすべてぼろで、どうとでもなれという代物ではあった。だが、わたしは両親の写真を永遠に失ったのだ。わたしは出所不明の間とでもいべき存在になった。親類のきずなを失い、困難な幼年期の生活のために孤独な乱暴もののかたくななやりかたを身につけてしまった浮浪児を、巡査が付き添い、つぎつぎとやってくる車に便乗させ、ほとんど町といていいほどの大きさのニュータウン、ニエドリガイロフにある青少年コロニーにつれてきたのだ。子供の家とコロニーとの差は歴然としていた。子供の家の住人は、ベトナムや中東で戦死したり、アルコール中毒、売春、長期の懲役、死別といった種々の事情で両親を失ったれっきとした市民の子供であった。子供の家の住人たちは国が世話をした。が、わたしたちコロニー居住者はほとんど囚人同様の扱いだった。食費と衣料費は内務省の予算から出ており、国内部隊のいかつい陸軍准尉たちが監視塔からわたしたちの一挙手一投足をうかがっていた。確かに、丸腰ではあったけれど。コロニーに収容されている子供たちはおよそ三百人で、その中に、このわたしワシーリイ・カラマーノフもいた。わたしのまわりの世界が縮小したのは嬉しいことであった。ものごとが以前よりはつきりとしてきたし、ヒステリックでも威圧的でもなくなった。が、コロニーの生活はしだいにやりきれないものになっていった。わ

たしは毎日のように、成熟していくわたしの理性ではとうてい理解できない事態にぶつかった。たとえば、どうして大のおとながわたしのような子供を筋肉の発達した足で蹴らなくてはいけないのか？ なぜ、脱脂した具のないキャベツスープを鼻で吸い込むことを強要しなければならないのか？ 石鹸を使わずに洗ったせいで黒ずんでしまった寢床に南京虫をわざわざ放つのはなぜなのか？ いつも『起床』の号令でたたき起こし、『ソヴィエト共産党』という言葉でオナニーをさせ、やつらの革靴の泥をなめさせるのはなぜなのか？ 南京虫がぼくたちの血をすすめるのを見て、警備員たちが笑ったのはいったいどういうわけなのか？ やつらの足がぼくたちのやせこけた未発達肋骨にふれたとき、やつらは本当に喜びを感じたのか？ ぼくたちの舌があいつらの厚布製の長靴に触れたとき、あいつらはオーガズムに達したのか？ 動物の死体で悪臭を発するスープをぼくたちが鼻をつつこんで吸い込むのを見てあいつらは舌なめずりしたのか？ わたしがかくも無慈悲に押し込まれた世界をわたしはいったいどのように理解すればよかったのか？ わたしは人々をいったい何だと考えればよかったのか？ やつらはいったい何なんだ。怪物なのか？ 将来の自分の姿をどのように想像できたのか？ 人間か、それとも何か別の存在か？ だとしたら、それはいったい何なのか？ 実際のところ、選択の余地はなかったのだ。人間か、それともドブネズミかネズミかキリンか狼かという選択なんてなかったんだ！ 『どんな人間になるのだろうか？』わたしはそのとき思った。『こうした卑劣漢に似たものになるのだろうか？ もしもぼくがこうした者たちに耳を傾け始め、かれらを理解し是認しようとしたら、ぼくの意識はこれらの行動様式と考え方をきつと完全に容認するようになるだろう。だが、ぼくはやつらを許し、

やつらのようになってしまった。これこそがぼくが絶対に避けたいことなのに。いやだ、なりたくない！ こわい！ だが、悩んだり苦しんで何になるというんだ？ とにかく自分を見つけなくては！』コロニーでわたしは、プチブリで苦渋とともに学んだ第四学年ではなく最年少の第五学年に入れられた。まわりの縮小した世界はわたしを喜ばせもしなかったし、心の安らぎをもたらしもしなかった。プチブリの巨大な世界には、自分の私に向けられた他人の攻撃に対抗する余地がよほど多くあった。あのおぞましいチビのポドベードでさえニエドリガイロフの教育者にくらべれば決定的な長所を持っていた。ポドベードは少なくともわたしと話をした。たしかに侮蔑的でぞんざいではあったけれど、わたしを権利の主体と認めてくれた。ここでは、わたしの市民としての地位を歯牙にもかけないようにみえる。ポドベードはわたしをなぐりつけてもいい発育不全の子供とみていたが、殴打のあとには必ず砂糖菓子を用意していた。だが、もしかがコロニーにいたとすれば、ほとんど間違いなくこのゆがんだ『保育教員たち』の群れに加わっていたにちがいない。地方の青少年コロニーはむしろ人間の精神と肉体を殺害するための多角形城塞に似ていた。このような環境で何か人間的なことを望むことなどできただろうか？ 一冊の本を読破したり、音楽に恍惚となったり、著名な芸術家の作品の前にたちどまったり、芸術に夢中になったり、学問的な知識を深めるなどということができただろうか？ 愛することは？ わたしのような追いつめられた存在に愛などという感情が生まれ得ただろうか？ いや、女性への愛とはいわない、少なくとも、人生や自然、そしてついには自分自身への愛は生まれ得たのか！ わたしのように心がずたずたに引き裂かれたものに詩や音楽を生み出すことができただろうか？

わたし自身の体験からすれば、そうしたことはとうていできるはずのないことだったのだ！ 青少年コロニーの入所者たちは半年から一年にわたる模範的な行いによって両親のもとに送り返されることになっていた。だが、このわたし、ワシーリイ・カラマーノフには何が期待できたろうか？ 家は、ない。両親は、いない。両親を思い出すのさえ苦々しい。後見人も、いない！ わたしのようなみすばらしい子供を誰が引きとるというんだ？ こんな家系の子供を？ 十一歳のコロニー収容者を？ 当時外国人の群れがわが国の少年たちを養子にしようとして国中を旅行することはまだなかった。ワシントンのロシア大使館はアメリカ人に養子縁組されたロシアの子供たちのために新年の祭典をとり行う伝統をまだ持たなかった。社会はまだわれわれ子供たちの価値を知らずにいたのだ。実際、わが国では人間はいくらぐらいするのだろうか？ 子供、大人、そして国民の値段はいくらなのだろう？ 数コペイカ、数グロシ、それ以下のはした金？ まったくわたしは自分をいくらで売ればいいのかわからなかった。海外市場の値段ときてはなおさらだった。あとになってわかったことだが、われわれにはとてもいい値がついていたのだ！ こうした買い物をしたがつているものはいくらでもいた。もし七〇年代ではなく、八〇年代か九〇年代に生まれていたら、わたしはまったく違った生き方をしていたにちがいない。そしてわたしの考えもまったく違ったものであったはずだ。今あるようなものではなかったはずだ。感情を抑え、なんとか自制しようとして、わたしはコロニーの中の、とある女教師に目をとめた。その女は、やさしそうで、好感が持てて、いつも微笑みを浮かべていた。あの女はきつとすばらしい母親になるにちがいない。わたしにとっても、またコロニーに収容されているどの少年にとっても。

わたしはその女のまなざしがとても気に入っていた。だが、ある五月の夕方、コロニーの所長のパンチューホフ少佐が突然わたしのところにやってきた。「おい赤毛」少佐はいきなりがなりたてた。「わしのところにおまえがハシシをやつとるとたれこんできたもんがいる。おまえを十五日間の懲罰房入りと決めた。じゃが、独房入りを三十日間の野良仕事に変えてやつてもいい。おまえが真面目に働かなんだら、労働期間を百日間、つまり農繁期全部に延長する。おまえを一日ジャガイモ袋一つで賃貸することもできるんだ。誰がコロニーでハシシを吸つてもいいと言つた？」わたしは呆然とした。コロニーを警備する者のあまりに破廉恥な言い方がわたしに次のような口をきかせた。「自分はこれまでそのようなことを面白半分にしたおぼえはありません。タバコもハシシも口にすることはありません。そんなものを買う金がどこにあるというんです。でもあなたがたと口論する気はありません。自分は独房での懲罰を希望します」「図々しいやつだな！ なんていう口のききかただ！」少佐は怒り狂った。「てめえ、独房で一ヵ月腐っていたいとでもいうのか？ 起床から消灯まで自分の糞くその上をはいずりまわりたいのか？ てめえの独房には糞桶くそおけも入れてやらないからな！ こん畜生め！ とつとと当直のところに行くんだ！ 准尉といつしよにセミハトーヴァの農場に行け。おまえの労働時間は朝の八時から夜の十時まで続く。何か悪さをしでかしたら、独房で三十回のむち打ちだ。セミハトーヴァでは六匹のコーカサスの獵犬が昼夜の別なくおまえを見張っている。逃げようとでもしたら、犬どもがおまえを八つ裂きにするからな。おまえの手助けをしてくれるものなんか、どこにもいないんだ。一言でも文句を言ったり、何か悪さでもたくらんだら、即刻独房入りだ。わかつたな。しかも夏いっぱいだ。それで結

核になることうけあいだ」パンチューホフのこの長広舌をきいたあとで、人間は、神によって創られたものであり、自然の覇者であるなどということがどうして信じられよう？ 人間は知性的であり、われわれは同じ種に属し、われわれはみんな同じだなどということがどうして信じられるのか？ 真つ赤なうそだ。わたしはこんなことは絶対に信じない、わたしの頭脳も心もこのような公理は絶対に認めない。一方で自分が何か別の生物の種族に属していることを感じ、また一方では自分が人間の出自だという重苦しい考えからなんとか自分を解放しようとしながら、わたしは生まれて初めて自分に向かって宣言した。『ちがう。わたしは人間ではない。わたしはわたしをとりまくあつた人々とはまったく違っている。わたしは人間ではないものの中に自分を見出さなくてはならない、人間の「三位一体をなす父と子と聖霊という位格」ではなく何か別の「位格」を探し出さなくてはならない。わたしをほんの子供のころから苦しめ続けてきた苦い経験を味わうことのない場所、またこれからも味わうことのないはずの場所を探さなくてはならない』この不意をついて出た考えにうちふるえながら、わたしはパンチューホフ少佐の前に立っていた。湿った五月の風がわたしの縮れた赤毛をなでた。空気は暖かった。が、わたしは作業服のすそをかきあわせ、なぜだか全身をふるわせていた。悪寒がした。わたしは屈辱的な自分の立場からのがれようとして、別にこれといった興味があつたわけでもなく、ニエドリガイロフの町の近郊に力なく目を落とした。この地方一帯の盆地の緩やかな勾配にそってひろがる新たに耕されたばかりの黒土には人の姿が点々と見えた。ふいにある好奇心に駆られて、わたしはそこに目を据えた。子供の姿は一つもなかった。『わたしは成長している！』その時わたしは思った。こうして、

わたしは初めて強制労働をするようになった。それも裁判で正式に宣告されたのではなく、卑劣な悪党、コロニーの教育者パンチューホフの意志によって。『さあ、当直のところに行くんだ、この赤毛の犬め！』少佐の声がわたしを現実に取り戻した。苦いつばをのみこんで、黙ってわたしはのろのろと当直室のほうに歩いていった。そういえば、あのころ、まだ子供だったころ、わたしのつばにはいつも少し苦味があつた。まるで、血だらけの傷口をなめているかのように。後になつてからはそういうこともなくなった。今のわたしを苦しめていたのは、人間たちとの会話が悠久に続くプロセスなのではないか、という不安だけであつた。ああ、やつらとの会話を少しでも早く終わらせることができるなら！ 「そんなのろまな足取りではどうてい銭をかせぐことなどできんぞ。早く行かんか、くそつたれ！」少佐の叫び声が響いた。わたしはもう侮辱されてもべつに何も感じないようになっていた。だからやつぱりのろのろとした足取りで歩いていった。当直室からは准尉がわたしの方に向かって歩いてきた。これといった特徴もない普通の人間だった。酔った赤ら顔の中にこずるい表情をうかべ、ぼんやりとした表情のない目をし、ウオッカの飲みすぎでこぶしがだらりとたれていた。帽子のつばはてっぺんに向けてまくれ上がり、今にもとれそうだった。革の長靴の代わりにスポーツシューズをはき、指にはびっしりと銅製の指輪がならんでいた。「寝るのは納屋の干草の上だ」准尉は断固として言い放った。「家主たちに頼みごとをするのは許さん。家主たちには、おまえが飢えや渴きに苦しんでいるようが、怖がつていようが、仕事で疲れていようが、自由を夢見ていようがおまえに關しては一切耳を貸さないことになっている。こうした考えは全部おまえの赤毛の頭の中にしまっておくように。おいおまえ、わし

のいうことがわかったらどうな？」ここで少佐はわたしの後頭部をぴしゃりとたたいた。「聞いたことは全部わしを通してするように！一言でも文句を耳にしたら、指導部がわしにおまえの過失に対する戒告をする。そしたら、おまえは消石灰をかけられてたちまち墓穴の中に消えることになる。春には手ごろの穴がいくらでもあるんだ。さっさと行くんのだ！はやくしろ！ニールカがもうわしを待つとるのに、わしはおまえを護送していかにやらんのだ。くそっ！」わたしはその時思った。『なんでみんなこんなに似てるんだ！顔かたちと名前がちがうというだけで、言うことはどいつもこいつもおんなじだ。みんな誰か名前のない作者の書いたテキストを棒暗記しているようだ。もう読むのなんかやめろ！頼むからこんなものを棒暗記しないでくれ！』わたしは、民間人と同じ靴をはいて早足で歩む軍人のあとをやつとの思いでついていった。『こんなに急いで。わたしの夕食のカラスムギの粥のこともすっかり忘れている。水っぽくて、いや、ほとんど水だったけど、温かった！』こんな思いがわたしの頭の中をかすめた。『でも、ひよつとしておかみさんが腹いっぱい食べさせてくれるかもしれない』わたしには女の人と話をした経験はほとんどなかった。たしかに飲んでばかりいる伯母と幾人かの学校の教師とは話をした。プチブリにも若い女の子はいるにはいたが、ワシーリイ・カラマーノフのような町の浮浪児には恐がって近づかなかった。わたし自身その娘たちと話をしようとしたこともなかった。十一歳の男の子が女性とどのような関わりを持つことができたというのか！まして教師となんて！……。じきにわたしは夕食とわたしの主人に関してひどい勘違いをしていたことに気づいた。これらの人々の生活はわたしの考えたものとは全く違っていた。わたしたちがのんのんと伸びたノイバラのしげ

みに肩を並べた時、わたしは犬たちのたけり狂った声を聞いた。すると誰かが低声でわめいた。「だまりやがれ！」一分後にその低い声は同じ要求を繰り返した。犬たちのけたたましい声は低いうなり声に変わった。こんなに憎々しげに吠えるのはコーカサスの獵犬だけだ。吠えながら歯をカチカチいわせている。わたしはそのころには犬をそれほど怖がらなくなっていたと思う。故郷の町でわたしは犬たちにさんざん苦しめられたけれど。自暴自棄の屠殺人であつたわたしの復讐心はもう過去のものだった。しげみの向こうにわたしは動物たちの巨大な体軀を認めた。犬たちは鉄柵のそばでたけり狂っていた。だが、かれらの凶暴な様子は准尉をこわがらせただけだった。准尉は何度かうめいて、「おい、頼むぜ、犬をなんとかしてくれ」と言った。すると、柵の向こうから年配の男が出てきた。少なくとも、そのときわたしにはそう見えたのである。「わかった、困ったやつだな。がきは連れてきたのか？なんだこんなやせっぽちか？こいつ、ちゃんと十二時間働けるのか？うちは青少年いこいの家じゃないんだ！一、三日ためして、こいつが何の役にも立たなかったら、ちゃんと取り替えてくれるんだろうな。あしたパンチューホフのところへ行つて、こんな栄養失調のがきをよこしやがったと文句を言つてやる。こんな子供が労働者だともいうのか？おい歴戦の兵士、ほら、自家製のウォッカだ、とつときな、そして、とつとと失せやがれ。ニールカがあんたを待ちだぜ。おい、こら、この罰当たり」男はわたしに向かつて言った。「おれについて来るんだ」男はわたしを納屋に連れていくと、干草を指さしたあと、入り口にむけて歩き出した。「食べ物と水、それにトイレはどこにあるんですか？」わたしは後ろから男に向かつて問いかけた。「おい赤毛、療養所かピオネール・キャンプにでも来たつもりでい

るのか？ おれがソヴィエト政権のために戦ったころはおれたちみんなネズミを食べたんだ。腹をすかせてたんだぞ！ 見ろ、あそこにエンバクの入った袋がある。おまえの歯はまだちゃんとしているだろう、噛みくだくんだ。トイレはどこにあるかなんて、それでも囚人か？ 納屋の向こうに行け！ 場所はいくらでもある」「でも犬はどうするんです？」わたしは聞いた。「犬、犬だって！ そんなものにはすぐに慣れる。あすの朝は七時にたたきおこす。まず、豚にえさをやりに行くんだ。そのあと、野菜畑の除草をしなきゃならんし、耕作地にも出なくてはならん。仕事は山ほどある。畑の外でぶらぶらしたり、くその役にも立たん授業なんか時間をつぶすよりよっぽどましだ」男は、それ以上何も言わずに、さっさと出て行つた。『いいだろう』わたしは思った。『納屋を少しでも居心地良くしなくては』ここでは是非とも言っておかなくてはならない。わたしはその時ほんの十一歳だった。まあ、書類上では、十三歳ということになっていたが、人生経験ということからすれば、十八歳にもなっていた。孤児は早く大人になるものだ。だからわたしはまず、周囲を事務的に見回した。納屋には石油ランプも蠟燭も、明かりをとるものは一切なかった。五月の中旬には九時ごろ暗くなる。わたしは判断した。『つまり、もうすぐ完全な暗闇が訪れるわけだ』わたしは急いでエンバクの入った袋を見つけ出すことにした。これには時間はかからなかった。新鮮な土がくまなくついた鋤の向こうに、釣り糸でつくろった袋が立ててあった。何か別の穀物の実がまじっている湿気ですえたエンバクは最初少しも食欲をそそるものではなかった。しかし、数分後にわたしは機械的に、初めのうちはのろのろと、食べられそうな実を知らないうちに選り始めていて、そのうちのいくつかを口にしていた。そのあとはもう夢中になって、

熱心に少しでも食べられそうな実を探した。ポケットはじきにいっぱいになり、わたしはあごを懸命に動かした。味がどうだったかなんて思い出したくもない。が、これだけは言っておこう。この年でわたしはまったく生で、熟してもいないものを食べたのだ。わたしには食べ物に対する執着などというものは一切なかった。わたしの胃袋はすべてのものを消化した。森の苦い栗の実やサトウキビ、すっぱい野生のりんご、生のジャガイモのつる、ウズラの卵や焚き火で真っ黒になるまで焼けたツグミなどだ。わたしはそうしたものを晩秋から冬にかけて二股にゴムをかけて作ったパチンコで撃った。わたしが自分に許した唯一のぜいたくは、キャベツの芯だった。日が暮れるとわたしはコルホーズの農場に出て、真っ赤な太陽の日差しが執拗に目を射るなか、小さいキャベツを選りだして、懸命に芯まで一枚一枚皮をはいだあと、暮れ行く空に大きな日輪を送りながら、味わいつつ長く長くかみ続けた。暗闇が訪れ、腹がくちると、わたしはプチブリの閑散とした街中に戻っていった。孤独な生活はわたしを闇に慣らした。闇の中のほうがよほど安全を感じたのだ。通りから最後の遊び人の姿が消えると、夜の街をたった一人で歩きながら、わたしは自分こそが人生の主人公だと感じ始めるのだった。わたしはそれほど自分ひとりであったし、痛いほどにからっぽなわたしの世界を所有したいと望んだのだ！……。納屋での初めての夜、わたしは夢も見ないで眠った。藁が鼻の先を掠めた時に、ちよつと目をさましたくらいだった。あくる朝、男はきのうの晩よりよほど機嫌がわるそうだった。男はわたしに一言大声で叫んだ。「おい、赤毛、起きるんだ。犬ころ！」そして、なぜかだるそうに手をふった。自分について来いというのだ。そうして、入り口のほうに歩いていった。わたしは急がなければならな

かった。その時だ、信じられないことがおこったのは。きのうわたしと准尉とを八つ裂きにしようとして、柵に群れ集まった猟犬たちが、どういうわけかとてもひとなつこい様子でわたしの方に向けて来て、わたしのやせたちっぽけなからだにぴったりと身を寄せると、並んで歩き出したのである。その中の一匹はわたしの手を舐めさえた！ これはわたしが自分の人生で初めて体験したキスだった。わたしには信じられなかった！ すると、犬はもう一度わたしを舐めた。わたしは喜びのあまり呆然としてしまった！ もう一匹の犬は鼻をわたしの顔に押し付けようとした。こうしてわたしに親愛の情を示しながら、犬たちはわたしを豚小屋まで送ってきた。この感動的な出来事はまだはつきりとはわからない何ものかの象徴のように、わたしには思えた。わたしは誰かこの喜びを分かちあいたいと思った。この人生で初めてわたしに愛情を示してくれたものがある。それが人間ではなく、犬であつたというのがなんだというのだ！ だが、わたしのそばに話し相手になってくれる者はいなかった。そのとき、わたしは突然話し相手を探すのもうやめだ、わたしには必要ないのだと感じた。栄養失調の子供ワシーリイ・カラマーノフと、外見は人間と似ていながら非人間のステータスを捜し求める、経験によって賢くなつた固有の私という存在との間にかわされる会話をわたしは楽しむようになっていたのだ。最初わたしはこの内面の会話を気晴らしとも奇行とも感じていたのだが、急速に自分ともうひとりの私との会話はわたしにとって必要不可欠のものとなつていった。生涯自分自身とだけ対話をしているようなものが普通の人間だといえるだろうか？ 誰もがわたしを精神病患者だと思ふに違いない！ 偏執狂だ、低脳児だと！ だが、このわたしはまったく健全だったのだ。人気のない狭い豚小屋で、わたしは

いったい誰と話ができたといいのか？ プチブリで、青少年コロニーで、わたしをとりまく憎悪の中でいったい誰と話すことができたといふのか？ 世界を敵対視するものに、誰かと話をしようなどという気持ちが起こるだろうか？ その世界の構成要員になろうなどと願うだろうか？ もちろん、願うはずはない！ 最初豚小屋の住人もやはりわたしを敵対視した。むかし、わたしは食器に盛られた豚肉の量が足りないことがとても残念だった。そもそも豚肉を煮てくれるコックもいなければ、豚肉を買う余裕もなかったのだ！ しかし、捨てられた子供の好奇心に富んだ思考過程はついに最初の独創的なアイデアを生むにいたつた。一ダースの普通の豚を飼育するより、肥え太つた一匹の豚を飼育したほうがよっぽど簡単で、もうけも多い。十二匹の豚の重さがそれぞれ二百キロずつだとすれば、新種の豚は三トンにまで太らせることができるだろう。そうなれば養豚業はすばらしく採算の取れるものになるはずだ！ わたしも強力な仲間を持てたはずだ。そのころのわたしはまだ遺伝学という学問が存在すること、そして、その遺伝学こそが固有の私の探求に役立つのだということを知らないでいた。ところで、一見どうみても会話ができるとは思えなかつた豚たちはすぐにめつたに見られないほどの友好的な態度を見せ始めた。豚たちはわたしにとって、あの善良な猟犬たちにもまして大切なものになった。わたしは自分の感情を一步おしすすめた。選ぶことができるなら、自分は人間の中にいるよりも豚と一緒に生きたいと願つた。一週間後にわたしはもう納屋から豚小屋の入り口に移つた。居心地はとてもよかった。豚の群れはわたしをとて親切に迎えてくれたから。あの男とはあまり顔を合わせることもしなかつた。わたしは一日おきにわたしのためにあの男が残しておいてくれたわずかばかりの餌を見つ

けた。かちかちに乾いたパンの切れ端とか、しわしわのたまねぎ、いくつかのじゃがいものつるとかタクチイワシ、つまり小さな塩漬けの小魚といったものだ。だが、わたしはおなかを空かせてはいなかった。エンバクの袋、ケシの種の入った壺、どんぐり、調理された豚の餌、わたしにはそれで十分だった！ わたしには食事について思い煩うことは何もなかった。わたしは別の考えにとらわれていて、自分自身との対話に夢中になっていた。ある日の夕方、豚に水をやろうとして井戸から水を運んできた時のことだ。わたしの後には主人の家に飼われている犬たちがついてきた。犬たちはたいていいつもこの道を通ってわたしを見送るのだった。最初わたしはこの犬たちはわたしが逃げないようわたしの後にぴったりとつきまっとうっているのだ、あるいは、わたしの少年らしい自由への憧れを断ち切るよう命じられているのだと思った。わたしには悪ふざけをしようなんて気は毛ほどもなかったのに！ だが、わたしはすぐに自分が思い違いをしていたことに気づいた。わたしたちのあいだには微妙な友愛に近い感情がうまれたのだ。よく知られたことであるが、動物たちは人間とより、仲間同士の方がずっと深く結びつくものである。犬は人間たちに向かって激しく吠え立て、自分の主人に向かって唸り声をたてることもある。しかし、わたしにはとても優しく、わたしを警護さえしてくれたのだ。犬たちとの間に芽生えた相互関係はさらにもう一度以下のことを立証した。わたしが選んだ思索の方向性、その基礎にあるわたしは人間ではないと考えたことは正しかったと。こうしてわたしは水の入ったバケツを下げて歩いていく。すると突然あの女教師が、やさしい面影がいつもわたしの心にセンチメンタルな想いをさそったあの先生が、くぐり戸をこえて中庭の中に入ってくるのが見える。わたしは微笑み、立

ち止まって、水を下に置いて挨拶をしようとした。しかし女は、わたしのほうを見ると、目を伏せた。女の顔にはずるい表情が浮かび、犬たちに向かって一言、「この裏切り者、動くんじやない！」と言うと、わたしのそばをだまって通り抜けた。女には立ち止まってわたしに言葉をかけよう、わたしの生活や勉強について聞いてやろうという気持ちはみじんもなかった。わたしは果然とし、女のうしろから抑えた、辱められたものの声で早口に言った。「こんにちは、アナ・クレメンチエヴナ！ わたしです。ニエドリガイロフのコロニーのワシーリイ・カラマーノフです」女教師はふりむこうとさえしなかった。女はわたしが存在していないかのようにわたしのそばを通り抜けた。そばにいたわたしが生きた存在ではなく、野原のごみくずか、風で丸裸にされたタンポポでもあるかのように。この出来事はわたしに新たな力で人類全体を憎悪するようにしむけた。人間ではない何ものかになりたいというわたしの心の中にある願望は強くなった。主人の庭でのいまわしいエピソードはさらにもう一度自分はいったい生物学的にどの種に属するのかという疑問をわたしに投げかけた。病的ともいえる執拗さしつようでわたしは人類という種族の代表者たちと自分を根本的に分かつであろう特性や意識の独自性を自分の中に見つけ出そうとした。しかし、わたしの燃えさかる知性は復讐への強い願望以外、何も見出すことができなかった。『つまり』わたしはひどく腹を立てていた。『わたしが自分の、そしてコロニーの収容者すべての者の母になってくれるとも想像したあの女は、パンチューホフの同類だったんだ！』すると犬がわたしの手首を舐めた。まるでわたしの考えていることがわかったかのように。わたしは我に返ると、水でいっぱいバケツを持ち上げて、豚小屋に運んでいった。わたしが働いている場所とあの女

教師が入って行った家とは子供の足でも五十歩と離れていない。『あの女はいったい誰のところに行っただろう？』わたしは考えた。『あの男のところだろうか？ この家にはいったい誰が住んでいるんだろう？ わたしの主人はどんなやつなんだろう？ この丸太作りの屋敷は誰のものなんだろう？』わたしはどういうわけかあの陰気な男はこの僻遠の領地の管理人だとばかり思っていた。男が粗野で貪欲で寡黙だからそう思ったのだろう。屋敷の主人が誰なのか、客は誰なのかをはつきりとさせるために、わたしは暗くなるのを待って、木造家屋の中を覗いてみることに決めた。夜の八時になった。わたしは豚小屋に水を運ぶと、飼葉桶かいばおけに水をそそぎ分け、豚小屋の入りに行って、穀物の上に横になった。オオムギがコロニーのシャワー室の幾筋かの水流のように、わたしの体をチクチクとさした。わたしにはそれがとても気に入っていた。この快感を少しでも長続きさせようと、わたしはしばしば寝返りをうった。そのあと何度も何度もチクチクする感触を味わうために体にくっついた穀粒をはらいおとしながら。わたしは話したかった。たくさん話がしたかった。自分自身との対話は原則的には固有の私を分離させるために行われた。その頃だった。思考することと自分自身と対話するのは、まったく別の作業だとわたしが理解したのは。二つとも独立した独創的な作業であるだけに自分一人の時間と特殊な心理状態が必要だった。完全な闇が訪れるまでには一時間あった。その時間を自分自身との対話に費やすことにした。わたしは対話をしながらも主人の家と庭のくぐり戸との間の小道に絶えず目をやり、耳をそばだてていた。つむぎだされた思考は、自分のも、もう一人の自分のもナイーブだったが、とても真摯なものであった。たまたま手にした二冊の本、コスタニヤンの『靴のデザイン——芸術家の手に

なる革』とマルガリータ・ギーの『渡り鳥』しか読んだことのない十一歳の未成年の思考にまともなものなど期待できただろうか？ ちなみに、この二冊の本は、学校の古紙回収の計画を達成させるために、同級生らが持ち寄った紙くず同然の本の中からわたしがたまたま探し出したものだった。だが、わたしはどうしてこの二冊の本をあえて選び出したのか？ わたしはたいいてい靴なしですごした。が、まったくはだしだったのではなく、ごみだらけのやぶれた短靴、それも自分のサイズより少し大きめでダブダブのやつを履いていたり、時には一足そろったショートブーツを履いていたこともあったが、形と色は別々だった。すでに話したかと思うが、パチンコはわたしにとって食料を調達するための必要欠くべからざる道具だった。ツグミや野生のハト、ウズラなどが日々繰り返されるわたしの狩りの獲物だった。第一の本の中にわたしが求めたのが、自分にちゃんとした靴をはかせるためにはどうすればいいのか、ということであるとすれば、二冊目の本には、わたしと伯母の胃袋を満たすために効果的に獲物を増やす手段を求めたのである。貧困とサバイバルのための絶え間のない戦いは身体器官の自己防衛能力を発達させ、欠食と孤独と寒さに耐えることを教え、生活に必要なものすべてを自分に保障する新しい手段を探し出すことを教えた。わたしは自分自身に言った。『たしか、プチブリの街の長い放浪の日々、おまえは自分の父親に顔やしぐさがすこしでも似た男の人を探しだそうとしていたんじゃないか？ おまえの父親は銃殺されたんじゃない、どこかに身を潜めて、おまえが父親なしでどう生きていくか、おまえの生き方や行動を見ているんだと思っていた。父親はいまにもおまえの前に現れて、おまえを抱きしめ、服やお菓子をくれるような気がしてたんだ。何度か父親になつてくれそうな男を

見つけさえした。でもそれだけだった。結局自分の選択に自信がもてなかったんだ』『もちろん、ぜったい忘れるもんか。そうだ、目からは涙があふれ、いまいましさのあまりのどがつまった』『おまえ忘れてはいないだろうな。いつかおまえはどこかの小母さんが気に入ってその人をお母さんと呼んだんだ。するとその女はいきなり、「このうすのろ、さっさとあっちへ行くんのだ！ 糖蜜菓子^{リーニク}をだまし取ろうとでもいうつもりかい？」と叫び、そのあと、こんなことまで言った。「しっ、しっ、ほんとにうるさいブヨだねえ」ほんとうに、おまえは何度失望と落胆を経験したことか。覚えているか？ 学期中ずっと昼休みのたびにフバタイコばあさんのアパートにあったかいシチユーとメンチカツとお菓子のはいった袋を取りに走って、ばあさんの娘の女教師のところへお昼ご飯に届けてやったのに、女教師は三点以上はぜったいにくれなかったし、一度だってご馳走してくれなかったこともなかった。シトウチキンの郵便局長の脳みそのたりない息子やバーボシキンの揚水所長のうすのろの娘^{むすめ}にはいつも五点をやったり、ケシの実のはいった丸型パンをご馳走してやったりしていたくせに』『覚えているとも、子供のころの日々をわたしは自分の記憶に鮮明にとどめている！ わたしは幼稚園の年中組で初めて自分へのあからさまな不公平と、ひよつとしたら、敵意さえも感じたのだ。幼稚園の庭には十本の桑の木が生えていた。市の調達事務所はわたしたち園児に桑の葉で飼わせようと、カイコを供与した。四週間ごとに純白の絹の糸でくるまれた繭^{まゆ}が調達事務所に手渡された。カイコの世話にあたったわたしの同級生たちは夕食のおまけにスプーンいっぱい^{まゆ}のマーマレードと丸型パンをもらった。幼稚園の保育士たちはわたしにカイコの棚に近づくことを一度も許さなかった。あいつらは自分の親類や知人の子供らにカイコの世話

をさせたのだ。だからマーマレードも自分のパンもわたしは見ることがない。どういうわけか大人たちはわたしの頭の後ろに平手打ちを食らわせたり怒鳴りつけたりし、保育士たちはもつとも屈辱的な仕事をさせるためにだけわたしを探し出すのだった。もしかしてわたしの両親の行為の記憶が、かれらにそうさせたのだろうか？ そうだ、思い出した。わたしは女の子たちがおもらしたしたパンツを持ってその子たちの家に持ち帰り、その代わりに乾いたパンツを持たされたのだ。孤児のようなもの以外の誰にこんなことをさせるだろう？ 孤児のわたしには、保育士たちに責任を取れと文句を言ってくれるものは誰もいないんだ！ それに、ただの一度だって誰かがわたしにお礼を言ったり、ケシ粒入りキャンデーやしわのレーズンの実をくれたりしたことがあったか！ あいつらはぐちるだけだった。「なんであんな娘はこんなことをくりかえすんだ？」そして、まるでわたしに女の子たちの不可解な行為の全責任があるかのように、わたしの頭の後ろをぴしゃりと打つのがあった。あいつらはわたしの父親に平手打ちをかませ、母親を罵^{ののし}っている気になつていたんだろう。わたしがこんな赤毛でやせっぽちなのがまわりのやつらの憎悪をかきたてたのかもしれない。プチブリ市の第三幼稚園でわたしは初めて一人になりたいと思った。わたしはたいていいつも保育士たちとも同級生たちとも離れたところに全く一人ぼっちですわっていた。お日さまだけがわたしの頬をなぜ、気まぐれなチョウが人生に対する興味を呼び起こした』『幼稚園のお絵かきの時間に地元の新聞社「プチブリのプラウダ」の特派員がやってきた時のことを、おまえは覚えているだろうな。女性記者はおまえの描いた絵を手にとって、感動して言ったものだ。「このクレムリンの壁、素敵ねえ！ これを描いた男の子はなんていう名前なの？ この才能

は絶対に記事にすべきだわ！」すると保母が女性記者のそばにさつとやって来て、おまえの絵を取り上げて、言ったんだ。「このクレムリンの壁を描いたのは『スームイ農業技術所』の所長さんの息子さんでヴィクトル・ヴィポルコフちゃんですよ」おまえは驚いたけど、黙ってひきさがったんだ『おぼえてるとも！ 忘れることなんてできると思うか？ 次の日の新聞には「五歳の少年、ヴィクトル・ヴィポルコフがお絵かきの時間に丹念に描いたクレムリンの壁」と題した記事が載ったんだ。こんなこともあったな。年長組のグループの誰かが幼稚園の隣の家の窓ガラスを割ったんだ。幼稚園中が上を下への大騒ぎになった。隣家の主人はどこかの大農業経営所の所長だった。そのうえ窓ガラスを割ったのは共産党のボスの息子だったのだ。問題を回避するために、つまり、大農場の経営責任者と地区の共産党のリーダーとの確執をさけるために、職員会議で採択されたのは、ワシーリイ・カラマーノフを罰するという決議だった。わたしは片隅で三時間ひざまずかされた。おまけにもう一つ不公平なことが加わった。罰が一時間半引き伸ばされたのだ。窓ガラスを割られた家の主人がいたずらものの耳を引っ張るためにわたしに直接会いたいと申し出たからだ。家主は約束の時間より遅れてやってきた。わたしは夕食ももらえず、頭の後ろを何度も平手でこっぴどくたたかれた。家主の手は重かった。が、わたしを驚かせたのは家主の口に浮かんだ泡だった。そいつはわたしの後頭部をドンとぶつと、怒り狂って叫んだ。「赤毛のくそがき、他人の家のガラスを割るとどうなるか思い知らせてやる！ ひどい目にあわしてやるぞ、できそこないのガキめ！」わたしはその時思ったのだ。いまにみてる、おれが大きくなったら、おまえの家の窓ガラスを全部たたき割ってやると『おまえはよもやそれを忘れはしなかったろう

な？』『忘れるもんか。借りは返さなくちゃならない。三年後の洗礼祭の酷寒のころ、わたしはあいつの家の窓ガラスという窓ガラスをすべてたたき割った。ガラスの割れる音が響きわたると、破片が雪の吹きだまりに飛び散った。わたしにはそれが家主の口から歯という歯が飛び出し、保育士たちの赤ら顔を引っかき、傷つけながらあちこちに飛び散っていくように見えた。ざまあ見ろ！ わたしは心の中で思った『もう、十分に暗くなったようだぞ』『そうだな、そろそろこの家に誰が住んでいるのか見てきてもいい時間だ』わたしは立ち上がると、バケツからぐつと一杯水を飲み干し、オオムギの粒をいくつか口の中に放りこむと、豚小屋を出た。丸太の家までの五十歩をわたしはかなりの速さで歩ききった。わたしは初めて禁じられた場所にいた。主人の敷地内の家の中に、そして、わたしという子供の運命を決めた家にいた。それまでのわたしの生活の範囲は納屋と豚小屋、菜園、半ヘクター程の農場とその間を結ぶ小道とに限られていた。そこでわたしは毎日働き、その中を自由自在に行き来できた。しかし、主人の家の前に来ることはわたしにはきつく禁じられていたのだ。もしわたしがもうすこし大きかったら、自分を奴隷のように感じていたことだろう。だが、わたしの子供のころの意識には別の苦しみが重くのしかかっていた。家に近付くとすぐ、自分には家の中を覗くのが難しいことがわかった。わたしの身長は百五十センチぐらいで、自分が考えていたことはできそうになかった。わたしは周囲を見まわした。そばにリンゴの木が花を咲かせていた。白みがかったピンクの花びらが風にふかれて舞い、まるで五月のチョウのようだった。わたしがリンゴの木に登っていくとすぐ、アンナ・クレメンチエヴァの姿が目に入ってきた。女は裸で、男の肩の上にすわっているように見えた。女の足は男の

首に巻きつき、手はだらりと頭のうしろにたれていた。その頃のわたしにはこの人間たちの奇妙な姿勢が何を意味するのかわからなかった。わたしは幾度となく市の公園で抱き合って横になっている恋人たちの姿を目にした。が、これほどあからさまな裸のすがたを見るのは、初めてだった。わたしは目をそらし、他の窓を覗こうとした。が、どこも真つ暗で、^{ひとけ}人氣がなかった。『あの女はあの男の妻なんだろうか？ それともあの怪物の愛人なのか？ つまり、あの女はこのおとなしい、うちのめされたカラマーノフを見つけ出し、孤立無援の奴隷として自分のもとに働きに來させるようにパンチューホフにそそのかしたというわけだ。あの女の家畜にエサをやって体を洗ってやり、菜園を見張り、畑を耕やさせるために？ 金も払わず、ろくに食事もさせず、必要なシーツも寝具も衣類も与えずに？ 言葉もかけないで！ さようなら、こんにちは、ありがとう、といった一番簡単な言葉もかけないで。わたしには隣人のこうした侮辱をあいづらすべてから受ける用意がある。だが、わたしはちがう。わたしはこんな破廉恥なまねはできない。ちがう、わたしは同じ種族に属していない、人間という^{きじ}生地から煉^ねられたものではないのだ。わたしには母も父もない。もしかして、これは何か神秘的な力がことさらにしくんだことではないのか？ 何か宇宙的な知性がわたしのような、人間を憎悪する者を創りあげようと望んだのではないか？ それなのに、この愚かなわたしはコロニーであの女の氣品のある顔を見ながら、母親の愛情を夢見ていたんだ！ そんな人間的なものはみんなわたしにとって何だというのか？ 馬鹿め！ わたしは何か別のものを目指さなくてはならないのだ！ つまり、あの女が農場主のセミハトーヴァなんだ！』ということは？ 氣品のある顔をした看守！ 道德家の顔をした地主なんだ！』こ

うしてわたしは十一歳ではっきりと自分が人間とは全く違う存在であることを確信したのである。しかし、未成年が感じる疎外感は大人の感じるものよりよほど強烈な表現をとるものだ。激しい怒りを全身に感じながら、わたしは木を降りると、納屋に急いだ。正直なところ、怒り狂ったわたしの意識の中には別にこれといったはっきりした考えがあつたわけではなかった。だが、自分の中の私^やが何か攻撃的な行動をしようとしているのをわたしはかろうじて抑えていた。なぜわたしは豚小屋に急いだのか？ わからない。うす暗い自分のかつての宿に入った。記憶をたよりに石油ランプに近付いて、マッチを擦^すった。その時思いがけない考えがわたしの意識を刺し貫いた。どうして主人のあの家を燃やさないんだ？ 他人^{ひと}が焼けるのを見てみると、心底うれしくなるものなんだ！ それがやつらの本質なんだ。うまくいった者がうまくいかなくなると、やつらはお祭り騒ぎをするんだ。子供のように喜び、感動し、満足の涙にむせぶんだ。こうしてわたしは人間という種族と最終的に決別する。別れの炎は新しい生き物の魂を照らし出し、地球上に完全に新しい生命が誕生するきっかけとなるんだ。わたしは自分の特異な状況から高みの見物をする。肥満した消防士たちが酔っ払いのようにめんどくさそうに消化ホースを広げ、ホースのノズルがさびた蛇口のように数滴の水を吐き出したあと、続けざまにくしゃみを始め、その後全面修理まで長くだまりこんでしまうのを見る。眠そうな隣人たちが寝る前にプラスのエネルギーを蓄えようと、**自分**たちの幸せな顔を窓から突き出すのを見る。そして、炎に包まれたものたちの叫び声が群集のどよめきにかき消されるのを見るんだ。この思いもかけない考えはわたしを狂喜させた。これまでの十一年間のわたしの人生でこんな幸せな考えが浮かんだことはなかった。強烈な決断

に我をなくし、わたしはマッチと一抱えの藁をひつつかむと、憎むべきやつらの住む家に向かつて駆け出した。窓から漏れるかな光のもとで何本かの白樺の薪を集めた。藁の上に薪をならべたあと、またその上に乾いた藁をおいて、マッチを擦った。炎が勢いを増してきた。炎の舌はすでに家の枠組みの最初の部分を舐めていた。『もしかしたら、父の犯行の本当の理由は人々に対する憎しみだったのでは？ 母の自殺も同じ理由で説明できるのでは？』突然まったく異なった考えが子供のわたしの頭の中に浮かんだ。『ぼくは何をしてるんだ。ぼくは人間じゃないんだ！ ぼくはこうすることで人間になろうとしているんだろうか？ ちがう！ 人間的なものなんてくそくらえだ！ どうやら自分の中にある人間的なものの残りがぼくをつきうごかしたようだ。そして、ぼくの両親のしたことも、やはり純粹に人間的なことだったんだ！』わたしは驚いた。わたしが必死になって近づこうとした新しい本質がこんなにも人間的な不快なものに成り得るということに驚いたのだ。わたしは豚小屋に急いだ。そして水を入れた飼葉桶をつかむと、火事場に駆け戻って、火に水をかけ始めた。飼葉桶一杯では不十分だった。わたしはバケツを持って井戸に走った。すでにくすぶり始めている火を完全に消し止めるために。犬たちはだまってわたしの後について走った。まるでわたしの心のなかに起こっていることがわかるかのように。もう火事の心配の全くないことを確かめると、わたしはのろのろと豚小屋のほうに歩いていった。友達の豚たちに別れを告げるために。その後、猟犬たちを抱きしめると、不思議に落ち着いて、いくらか厳粛な気分できぐり戸をあけて、庭から出ていった。『ワシーリイ、おまえはいったいどこへ行くつもりなんだ？』わたしは自分自身に聞いた。『自分を探しに行くんだ！ そうだ、その時が

来たんだ！ 十一歳でこうした探求を始めることができてよかった。今始めなかったら、間に合わなかったかもしれないんだ！』わたしはその頃はまだ知らないでいた。宇宙が人間を造り出すのに百三十億年もの時が必要であったことを。そうして、できあがったものがいかに効率の悪いものであったかを！ 偉大なる試練は何年も続いた。人間の中の人間的なものを変えることだ。しかし、仕事は頓挫し、前に進まなくなった。人間という種族の代表者たちの自己満足と、人間的な不完全な遺伝的組成が自己完成への最も重大な障害となったのだ。誰かがこの難事業を始めなくてはならない！ もし仮に突然変異の時間と空間だけにたよっていたら、人間という欠陥種に代わる新しい存在が最終的に生みだされるまで何十万年もが必要となるのだ！……翌日、ニエドリガイロフのコロニーの女教師の家の放火未遂事件は果てしない議論をまきおこした。わたしは森の中で寝ているところを捕らえられ、鞭で打たれ、独房に投げ込まれた。温かい食べ物も散歩も木曜日ごとの風呂も全く許されなかった。パンチューホフが請け合った通り、独房には用便桶も差し入れられなかった。用は独房内で足さなくてはならなかった……。ロシアでは法的に責任を取らなくてはならないのは十四歳からとなっている。わたしは十一歳だった。偽造文書でも、十三歳だった。しかし、この状況はパンチューホフやセミハトヴァ、その他のコロニーの管理者たちをまったく困らせなかった。わたしを法的に責任を取らなくてはならない者にするために、かれらは再びわたしの出生証明書を書き変えた。新しい出生証明書には出生を数ヶ月間早めた新しい生年月日が記載された。こうしてわたしは急速に大人になった！ わたしの一件の事情聴取は壁紙が色あせて黄色になった裁判所の小部屋で行われ、それは三分とはかからなかつ

た。壁紙と同じように色つやのない顔とエナメル質の傷んだ歯を持った疲れた様子の裁判官は急いで判決を読み上げた。そしてわたしはピヤーン川の川沿いにあるペレボーズ市の未成年犯罪者の収容されているコロニーに五年間の刑期で送られることになった。わたしは人類に対していたいどのように接するべきだったんだろう？ あいつらを敬うことなんてできただろうか？ 人類という種族に似たものになりたいなどと思えただろうか？ いやだ、なんとしてもいやだ！ 絶対にいやだ！ もっとも、この考えはわたしの意識の中に幼年期から芽生えていたものだ。そして今までのわたしの人生でこの考えを改めさせそうなものは何もなかった。中央新聞『プラウダ』がプチブリでもニエドリガイロフでもペレボーズでも全く同じように、ロシアの田舎町における人々の精神構造はどこでも同じだった。わたしのまわりの人々の考え方には何か共通のものがあつた、まるで中央によって統制されているかのように。ペレボーズに着くやいなや、わたしはやっかいなことに巻き込まれた。管理責任者たちはわたしに赤い腕章を着けて、わたしが十分『赤化』されたことを見せるために、一日中収容所内の就寝用バラックを回って歩くようにと要求した。つまり、忠誠心ばかりではなく、収容者たちに背くことが証明できるよう、収容所の管理者たちと共同して働く用意があることを示せというのだった。年少の犯罪者たちは手に手に棒切れを持って、そんな事はぜったいにするな、と言いつくめた。わたしは思った。『バラックに収容者と一緒に住んで、そして、収容者を事務室に座っている別のやつらに密告する。ひょっとして、それが人間の論理なのかもしれないが、どう考えてもわたしの論理ではない。人間はワシーリイ・カラマーノフの友になれるものだろうか？ いや、そういう資質はやつらにはない』わたし

の優柔不断さは両方とも陣営の気に入らなかつた。そして、両方とも陣営がわたしをぶちめすことに決めた。先の陣営は昼間、そしてもう一つの方は夜わたしをぶちめした。収容所内の病院にわたしは百日間ほど寝ていた。十月の末にわたしは退院し、そこで地元のボーラー室のボーラーマンの助手として働くよう辞令を受け取った。孤独への願望はいよいよ強くなった。こうして、わたしは収容所内の活発な活動から遠ざかり、単調に五年の日々が過ぎていった。わたしは収容所内で、ただの一度も食料の差し入れを受けず、ただの一通も手紙を開封しなかつた唯一の収容者であり、また、一度も親類縁者との面会に呼び出されず、期限前に釈放されなかつたただ一人の囚人だった。だが、わたしはまた図書館のすべての本を数回読みきった収容所内でただ一人の囚人でもあつた。まさにこの収容所でわたしの想像力と本への愛着は飛躍的に増大したのだ。わたしは勉強したいとは思わなかつた。学校では他の子らと話さなくてはならなかつたから。わたしは黙っていたかつたのだ。わたしは考えていた。わたしは自分自身と会話をしていた。冬場と夏場はボーラー室からはほとんど外に出なかつた。わたしは働き、思索に耽り、夜空の星を仰いだ。囚人らの幾人かは釈放され、あるものは収容され、またあるものは大人のコロニーや刑務所に移送された。三月も末のある日、わたしは当直の部屋に呼び出されて、釈放を告げられた。わたしは五年の歳月がどのように過ぎたのかも覚えていない！ わたしは囚人服を脱いで、どこへなりと出て行くようにと言われた。この知らせは別段わたしを喜ばせもしなかつた。行くところなどどこにもなかつたからだ。だが、この通告はまた特別の悲しみも感じさせなかつた。わたしとペレボーズ収容所の警備員や囚人たちをつなぐものは何もなかつたから。わたしにはどうでも

よかった。禁固の身でも自分を探し出すことはできた。とはいえ、自由はわたしにある種のチャンスを与えた。収容所^{ラーゲリ}の所長の前でわたしは服を脱ぎ始めた。囚人用の綿入れ半外套、詰め襟の制服、重い短靴、靴下、ワイシャツ、シャツを次々と脱ぎ捨てた。パンツを脱ぎかけると、所長は突然わめき始めた。「まっ待ちやがれ！　きさま、本官を侮辱した罪で即刻十五日間の懲罰房入りだ！」「収容所の制服を脱ぐようにおっしゃたのはあなたではありませんか！　わたしはおっしゃる通りにしたまでです」「用度倉庫に行つて、着替えるんだ。なんだつてわしの目の前におまえのしみだらけの身体をつきつけなきゃならんのだ？　さつさと行け！」「わたしには着替えるものがあります」「わたしはおどおどと言つた。「着替えるものがないだど？」所長は怒りだした。「ほんとうです！　わたしは孤児です。ここに來た時、身長は百五十九センチでした。ですが、今は百八十二センチあります」「わたしにはきさまに国家の財産を横領する権利を軽々しくやることはできないのだ！」「少佐は電話をかけると——どうやら會計課のようだったが——訊^きいた。「カラマーノフにはいくら算入されておるんだ？　九十ルーブリ三十二コペイカ？　制服はいくらするんだ？　ほんとうか？　返却券と一緒に二十三ルーブリ四十コペイカだと？　こいつには自分の服が一枚もないんだ。計算し直さなくてはならん」「五年間の稼ぎがほんの九十ルーブリちよつとか。自由の身でもそれくらいしか支払われないのだろうか？」「そんな考えがわたしの頭をよぎつた。會計係は五ルーブリに相当する着古して裾がぼろぼろになつた綿入れの半外套を受け取ると、そのかわりに負債消滅証明書を手渡した。それにはわたしのわずかばかりの貯金と国家の財産、つまり、わたしがまだ身につけている囚人服との計算のし直しが書き付けてあつた。わたしに七十

ルーブリはどが手渡されると、警備員がドアを開け、わたしのほうに目をやつて、言つた。「この怠け者、さつさと失せろ！」こうして十六歳で（書類上では、ほぼ十九歳だつたが）わたしは自由の身になつた。詰め襟の制服のポケットに自分の書類——釈放証明書と偽^{にせ}の出生証明書——を入れると、わたしは別に嬉しいとも思わず収容所^{ラーゲリ}の門をあとにした。どんよりとした空はいつにも増して暗かつた。雪も降り出し、空気は湿り、道はぬかるんで、人通りも多かつた。道行く人々の不機嫌な顔つきと、何か当惑したような歩きぶりと、手足のぎこちない動作がわたしの気分を滅入らせ、とまどわせた。『自由な世界というのはいつもこんな不愉快で絶望的なものなんだろうか？　あいつらはどうしてこんな不公平な世界で生きていくことができるのだろうか？　あんなにゆがんだ意識を持つて？　あいつらには未来なんかないじゃないか！　何かを始めなくてはならないんだ。だが、あいつらにそれができるのだろうか？』わたしの頭をそんな考えがよぎつた。わたしはどこへ行けばいいのか、どのルートを取ればいいのかまったくわからずに、街の通りをのろろと歩きまわつた。本当に、どこへ行くあてもまったくなかつたのだ。わたしの目の前には巨大なロシアの地が延々と広がつていた。だが、わたしを待っていてくれるところ、めざすべきところはそこにはなかつた。思いがけなく、わたしは傾いた木製のスタンドのならんだ露天市場に出た。商売女たちがジャガイモや赤いビーツ、干しきのこ、毛糸の靴下やショールを客にすすめていた。なんとなく暗い感じの男が斧を売つていた。シャベルや熊手やフォークを売つてゐる男もいた。市場にはどうにも興味がわかなかつた。回り道をして、わたしは出口にやつてきた。そこには数台の古ぼけたバスが停まつていた。そのうちの一台のバスにへペレボーズー

クニヤギーニノ」という表示を読み取った。バスの扉に首を突っ込み、運転手に聞いた。「乗車券はいくらですか?」「三十コペイカだ!」運転手は答えた。「じゃあ、お願いします」「乗りな。チケットはいるのか?」「けっこうです」「じゃ、十コペイカまけといてやる」数分後、バスはすでにわたしを乗せて、ヴォルガ河沿いの古い町に向けて走っていた。こうしてわたしのクニヤギーニノでの生活が始まった。最初のうちわたしはバスをねぐらにしていた。夜はバスの後部座席に身を潜めて眠り、昼は街の通りをうろつきまわった。一週間後、わたしは梱包工場で見つけた。わたしは金槌かなづちと釘を手渡されて作業所につれていかれた。補助資材が無造作に投げ出され、わたしはウォツカのボトルを入れる木箱の組み立て方を教えられた。一箱につき、十コペイカが支払われた。最初のころは一日でせいぜい十箱作るのがやっとだった。が、作業を始めて二週間たつと、一日の終わりにはわたしの作業台の上に十五から十七個の箱が整然と並んだ。すこし暖かくなると、わたしは夜ひそかに梱包作業所に寝に戻るようになった。わたしの一ヶ月の稼ぎは五十ルーブリちよつとになった。そのころまでにわたしはぼろ市で何枚かの古着を買い、外見を整えた。また、釈放証明所に基づいて身分証明書も受け取り、その頃ますます自分を悩ませるようになった問題について考え始めた。わたしは知識なしでは自分を変えることはできない、自分から人間的なものをすべて振り落として新しい存在に変わることとはできない、ということが次第にわかってきた。収容所ライゲリでわたしはそこにある本という本をすべて、何度も繰り返して読んだ。収容所の本は十年から十五年の期間でしか入れ替えられなかったから。文学書は基本的に人間とその営為を賛美する愛国的なものしか所蔵されていなかった。そうしたテーマにはまったく興味

が持てなかった。が、わたしは無理に図書館の本を読んだ。わたしには全く別の目的があったからだ。まず本を読むことを学ばなくてはならない。かれらの世界をすっかり理解し、一刻も早く新しい知性的な存在を誕生させるために計画的に戦いを挑まなくてはならない。帝政時代から雄大なヘラジカの紋章を持つ歴史的なロシアの市、クニヤギーニノにはかなりいい図書館があった。わたしはそこで初めて本格的な書籍と出会ったのだ。わたしは自分の自由時間のすべてを図書館の閲覧室で過ごすようになった。人間には興味がなかった。友人もなく、女の子とデートをすることもなかった。わたしは女の子たちとの交際を求めなかった。見た目にはわたしの生活は単調なものであったかもしれない。が、実際には、わたしは常に探求への飽くなき興奮状態にあったのである。この辺境の都市の図書館はある種の知的探究心を助長した。例えば、本格的に遺伝学を学ぶように自分を駆り立てた最初の発想は、ロランド・クリストファネリの『憑かれた人ミケランジェロの日記』を読んでいた時に突然わたしの頭に浮かんだものだ。この願望は他ならぬ羨望という人間的な感情から引き起こされたものだった。わたしは自分の一貫性のなさを恥じた。つまり、まだ人間特有のメンタリティーが残っていることを恥じたのだ。そして、意気込んで天才の秘密を探し始めた。この未知なるものの探求こそがわたしを首都に誘ったのである。事は非常に散文的に進んだ。わたしは地方の図書館員に気詰まりな質問をしだしたのだ。わたしは天才の資質を解明する本に興味を持った。クニヤギーニノの図書館にはこのテーマに関する文献はなかった。すると、年配の婦人がそつとささやいたのだ。「おまえさん、モスクワに行きなされ。首都の図書館にはあんたの探している本はみんな揃っているはずじゃよ」もつとも、その老婦人は

驚いたような目をわたしに投げた。世にも不思議なものを見るかのように。まったく老婦人の目にわたしは不思議な読者に映ったようだ。夕刻ぶっ通しで本を読みふけり、女の子には少しも興味をもたず、いつも一人で、しかも遺伝学に興味を示す若者。しかも遺伝学という基本科学の概説書だけではなく、その中の最も微妙な分野である天才の創生について知りたがっている。おそらく、このようなテーマに興味を示すものは誰だって、周囲の者たちに警戒心や危機感を起こさせるにちがいない。どうしてそんなものが必要なんだ？　こいつは気が違ってるんじゃないか？　もしこいつが突然とんでもないものを要求しだしたら？　その時はどうすればいいんだ？　こうして、一九九〇年の八月二十一日にわたしは自由席の切符を買って、自分の簡単な身の回り品を袋につめて、モスクワに向かった。正直なところ、どこで、どのように暮らそうがわたしにはどうでもよかった。自分の生活条件への要求などわたしにはまったく何もなかった。たった一つだけわたしがこだわったのは、時には病的にまで頑固に求めたのは一人でありたいという孤独への願望だった。そして、わたしはおおよそそのところ自分の頑固さに満足していた。また、自分が子供の頃に芽生えた考えの強靱さと一徹さがうれしかった。ところで、わたしはモスクワの誰のところへ行ったのか？　モスクワでわたしを待っていたのは誰なのか？　いったい誰のところか？　息の場を求めればよかったのか？　この巨大都市でわたしにはただの一人も知り合いはいなかったのだ！　それはわたしに親類縁者がいなかったからというのではなく、私と人間は未だかつて一度も親しくなろうとしても親しくなれたことがなかったからだ。オルドヴァイ人とピテカントロプスとの共生がオルドヴァイ人の完全な死滅に終わったように、ピテカントロプスとネアンデル

ルタール人との接触が何の結果も生みず、ピテカントロプスが永遠にこの世から消えたように、また、ネアンデルタール人とクロマニヨン人との交流が生まれないまま、ネアンデルタール人が存在しなくなったように、『人間と私』との対立においては、人間こそが忘れ去られ、歴史のページの中にだけ残り、考古学的な興味の対象になるのみであるべきなのだ。われわれはけっして共存することはできないのだ！　かれらはこれについてまだ何も知らないでいる。が、わたしはなぜか自分の正しさを確信していた！　だから首都でどこに住むことになるかがわたしには全くどうでもよかったのだ。わたしは首都に知識を得るために行くのであって、ほかのことはわたしにとってまったく興味も関心もなかった。わたしは自分の目の前に山積みになった本だけを見ていた、が、人々を見ようとは思わなかった。あの頃わたしにはクロマニヨン人にとって代わるべき新しい存在を志向する自分は完全に孤立しているように思われた。孤児として一人残されたわたしは、とても早くからすべての人間的なものから逃げようと心に決めていた。そして、ここクニャギーニノで、わたしは次のように思考を展開させたのである。ケニアの峡谷オルドヴァイで、百五十万年以上前に出現したアウストラロピテクスの痕跡が発見された。ドイツのネアンデルタールでは、十五万年間生存して『ネアンデルタール人』と名付けられた原人の遺骨が発見された。フランスのクロマニヨン洞窟では、四万年以上前に生存し『クロマニヨン人』と名付けられた現代のタイプの最初の人類の出現の証拠が発見された。わたしはプチブリに出現した。つまり、わたしの生物学的な種族は間違いなく『プチブリ人』と名付けることができる。是非とも人類学的連続性における科学的な継承性について観察しなくてはならない。しかしながらこの推論

はわたしをたいへんとまどわせた。プチブリからモスクワまでは約四百キロもある。プチブリ人という種を存続させるためのわたしのパートナーとの出会いはどこで行われるべきなんだろうか？ モスクワで？ いやちがう、これまで種族が発掘された場所は、ケニアにしても、ドイツやフランスにしても範囲は数キロメートル以内と限定されている。わたしの場合は地理的空間が数百倍も増えることになる！ だが、もしかして、首都でわたしはプチブリかニエドリガイロフ、またはクニヤギーニノから来た女性と会うことになっているのかもしれない。とすれば、すべてがうまくいく。人類学上の論理は満たされ、プチブリ人が人類に代わって登場することになるんだ！ ここでは愛などというのは何の役割も果たさないのだ。新しい種の発生に、愛などという感傷的なものがなんだというのか？ わたしは定められたことを成し遂げるべきなのだ。ぜったいに！ わたしのパートナーがどのような顔かたちをしていようが構わない！ このような重要な決定に際し、外見が問題になるだろうか？ わたしは人間ではないのだ！ わたしは自分の特異なステータスを誇りに思う！ 人間の意識を超え、現存する生物学的種族の範疇を超えた完成への願望。わたしは既にクロマニヨン人という種が改善される可能性は無いことを深く確信していた。コニヤツクがカシワの樽たるの中で四十五年しか醗酵せず、そのあとカシワの香りが酒を芳醇にすることができなくなるように、人類の発達も四万五千年が限度だったのだ。人類の知能も文化もこれ以上発達することはないだろう。突然変異も十分な効果は見せず、人類が自己完結することは無い。これはある一つの進化のサイクルの終わりであり、新しい種族の形成の始まりなのだ。こう考えながらわたしは汽車の駅に急いだ。モスクワまでの自由席の切符は三ルーブリ二十

コペイカだった。わたしは車両に乗り込み、席を見つけると、上段の真上より、荷物の詰まった袋を枕に横になった。そして、これまでの思索に疲れきったわたしは急速に深い眠りに落ちていった。夢の神秘、これはわたしとはまったく縁のない領域ではあるが、ほかならぬ首都へと進しんずる汽車の中で不可思議な夢がわたしに訪れたのであった。その夢は自分の想像力をいやがうえにもかきたてたので、わたしは今まで経験したことも、味わったこともない純粹な喜びを初めて感じた。夢の中で自分がモスクワにいると感じた途端にわたしはえもいわれぬ喜びを味わった。巨大な都市、広大なアスファルトの道路、いままで聞いたことさえない車のブランド、外国の商品を所狭しと並べた豪華な商店、全世界の珍味を提供するレストラン、最高級の家具をそろえたアパート、金ぴかの黄金の塑像で飾られたクレムリンの執務室、わたしの予想を上回る蔵書数を誇る図書館、首都の最新式地上および対空防衛システム、それらはどれ一つとしてロシアの辺境の町から出てきた青年であるわたしの意気を阻そ喪そうさせたり、驚かせたりはしなかった。そして、最高の喜びを、わたしはまったく別のことに感じたのだった。裕福なこの巨大都市、豊かさを支える巨大な下部構造、かつてのソヴィエト帝国の首都の驚くべき規模の資本、わたしの前に実際に姿を現したすべては、重要なものを欠いていた。モスクワは空っぽだった！ うれしい事にわたしの目の前には人っ子一人いなかったのだ！ かれらは消え失せてしまった！ 蒸発してしまった！ 存在しなくなったのだ！ このとんでもない不可思議な状況こそがわたしに限りない喜びを感じさせたのである。この千五百万人の都市全部がわたし個人の所有であることがわかった。が、わたしにはこんなものは全然必要ないのだ、まったく役に立たない代物しろものなのだ。わた

しはこれらすべての人間の贅沢をうち眺め、かれらの時代がついに終わり、新しい種族の最初の存在——プチブリ人——がこの世に押し入り、世界を新しく再建しようとしていることに喜びを感じた。生物学的、倫理的に全く異なる基礎の上に世界を再建しようとしている！ はるか昔カルメル山のタブーン洞窟に出現した人々が自分たち人類の世界を築こうと夢見たように。そしてかれらにはそれができたのだ！ ならばわたしにもできるはずだ。わたしはまったく異種の存在なのだ！ わたしがかれら人類に代わるべく出現したように、プチブリ人のあとには別の種族がやってくる。この世界を自分たちのやり方で創り変えるために。地球はこの先さらに百三十億年ほど存続するのだから。いったいこの先どれだけの生物学的な新種族が次々と交代して現れることだろう！ 種族の交代に反抗するのは無益だ、バリケードも無効だろう。人類がこうしたことを理解するのが早ければ早いほどかれらの退場は痛みを伴わないものになる。これが自然の摂理なのだ！ かれらのうち何人かは人類に未来がないことがわかつている。しかしかれらの頭脳が自己完結することはもうできなくなっている。恒常性は壊されてしまったのだ。この種族の進化にはじきに終わりがやってくる。もし人間がわたしの立場にたったら、モスクワのような最高に裕福な都市にたった一人になったら、いったいどのようなふうだろうか？ ロシアの首都に、今日たった一人残されたら？ まずクレムリンの最上の豪邸に住まいを移し、グラノヴィータや宮殿の財宝を全部独り占めし、日ごと車を乗り替え、造幣局を私有し、中央銀行の支配人になり、豪華な別荘を自分自身のものとして確保し、巨大都市の郊外を歩き回ることだろう。そして、マツトレスには金を、枕には宝石類を詰め込むことだろう。インペリアル・イースター・エッグでお

手をし、靴の敷革には国家憲法を用い、自分の肖像を印刷して町中の広場や家屋やアパートにべたべたと貼り付けることだろう。自分のまわりをピオネール・ミサイルで囲み、赤の広場にミグ戦闘機をずらりと並べ、すべてのクレムリンの塔の前にはウラジーミル戦車を駐留させることだろう。クレムリンの家々の玄関の前には自走多連装ロケット砲台『グラード(電)』を装備し、私邸の屋根の上には近距離防空ミサイルシステム『ストレラー(矢)』を備え付け、寝室には、攻撃用ヘリコプター『チョールナヤ・アクーラ(黒い鯨)』を置くにちがいない。招かざる客に、自分が何者であり、何ができるのか、どんな力を持っているかを知らしめるために！ 大統領の伝達機関、テレビ、ラジオ放送、イタル・タス通信を通じて、自分が大統領兼、総書記兼、国会議長兼、ロシア人の代表、地上の臍^{へそ}ともいえる偉人であることを宣言するにちがいない！ これこそが人間の本質なのだ。欲求、際限なく増殖する欲求、有益なもの、無益なものすべてののろくたを所有したいという頑^{かたく}なまでの欲望が今後人々の生活の前にたちふさがる遮断機となるのだ。こう認識したあと、わたしは声高く叫びたいという欲求にかられた。人々よ、もうたくさんだ！ みなさん、これで十分だ！ あなたがたの時代はもう終わってしまったのだ！ われわれの時代がやってきたのだ！ わたしの新しい種族はあなたがたのとはまったく異なった文明をつくりだすのだ！ わたしを取り巻くすべてのものに対する嫌悪はとどまるところを知らなかった。そこでわたしは少し歴史の力を借りることにした。シュメール文明に属する人間がギリシア人には不可解であったように、また、エトルリア人がローマ人にとって謎であり、ローマ人が蛮族の目にはかえって離反者と映ったように、中世人が蛮族にとってかわり、その後、ルネッサンス

人がそれに代わり、ルネッサンス人が資本家の襲来の前になす術もなかったように、ブルジョア的な思考が社会主義的思考に取って代わられたように、そして、社会主義が地球主義グローバリズムに歴史的な位置を譲ったように、現代人は激烈な抵抗をすることなくプチブリ人に生活空間を譲り渡すことであろう。この論理的な連続性にわたしは自分のすべての力を傾注した。ただシユメール人とローマ人、ルネッサンス人と地球主義者の間には本質的な違いはないように思われる。完全に別々の存在なんて、意味をなさない！ 確かにある者は名誉を、またある者は資本を擁護した。ある者は自分を精神の犠牲とし、ある者は自分を暴力の犠牲にした。キリスト教で己を呪縛した者もあつたし、絶対的な自由を宣言した者もあつた。権力を希求した者もあつたし、ある者は、無政府状態を望んだ。だがこうした考えはすべて一つの種族、ホモ・サピエンス（知性の人）の生んだ思考のいくつかの逆説に過ぎない。つまりある一つの時代、知性的といわれる人類の時代の突然変異に過ぎないのだ。知性的だなんて全然正しい定義ではないのだ。まったくなんて尊大な定義なんだ！ いまこそ完全に新しい時代、プチブリ人——宇宙主義を標榜することで他とはつきり異なる新しい種族——ホモ・コスミカス（宇宙の人）の時代が到来しなくてはならないのだ。宇宙のすべての謎を解くことのできる存在。理性で宇宙を理解するだけでなく、巨大な宇宙空間を自由にできる存在。宇宙という世界の主人公となり、哀れでみすばらしい僭称者ではなく、真正銘の自然の覇者たり得るもの。だいたい登場のそもそもの初めからホモ・サピエンスの意識には現実を願望に置き換える『奇癖』があつた。自然の覇者ともあろうものが、この地球上に存在している間にこれほどの数の神や皇帝や統率者や異教の神や偶像を考え付くことを自分たちに

許すなどということがあり得るだろうか？ ボドベード、パンチューホフ、セミハトールヴァ、フバタイコ、シトウーチキン、ヴィポルコフといった輩や、ロシアに住まう有象無象の同類のうち誰が自然の覇者たり得るのか？ かれらの中に知性的であるという人間の名に値する者はいるのか？ 自分自身や全世界を理解できる者はいるのか？ 狡猾さ、貪欲さ、そして憎悪が知性を圧倒するなどということはあり得るのだろうか？ そもそも、個々の人間の素材の中に知性は存在するだろうか？ 知性は、どうやら、極く限られた場合だけ使用可能であるようだ。どこかでわたしは読んだことがある。自分たちのこれまでの歴史を通じて、かれらがこの世に送り出した天才は千人に過ぎないと。十万年の間に千人、ということは、おおよそ三百億人に千人の天才ということになる。不十分だ、人間たちよ、不十分だとは思わないか！ それに天才のリストがまた疑わしい。全く信憑性しんぴやうせいのないリストだ！ まったく信じがたい！ ボリス・ゴドゥノフ、カル五世、アレクセイ・エルモロフ、グレーブ・ウスペンスキイ、セオドア・ルーズベルト、ヴァージニア・ウルフ、シャルル・ド・ゴール、アレクセイ・トルストイ、サミュエル・テイラー・コールリッジ、ジュール・マザラン等々。かれらを真正銘の天才たち、カント、ベートーベン、ドストエフスキイ、ニュートン、レフ・トルストイ、メンデレーエフといった巨人たちと比較することなどできようか？ しかも、こうした巨人たちは百人と現れていないのだ！ 十万年の間に百人！ つまり、千年につき、たった一人の天才ということになる！ かれらはこれでも知性的な存在と自らを名付けることができるのだろうか？ 大体、ホモ・サピエンスに関するすべては、たいへん疑わしく、ひどく不自然で、矛盾していて、現実と相容れないものなのである。か

これらの世界を十二分に詳しく観察しなくてはならない。知性の欠乏が、あらゆるところで起こっていることを確信するために。知性の切実な必要性は常に感じられたことであつた。が、今日はことにそれが強く感じられる。各人が己を開き、一般的な観察に供するためにその全貌を現した今日において。現在、未だかつてないほどかれは自分の本質をはつきりと表現しようと急いでいる。外見上かれは自由だ、かれを入念に観察することは可能だ。だが、われわれが今日にするものは何か？ 百万年もの長きにわたって人間は創られてきた。が、その結果がこのありさまだ！ 昔も今も深い幻滅をもたらしたただけだ！ 例えば、ゴルバチョフがかれらに自由を与えた時、かれらが見せたのは完全な破綻だつた。自由は人間を卑屈で、怠慢で、劣等感に悩むものにしただけだつた。未完成なホモ・サピエンス、いわゆる知性的な存在は消滅すべきだ、歴史の中に消え去るべきなのだ。北京原人、ヨーロッパ野牛、ユキヒヨウ、蒙古野馬、カスピトラたちがいつか絶滅して果てたように。自然界ではいつも何か新しいものが発生しているではないか！ 新しいものはその上限まで発達し続けたあと、しだいに衰え、ついには永遠に滅び去るのだ。かれら人類もやはりこのような進化と退化の経過をたどるべきなのだ。遠い未来ではなく、今この時に。わたしにはこのプロセスを促進させる用意がある！……。夢がここまでたどりついた時、誰かがわたしの肩を押した。わたしが目を覚ますと、目の前に車掌の張りのない顔が見えた。車掌の目は飛び出し、額には引っかけ傷がいくつかあり、頬骨の上には青あざができていた。夢はとたんに消え去り、内部のモノローグは中断され、のどのあたりがむずむずしてきた。わたしは何度か咳をした。^{せき}「さっさと立ちな！ なんだってぐずぐず寝てるんだ？ 終点だぞ。とつとと失せやが

れ！ もっと寝ていたいんだつたら、金を払うんだ。今晚七時まで！ ルーブリだ！」車掌はいきなりこう言った。現実の世界に引き戻されたのが不満で、わたしはのろのろと上の寝台から降りた。しかしながら、自分はモスクワにいるんだと思うと嬉しくて、わたしはほとんど中身のない手荷物をさつと取り上げると、車両を降りた。「おい。赤毛！ この田舎もん。帽子を忘れたぞ！ 持ってけ、こちとらにはシラミを飼うところはないんだ！」車掌が叫んだ。「帽子なんか、かまうもんか！」そう思つてわたしは、車掌には何も答えず、カザン駅のプラットフォームをどんとどんと歩いて行つた。楽しい夢見の後、わたしは憂鬱な気分に襲われていた。人のいないモスクワだつて？ そんなことはあり得ない！ この巨大都市への入口でわたしは、またなんて嘲笑的な夢を見たものだろう！ これはつまり、若きプチブリ人の確信を笑おうとでもいう誰かの意図なのだろうか？ あいつらを見ろ。ものすごい数だ！ 数え切れないほどだぞ！ 頭がくらくらとし、吐き気がして、わたしは唾でもはきかけてやりたくなつた。そして、箱を作るあの梱包作業所に飛んでいきたくなつた。ただしウォッカや、野菜とかりんごの箱ではなくて、あいつら一人一人を入れる箱を作るために。なんとまあ忌々しいほどの人の群れ！ あいつらがこれほどいるとは今まで思いもよらなかつた。わたしの確信、かれらの時代はもう終わってしまったのだという確信はいよいよ強くなつた。やつらなんかどうとでもなれ！ だいたいどうしてわたしがあいつらのことを考えてやらなきゃならないんだ？ わたしは自分一人でやっていけるんだ！ わたしの目的は、自然のプロセスを早めてやることだけなんだ。義務感がわたしを現実に戻した。わたしは人間の中の優れたものについての知識を得るために首都にやってきたのだ。そうした知識

を得たあと、初めてわたしは大宇宙の意味を追い求める新しい地上の住人を創造し始めることができるのだ。新しい時代、ホモ・コスミカスの時代の到来をすこしでも早めるためには、それに先立つ時代についての知識を用いなくてはならないのだ。わたしはそれがどのように起こるものかはつきりとはわからなかった。だが、この奇跡はある瞬間にごく自然に起こるものだということを感じていた。わたしは夢想していた。全世界に向けてこう宣言する用意があった。『わたくし、ワシーリイ・カラマーノフは全く新しい存在である！ 素面しらふの者も酔っ払った者も、創造的な者も退廃的な者も、すべての人間的なものに対する敵対者である。わたしはこの世界に偉大なる使命を帯びてやって来た。手に手に松明トーチを持って彼岸へと向かう人間たちの行進で大空を照らし出すためにやって来たのだ』と。その時、しかしながら、希望と誇りに満ちたわたしはモスクワの地下鉄路線図に近付きつつあった。『ここに何が見つかるというんだ』わたしの頭をこんな考えがよぎった。『ここはまったく未知の世界なんだぞ！ わたしはただどこかの片隅にささやかな小部屋か、木賃宿か、それともどこか放置された中庭でも見つけられればそれでいいんだ。地下鉄が何の役に立つんだ？』だが、することもなく、どこへいけばいいのかもさっぱり分らなかったわたしは、これといったあてもなく地下鉄の駅名を読み始めた。そして、突然路線図のど真ん中にわたしはおもいもかけず『レーニン図書館駅』という駅名を見出したのである。『そうだが自分には必要だったんだ！』心の中でわたしは呟つぶやいた。『そうだ、駅は図書館を称えて名付けられているのだ。どうやら事は着々と成功に向かって進行し始めたようだ』こう考えながらわたしはエスカレーターに一步を踏み出し、路線図の指し示す場所に向かった。が、これだけの数の人間を

わたしは今まで見たことがなかった。駅を流れる車客の流れはヴォルガ川流域のソバ畑の夕の群れを思い起こさせた。乗客であふれた車両はフバイコ婆さんがプチブリの女教師である自分の娘に送ってやったケシの実入りのパイに似ていた。わたしはモスクワの地下鉄の駅で、自分がまるで黒い粒の列となってお菓子のなかにぎっしりと詰め込まれたケシ粒の一つでもあるかのように感じられた。列車の車両がトンネルの闇に包まれると、今度は人間によって造り出された地獄に落ちたような感覚が生まれた。いままで感じたことのないパニックが一瞬わたしの全存在を包み込んだ。わたしはジャッキで四方から持ち上げられ、やせ細ったわたしの身体は圧縮されて小さな恐怖の一塊ひとかたまりとなった。誰かがわたしの身体からだの男の部分をしつこく押し始めた。誰かの手がわたしの空っぽのポケットをまさぐっていた。どこかの婦人のハイヒールの鋭い踵かかとがわたしの足をひどく踏みつけた。わたしの肩の上に誰かがゴシキヒワの入った鳥かごを置いた。人々は少しも恥じることなく、それどころか、まるで意識的にそうしようとしてるように、わたしに向かって胡椒やねぎやんにくのにおいのする臭い息を吹きかけてきた。わたしには突然人々がわたしをカツレツにでもしたがつているように思われた。わたしはいまにもばかでかいフライパンの上でジャージャーと焼かれ、その熱エネルギーは反ホモ・コスミカスとして放出されるだろう。わたしは自制心を失った。『どうしてこんなことが可能なんだ？』わたしは思った。『わたしはまだ何もしていない。だが、しようとしていることは山ほどあるんだ！ わたしは自分の全生涯をプチブリ人の到来のために捧げたいと思った。禁固の身であった日々、収容所ラーゲリのボーラー室で日を送りながら、毎日のようにわたしは「Xデー」を、人類が完全に消え去る幸福な一

瞬を夢見てきたのだ。わたしはかれらに手を振ろうとまで思った。バイバイ、ずるいおやじさんたち！ もう二度と会うことがありませんように。でも、まさかこんなことになるうとは夢にも思わなかった』その時わたしはスピーカーから流れ出るアナウンスを聞いた。「レールモントフ駅。次の停車はキーロフ駅」列車が暗闇から電灯で照らし出された駅構内に浮かび上がり、停止すると、ドアが開け放たれ、人の流れがわたしを車両から引きずり降ろし、また車内へと引きずり込んだ。そして、列車は進行を続けた。最前の恐怖に満ちた考えは乗客がしつこくわたしを押し付けるに従い消えていった。『これでもあいつらは自分たちを知性的な存在だとみなすことができるのか？ あいつらの行為は、知識をあざ笑うものだ』わたしは思った。わたしは笑い出したい衝動に駆られた。親指と人差し指で輪を作ってピーツとならしてやりたいとも思った。人間の貧弱さをはつきりと証明するものとの出会いを祝って口笛でも吹きたくなかった。こう叫びたくなかった。『これはまたとんだお利口さん方だ！^{がた} あなた方、知性的といわれる方々よ！ 墓場にお急ぎなさい！ ついにあなた方の番がやってきたんだ！』ところが、この興奮状態は割合早く覚めて行き、そのあとわたしは車内の隣人たちをじつくりと眺め始めた。見知らぬモスクワの住民たちの顔を眺めるのも悪くはないかもしれない、と思えた。ヴォルガやスームイの住民と違う何か変わったことに突然気がつくかもしれない。『ひよつとしたら、自分の仲間に見えるかも？』こんな考えが頭をよぎった。『単なるプチブリの住民じゃない、クロマニヨン人に取って代わるべく急いでいるわたしの、いやわれわれの仲間のプチブリ人に会えるかもしれないのだ！』自分の卓越したアイディアをこねまわすのに没頭していたわたしは突然アナウンスを耳にした。「レニン図書館駅。次の

停車はクロボトフ駅」ある間もなく、プチブリの乗客は降り、車内は空になり、通りに出ると、ドストエフスキイの銅像が目に入った。不幸な作家はさもなく腰を掛けており、あたかも台座の上に鋭い釘でも突き出ていて、この作家を苦しめてでもいるかのような印象をかもし出していた。『これが自分たちの偉人を敬うあいつらのやり方なのだろうか？』とつさにわたしは思った。銅像の向こうには、通りをはさんで、トルコ石の色をした建物の上に色あせた看板が見えていた。『ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国最高会議受付』。『過去の帝国の残滓だ』という考えがわたしの頭をかすめた。右を見ると、わたしの目の前、百メートルのところにクレムリンの塔がそびえていた。その時わたしは子供のころ味わった屈辱を思い出した。幼稚園の保育士たちが地方の新聞記者にクレムリンの壁の絵を描いたのはワシーリイ・カラマーノフではなくヴィクトル・ヴィボルコフだと嘘をついた時のことを。『何も驚くことはないさ。虚言の遺伝子はこの哺乳類の種族に支配的なものだから』慥然としてわたしは思った。そうしてわたしは後ろを振り向いた。すると、そこには高い石造りの土台の上に巨大な円柱が何本も聳え立っていた。ペディメントの上にはいずれにも石造りの彫像が配置されていた。どうやらないそう有名な作家や学者であるらしかった。その中の幾人かには見覚えがあったが、多くは初めて見るものだった。『これがその図書館なんだ。なんて大きいんだ！ ここに所蔵されている本をすべて読むには一生かかっても足りないぞ！』思わず心の中で呟いた。だが、急いでこの知識の殿堂の中に入ることにはしなかった。いままでとは全く異なった思いがけないテーマについて考えながら、わたしは建物のまわりを左にゆつくりと歩き出した。全人類を憎悪し、この種の生き物より自分が優れてい

ることを常に確信し、人類が自然界から消え去りプチブリ人がそれに取って代わことに自分の人生を捧げながら、現在とそれに先行する文明の知識に惹かれるというのは、ホモ・コスミカスの倫理からして、正しいのだろうか？　つまり、人間たちの中にかれら自身の種族を滅ぼすための助言者を探してもいいのだろうか？　もつと言え、かれらの研究の成果をかれら自身に対抗するために用いるというのは正しいのだろうか？　わたしは自己矛盾を犯してはいないだろうか？　あまりに人間的なこの倫理を、わたしが自分もその中に入るものとみなしている将来の存在のために用いるのは容認可能なのか？　それとも、容認不可能なのか？　この簡単ではあるが、まったく思いがけない問いはわたしの不意をついた。だがここでわたしはもう一度出発点に戻ることにした。人々を別の世界、つまり、あの世に送り出し、かれらに代わる新しくてより強い知性的な存在の到来をどのように完遂させるべきかを理解するために、わたしには科学的な知識が必要なのだ。だがすべての書物は、人間の思考活動の産物なのだ。もし仮に知識がもつぱら人間的なものであるとしても、わたしはそれを自分の方法論の基礎としたいと思う。では、ほんとうに人間は知性的ではないのだろうか？　ひょっとしたら、人間のうちの少し、極々わずかであるかもしれないが、例えば、○・五パーセントぐらいは、やはり選良エリートのカテゴリーに入れるべきではないのか？　とすれば、おそらく、この選良エリートたちをホモ・コスミカスの世界に誘いざなうべきではないのか？　完全な孤独の世界に住む十七歳の青年、しかも収容所ライゲリと地方都市の図書館の本しか読んだことのない青年の異常な考えは或る人の目にはナイーブだと映るにちがいない。しかし、新しい世界を夢見るこの考えはわたしを満たし、わたしは自分の道をひたすら前進していこうと

していた。探求を進め、知識を深めようとしていた。だが、首都の有名な図書館のまわりを歩いていた時に初めて、わたしは思った。人間という種族への自分の嫌悪感は若干未熟で、大いに個人的なものであり、なんら学問的な裏付けのないものであると。『わたしの主なる問いかけに書物がどのような新しい回答をあたえてくれるか、プチブリ人はすこしでも早くクロマニヨン人に代わるべきであるというわたしの若き日の考えがどれだけ信憑性しんぴょうせいのあるものか見てみよう』ところが、モスクワの大図書館の途方もない蔵書量が、わたしをだんだん困惑させるようになった。わたしは時にカザン駅に戻って、自分の乗る列車を見つけて、車掌に二ルーブリ払って自由席の上段で一夜を過ごしたあと、敗北感に襲われないように早くヴォルガに帰ってしまいたいと強く願った。人間という種族に心底敬服してしまわないように！　かれらがホモ・コスミカスと共存する権利を認めてしまわないように。敗れた夢というものは、熱くなった知性にはもつとも危険なものなのだ！　だがその時わたしはまったく別のことを考えてもいた。もし知識の殿堂の書物がわたしの考えの正当性を承認し、わたしに最終的な行動を迫ったとしたらどうだろう？　いったいどういう行動なのかはわからないが、われわれの観点からすればもつとも果敢で、非凡で偉大だが、かれらの倫理からは逸脱した奇怪な行動を要求したとしたらどうだろう？　また仮に最良の書物が人間たちによってではなく、偶然この地球という異星に舞い降りたプチブリ人によって書かれたことを発見したとしたらどうだろう？　ジャガイモ畑にときにみずみずしい小麦の穂がひとりでに突然芽を出すのはなぜなのかよくわかっていないではないか！　それとも、わたしはワインに毒を盛って宇宙の祭典を催さなくてはならないのか？　否！　それはあまりに人間的な

やり方だ。プチブリ人にはそのようなやり方はできない。わたしが賛同できるのは奇跡だけだ。たとえば、瞬時に男女の性を一つだけにする。女性を選ぶかそれとも男性か？ うん、女性のほうがいい！ それとも人類全部があつという間に年をとるようにする。すべての人間が八十歳になるんだ！ それとも回教僧やラビやバラモン僧といった聖職者たちに、人間どもがみんな喜んであの世に行きたがるようになる驚くべき能力を授けるといふのはどうか？ やや、これは人間の使うトリックじゃないか！ それともホモ・コスミカスの待ち望む奇跡といえるだろうか？ いや、やっぱりこれはかれらのスタイルだ。かれらは信じているんだから！ 自由信仰を要求しているんだ！ どうぞ勝手にだ！ それでは、なんらかの手段で出産を妨害するというのはどうだろう。女性からは卵細胞を、男性からは、精子を除去するんだ！ いやそれとも何か知性を超えた方法を取る。例えば、地軸を中心とした地球の回転の速度を十倍、いや、いつそのこと百倍にする。すると、一日は〇・二四時間になる！ つまり、一日は二・五分で、一年は九一二分だ。だとすると、八十年は——これはヨーロッパ人の平均寿命だが——七万三千分で飛ぶように過ぎていくことになる。これを人間の生物学的な生命能力に換算すると、五十日間でかれらは消滅することになる。かれらの生命の資源は枯渇するのだ！ それとも十五度ばかり地球上の温度を下げるか上げるかする。すると、かれらは一、二年で絶滅するだろう。それとも嫉妬とか羨望とか復讐心とかの遺伝子の影響を三倍か五倍に増幅する。きつとあいつらは互いに喉を切り裂きあうことだろう！ それともやつらの食欲の遺伝子を変えて、心理への影響を大増幅させるとすると、やつらは互いに食い合いを始めるだろう。逆にその影響を減少させて、人間の脳への刺激

を均等にする、栄養調節が豊かになり、かれらは世界中の偉大な人物になる、人間は互いに愛しあう、はそれほどまでに自然の安定性や調和といったものに依存しているのだ！ ごくささいな変化でも起これば、人間はもう存在しなくなるのだ！ 太陽における最高気温と、宇宙空間での絶対零度に近い最低温度とがわかつているなら、十五度くらいの温度の上昇や下降がなんだということだ！ わたしはその時、十年か十五年後にこの考えが自分の頭に浮かんだとしたら、ということ想像しもしなかった。もしそうだったなら、首都の図書館の前で恐怖がわたしの全身を捕らえていたにちがいない！ わたしは瞬く間に白髪になっていたかもしれないのだ！ 人類を『プチブリ人化する』という考えの過激さがわたしには嬉しかった。自分がいままで育んできたホモ・サピエンスを研究する形式や方法についての非常識な考えがわたしにはおおいに気に入っていた。人々がわたし個人に対し、いかにも嫌そうな軽蔑に満ちた顔をするのがわたしには満足だった。秘められた目的を果たすべくわたしの踏み出した小さな一歩がわたしには気に入っていたのだ。頭の中にはなんらはつきりした計画があるわけではなかった。ただ一つを除いては。ある重大な考えがわたしの頭を悩ませていた。それは、プチブリ人の倫理に則^{のっと}って人間たちに次にどう対処するのかを決めるために、知識を早急に吸収することである。そして、かれらの自然消滅を待つべきか、それともそのプロセスを知的な襲撃によって加速させるべきかを決めるということだ。しかしながら、また別の、現在ただ今かれらとの間でわたしはどのように身を処すべきなのか、という二次的な問題もまたわたしを不安にさせていた。もしワレンチン・セローフ美術館が突然のように目の前に現れなかったら、わたしはこれらの問題について延々と考え続けていたに

ちがない。その壁にはこんな告示が貼ってあった。『清掃夫を求む』何がわたしをスタロヴァガニコフスキ横丁にあるこの美術館に來させたのかわたしはもう覚えていない。美術館長の執務室に入ると、わたしは言った。「ヴォルガ沿いの町クニャギーニノから來たワシーリイ・カラマーノフです。清掃夫として働くことができます」「いくつなの？」「土気色の顔をしたやせぎすの女性館長は尋ねた。「赤毛の人間は、なんでも喧嘩っ早くて、狡ずるいっていうけど。あんたまさかわたしたちの美術館を強奪するためにひそかに送り込まれたんじゃないでしょうね？」「いいえ、わたしはモスクワに知り合いはまったくいません。書類上では二十歳ということになっています！」「それともヴォルガの犯罪集団？ あなたの頭領の名前はなんというの？ タルモズかしら？ それともテルモス？」「わたしはそんな人達は知りません」「勤続経験はあるの？」「あります！ ボイラー室で五年間働きました。ボイラーマンでした！ そのあと一年ばかり梱包工場で箱作りをしていました」「軍隊には入っていたの？」「いいえ！」「兵役拒否者ということ？」「五年の猶予期間がありました」「どういう理由で？」「五年間を未成年受刑者のコロニーですごしました。猶予期間はその禁固期間に相当します」「それじゃあつと」婦人は語尾を引き伸ばした。「つまり、牢屋に入れられてたつてわけね。罪状はなんなの？」「私有資財への放火です」「犠牲者、怪我人はいたの？」「いいえ、いませんでした」「大きな物質的損害は？」「いいえ、火は自分で消し止めました」「あなた、嘘ついてるの？ それじゃどうしてあんたに五年もの刑期を科さなきゃならないの？」「わかりません。ですが、それほど悪くはありませんでした。本も読めましたし。清掃夫が必要でしたら、働く用意があります」「お酒は、飲むの？」「いいえ」「モスクワでは、どこに住ん

でるの？」「まだ住むところはありません。今朝早く着いたばかりです」「親類はいるの？」「いません」「じゃあ、どこに泊まるつもりなの？」「納屋にでも。雪かきに使う箒とか鉄棒とかシャベルなんか置いてあるところです。わたしは不便には慣れています」要するに、館長はわたしを美術館の労働者として、一ヶ月の見習い登録したのである。こうしてわたしは首都の清掃夫になった。図書館からは百メートル、クレムリンからは二百メートルのところだった。セローフ美術館は午後六時まで開いていた。そのあと毎晩わたしは図書館の閲覧室で時を過ごした。が、ここで新しい書籍を読んだあと、わたしは自分に対していくぶん批判的になった。サンサーンスは五歳で既に偉大な音楽を作曲し、人類学者のフレンス・ハミルトンは六歳で『イーリアス』と『オデュッセイア』を公衆の前で感情を込めて朗読し、グリボエードフは八歳で大学に入学し、レー尔蒙トフは『悪魔』の第二稿を十五歳で書き上げ、十六歳の時にはすでに『仮面舞踏会』を書いていた。そして、ルネ・デカルトは十七歳にしてすでに偉大なる発見『デカルト座標』をなし、同じく十七歳でガリレオ・ガリレイは振り子の振動の等時性を発見していたし、メンデルスゾーン・バルトルディはシンフォニー序曲『夏の夜の夢』を創作していた。そして、エラズマス・ダーウインは十八歳で自著『動物学』を書き上げた。こうしたことを知った時、わたしは自分をひどく恥じた。わたしは人間たちがわたしに投げかけた挑戦をひしと感じた。まるで人間たちの中の誰かが、実際にこんなふう問いかけているように思っただのだ。『おいおまえ、プチブリ人、おまえ自身にはいったい何ができるんだ？ 石炭を燃焼室に投げ入れたり、箱を組み立てたり、いろんな時代の学者の書いた本を読んでは、図書館の椅子でズボンを擦り切れさせるぐらいのこと

か？ おまけに、そうしながらおまえはいつもわれわれの人類学的な形態を罵^{のの}っているんだ！ おまえ自身はいったい何者なんだ？ おまえをすべての人類と分けている、注目に価するとかいう点は何なんだ？ たしかに、赤毛というのはロシア人にはめずらしいし、おまえが物質的な利益を求めていることは認める。おまえが出世にも、党にも、ビジネスにも、人との関係にも、衣服や外見にも興味を持っていないことは認めよう。おまえが人とのうるさい交際より孤独を好むこともわかっている。酒もタバコも麻薬もやらない。だが、そんなやつらは山ほどいるんだ！ おまえは女より本と寝っころがっているほうがうれしいんだ。おまえはいつもなんとかして自分の計画を実現させようと願っている。だが、それ以上の何があるんだ？ おまえを他のものから分けている特徴はどこにあるんだ。おまえの中のホモ・コスミカス性とは何なのだ？ すべての人間的なものを拒否することをとくと考えることか？ おまえが虐げられ、侮辱されていることか？ そんなやつは通りにも墓場にもうようよいる！ おまえの頭が人間たちとは違った働き方をするとか？ だが、その証拠はどこにある？ おまえはまだ何もユニークなものを創り出していないじゃないか！ 誰もおまえの計画を知らないし、誰もおまえのことなど知らないのだ。人類はおまえの出現を無視することだってできるんだ。何の証拠もないんだから！ おまえが今日この世界に到着していようが、昨日死んでいようが、明日死のうが、九十年後に死のうがかまわないんだ！ おまえが自分でハエの飛翔や、犬の鳴き声や、新生児の叫び声を調べたわけじゃないんだ。誰がおまえなんかを観察しようなどと考えるだろう？ 誰がおまえの考えに耳など傾けるだろう？ クロマニヨン人の消滅なんて興奮しきったおまえの意識の想像の産物に過ぎない

んだ！ 人々は幸せなんだ！ 人々はたが物質的な豊かさという点で満足しているんだ！ 昨日一ルーブリ持っていた。そして、今日は百ルーブリ、明日は千ルーブリ持ちたいと思う。それだけのことだ！ おまえがあれこれ考えている問題なんか人間たちは屁とも思わない。奇跡を起こすんだ！ 何でもいいからおまえの超能力とやらを見せてくれ！ 人間世界の印象を十分に得るために、犯罪に没頭するのもいい、文化活動や政治や芸術や科学、何でもいいからやるがい！ 行動するんだ、ホモ・コスミカスという己のユニークな種を確立するんだ！』まさしくこの偶然に起こった自分自身との対話のあと、わたしは初めて奇跡を外部ではなく、自分の内側に求めるようになったのだ。内部の声はわたしにささやいた。奇跡はあるのだ、どこか遠くにはなく、ほらすぐそばに、奇跡を求める最初の呼び声に応えていますすぐにでも現れようと待ち構えているのだと。意識のカーテンを押し開ければ、奇跡は全力を挙げてたちあらわれてくるのだ。図書館の巨大な鏡の前でわたしは自分自身と視線を交わしたあと、思った。文明の歴史はわたしに容赦ない挑戦状をたたきつけようとしている、何年にもわたって積み重ねてきた思考の確信をぐらつかせようとしていると。わたしには自分のアイデアが誰かによって壊され、無効にされるという可能性を想像することすらできなかった。だが、もしわたしが自らの手でそれをなしたなら、よほどつらく、苦々しいものになっていただろう。また、もしその考えを裏切ったり、他の考えに乗り換えたりでもしたなら、まったく不意に人生の心棒をなくしてしまっていたことだろう。わたしは自分を落ち着かせようとした。落ち着くんのだ。そして、図書館のまわりを一周した。それはわたしのお気に入りのルートだった。しばらくは生活を何も変えないことに決めた。清掃

夫であり図書館の閲覧者である隠遁者の生活を続けるのだ。どういう形で自己を実現するか、どうすればわたしがほんとうのプチブリ人であって、^{もうろく}耄碌した人間ではないことを自分にだけでも証明することができるかを常に考えるんだ。わたしはその時考えた。『もしも、今わたしが自分は地上の未来の種族であること証明しにかかったら、わたしは一笑に付され、人間憎悪の咎で非難されることだろう。精神病院に放り込まれるだろう！ それともウラジミル特別監視刑務所か、ペルミ共和国共同刑務所だろうか。あいつらにはこの手の刑務所にはこと欠かないし、あいつらはいつだって適当な場所を探し出してくることだろう。せめて自分にだけでもわたしがホモ・コスミカスであることを証明しなくてはならない。自分がホモ・コスミカスであることに自信を持たなくてはならないのだ！ そうすればわたしは人間たちを歴史の彼方に追いやるために、すべての知識と自分の天賦の才をすべてかたむける権利が公然と持てるのだ。だが、わたしが本当のプチブリ人でなかったら、これは絶対にできないのだ。その時はいったい誰にこの世界を任せればいいのだ？ 誰が百三十億年の間この地球上の主人となるんだ？ この事業は急いではならないのだ。この先の自然界の突然変異には当初の物質しか残っていないはずだし、その物質とはクロマニヨン人でしかないのかもしれない。自分はどれほどの満足感を持って遺伝子の漂流を、ある種族の基本的な構成要素の揺らぎを観察することだろう！ 物質自体が綿密に原子一つ一つから地球上の新しい種族の遺伝子の統一体を構成していくのを観察するのはどれほど魅力的なことだろう。だが、この奇跡をどのように観察すればいいのか？ 新しい存在の創造を観察することができる秘密の鍵穴はいったいどこにあるのか？ ホモ・コスミカスの次に来るのは誰なのだろう。

DNAの限られた断片の長さの多形性を操作している最高の魔法使いたちをどのように見守ればいいのだろうか？ 遺伝子の重量の体細胞への幻想的ともいえる転移をどのように観照すべきか、自然発生や誘導された突然変異の本能的な論理をいかに楽しむべきか、また、染色体の異常をどのようにして驚嘆すべきなのか？ 素晴らしい光景だろうなあ！ ひょっとして個人の実験室を持つべきなんだろうか？ そこで数々の実験をする？ 遺伝子操作の実験に生涯を捧げるべきか？ それとも科学研究所に職を求めるべきか？ そして科学研究者になる？ だめだ！ それはいけない！ まだ人間たちに近付くのはなんとしても避けなければ！ わたしはもう決めたではないか。まずはつきりとした診断を下さなくてはならないと。自分は何者であるか？ どの種族に属するのか？ クロマニヨン人なのかプチブリ人なのか？ 過去に属する人間なのかそれとも未来を担う存在なのか？ そのあと初めて最終的な決定を下すことができるんだ』その時、わたしの頭にはまったく別の考えが浮かんできた。人間たちはある一定の秩序で自分たちをクラス分けしている。数年前だったら、かれらは社会の最高層に、在任中の役職あるいは党内の地位が^{ポスト・フォリオ}あれば入れた。が、今はすべてが資産できまるのだ。知性とか出自とかは全く何の役にも立たない。頭脳はひたすら商業や、冒険的な事業のためにだけ必要とされる。今日では犯罪的な思考がロシア人には最も切実なものなのだ。ゆがんだ想像力を持ったものだけがエリート階級を上り詰めて、自分たちの時代の英雄になるんだ。あとの者たちはそうしたエリートたち、犯罪、文化、商業、政治や科学の分野における流行児たちの真似をしたがるだけだ。種の退化はすでに始まっている。退化は速度を増し、急速に破綻に向かっている。かれらのうちの最も賢明な者たちは破綻

が近付いているのを認識している。優秀な人間たちの精子バンクを創ろうとさえした。それでどうなったのか？ 結果は？ ゼロだ！ おそらく、より効果的にプチブリ人を造形するには、人間的な欠陥を絶対持たないようプチブリ人を設計するためには、道德の退廃や情欲の奔流を細心に調査しながら、かれらの本性を見極めなくてはならないのではないか？ そうすれば、クロマニヨン人のどの遺伝子をホモ・コスミカスのために保存しなくてはならないかがわかってくるのではないか。正直に言おう。この考えはわたしの想像力をかきたてた。そしてわたしは自分の実験を何から始めればいいのかについて頻繁に考えるようになった。だがここでわたしは大変な重大な問題に直面した。かれらの本質を内部から理解するためには、人間の不完全性のいったいどの分野を研究すればいいのか？ **かれらの本性を理解するためにはどうすればいいのか？** わたしには手助けをしてくれるものはいなかった。わたしは自分だけを頼りにしなくてはならなかったのだ。罪深い人間の役をうまく果たすためには、芸術的な才能が必要であることをはっきり自覚しながら、わたしは自問した。自分にはその才能があるのか？ あるとすれば、どのくらいか？

ところで、無駄に時を過ぎさないために、図書館の窓際の席に掛けていたわたしは、軍参謀本部の建物に向かう人々の流れをじつくりと眺め始めた。多くは軍服を着ていた。疲れて灰色の顔をしたかれらはそばを通っていった。どういうわけか、かれらはわたしが毎日モスクワの舗装道路から掃き出している汚い砂を思い起こさせた。『たった今人々にたいしてもっと丁寧^{ていねい}に接しなくてはならないと自分に誓ったばかりじゃないか』こうした考えが頭をよぎった。『なんだってそんな

ひどい嘘を言わなくちゃならないんだ？ **かれらの生物学的な種族の代表者たちがこの知識の殿堂を満たしている最良の本を書いたんだぞ。『耐性』という専門用語を考え出したのはかれらなんだ。かれらとの関係における耐性をこそ遵守しなくてはならないのだ』**その時わたしには自分の想像力という生産兵器がどうしたわけかものすごいテンポで働き出したように思え、道行く人々の流れはますますその速度を早めた。人々はわたしのめまぐるしく動く^{はうき}箒の下から飛び出し、稲妻のように首都の通りから消えていった。その時だった、ある犯罪の筋書きがわたしの頭の中に浮かんだのは。わたしは収容所^{ラーゲリ}暮らしのなかで聞いた話を思い起こしていた。それは、『フリーメイソンたち』が参謀本部で『へたれサケのような将校』たちを『釣り上げ』、外貨専門店『ベリョースカ』発行の外貨の金券に過大に見積もった交換レート^{ダミー}を提案し、紙幣の代わりに『人形』をつまみ刻んだ紙切れを手渡したという話だった。『ひょっとして、この手で人間世界への参入を果たすべきなのでは？』その時わたしは思った。『かれらの知的貧困の数々の断片が人間たちの破綻を、かれらの我を忘れた貪欲さを証明するのではないか？ 金券か何かに一ルーブリの価値があったとして、それに三倍の値がついたら、どう考えても交換したくなるんじゃないだろうか？ 疑うだろうか？ うさんくさい取引だといって断るだろうか？ 儲け主義の遺伝子はやつらホモ・サピエンスの優勢因子なんだ！ 他でもない、この完全な雑食性とでもいったものがかれらを破滅に導くんだ。かれらはすべてを欲しがっている。ある者は車を持ちたいと願い、ある者はなめし皮の半コートを、三番目のやつは愛人を、四番目は札束とかいうんじゃないんだ！ やつらはそのすべてを一度に、しかも今すぐに、そして、途方もない量を欲しがるのが。まるで魔法

のように！ えいやつとほらすべてが目の前に！ こうした欲望が知的な人間の崇高な理想と同一視できるものだろうか？ これらすべての虚飾を手に入れるためにかれらは嘘をつき、法を犯し、ショーウィンドーを叩き壊し、互いに殺し合い、己の運命を損ない、権力を奪い取り、他人の名を騙るんだ！ 犯罪の遺伝子の力を自分自身で体験するために、まあ、一年ぐらい「フリーメイソン」の役を試してみることにしよう……」わたしはこうした未来図に没頭する用意ができていた。が、ふと我に返り、空想を中断し、図書館の本を返却すると、スタロヴァガニコフスキイ横丁の自分のあばら屋にもどった。わたしの隠れ家はレンガを積み上げて、それにアスファルト用のタール紙で覆った屋根をつけただけの老朽化した納屋にすぎなかった。端が腐りかけた板を張った床は地面よりも五十センチぐらい下のところにあった。美術館の入り口の真正面になるたった一つの小窓は古いダンボール紙でびっしりと隙間がふさいであった。わたしはこの官舎に大いに満足していた。鉄製の簡易ストーブがついているだけの寒々とした物置小屋で、わたしのような禁欲的な生活を好むものにはぴったりのところだった。自分のマッドトレスに横になるやいなや、中断された思索が再開された。『その後、文化人の代表という仮面を被らなくてはならない。が、これには二年は必要だろう。こうした人種はまったく知らないが、火傷やけどをするだろうことは感じていいる。まるで青酸にでも触れた時のように！ だが、それこそがすべての人間たちとわたしとが遺伝的に相容れないという現実を立証するのだ。その後、政治的な活動家の役割を果たすんだ。この活動には三年はかかるだろう。まだ何をすべきなのかはつきりしたことはわからない。誓ってもいいが、こうした職業の實用主義プラグマティズムはわたしに絶えず嘔吐をもよおさせることだろう。権

力を志向する人間的な現象を理解するためには、自分自身を犠牲にしなければならない。政治的行動をしている人間たちとの交際で自分が最悪の下痢に悩まされる可能性はある。よく知られているように、政治的な出世主義者たちの傲慢不遜は、通常、精神的な聴覚障害と、恒常的な胃腸障害をひきおこす。そうして、わたしは「人間世界」への参入を学者の役割を果たすことで終えようと思う。が、これには二、三年で十分のはずだ。この間のわたしの人生の連れ合いは、おそらく、懷疑となることだろう。なぜかれらは自分たちの生物学的な種の改良にこうも手をこまねいているんだろう？ こんなに知的に貧困で不完全なのに！ ひょっとしてかれらは真の洞察力に欠けているのだろうか？ それとも、永遠に続く自分自身との戦いへと変化するクロマニヨン人の非人間性は、遺伝子の構成にあらかじめ組み込まれていたのか？ それなら、わたしは今後何年間か人間たちの本性をかれらの生活の中で調査研究することに費やさなくてはならないのだ。何年にもわたる人間の欠陥を究明する旅のあと初めてわたしは最終的な決定を下すだろう。人類の消滅をいそぐべきか、それとも自分の存在についての永遠の問いをめぐる思索に陶然と酔い続けるかについての決定を』こうした考えで頭をいっぱいにして、わたしは自分の避難所から外に出て、急いで通りを掃き清め、ゴミ箱を空け、庭にあった『犬の散歩を禁ずる』という立て札を修復して仕事を終えると、また自分の物置小屋へと急いだ。わたしは考えた。『いんちき仕事にとりかか

るには、客の目の前で実際に数えるための金が必要だ』清掃夫として働いたこの一年間にわたしはバジエーノフ、カナビフ、クーニン、ドゥブロフスキイ、ハリス、レンツ、オーウェン、ケシマン等、数百冊の本を読んだ。プチブリ人の到来に関していくつものプランを練った。だが、わ

よっとしたら、ちょうどいいのかもしれない』わたしは思った。『ちょっと感動的じゃないか。金券の値段を三ルーブリに定めると、眼鏡をかけた青白い青年には二十ルーブリ足りなくなるなんて。このシーンから客との付き合いを始めてもいいんだ……。それにしても、自分はこうしてこんなに意気込んでるんだ？ 不思議な情熱がわたしの頭をばおつとさせた。自分はこの話が面白くてたまらなくなっているのを感じる。ワシーリイ・カラマーノフ、おまえはいったいどうしたというんだ？ わたしは自分をこの生活にこっそりもぐりこませなくちゃならないんだ。喜び勇んで、コーカサスに夏の旅行に出かけるみたいに、まっしぐらに飛び込んでいくなんてだめなんだ。落ち着け、プチブリ人！ 時期尚早に、しかも理由もなく人間の仮面を被るかぶのはおまえには許されていないんだぞ』わたしはのろのろと自分の納屋に向けて歩き出した。わたしの足取りは妙だった。わたしは今まで本以外の何にも興味をもったことがなかった。だから歩いている時も建物の建築様式だの、自動車の形だの、人々の顔だの、店のショーウィンドーだのをよく見たことは一度もなかった。目はたしかに開けていた、が、わたしはまるで盲めくらのように歩いていた。もし誰かがレストラン『プラハ』、もしくは国立図書館か国会の建物は何階建てかと尋ねたり、女の人を描写するようにと言ったら、わたしは尻込みして、口ごもったことだろう。わたしは誰が首相なのかも覚えていないし、国歌のメロディーも口ずさめない。これはわたしの世界ではないのだし、わたしはどうしてもその領域に収まりたくはないのだ。だからといって、かれらと断固として交わらないという気持ちもわたしにはなかった。もしそうならわたしはとうの昔にどこか遠くの人里離れた針葉樹林タイガにでも行つて、完全な世捨て人にでもなっていたことだろう。しかしわ

たしは人間たちの知的貧困知的貧困だけでなく、その世界全体を愛するよう願つて、かれらの背向や道徳から距離を置こうと努めていた。美德とはすべての人間的なものからの解放であるとはかり思っていた。誰にも自分のやり方があるんだ！ 自分のマッドレスに戻ると、わたしは考え始めた。ホモ・サピエンスだけにみられる固有の生活様式への第一歩をどのように踏み出すべきかと。十七年間この世界とつながったことがなく、一人として生きた存在と深い親交を持ったわけでもなく、かれらの心情を頭でも心でも受け容れたこともなく、これまでの人生でかれらと一言も精神的な会話を交わしたことのないわたしが、突然、あつという間に人間たちとコンタクトを持つんだ！ これは困難な決定だった。しかし、個人的な抵抗は抑えつけられ、ホモ・コスミカスの非凡なる意志がわたしを先入観から遠く引き離れた。わたしは最終的に決めたのだ。明日、朝の清掃のあと、何の前ぶれもなく清掃夫の仕事をやめて、総司令部に獲物を狩りに出かけるのだと。わたしは鏡の破片を取り上げ、自分の顔を覗き込んだ。自分にはそれが変わり始めているように思えた。そこにはまったく見覚えのない表情がはつきりと現れていた。集中力は衰え、目の輝きは曇り、耳は垂れ、頭髮はぼうぼうと伸びて、顔色の白さは青みを帯びて、そばかすは黒く変わり、顔全体がどこか罪人風になっていた。『ずっとこのままなんだろうか？』驚いてわたしは思った。『いや、顔つきなんてどうでもいい！ 自分は怠惰で通知表で二ばかり取ってる落第生に似てるな。一日中図書館の喫煙室に腰かけているやつらにさ』ところで、どんな名前でも人間たちの中に入っていくんだ？ カラマーノフか？ いや、絶対にだめだ！ どうしてプチブリ人の名誉を汚さなくちゃならないんだ？ ペテン師のフリーメーソン、ポシバイロフの名前を借りるという

のはどうだろう？ やつは若かったけれど、矯正不能の犯罪者だったとかいう。ポシバイロフはこれみよがしに、役者がかつてさえたそうだが、赤い腕章——囚人の打ちのめされた犯罪者精神を示す警察のシンボル——とか、整列歩行とか、収容所の食事を拒否した。ここでわたしは差し入れを受け取った囚人は誰も必ず『収容所の監督者』の食卓にもらった食料の半分以上を差し出さなくてはならなかったということを思い出した。消灯の合図のあとはポシバイロフは氣力が萎えて、自分の犯罪者の一生における『偉業』をととうと語るのが常だった。その時だった。わたしが初めて『へたれサケ』だの『人形』だのという言葉聞いたのは。さて、名前は何といったか？ アレクセイとかいったか、それとも……他の名前はなんとしても頭に浮かばなかった。それで『人々の中』ではアレクセイ・ポシバイロフと名乗ることに決めた。が、とたんに顔に皺が寄った。『ちえつ、なんて不愉快なんだ！』通りに目をやると、もう暗くなっていた。天気は崩れ、雨がぼつぽつ降り出した。頭の中には明日の人間への変身についての考えが、まるで刺のようにつきささっていた。気分は不快極まりないものだった。『こうした人間化の症状は初めてのものなんだろうか？ かつて自分はまわりの世界にほとんどいつも冷淡だったのに。今日はいったいどうしたというんだらう？ アドレナリンの過剰が精神状態に影響しているんだらうか？』わたしは思った。わたしには自分の記憶を信頼する十分な根拠がある。こんなに簡単に指でぽんとはじくように人間世界に入っていく、いやそれだけでなく、すべての人間的なものの導入をいんちき仕事、つまり、かれらの法を犯すことから始めるには、あのころのわたしは羞恥心がありすぎ、また傲慢すぎたのだったのだ。『どうして自分の内なる声はわたしにホモ・サピエンスの研究

を犯罪から始めるよう促したんだらう？』こんな問いが浮かんだ。『もしも……』わたしは、それだとはわかったら？ 幻覚だとしたら？ 病的な想像力の産物に過ぎないとしたら？ それに、もしも逮捕されて何年かの刑を科されたら？ わたしの一番重要な目的はどうなるんだ？ 現代文明の迷路を通り抜けて自分はその目的に到達できるのだろうか？ 重要なことは理解できるだろうか？ わたしはそのためにこそこの世界に現れたのだから！』もつとも、もしわたしが本当にホモ・コスミカスであるなら、警戒する必要など何もないのだ。何かを恐れるなんておかしいんだ。何も起こるはずがない！ わたしはかれらより知的に優れているんだから！ 逮捕を怖がる必要はないし、二番目に入っていくことにしている『文化的環境』の中で、自分が調査を進めることができないかもしれないと心配することはない。政治的なエリートがわたしの支配下に置かれたいだろうかからといっておびえることはない。科学の分野でわたしが無名であり続けるのにひるむことはないのだ。プチブリ人はこの世界を征服する使命を担っているのだ！ その時わたしは歓喜して、声なき声で叫んだ。『前進！ 前に進むんだ、わが友ワシーリイ・カラマーノフ！』ここで、自分をたしなめた。『おっと失敬、間違えました。カラマーノフじゃなくてアレクセイ・ポシバイロフでした！ かれらに地球人の新しい天才たる自分の才能を示すのだ、超人間的可能性という理想に燃えたホモ・コスミカスの並外れた才能をかれらに提示するんだ。勇氣を持って固有の生活の規範をつくりあげるために、おまえは是が非でもこうしなくてはならないんだ。でなければ、人々への敵意とかれらを歴史から排除したいという願いの他に、おまえはまだ自分の有効性を何も試してはいないじゃないか』すっかり落ち着いて、大胆な計画の実現の必要性を自

分自身に言い聞かせ、わたしは行動することにした。まず自分自身にすべてを正直に包み隠さず話す権利を要求することを自分に課すことから始めた。自分には何も隠してはならないんだ。人間たちはこれを見事にやってのけているじゃないか！ そのあと実際の行動にかかった。バリカンを手にとると、ふさふさとした赤毛の頭髪を根元から刈り始めた。坊主頭のほうが髪を被りやすいからだ。眼鏡をかけてみたあと、酔っ払いの女から四ルーブリで買い取ったジャンパーを着た。ジャンパーを売った女は金を受け取ったあと、涙ながらにいったものだ。『ジャンパーが何の役に立つていうんだい？ 健康のためにや、ボトルのほうがよくばど大事さ！』『やつらの生活、行動、生き方のみかけだおしの多様さにはあきれるばかりだ。やつらは何の役にもたたない些末事にとらわれきってるんだ』わたしにはこう思えた。『ジャンパーをウォッカと取り替えて何の得になるんだ、いろんなスタイルの服を着たり、各種の料理を食べたり、ある種の女たちと恋愛したり、互いに異なる政治的理念や美的情熱を声高に言い合ったりすることに何の意味があるんだ？ 仕事場の長になりたいと願う者もいれば、ある者は会計係とか、秘書、清掃夫とかになりたがる……。なんというめまぐるしさだろう！ なんて中身の無い、不自然な考え方なんだろう！ プチブリ人の場合全然違うんだ。われわれを惹きつけているのは精神の多様性だけだ！ われわれの時代を到来させるための燃えるような不滅の情念なんだ！ そのほかには全く何も無い！ 不毛も愚鈍さも阿諛も感情に流されることも、貪欲さも、そして、追従もない。われわれの前にあるのは精神の広がり創造的時間のみだ。それなのにあいつらにはあんなたくさんのゴミが……。あいつらにはそれでどうして生きることができるんだらう。あいつらの

貧しい世界を想像するのはとてもできない』こう考えたがわたしは雇い出た。何をするにもなかった。庭は秋の最中のように陰鬱に見えた。短い通り雨で水溜りができて、そこに落草したポプラが影を落としていた。スズメが羽音をたてて雨水を跳ね飛ばしていた。立ち止まりもせず、わたしは歩を進め、スタロヴァガニコフスキ横丁に出た。すると、『人々をよく観察する必要がある』という考えがひらめいた。『わたしはかれらのことを全く知らないではないか。ひよつとしたらかれらはわたしがかれらについて考えているよりも優れているのかもしれない？』しかしその時全く逆の考えが激しく最前の考えを打ち消した。『千年にたった一人の天才しか生んでいないとしたら、このヴォズドヴィージェンカ通りでわたしは誰に会うことが期待できるというんだ？ 人々はこの往来を行き交っている、モスクワには百万もの人間がいる。だが、このかわいそうな人々のうちの誰が自分の好奇心をそそるだろう？ 相談相手として、また対等で尊敬の念を引き起こすようなものとして自分が関心を持てる者はいるだろうか？ かれらの気苦労や心配はすべて、せいぜい買い物かごをいっぱいにすることぐらいで、精神の宝庫についてではないのだ。宇宙の問題などはかれらにとってどうでもよくて、生活が平穩無事であればそれでいいんだ。新しい靴やブラウスやジャケットやコートや鞆、かれらの喜びのすべてがここにあるんだ。新しいドレスを買う喜びに精神的なエネルギーを費やすことなどがどうしてできるんだらう。ソーセイジ一本を買う喜びに、ビール一杯に、札束に、自動車に費やすことがどうしてできるんだらう？ みんながみんな物質的な豊かさという事にだけかまけているのではないことは認めよう。だが、かれらの大部分、数学者の言葉を借りれば、極大値はそうなんだ。それはまた、わたしの

ような少数者が人間たちとの接触到に苦しんでいることを意味している。ひどく、つらいほど苦しんでいるんだ！……。まったく、人間とは、ほんとうに奇妙な存在である。クロマニヨン人の遺伝子構成はなんとまあ無様にできあがっていることか！ 知的能力の係数は実に多様だ。こうした雑多な大衆の中で天才たちが生きていくのはどんなにつらいことだろう！』だがここで思考経路はまた急速に変化した。『だがもしホモ・コスミカスを人間たちの中に探し出さなくてはならないとするとうなんだ？ そもそも突然変異とは、絶対的な平均値じゃないんだから。突然変異は人間たちの個々の誕生の際に起こっているんだ。もしわたし自身が、人間から生まれ出たものであるとすれば、他の者たちもそうであり得るんだ。わたしと同じような者たち！ ひよつとしたらそうした者らにはプチブリ人の遺伝子構成の特徴がそれほどはつきりと現れていないのかもしれないし、有害な人類の環境が、新しく神秘的で今日覚めようとしている存在たちを依然として支配しているのかもしれない。そしてかれらがそれほど少なくないとしたら？ かれらは、わたしと同様、現代文明と平行して存在しているんだ。暗くて狭い穴蔵の中に潜み、非人間的な環境の中をさすらい歩いているんだ。かれらは、わたしと同じく、清掃人の住む古びた納屋の中に、汚いエレベーターホールの中に、街のゴミだめの中に、また、地方の田舎町のあばら家にひそんでいるんだ。新しい時代、プチブリ人の時代の到来をどこで待とうがわれわれにはどうでもいいことなんだから。なるほどあいつらにとって清掃夫は、社会的評価の低い仕事だ。ゴミの堆積はあいつらにとっては、一顧だに価値のないゴミ溜めに過ぎない。だが、わたしにとってこれはまさしく、人類の漸進的な消滅のしるしなのだ。過ぎ去った空虚な文明の記念に他ならないのだ。勝

「知的」というレッセルを自分たちにも与えた。不完全な種族の確固とした訓諭なのだ。わたしに必要なのは自分の仲間を見出すことだけだ。かれらにこの人間の世界で自分たちはひとりじゃないんだというシグナルを送り、かれらに手を差し伸べ、ホモ・コスミカスはここに、おまえたちのすぐそばにいる、われわれの時代がやってくるのだと正式に通告するのだ。だが、今のところ、わたしには自分の研究理論を実現させる必要がある。一年間はいかさま師にならなくてはならないのだ。かれらに宣戦布告するために、かれらの貪欲さという遺伝子の本性をどのようにすればあばくことができるのかを、わたしは知らねばならない。考えてもみろ、両方とも間違いじみて勘定高いじゃないか！ まず金券を売るやつが三倍の値段を払おうとする馬鹿に会って喜ぶ。そのあと、まぬけをまんまとあざむいた金券買いがほくほくと喜ぶ。もしやつらにプチブリ人の知性があったとすれば、このようなことが起こり得るだろうか？ なんともまあ卑劣な情熱！ 最後のやつが勝つわけだが、まず最初のやつが勝って小躍りして喜ぶんだ。醜い！ なんととしてもこの病原菌を来るべきホモ・コスミカスの時代に持ち込まないよう万全の策を講じなくてはならない。見事にやってのけなくてはならないんだ！』わたしは参謀本部の建物に向かってのろのろと歩いて行った。そしてポシバイロフが第三玄関からはアンゴラやイエメン、ベトナム、ニカラグアでの軍務を終えて『外貨の』金券を受け取った将校たちが出てくると語ったことを思い出した。参謀本部の灰色の建物はいかめしく、おそらく、陰気にさえも見えた。建物の前に傘をさした将校たちを見つけてわたしは驚いた。いままで将校たちが傘をさすなんて思いもよらなかったのだ！ 最寄の入り口の重い扉の上にかかった表示板を覗き込むと、第四玄関であった。

大理石の階段のステップには制服からとれた真鍮しんちゆうのボタンがいくつかころがってぴかぴか光っていた。『変だ』わたしは思った。『掃除夫はいないんだろうか？ それともボタンをしっかりつけるのは難しいのだろうか？ かれらのこの特徴は是非とも覚えておかなくてはならない』次の出入り口には第三玄関と記してあった。巨大な正面の扉からは無言で『拳手の敬礼』をした軍人たちが大勢出たり入ったりしていた。軍人たちの顔にはなんとも不思議な忘我の表情が浮かんでいた。歩きぶりには空ろなエネルギーが、四肢の動きには機械的な単純さが感じられた。工場で生産される子供のおもちゃが、ちょうどそんな動き方をする。薄汚れた、てかてか光る制服はやつれた身体にはだぶだぶであつたり、丸々と太った身体をぴったりと包くるんでいたりした。『筋肉質のスポーツマンタイプのやつは一人もいない』驚いてわたしは思った。『じゃあ、軍隊とはいったい何なんだ？ あいつらはあそこで何をしてるんだ？』だがその時、別の考えがわたしの意識を文字通り突き刺した。『この軍人たちがみなわたしの孤独の中に、まるで第三玄関の扉を開けるようにやすやすと、無遠慮に入ってくるんだ！ そして、わたしの意識はかれらの問題を自分の中に取り入れなくちゃならないんだ。もうすぐわたしはかれらのとれたボタンや、しわになった外套や、ピカピカ光る肩章や、むくんだ顔つきを夢に見るようになるんだ。そんなことのために生きる必要があるのだろうか？』『だがプチブリ人の時代はどうなんだ？』内なる声がゆっくりとそれに反応した。『わたしはホモ・コスミカスの到来の場を清める義務をおまえに課したのだ。おまえの前には、幾年にもわたる計画が横たわっている！ おまえはそれを遂行しなくてはならないのだ！ 目的は実にはつきりとしているではないか！』おそらく十五分、いや二十分ぐらいが過ぎ

た。が、わたしはもうくたぐただった。自分が十分な価値を持たない存在のように感じられた。視覚が精神と意志とをひどく圧迫した。人、人、人の群れ！ かれらの数がわたしの意識を破壊し、粉々にした。わたしは自分を見失い、何か黒々とした穴の中に落ちていった。陰鬱な帳とばりが目の前に降り、頭がぐらぐらし、足はがくがくした。最後の力をふりしぼって、わたしは自分のあばら家に戻ることにした。自分には全体的な計画が整っているという思いがわたしを慰め、わたしは気を取り直した。『用意はすべて整った、詳細も決まった。さあ、ワシーリイ、始めるんだ。明日の午後、清掃夫としての仕事を終え、髪かみを被かぶり、本を一冊手にして参謀本部の第三玄関に急ぐんだ。自分についての嘘の経歴だけは覚えておくんだぞ。それなしでは事は進まない。未完成な存在というのはそういう感傷的な話を聞きたがるにちがいないんだ。やつらに話して聞かせるんだ！』こう考えながらわたしは箒ほうきを手に取り、わたしに任されたすべての区域を掃き、そのあと水溜みずたまりりのできた美術館の庭を掃き終えた。わたしはぐったりと力が抜け、足をひきずりながら納屋たくに辿り着くと、疲れきっていてすぐに寝入ってしまった。その夜は何の夢も見なかった。ちやうど七時にわたしは起き上がり、金だらいで顔を洗い、一切れのパンと生卵、そして冷たい水で朝食をとったあと、仕事に取りかかった。わたしの禁欲的な生活は何かの本で読んだり昔からの伝わっている話を聞いて、その真似をしたものではない。そこにはわたしの本質が表れていたのだ。食事や着るものや生活のあらゆる新機軸というものに、わたしは素朴に強い拒否反応を示した。正午までにわたしは決められた通りにすべての仕事を済ませ、第三玄関における活動の準備に取りかかった。孤独との決別はわたしをすこしも衰弱させなかったばかりではなく、伶俐な集

中力をも鍛えあげたのだ。今日はもうどんな疑いもわたしの頭にはよぎらなかつた。わたしは何をしなくてはならないのか、人間の貪欲さをたきつけるにはどんな手順をとらねばならないのかはつきりとわかつていた。だから参謀本部へと急いだのだ。わたしは既に髪も被り、髭もつけた、そしてふと鏡の破片の中の自分に気がついた。違う、これは絶対にプチブリ人のワシーリイ・カラマーノフではない、その分身でも、影でもない。それはアレクセイ・ポシバイロフだった。こういう人間をこそわたしは生涯憎み通してきたのだ。かれらこそがわたしに激しい怒りを感じさせたのだ。知的な人間というその名前を剽窃したことで。かれらをこそわたしは考古学の文献の中に追いやろうと固く決心したのだ。それがどうだ、これを見ろ！ おまえはかれらにそっくりじゃないか！ 自分をしっかりと見てみる。自分はホモ・コスミカスとはどうてい思えない。わたしは『人々の中』に入っていくことがあまりにも多くの時間と力とを奪うのではないかと不安になった。時間と力をわたしはこんなに必要としているのに！ だが、わたしは決然として思考を中断し、『人形』をポケットに突っ込み、現金を掴んで、眼鏡をかけると、納屋を飛び出し、参謀本部へと向かった。本部までは、ものの五、六分とかからなかつた。第三玄関には今日も人が多かつた。もう一度収容所のポシバイロフの手口をおさらいすると、わたしは出てくる者の中から一人を選んだ。中背の少佐で、わたしより少し背が低い。日に焼けた、平凡な顔立ち。立ち襟の軍服は新しく、ズボンは着古されてよれよれだ。わたしは思った。『どうやら、北アフリカかアンゴラからの帰りだとみえる。立ち襟の軍服はハンガーにかけてロッカーにしまっていたが、ズボンは派遣期間中ずつとはいていたんだな』目は輝いてはいるが、空ろで、悪意も、また

善良さも宿ってはいない。表情のある額と、広い頬骨。三十歳か三十五歳ぐらい。歩くうちに顔が赤くなっていく。どうやら、ポケット一杯の『外貨の』金券を持っているようだ。ひよつとして、中佐の星章をもらったのだろうか？ 長く考えもせず、わたしは近付く。「こんにちは！ アレクセイ・ポシバイロフといいます、トヴェーリから来ました。金券を買いだいたいんですが。百五十枚の金券に四百三十ルーブリ払う用意があります。金券一枚あたりおよそ三ルーブリということになります。売ってくださいますか？」早口で、歩きながらまくしたてる。少佐は歩調を緩めず、自分の行き先に向かってさっさと歩いていく。『金券一枚あたりおよそ三ルーブリ』という言葉を聞くと、とたんに立ち止まり、三十秒ほどわたしを視線で突き刺す。わたしは少佐を入念に観察する。目がかつと開き、鼻の孔が膨らみ、息が荒くなるのが見える。特徴のない空ろな顔つきがみるみる変わって、わきあがった興味がふくらんでいく。目はもう落ち着きがなくなり、獲物を感じている。どうやら、こう思っているらしい。しめしめ、運がいいぞ、間抜けにでくわしたぞ、三ルーブリも払うだなんて！ 「どうしてわたしが金券を持っていることがわかったんだ？」目を少し細めながら軍人は訊ねる。「モスクワ刑事部のもんじゃないだろうか？」「ぼくはまだ二十歳にもなっていません。ぼくは専門学校の学生で……」「金は持ってるのか？」少佐はさへぎる。「もちろん！ ポケットの中です。出しますか」「いや」少佐は言う。「ここではだめだ。電話ボックスに入ろうじゃないか。すぐそばだ。ゴーゴリの銅像の近くだ」黙って一緒に百歩ほど歩いていく。わたしには少佐の目を観察することはできない、横顔が見えるだけだ。しかし、手をもじもじさせているのが見える。喜んでるんだ。わたしを騙すのを夢見ている。金券一枚

に三ループリだ！ 左のポケットにわたしは『人形』^{ダミー}を確かめた。右には、現金がある。電話ボックスが見えてきた。「入るんだ」少佐が言う。わたしがボックスの中に入りこむと、少佐が後に続く。少佐は受話器を取り、耳にあて、肩ではさんだ。まるで電話をしているようだ。「金を出すんだ！」少佐は高圧的に要求する。わたしは落ち着いて赤い十ループリの札束を引っ張り出して、『モスクワの通りと広場』という薄い本の上に置く。「数えてください。ここにちょうど四百三十ループリあります」少佐はそろそろと金を引きずり出す。目はきよろきよろしている。必死に数え始める。額からは汗が流れている。わたしは少佐を見ながら考える。それでも自然の覇者といえるのか。こんなのが覇者だというなら、自然とはなんともくだらないものだ！「よし！ 確かに。四百三十ループリある」少佐はきれぎれに神経質そうに言って、自分のポケットに金をつ突っ込もうとする。「待つてください」紙幣を集めながら、わたしは言う。「まず、金券を見せてください。お金を納めるのはその後です」わたしは少佐の手から金を取り戻すと、それをゼロファン^{あと}の袋の中に収めて、また本の上に置いた。少佐がわたしのループリ札を数えている間に、わたしは本の下に、用意した『人形』^{ダミー}を置いた。あとはどさくさにまぎれて手首をサッと裏返すだけだ。そうすれば『人形』^{ダミー}が表に出る。本物のアレクサイ・ポシバイロフもそうしたのだ。これは職業的な手口だった。少佐は緊張した面持ちで金券の束を身体にびったりと張り付いた制服から取り出そうとしていた。わたしに必要なだったのは手首を動かすための一瞬だけだった。そして、いよいよ少佐が金券を取り出した時には、本の上にはすでに『人形』^{ダミー}が乗っていた。「どうだ、たくさんあるだろう？ おまえに渡すのは百五十枚だったな？」少佐は汗をたらたら流していた。電話

ボックスの中は狭くて、蒸し暑かった。この中で少佐のほろもろいけを頼り直感^{直感}が湯気を立てていたのだ。「その通りです！」わたしは言った「それ以上は必要ありません！」「そりゃ残念だ。もつと買うこともできるんだぞ！ よし、わかった！ さあ、取るんだ」自分の身体で入り口をふさぎながら、少佐は言った。『わたしが逃げるんじゃないかと心配なんだ』と、とっさに思った。わたしは人間を見ているのがつらかった。他の者だったらこの自然の覇者とやらの馬鹿さ加減を見て大笑いしたことだろう！ だが、少佐の盲目ともいえる愚鈍さはわたしの心に重くのしかかった。わたしはひそかに冷笑することもしなかった。少佐は一方の手でわたしに百五十枚の金券を渡し、もう片方の手で『人形』^{ダミー}を引っ掴むと、信じられないくらいの馬鹿力でポケットに押し込んだ。少佐の詰襟の軍服がばりばりと音をたて始め、縫い目が破れたように思えた。あとはもう一言も口を利かず、少佐は受話器を放り投げると、電話ボックスから飛び出し、アルバート通りの方角にせかせかと歩き出した。わたしはその後ろ姿に向かって叫んだ。「少佐殿、失礼します！」少佐は振り向きもしなかった。ただ、歩調を速めたただけだった。わたしは脈を取ってみたが、正常で落ち着いていた。『真正正銘のプチブリ人だ！』わたしは自分のことをそう思った。憂鬱そうにぶらぶらぶら下がつている受話器を元に戻すと、わたしは少佐の後について歩いて行つた。が、少佐はまったくわたしには関心を示さなかった。後について行っても何の危険もないことは明らかだった。少佐が自分の家でしかポケットを確かめないこと、そして、『人形』^{ダミー}は少佐にとつては完全に予想外のことであることが、わたしには、はつきりとわかつていた。しかしながら、『人形遣い』という職業にはもう一幕残っていた。第一幕をわたしは平静に遂行した。今わた

しの前にはもう一つの課題が立ちふさがっていた。それは金券の買い手を見つけることだった。これはさほど難しいことではなかった。金券の価値は額面価格の二倍だった。旧アルバート通りに委託販売店^{プロカー}をやっている店があった。わたしはそこに出掛けた。『外貨の』金券が少しあるんですが。買っていただけますか?」わたしは店先にいた女に向かって言った。けばけばしく化粧した肥った女は、耳たぶから鎖骨にとどくほどの重いイヤリングをつけていたが、わたしを頭からつま先までずいとお見渡すと、一言「ちよいとお待ち!」と言って、店の中に消えた。店番の女は、自分よりもっと肥った威圧的な体躯の婦人といっしょに戻って来た。威張った、高圧的な、即刻服従せよと言わんばかりの視線がぐさりとわたしを刺し貫いた。だが、ありがたいことに、わたしは人間ではなかった! さもなくば即座にその女のもとにひれ伏していたにちがいない。それほどの破壊力が細めた女の目にはあったのだ! わたしはひそかな作り笑いを浮かべて、ぞんざいにペテン師のように言い放った。「別嬪^{べっぴん}さんがた、こんにちは! 金券を百と五十持つてるんですがね」「おやおや、それは残念だねえ、たったそれだけかい?」灰色の地毛を薄い青色に染めた女主人は驚いて言った。その顔には途方にくれたような表情が浮かんだ。女は危ない橋をいくつか渡ってきたブローカーというよりは、駄々っ子のように見えた。わたしは、はした金で女をまごつかせたのかと思った。女はもっと違う金額を期待していたんだ。「いくらご入用なんです?」わたしは女の耳元でささやいた。女の手を取って、自分のほうにひきよせさせた。弾力性のある女の胸の片方の胸が、わたしの身体に押し付けられて、固いばねのようにきゅっと縮^{ちぢ}まった。『どうしてこんなことを思いついたのか?』その時とつさにわたしは思った。『自分は本物

のホモ・コスミカスで、いますこしばかり人間の仮面を被っているだけなんだぞ!」女は喜びのあまり満面に笑みを浮かべた。よくわからない香水の香りが生まれて初めてわたしの鼻先で強く匂った。女のでかてか光る化粧の濃い顔がわたしのやつれた顔にいまにも触れそうになっていた。女の放つ尋常でない香りが、意識が朦朧^{もうろう}となるほどわたしを攻め続けた。わたしは観察していた。女が何を考え、どんな言葉をささやき始めるかを。どうやら、女は金券で買える商品やら、それで支払うことのできるサービスやらを思い描いているようだ。女は顔を輝かせたばかりではなかった。夢の中で女は店の客やアルバート街の通行人や、巨大なロシアのすべての住民の上に高く舞い上がって行った。女はどこか雲の中を運ばれて行き、今は大空の中にいた。女は夢うつつの幻想世界で陶酔状態になっていた。古代ローマの女性貴族のように、女はすべてのものの上で舞い踊っていたのだ! だが、わたしは知っていた、それがどんな世界だったかを。まばゆいばかりの品々、愚かな祝宴、周囲の窮乏を横目に行われる饗宴。その時わたしは自分自身と取り交わした約束事を思い出し、腹を立てた。『カラマーノフ、どうして一年もの間いかさま師をしていないくちやならないんだ? 人間たちの尊大さを確認することの無意味さを理解するんだったら、一握りのエピソードで十分なはずだ。人間とは絶望的に無教養な存在で、世界が発展していくのを妨げているんだ。ワシーリイ! かれらすべてから解放される方法を見出すんだ! 急げ! 宇宙が待っているんだ!』「わたしや金券数千枚だつて買おうと思えば買えるんだよ」委託販売店^{プロカー}の女主人の声がわたしを現実の世界に連れ戻した。「それにいい値で買うわよ。金券一枚につき一ルーブリ八十コペイカでどう。ターニカ」女主人は店先に座っていた女に向かって言った。この

青年に二百七十ルーブリ渡しておあげ」その後、わたしに向かつて言った。「金券はどこにあるの？ まさか贖^{にせ}もんじやないだろうね？ 今度はいつ持って来てくれるんだい？」わたしは計算してみた。四百三十ルーブリはもともと自分のもので、女主人は二百七十ルーブリ出すと言っている。合計すると、七百ルーブリになる。その内二十ルーブリは『人形』作りに消える、十ルーブリは金髪^{かつら}の鬘^{かづら}の代金だ。更に、二十ルーブリで着古したジャンパーを買うことにすると、六百五十ルーブリ手元に残る。五十ルーブリは貯金しておいて、六百ルーブリを三で割ると金券二百枚分になる。わたしは言った。「明日、この時間にもう二百枚持ってきたましよう」「どうしてたった二百枚なんだい？ 言っただけじゃないか。千枚だって買えるんだって！ 千枚以上買ってもいいんだよ！ 何枚でも手に入るだけ持っておいで。全部ここで買い上げてやるよ！」女主人の顔には不満げな渋面が浮かんだ。「ところであんた、名前はなんと言うんだい？」「アレクセイ・ポシバイロフ」「あんた、なんだか顔色が悪いよ。黄色い斑点もある。まさか薬^{ヤク}をやってるんじゃないだろうね？ それとも肝炎なのかい？ あんたの年ごろにしてはえらく考えこんだ顔してるじゃないか……病気じゃなからうね？」「いいえ、大丈夫です。勉強が忙しくて、随分時間が取られるんです！」「そうかい。明日またおいで。待ってるよ。いい値をつけてあげるからね。断ろうたつて断れないようなね」そうして女主人はなんだか夢見るような目付きでわたしを覗き込んだ。女のこんな目付きはいままで見たこともなかった。いや違う。この目付きは全く違った理由で自分に興味を持った目だ。『何を考えているんだ？』わたしはちよつと考えた。『金券のことを夢見ているのだろうか、それとも何か別のことか？ まさか！ セックスをしようなんて思ったんじゃない？』

なからうな？ あの女は……わたしはそれだけは断固として自分に許さない！ あいつらが口紅を塗りたくったあの女の唇にキスしてやればいいんだ、あいつらこそがあの女の鍋のような胸をなでさすってやればいいんだ、あいつらが樽のようなずんどうの胴を抱きしめてやればいいんだ。あいつらにあの女の宝石をちりばめたソーセイジのような指を優しくなでさせ、あいつらに染め上げた髪をいじらせればいいんだ。マダム、このカラマーノフにはそんなことは断固としてできない！』わたしは一礼すると、旧アルバート街に飛び出した。どうやら、わたしの顔付きはよほど変だったにちがいない。道行く人が何人かふりむいて後ろからわたしを眺めていた。だが、わたしにはそんなことはどうでもよかった。わたしは貯蓄局に行つて、ブローカーで得た金を朱色の十ルーブリ札に換えた。新しい鬘^{かつら}などの買い物も残っていた。明日の行動に向けて準備をしなくてはならなかった。頭の中でわたしは今日の顛末^{てんまつ}をまとめてみた。今日わたしは自分にとって全く新しいことをたくさん遂行した。第一にわたしは人間たちを初めて欺いた。第二に人間たちの目を初めてまっすぐに見た。それも、かれらを距離を置いて観察するのではなく、直接にかれらと話しながらだ。第三にわたしは初めてものを売った。それが金券だったのは重要ではない。わたしは商売人のように振舞ったのだ。四番目にわたしは初めて女と、目と目をあわせながら話をした。五番目にわたしは初めて淫乱な眼差しを感じた。六番目にわたしは初めて二時間以上人間の生活を送った。七番目にわたしは自分を強制して初めて目指す計画——地球の住人の交代——を成し遂げることができるとを今まで以上に強く認識した。これだけ多くの不完全なものたちがわたしに反抗することができなんだ！ まったく冗談じゃない。六

十五億もの人間がいるんだ！ それより多いのは魚くらいのものだ！ それなら、ひよっとして人間たちを海の中に追いやるというのはどうだ？ そこには広大な場所が広がっている。いや、とんでもない！ 水が汚染されてしまうじゃないか！ 穢れのない世界が殺されてしまう。やつらは海の水をぶちまけてしまうぞ。政治教育施設やら刑務所やら国境を造りはじめるにちがいない。やつらの遺伝子構成は欠陥に満ちているんだ。やつらにはこの地球上に残るいかなる権利もないということを自分たちで理解することができないんだ！ 他のものたちに自分たちの場所を譲るときが来たということが、わからないんだ。もしやつらが自分たちで出て行かないのなら、カラマーノフが助けてやろう。それに自然がやつらを追い払うことだろう。『ワシーリイ、急いではならない。おまえを思いもかけない出来事が待ち構えているんだ。人間たちと交われば交わるほど、人間という種族をおまえは憎むようになり、やつらと隣人であることを避けたいという願いがいよいよ膨らむだろうし、プチブリ人が絶対にどうあつてはならないかがはつきりとわかるようになるにちがいない。先験的にかれらには何が許されていないのか、逆に人間的なものの何をかれらの遺伝子の中に残すことができるのか。いや、重要なことは、それがいったいいくつかということだ。やつらの欠陥の探求に熱をあげる必要はさらさらない。それは自然に表れ出てくるのだから！ おまえはこなごなに砕け散った世界の破片の中にそれを見出すにちがいない！ 目を伏せてはならない、大きく見開くんだ！ そうすれば今おまえが知っていることよりずっと多くのことが、わかるようになるだろう』こうした考えがわたしを元気づけ、『人間たちの中に入る』という衝動がわたしの知性にますます強く働きかけた。わたしはスタロヴァガニコフスキー

横丁の自分のあばら家へと急いだ。自分はアレクセイ・ポシバイロフではない、ワシーリイ・カラマーノフである、骨の髄までプチブリ人だと感じたいという欲望は抑えきれないものだった。着替えを済ませ、丸坊主の清掃人という顔に戻ると、わたしは戸外に飛び出し、道を掃き始めた。その時には、庭はすでに清掃されており、ゴミもとつくの昔に片付けられているということが、わたしにはわからなかった。後に自分の人生における異常なあの日の一瞬一瞬を思い起こしてみ、初めて、わたしは自分が庭を掃き清めたばかりではなく、自分自身を清めたかったこと、その日に起こったことのすべての記憶から解放されたがつていたのだということに思い当たった。そう要求したのはわたしの遺伝子の本性だった。が、知性——ホモ・コスミカスの知能——はこれに抵抗した。知性は過ぎ去った一日の詳細を一つ残らず収集し、記憶の特殊な細胞の中に納めた。わたしは自分が耐え難いほどに眠りたがつているのを感じながらも、のろのろと美容院にたどり着き、金髪の鬘を買ったあと、その隣の店で中古のジャンパーを買い求めた。そうして、自分の納屋に辿り着くと、よろよろとマットレスの中に倒れこんだ。次の日、正午には、わたしは再びアレクセイ・ポシバイロフに変装し、参謀本部の第三玄関へと向かった。金髪のポシバイロフには犯罪の手順を踏む用意ができていた。今日わたしは昨日と同じようなごく普通の『へたれサケ』ではなく、将校の中で一番えらそうで、賢そうで、かつ、一番貪欲なやつを見つけたいと願っていた。少佐ではなく、大佐か将軍がいい！ わたしは心をそそる提案を拒否するものに会いたがつていたのだ。そいつが驚いたようにこう訊ねるのを願っていたのだ。『どうしてあなたは三倍もの価格を払おうとするんです？ 精神病院の証明書はお持ちですか？ わたしは病人を

まどわしたくはないんです！ 金券とルーブリの交換レートは、金券一枚に付き一ルーブリです。わたしは金券を過大に見積もった値段で売りたいくはないんです。レートをきちんと守る、そうでなければ願い下げです』と、例の場所で立ち止まって、こんなふうになわたしは考えた。そこには今日もまた大勢の人がいた。大部分は少佐や中佐の肩章をつけた男たちだ。海軍服を着た二、三人の女性もいるにはいた。すると、突然一番最初の大佐が姿を見せた。その人物は入り口をゆつくりと出て行った。背丈は中よりやや下。太り気味。分厚い反っ歯が上向きに口から飛び出しているように見えた。ぜいぜいと息をしていた。わたしにはその人物の吹く軽い口笛を聞いたように思った。階段を下りきると、大佐は立ち止まった。目を細めて、あたりを見回した。アスファルトをねらって手鼻をかむと、ズボンで指をぬぐった。『挙手の敬礼』にはまったく何の返礼もしなかった。まわりの者には大佐が何やら考え込んでいるのがはつきりとわかった。考えている！その後、タバコを吸って、火の消えたマッチで歯をほじくり、少し噛んで足元に捨てると、アルバート駅の方角にゆるゆると歩き出した。ゆつくりと歩いていた。大きな腹が制服を膨らませていた。『さあ、ワシーリイ』自分に向かってわたしは言った。『もう一人自然の覇者とやらを覗いてみようか？』わたしはすぐに後について小刻みに歩を進めた。大佐と並ぶと、言った。「すみません、金券一枚に三ルーブリ払います。どうしても二百枚金券が要るんです。許婚にウエディングドレスを買ってやりたいんです。わたしはアレクセイ・ポシバイロフと言います。トヴェーリから来ました」「おまえ、どこからここへやって来たんだ？ ほんとにおまえに会ったことはないのかな。トヴェーリから来たって言ったな」大佐はわたしをじっと見て、立ち止まった。「おい、

トヴェーリから来たって聞いた小僧、おまえがその小僧は四ルーブリで買って、四ルーブリで売ろうって言うね？ えっ？ 大佐を欺こうってんだな？ 三ルーブリで買って、四ルーブリで売ろうって言うんだろ。そうして吾輩を馬鹿呼ばわりしようっていう魂胆か？ おまえどこで兵役についてたんだ？」「学生です、わたしは。兵役猶予期間中です」「年寄りはお働いて、若いもんは金券買いをする！ 小金をためる！ いや、絶対に三ルーブリでは売らん。四ルーブリ出すんだ。それ以外ではだめだ！ 吾輩はこの金をあてのいまましいイエメンで稼いだんだ。軍事顧問を勤めて、地下の軍隊も創ったんだぞ。アフメド・サリヤム・サイド將軍も吾輩の教え子なんだ！ 將軍に爆弾の投げ方を教えたのも吾輩なんだ。イスランブリ中尉がサダトを倒すのがそんなに簡単だったとも思うのか？」「こいつ何だって軍事秘密なんか話してるんだ？ 自分にはそんなもの関係ないんだ！ それにしても、こいつの貪欲さはとても興味深い』そんなことが頭をよぎった。わたしは話の腰を折った。「大佐殿、『ベリョースカ』のウエディングドレスは金券二百枚分するんです。わたしには金券が二百枚必要なんです。ですが、わたしには全部で六百ルーブリしかありません」「三ルーブリではなんととしても売れん。四ルーブリ払うんだ！ おまえの結婚が吾輩に何の関係があるんだ。吾輩は甥っ子の誕生日に『シャープのテレビ』を買ってやるのも断ったんだぞ！ おまえはトヴェーリから来たというが、それが吾輩とどういう関係があるんだ？ 四ルーブリ払うんだ、でなきゃとっとと失せろ」大佐がまた鼻汁を直接アスファルトに飛ばすと、わたしの短靴に一滴かかった。が、大佐はどうやらそれには気付かなかったらしい。「いいでしょう、わかりました」わたしは言った。「六百ルーブリで金券百五十枚だけ買わせていただきます。すぐに通りで

数を確認されますか？」そう言つて、札束を引きずり出そうとした。「おい、ポシバイロフ、おまえはスパイか、それとも馬鹿なのか？ 隠すんだ！ それにおまえの名前はなんとも性質が悪そうだ。普通のポシバイロフだって！ まったく！ おれの連隊にやって来たら、きさまの馬鹿さ加減をすぐさま叩き直してやる。通りで商売をおっぱじめるやつがあるもんか？ 通路を探すんだ、通路を」『通路というのはどこにあるんだろう？』わたしはちよつと思案した。「左に曲がりました。あの食料品店の近くに何か見つかるはずですよ」通路は暗くて、つばだらけで、しかも尿の匂いがして、壁にはカビも生えていた。わたしは札束の入った包みを本の上に載せ、その下には『人形』を配置した。「さあ、札束を取つて、数えてください」わたしが提案すると、とたんに大佐のヒステリーが始まった。ふたまわりも肥大した貪欲な目で大佐はわたしの顔を眺め回し始めた。そのあと突然、すこしも恥じることなく、大声で独り言を言い始めた。それは、信じられないほど、際限なく続く言葉の濁流だった。顔つきは石のように無表情で、声だけが震えていた。時々、思い出したように大佐は流れ出る涙を拭いていた。こういうものをわたしはいままで見たこともなかった。石のような顔を流れる涙。「吾輩には、つまり、金券が六千五百枚あるんだ。それに四を掛けるとすると、二万六千ルーブリということになる。この金で吾輩は協同組合のアパートを買うことにしよう。そして、それを額面価格の二倍で売ろう。車はアイストーフに譲つてやる。それで三千ルーブリは稼げる。カーペットは七千ルーブリになる。ケマル・パシヤのサーベルには仲買の女が三千ルーブリ積んでくれるだろう。アブドウル・カリムの挿絵の入った十八世紀のコーランには回教徒が三千ルーブリの言い値をつけるだろう。郵便の手セットには役

機師が千ルーブリ札を解いてもらった。ワタダの石の碎片のコレは……ルーブリの値がつく。ナセル大統領の手紙には古本屋が千五百ルーブリは支払う。サファイアの原石には二十ルーブリはかたい。『ラドー』の贗物の時計には千ルーブリ、サフラン五千キロにはウズベク人がアゼルバイジャン人だったら何千ルーブリもの言い値をつけるはずだ。使用済みの防毒マスクで問題なく四千ルーブリはまきあげられる。そのあと、かせいだ金を全部カバンに詰めてベトナムに持つて行く。そこでコーヒー農園を買うんだ。それともハンガリーに行つてりんごの農園を買つたほうがいいだろうか、そのほうがいい金になるかもしれん……」「大佐殿、どうなさったんです。お金は数えられないんですか？」わたしは口をはさんだ。わたしがもっと早くそうしなかったのは、大佐が何を考へているのかに興味があったからだ。だが、もうすべてがはつきりとした。儲け主義の遺伝子の活動を何度も何度も確認する意味はない。要求、そして、金儲けの遺伝子、これこそが人間の敵なのだ。これが意識を飲み込み、クロマニヨン人のなけなしの貧弱な知性に服従を要求するんだ。あいつらはどうしてこの破壊的な力に気づかないでいられるんだろう？ だいたいやつらの知性とやらへの自負はすぎましい！ もういい加減にしろ！ 「大佐殿、どうか紙幣の数をお確かめください！」わたしは繰り返した。将校は鼻をかんで、袖で鼻をぬぐうと、指をズボンのポケットで拭いた。そして、ポリエチレンの袋から札束を取り出して、数え始めた。札束をうんざりするほどゆっくりと、一枚一枚数えていたが、何度も間違えては、最初から数え出した。わたしが本を差し出すと、大佐はその上に札束を時には十枚ずつ、時には二十枚ずつ置いていたが、十枚の札束と二十枚とがごちゃごちゃになることもあった。十ルーブリの札束を

あちこちなでまわしながら、大佐は何か音楽でも聴いているかのように見えた。大佐は一枚また一枚と数えるたびに指で押さえた紙幣を右の耳に持っていて確認していたからだ。大佐は目をつむって、大きな頭を何かのリズムに合わせて左右に振っていた。それに、まくれあがった唇からはささやき声や歌声が漏れてきたりした。ようやく数え終わると、大佐は大きく息をついた。十ルーブリの札束はかなり長い間、本の上に乗っていた。わたしは右手で札束を抑え、左手は右手の下で本と『人形』^{ダミー}とを支えていた。そして、大佐の目の前で札束を透明な袋の中にきちんと入れ始めた。「うん、うん、いいじゃろう」将校は小声で言った。「銭は秩序ちゅうもんを好むんだ」「ところで、金券はどこにあるんです？」わたしは尋ねた。大佐は制服のボタンをはずした。そのあとワイシャツのボタンも。すると、ランニングの上に手で縫いつけたポケットが見えた。『収容所のやり方だ』とつさに、ひらめいた。『スリの心配でもしてるんだろうか？ それとも、すべての人間を疑っているんだろうか？』大佐は秘密のポケットから金券の束を引き出して、その中から百五十枚引き抜くと歯にくわえて、残りの金券を即席の金庫に戻した。そして、ボタンを掛けると、言った。「ポシバイロフ、では交換するでしょう。おまえに金券をやるから、金をよこすんだ」「さあ、札束をお取りください。金はとつくの昔に揃ってます！」わたしは言った。本の上にはすでに『人形』^{ダミー}が乗っていた。大佐はそれを取ると、ちよつと考えたあと、わたしに金券を手渡すと、再び制服とワイシャツのボタンをはずして、手縫いのポケットの中にゼロファン^{ゼロファン}の袋をぐつと押し込んだ。「おい、ポシバイロフ、わたしの電話番号を控えて置け。金券一枚に付き四ルーブリのレートでなら、いつだって換えてやる。何か書くものはあるか？」「ありがとうございます

さいます。でもこれ以上はいらないです。ウェディングドレスをよめる分だけあればいいんですから。『ベリョースカ』には金券百五十枚でよめるドレスがあります。確かにちよつと袖が短かめですが」「その通り！」大佐は言った。「花嫁の手は若いうちに切っておくもんじゃやて。嫁さんの手が短ければ短いほど、婿の力は強くなるってもんだ。わかったか？」わたしたちはようやくのことで通路を出て、二手に分かれた。何歩か足を運ばせたあと、将校はまた大きな音をたてて鼻をかんだ。わたしの額に鼻汁が一滴飛んで来たような気がした！ わたしはハンカチを取り出して、顔を拭いた。正直なところ、その時わたしはこれが単なる錯覚にすぎなかったのか、実際にわたしの顔に大佐の粘液が飛び散ったのか確かなところはわからなかった。この種の人間との会話のあとわたしはまた道を掃き清めたいと強く思った。が、わたしには果たさなくてはならない義務があった。わたしは自分のいる世界を呪いながらブローカーの女のもとに急いだ。『どうして、ここにわたしはいるんだ！ こんないとわしい時代に生まれてこなくてはならないとは』苦々しい思いがわたしのところを苛んだ。途中わたしは見知らぬ通路に入り、髪を取り替えた。今日の金髪から昨日の褐色に取り替えて、素知らぬ顔で店に入った。わたしと視線を合わせると、店番の女は後について来るようにとうなずいて合図した。わたしを女主人の所長室にいざなうと、女はただちにどこかに消え去った。女主人の部屋は十メートル四方もなかった。わたしはまわりを見回した。書類に埋もれた机、埃にまみれたガラクタが散乱した床、壁に掛かった田園風景を写したと思われるどす黒い絵、隅には何かのダンボール箱が雑然と詰まれている、この小さな部屋をゴミ溜め風^だにしていた。『わたしに頼めば、すぐさまきちんと片付けてやるのに。多少なりと

も楽に息がつけるように』そう思ったわたしは、とたんに大佐の鼻をかむ大きな音を思い出して、あまりに厭わしくて眉をひそめた。『いやはや、まったく!』「おや、アレクセイ、あんただったのね! 来てくれたんだね! 約束のものは持ってきたんだろうね?」灰色の髪をした女主人が左手で頬杖をついて机の向こうに腰かけていた。女の胸はテーブルの上に綿ネルの生地をまいたロールのように横たわっていた。「金券百五十枚、またお世話になります」この女と長く話をする気持ちはまったくなかった。「おやおや、おまえさん、百五十ずつ持っておいでなのかい。あんたには上限があるとでもいうの? それともわたしを信用してないの? このわたし、ニーナ・セルゲーエヴナを信用しないの? アルバート中がこのレペーシキナを知ってるんだよ、一目置いてるんだ! わたしやおまえさんを騙すようなことはしないよ。二百七十ルーブリがなんだっていうの? そんなもの屁でもないさ!」その時わたしはまったく違ったことを考えていた。『もしもこのご婦人を挑発して、本能のおもむくままにさせたらどうなるんだろう? 素直な感情表現をさせて、この女の遺伝子の嗜好とやらを覗いてみたらどうだろう? わたしは女という生き物をまったく知らないんだ!……』「ニーナ・セルゲーエヴナさん、今日の金券の値段は昨日より高くなっております。あなたには買っていただけないかもしれません。他のブローカーをあたってみてもいいんです」「あんた約束したじゃないか、ルーブリ八十コペイカで換えるって!」女はいきなり机から立ち上がって、叫んだ。「商売人の倫理を破るつもりかい。わたしが値段を決めて、『ベリョースカ』と交渉するんだ。それなのにあんた、事前に承諾もとらず値段をつりあげようっていうの。どういうつもりなんだい?」「新しい値段をお教えしましょうか?」わたしは落ち着い

て聞いた。「結構! わたしや知りたくもないよ!」「それでは帰らせていただきます」「とつととお帰り! もうおまえの顔なんて見たくもないよ!」わたしは黙って一礼すると、出て行こうとした。が、女がまた大声でわめいた。「いや、お待ち! いくらで売りたいんだい?」「現今の状況を鑑みますとどうやら二パーセントの値上げが必要です」わたしはゆっくりと話し出した。「別段悪気があるわけではございません。わが国では市場経済が始まっております。レートの変化は、市場の鉄則であります。レートは一日に数回変わることでもあります。次第に上昇していくこともあれば、一気に下降することもあるのです! ですから、わたしとしましては……」「アレクセイ、およし! 二パーセントはいくらになるんだい? ちよつとお待ち、計算するから!」ニーナ・セルゲーエヴナはだいぶ取り乱していた。「その必要はございません。もうこちらで計算済みです。全部で五ルーブリ四十コペイカの増額ということになります。わたしは商売にはうといのですが、この程度のレートの増加で大騒ぎをすることもなからうかと思えます。では失礼いたします」「ちよいとお待ち、この穀つぶし! わたしを苦しめないでくれ! わかったよ、わたしがまちがってた。やっぱり、女だねえ! いいから、二百八十ルーブリ取るときな!」女は口調を和らげた。「それでは、四ルーブリ六十コペイカはお茶代ということになりますか?」わたしは薄笑いを浮かべた。「あんまり考えすぎるんじゃないよ! なんなりと好きなようにするがいいさ。それより、金券を出しとくれ!」レペーシキナは拝み出した。わたしは金券を五十枚ずつの束で三つ女に手渡した。が、帰りを急ごうとはしなかった。『次はどうすればいいのだろう?』気持ちはまだ休まらなかった。『わたしにはこの種族の詳細を明らかにすることがとても大

切なんだ』わたしは純真な若者のふりをすることにして、ポケットから小銭をとりだして、釣り銭を出すために数え始めた。だが、その時ニーナ・セルゲーエヴナが小銭を引っかき集めて驚嘆（わしづか）みにすると、わたしのズボンのポケットにぐいと押し込んだ。小金を掴んでいた手を開くと、女はわたしを昨日と同じ淫乱な眼差しでながめて、わたしの身体の男の部分をぎゅつとつかんで、荒々しく、執拗（しつよう）になでさすり始めた。男の部分は形を変えて、固くなった。レペーシキナはもう片方の手で電気を消すと、足でボタンとドアを閉めた。そしてわたしの耳に音を立ててキスをすると、こうささやいた。「あんたに輸入ものの靴下を買っておいんだよ。黒いやつでね、縁にスウェーデンの王冠がついてるのさ。あんたの気に入ると思うよ。早く服を脱いで、さあ、椅子の上に！」女の声は震え、息遣いが激しくなった。「みんな脱いじまいな、アレクセイ！」そして、わたしのズボンから手を引き抜くと、女は自分も服を脱ぎ始めた。「おまえさんの靴下は一流だよ。イタリアから持ってきたんだから。シャツも脱ぐんだよ。早くおし！」女はまたわたしの秘密の部分をつかんだ。所長室での女主人のとんだ空騒ぎを目の当たりにしてわたしは腹立ちまぎれに思った。全体誰の頭に自然の桂冠を載せたんだ？ どうやら、ご親切な校閲者とやらも桂冠が粘土製だということに触れなかったものと見える！ いや、絶対に桂冠なんかじゃない、鍋だ！ そうだ、粘土製の鍋なんだ！ その時わたしはレペーシキナ女史の震える手をふり解（ほど）くと、落ちて着いてこう言った。「それでは、ごきげんよう、桂冠を乗つけた知恵者とやら、失礼いたします！」そうして、道路に飛び出した。わたしの信念は石のように固く、人間界の悪魔どもにはとうていわたしを打ち負かすことはできなかった。わたしはどんな試練にも、誘惑にも耐えたことだろう。

旧アルバート街は人でいっぱいだった。瓶ビールをラッパ飲みしている者もいれば、キスをしている者たちもいた。へたくそなギターをかき鳴らしたり、歌ったり、ふざけあったり、紹介し合ったり、果ては、いんちきをしたり、シエルゲーム^{*}をして、目配せをしあったりしている者たちもいた。それはロシアの首都の極く普通の日だった。わたしはアルバート街をのろのろと歩きながら、憂鬱に思った。なぜ自分はこの世界にやって来てしまったのだろうか？ 招かざる客だ。ひとりぼっちの清掃人だ。自分の理想でやつらを少しでも早く消滅させようとしているこのわたしは、やつら、この幸せな者たちにとって本当に必要なんだろうか？ やつらの知的貧困を覗きこんだり、やつらの欠陥をあれこれ記憶のノートに書き込んだりすることが本当に必要なんだろうか……。勝手に消滅してしまえばいいんだ。誰もネアンデルタール人の消滅を急がせたりはしなかったじゃないか！ 誰も憤怒（ほうき）の箒でかれらを追い散らしたりはしなかった。それとも、ひよつとして誰かいたのだろうか？ ある種の力がかれらの消滅を操作したのだろうか？ かれらは不思議なほど落ち着いて平然と歴史のページの中に消えて行ったじゃないか。まったく不自然なほどすごすごと自分たちの生息分布圏から永久に立ち去って行った。それなら、クロマニヨン人に必要なのは最後の一押し^{ひとお}だけなんだ。神聖、かつ、ひそやかで、穏やかな一押しだけなんだ。そこでわたしは再び思った。私^やとは実際にユニークな創造物なのだと。地球の運行の速度と、その速度が太陽までの距離に依存することを発見したコペルニクスのように、わたしは遺伝子構成の

*ふせた三つのカップの中の一つに小さな物を入れてカップを移動させたあと、物が入っているカップを当てるゲーム。

突然変異の速度に依存した種族の個々の生命の回転の速度を算出しなくてはならない。つまり、突然変異の速度が明確になった時初めて、わたしは実際に、はずみ車を放つんだ！ 全速力で！ そうして人間たちの群れをその終焉に向かつて急がせるのだ。わたしが今旧アルバート街で眺めている人の群れと同じく、喜びに満ちた幸せな顔をして、手に手にビールを持って、歌を口ずさみながら、肩からギターを掛け、流行の服で身を包み、豪華な車に乗って終焉へと急がせるんだ。あいつらにわたしの考えていることがわかったなら！ もしあいつらがわたしの考えを聞いたとしたら、わたしを粉々に打ち砕くだろうか？ それとも自分たちもまたこの出発を手助けするのだろうか？ もしかすると、やつら自身すべてがいやになり、あいつら自身がこの世界を捨て去ることを願うようになるのだろうか？ あいつらの人生の大半は不幸に満ち満ちている。出生率は落ち、同性愛が増えている。こうした過程がもう逆戻りのできない状態になっている国々もあれば、もう一方では、人口の永遠の増加というまったく逆のコースを辿^{たど}っている国々があるのも事実である。なんという混乱！ たしかに自分のよく知らない種族と戦うのはわたしにとって光栄なことにはなった。だが、そのためには自分の全生涯をかけても足りないかもしれない。わたしは国立図書館の分厚い本を、文字通り一冊残らず読み尽くさなくてはならないのだ。わたしの頭はそんな考えでいっぱいだった。生まれつきの明確な目的意識がわたしの考えをいっそう強くした。道行く人々には何の注意も払わないでわたしはゆつくりと歩行者天国を歩いて行った。人間の生活はわたしには何の興味もなかった。やつらもわたしという奇妙な者に対して否定的な感情を懐^{いだ}いている。やつらにわたしを尊敬することなどできるだろうか？ このわたし、道路の清

掃人ではないわたしを。いかなる愛着も持たない存在、やつらの生活習慣と常に内なる戦いを挑んで、流行にも、若者のたまり場にも、文化や金にも興味を示さないこのわたしを尊敬することなどできるだろうか？ わたしはやつらの理想から遠い所にいるのだ。宗教とか国家とか、主義や勲章、官僚主義的なヒエラルヒーはすべて、わたしには空疎な名ばかりのものにすぎない。美術館の同僚は誰一人としてわたしと話をしない。人間だったらさぞかし悲しがることだろう！ 憤怒で燃え立つことだろう！ だが、プチブリ人には、これが喜びなんだ！ わたしは誰からこんな奇妙な考え方を受け継いでしたのだろうか？ わたしはレストラン『プラハ』まで来ると、左に逸れ、百歩ほどで『チーズ』の店に出た。環状並木道を渡り、ズナーメンカ通りに沿って森の中のパシコフの家に降りて行った。そこでわたしはどういうわけか立ち止まり、頭をぐるぐるめぐらした。まるで何かを思い出したように。それとも、プチブリ人たちと会うことができそうな場所を探し出そうとしていたのかもしれない。もちろん、そんなものを見つけたことはできず、わたしは苦笑して、左に曲がり、スタロヴァガニコフスキ横丁に出た。清掃人の小屋はもう二分も行ったところにあつた。わたしは歩を早めた。鬢^{かつら}とポシバイロフの衣装を一刻も早くかなくり捨てて、ホモ・コスミカスに戻りたかった。孤独への抑えがたいあこがれが新たにまたわたしを包みこんだ。興奮した頭の中では数々の珍妙なシーンが心を乱し続け、わたしの望む平静を奪った。『このように膨大な数の人の群れを見るたびに、わたしの孤児の感覚は研ぎ澄まされる』わたしは思った。『わたしのまわりに人がたくさんいればいるほど、やつらの存在から自分の知性を切り離したいという願いが強くなる。これはまた、全身の疲労と頭痛、眩暈^{めまい}、執拗な耳鳴り、ど

こかの穴の中にも入ってしまいたいという願望を引き起こす。一人でいたいというだけじゃない、誰も見たくない、誰の声も聞きたくないと思うんだ』自分の不変性に元気づけられながら、わたしは納屋まで辿り着き、マットレスに崩れ落ちると、また空想し始めた。どうやらわたしは夢の中で空想していたようだ。だが、それがほんとうに夢であったのかどうかはつきりしない。すべてが現^{うつ}であったのかもしれないのだ！ わたしは通りを掃いていた。しかし、なんとも奇妙な事に、道は黄色に色を変えた木の葉ではなくて、紙幣で埋めつくされていたのだ！ 様々な色をした紙幣が幾層にもなつて、人のいない道に積み重なっていた。かすかな温風がまるで糸を引くように紙幣を運び、紙幣はアスファルトの上をかさかさと言をたててスタロヴァガニコフスキ横丁のほうに流れてきた。道をきれいにするために、これだけの数の紙幣をかき集めるのは、とても無理な話だった。シャベル一杯にどれだけ入るというのか？ 最初わたしは美術館の掃除機を使うことも考えた。だが、すぐにその考えの愚かしさに気づいた。集めた紙幣をいったどこへやればいいんだ？ わたしの担当区域にはゴミ箱が三つしかない。そこにどれくらい入るというんだ？ 一箱にシャベル五十杯分がせいぜいだ！ ところが、わたしは五万杯もの、いやそれ以上のゴミをかき集めなくてはならないんだ。このゴミをどこへやればいいんだ。この火急の問題を即刻解決するために出した結論は、紙幣を燃やさなくてはならない、というものだった。松明^{トーチ}を持ってきて紙幣を燃やすんだ、火の中に紙幣を束にして投げ込むんだ。この考えが最も効果的だと思われた。この巨大な紙くずの山から解放される方法は他にはないとわたしは思った。わたしは人間たちの要求を満たす手段でしかないものをすこしでも早く廃棄しなくてはならない

と感^{かん}じたのだ！ あいつらの不幸は要求することにあるんだ！ 巨力の富を手に入れたという飽くことを知らない要求にあるんだ。消滅しつつある世界の財貨で自分を取り囲みたいというくだらない情熱。やつらの神経の偏執狂的なところがわたしを最も苛立たせた。スタロヴァガニコフスキ横丁とヴォズドヴィージェンカ通りの角で、わたしは義務の念に駆られて、松明^{トーチ}に火をつける、紙幣を一抱えごと燃やし始めた。炎が勢いよく上がった。それはもうわたしの背丈ほどの高さになっていた。懸命に働いてわたしは汗だくになった。が、火のかたわらでわたしは不思議なほどの力の高まりを感じてもいた。松明^{トーチ}一つではとても足りなかった。紙幣の奔流が地面の下から間歇^{かんけつせん}泉の湯のように噴き出して来るように見えた。わたしは二本目、三本目、そして四本目の松明^{トーチ}にも火をつけなくてはならなかった。街角は火の海になっていた。横丁を埋めつくした紙幣に火は燃え広がった。あたりは一面火の海だった。炎の舌は家々の土台を舐^なめまわしていた。高熱で家々の窓ガラスは砕け散り、戸の枠はきしんでいた。火は執拗に一階部分を這いまわり、階上に駆け上がる^{トーチ}としていた。わたしは自分自身が松明^{トーチ}に変身したかのように思った。火に囲まれても、わたしは少しも恐ろしいと思わなかった。それどころか、火の中に居心地の良さを感じていたのだ。自然がわたしに何か人間の力を超えたある能力を授け、わたしをどこか未知の次元に連れ去ったように思えた。わたしはこうも思った。これこそがプチブリ人の世界ではないのか？ そうしてこの考えはわたしに心の底からの安らぎを与えてくれた。その時突然わたしは何か聞き覚えのある声を耳にした。わたしの耳元にとどいたのはおだやかに語り合う声ではなかった。はじめわたしは唸り声を聞いた。それは急激に叫喚へと変わった。大声でわめきながら

人間たちが火の中から駆け出して来た。瞬時にわたしは思った。『ここにどこか隠れるところがあるというのか？ 一面火の壁が立ちふさがっている！ 生き延びるチャンスなんかあるものか！』そして今度は声だけではなく、逃げ惑う人々の顔にも見覚えがあることに気づいた。突然、パンチューホフ、ポドベード、シトウーチキン、セミハトーヴァの夫婦、参謀本部の大佐と少佐、仲買いの店のレペーシキナと店番の女をはじめ、わたしが今まで出会った者たちの顔が火の中に見えた。しかもかれらは火の中から逃げようともせず、炎の中を走っていた。手に手に袋や布で包んだ物や、ありとあらゆる物を持って、わけのわからぬ言葉を喚きちらしながら。最後の力をふりしぼって、誰かが台所用品を山とつんだ瑠璃引きの浴槽を引きずっていった。またある者は、動物のように歯をむきだして、ピアノを動かして行つた。あまりの重さに腰を曲げながら、服のいっぱい掛かった洋服掛けを引いている者もいれば、スーツケースを持っている者もいた。蠟燭立てや銅の彫像、アイコン、シャンデリアなどの雑多な道具類を山と積んだ乳母車を押していく者もいた。かれらが赤々と燃える一面の大火の中から懸命に持ち出そうとしている物を見て、わたしは愕然とした！ 火はもう青い炎をあげていた。それにかれら自身も燃え上がり、さながら燃え上がる巨大なマッチ棒のように見えた。それよりもよほど奇妙だったのは泣き叫びながら走つていく人間たちが、逃げ惑いながらも火に包まれて燃え上がっている紙幣をかき集め、それをこれまた炎に包まれたポケットに押し込めようとしていることだった。炎に包まれた人の数はますます多くなった。この人の群れにはもう驚くばかりだった。『なんて貪欲な飽くことを知らない存在なんだ！』すると、頭の中でひらめくものがあった。『もうかれらの消滅は始まっているのではな

いか？ 炎はわたしに触れもしない！ わたしを燃やさないで！ 人間たちは火の中で滅び、プチブリ人たちがクロマニヨン人たちによつて汚されたテリトリイに移り住むために火の中から立ち現れてきているのではないか？ 化学物質で汚染された地上に移り住むために？ 有害物質で毒された大気と世界の海水を継承するために？ かれらのあとといったいどれほどのゴミを捨て去らなくてはならないだろうか！ 人間文明というがらくたからホモ・コスミカスを解放するためにはいったいどれだけの町を破壊しなくてはならないだろう！ そうだ、火こそが世界を変え、プチブリ人に新しい時代への道を切り開くための最良の実体なのだ。どの世紀も灰の中から誕生したではないか！ 灰とは、ホモ・コスミカスを育成するためには最も効果的な肥料なのだ』すると、突然火はごく自然にひとりで鎮火した。ぶすぶすとくすぶる人の燃え殻と、建物の骨組みとだけが残っていた。焼け跡は全域に広がっていた。だが、その光景はわたしに拒否反応も、不満も憂鬱も呼び起こさなかった。いや、その逆だった。わたしは灰の上に横になりたいと思つた。灰に全身を押し付けたいと思つた。抱きしめたかった！ 人間たちが金やアイコンや贈り物や宝石類にするように灰に接吻したいと願つたのだ！ 灰こそがわたしの求めるものだった。わたしは灰を手にして、頬や胸になすりつけると、限らない、酔いにも似た喜びを感じた。その喜びがあまりにも大きかったためか、わたしは夢から覚めた。あるいはまた忘我の境から抜け出したのかもしれない。わたしはマットレスから飛び起きると、中庭を見るためにスタロヴァガニコフスキ横丁に飛び出し、ヴォズドヴィージェンカ通りに向かった。全世界を包みこんだ火事の形跡などは何もなかった。透明なネオ

ンの光が人気のない閑散とした通りを照らし出していた。今年初めての凍てが指先をちくちくとした。朝三時をすぎたころだった。『不思議な幻覚だった』わたしは思った。『もちろんわたしは夢を見ていたにちがいない。だが、こんなはつきりとした夢はいままで見たことがない。ひょっとしてこれは、行動せよという神秘的な啓示か何かではないだろうか？ いや、まさかそんなことはない！ すべてがあまりに人間的で残酷だ。プチブリ人には暴力をふるうことは断固として許されない』自分のあばら屋に戻ると、わたしは眠ろうとした。だが、どうしても眠れなかった。荒廃のようなものがわたしの心を占めていた。まるで、すべてを灰にした火事がモスクワの通りで起こったのではなく、わたし自身の心の中で起こったように。『わたしは生涯、孤独にあこがれつづけるのだろうか？ たしかに、今わたしは人間たちと話をするのを避けている。だが、この世界へのプチブリ人たちの移住が始まった時、かれらと交際したいというわたしの願いが萎縮するということはないのだろうか？ 私とは、いつまでたっても私のままで、たったひとりの私でいるのだろうか？ たしかに私とはすべての存在の中で最高の価値を持つものだと言われている。それは精神と心と身体の理想的な調和なのだ！ 地球上だけではなく、全宇宙の中の最高の調和なのだ！ だが、それは誰が言ったんだ？ 人間たちか？ いや、そうではあるまい！ プチブリ人たちの先駆者がこう宣言したのだ。そもそも人間には限らない宇宙を自分たちの居住空間にする能力などないじゃないか。だからわたしは、プチブリ人の私がかれら人間たちのひとりよがりで互いに警戒しあう私と、地球を最終的な袋小路へと追いつめたかれらの集団としての我々にとってかわることを確信している。このカラマーノフこそが、迫り来る終焉の証人

なのだ。人間は自分たちではこの崩壊に気づかないのだ。かれらは今日の問題にしか興味をいだかない。来るべき日がかれらにはわからない。かれらはその日の前に盲目なのだ！ プチブリ人たちの私の間で、いくつもの時代が過ぎていくのだから、私の世代間の繋がりが絶たれることのないように、また、その中の一つでも短命に終わらないように、知性の活動と寿命とが直接関わるように新しい存在の遺伝子を構成しなくてはならない。ドミノ遊びに興じたり、テレビを見たり、セックスをしたり、管理のための手段や方法を講じたり、強姦したり、飲酒にふけっているということは、すなわち、あなたの知性は不活発で眠っているということだ、知性は打ち砕かれてしまっているということなのだ！ さらばだ！ さっさと他の世界に移ればいい！ そうそう、そうなんだ！ 人間たちの言い方をすれば、さっさと失せろだ！ あんたが何の役に立つというんだ？ プチブリ人こそが宇宙の限らない神秘に到達し、新しい銀河を発見し、未知の世界に移り住むのだ！ その世界でどうしてやつらに、カード遊びをしたり、サッカーを見たり、淫売屋に行ったり、下手な漫才師の話に興じたり、デビューしたてのへたくそな女性歌手のコンサートに出掛けたり、銀行から盗んだ金を溜め込んだりすることなどさせられるだろう？ 人間は死すべきものののだ。常に清新さを求めることもなく、自分たちを取り囲んでいるものについての新しい思考もないのだから』ここでわたしはふと考えた。というのはここまでの考えが図書館の分厚い本の中から得た知識なのか、自分自身のものなのかがよくわからなくなったからだ。もしこの考えが本から得たものであるとすれば、この地球上には過去に何度もプチブリ人が誕生していたことになる。それではなぜかれらは、いたずらに消滅してしまったのだろうか？ どうやら、か

れらには人間的なものの余剰があったと見える。時間に対する恐怖は単にこの生物学的種族の大多数だけではなく、人間の中の最良中の最良のもの、ホモ・コスミカスの截然とした特徴を有する者たちをも滅ぼすものと見える。たしかに百年はかれらには、計り知れないほど長い。だが、自然にとって、時間が何だというのだ？ 自然にとって急ぐ必要などあるのだろうか？ 自然は人間たちを世代から世代へと鍛え続けているのだ。最後には新しい存在が誕生するようにと。百万年も十億年も、自然にとっては、大海の中の一滴の水に過ぎない。だが、わたしはこの突然変異の過程を促進させなくてはならない。わたしにはなんとすることもかれらと共に住むことはできないのだから。ホモ・コスミカスとは、まったく異種の存在なのだ。ホモ・コスミカスはかれらの理解をはるかに越えた問題について思索することだろう。ネアンデルタール人がクロマニヨン人と共生したという歴史を考慮して、人間たちに妥協案を提示してもいい。地球上にこれまでの姿のままに住みたいとお望みなら、どうぞお残りなさい。あなた方の最後は近いし、命運は尽きてはいるんですがねと。全世界を自分たちのものとするがいい、それができる間は。われわれは百平方キロメートルの分布圏でしかないプチブリに移り住もう。そこがわれらの母なる地となるのだ！ 約束された地となるのだ！ かれらとわれわれの違いは、歴史上のほんの一步にあるのだ。かれらは永久なる死後の世界に足を踏み入れねばならない。だが、ホモ・コスミカスは宇宙空間の中に足を踏み出すのだ。この瞬間を近づけるために、もつと多くの時間を読書に費やさなくてはならない。哲学者や遺伝学者、物理学者や生物学者の書いたものを読むのだ。理論的にプチブリ人の遺伝子の構成を作り出すのだ。創造という新しい理想に自分のすべてを捧げるのだ。自分

の理論に満足し、わたしはくつたりとした、笑いがこみあげ、喉に乾きを感じた。身体には悲寒が走った。わたしは自分がどこか完全な空虚が支配する音の無い冷たい空間にいるように感じた。眠気が襲ってきた。わたしは毛布を頭までかぶり、身を縮めて丸くなった。そのあと急速に眠りの世界に落ちていった。六時半に目覚ましが鳴った。わたしはようやくの思いで起き上がり、身体を洗い、冷たい水を飲んで、一切れのパンを食べ、赤いビーツをかじったあと、着替えて外に出た。町にはもう冬が訪れていた。雪が家々の屋根や舗装道路を覆っていた。吹雪が若者のように熱っぽくわたしのまわりを舞い狂っていた。それはまるで自らの忌々しい気性に抗っているようだった。「わたしから、この猛々しさを奪い取るのだ、ワシーリイ」舞い狂う雪はこう語ってでもいるようだった。「そうすればおまえは完璧にやり遂げることができる。自分のそばに引き寄せることができる、あの自分の時代とやらを近づけることができるのだ！」「本当にそんな当たり前のことなんだろうか？」わたしは考えた。『自分には実際に熱心さが足りないという、それだけのことなんだろうか？ 考えるばかりで、あまり行動しないとでもいうのか？ だが、どんな果実でも、いつかは熟する時が来る。確かに自分はいつかはどこか違う世界に行くことができるだろうと夢想している。これはなんだろう、狂気か？ それとも偏執狂か？ 遺伝子の総譜の変化がもたらした熱狂だともいうのか？ プチブリ人なしでは宇宙は空だ！ 宇宙にはそれを生み出すもの、創造者が必要なのだ！ 果てしのない空間——だが、その主人が欠けているんだ！ それにしても不思議だ。人間は狭い土地を争い、自分をフェンスや柵で囲み、ビザを発給したり、避難所をもとめたりしている。だが、誰一人として永遠の中に己を見出すという計りしれない可

能性について考えようもしないのだ！死ぬことを恐れ、死者を悼んでは泣き、莊嚴な追悼会を催す。地下納骨所や大理石の墓碑、それに廟を建てたりまでする。だが、かれらには不死に關した祭りもなければ、儀式の一つもない。かれらが葬儀に費やす金額を合計してみると、天文学的な数値になるではないか！現在、世界中で一年間に五億人の人間が死んでいる。葬儀代、つまり、棺や教会への寄進や埋葬サービス、別れの会食、墓のデザイン、追悼の儀式など、全部で故人一人当たり平均二百ドルほどが費やされる。五億人に二百ドルを掛け合わせると、なんと一千億ドルの支出となる！これはロシアの国家予算よりはるかに巨額だ。もし、十年、あるいは、百年間の支出を考えると？これはもう驚愕すべき数値になる！だが、どうしてかれらの知性はこう言わないのだろうか？「クロマニヨン人たちよ、埋葬の儀式を簡略化しようじゃないか、遺体を穴に投げ込んで、科学の実験のために金を節約しようではないか！われわれの子孫が不死を手に入れることができるように」もし、不死に税金を課したら？葬儀代で浮いたお金の二十パーセントか三十パーセント。つまり、五十ドルだ！それに、もしこういうことすべてが實際的な結果を生むとすれば、軍備の妥当性が問題になってくる。もし人間が不死を手に入れたら、武器は意味を持たなくなるではないか？ロシアやその他の諸国の軍事産業複合体で研究中の科学的潜在能力は必要とされなくなるだろう。何のためにもならない欠陥だらけの事業に終焉が訪れる。無限の財源が捻出されるのだ！そうすればこの巨大な下部構造を不死という基本的な問題の解決に転換させることができる。おそらく現下の状況でなら、近々百年以内にこれは達成可能だ。だが、大いなる逆説は、自分たちが一時的な存在であると感じていること自体が証明して

いるように、かれら自身がそのことを理解していないことにある。まるで自分たちの生命を延長するのは他の種族の仕事だともいうかのように。つまり、プチブリ人の仕事だとも！だが、それは間違っている。もしかれらがこの問題をまともに考え始め、問題解決にむけて動き出したなら、わたしは一番最初に人間として登録することだろう。なんといっても死こそが、地上のすべての罪障と、かれらの遺伝子構成の最大の欠陥おおもとの大元なのだ。どうしてこんな重要なことが、かれらにはわからないのか？まったく、やつらはなんて知性的なんだ！この神話的な呪詛はクロマニヨンの地で既にかれらを脅かしていた。受胎の時からすでに死には無抵抗なものとしてあった。多くのものが死を望みさえしたのだ！死を讃える頌詩しょうしまで書く始末だ！かれらは技術的な進歩に夢中になっているんだ。かれらにはそんなものはまったく必要ないということを忘れて。かれらに必要なのは有機体としての急速な進展、つまり、生物学的な進歩なのだ！そうだ、生物学的進歩が必要なのだ！それなのに、やつらは広々とした夜空を仰ぎもせず、クレムリンのルビーの星をぼんやり眺めているばかりなんだ。そうだ、人間は滅び去るべきものなのだ『わたしにはかれらが限りなくつまらないものに思われた。その時わたしはヘルマン・ヘッセが書いていた言葉を思い起こした。『作家ヘッセが病とか死から自由で、永遠の命が作家ヘッセにとって望ましく、また必要なものであるかとへ……』もしわたしが問われたら、栄譽を求める文学者としてわたしは、この問いに対して肯定的に答えることだろう。だが、この問いが誰か他の者について出された問いであるとすればへ……』わたしは躊躇することなく、「否」と答えることだろう。いや、まったくのところ、わたしたち老人、あまり魅力的でもない人間にとって、痛

風一つ病むでもなく、永遠に生きるということはまったく不必要なことである。へ……いや、わたしたちはいずれいつの日か、喜んで死んでいくことだろう。』クロマニヨン人というのはまったく不思議な人々である！ かれらは自分から『喜んで死んでいきたい』と語り、不死に関しては一言も語らないのだ！ 不死への希求は聖書のテキストの中に見えるばかりなのだ。だが、この希求は神秘的で、宇宙空間の固有の種族の理解の範疇を越えている。『……魂は永久に生きる』こんなでたらめを信じているとすれば、人間とはまさしく原始的な生き物にちがいない！ 急がなければならぬ。でなければ成し遂げることはできないのだ。これは、気まぐれなんかじゃない。人生の目的なのだ！ 傍^{はた}から見れば、なるほどわたしは奇妙な存在に見えるに違いない。想像してもわかるだろう。清掃人の綿入れジャンパーを着た若者が、自分のみすばらしい納屋の入り口で吹雪に凍えながら、こんなテーマについてあれこれ思索に耽^{たづな}っているのだ！ 人間たちの目から見れば、わたしはただもう、はつきりとうすのろに見えるに違いない。だが、わたしにはそんなことは全くどうでもいいことなのだ。わたしはむしろかれらがかれらの都合のいいように、自分たちとわたしとの間に違いを見出してくるよう望む。それがわたしにとって何だというのだ？ わたしは真のプチブリ人の純粋な生活に向けて用意をしなくてはならないのだ。わたしの離人癖や孤立した生き方はホモ・コスミカスとしての自負を示すものであり、自己統制と、知力の強さと、精神的統一とを証明し、瞑想に耽^{たづな}ることを常としていることを語っている。そうだと、急がなくてはならないのだ。有益な書物をすべて読破しなくてはならない。エフロイムソン、エフスタフィエフ、アレン、ベツカー、ドウノ、ヴィーデマン、その他にも読むべき本は山ほどある。最も重要なアイデア——つまり、人間という素材に基づいて新しい存在を創り出すこと——これを実現させる方法をよりよく理解するために読むのだ。わたしは創造という仕事に取りかからなくてはならない。知られざる突然変異を創造するという仕事に取りかからなくては。この驚嘆すべきプロセスを始めるためには、いったい何冊の本を読破しなくてはならないのだろう、いくつかの理論を再考しなくてはならないのだろう、知識の殿堂である図書館で過ごす時間、また、本を片手にうす暗い清掃夫の納屋のマットレスの上で過ごす時間はどれほどのものになるのだろうか！……冬は清掃夫から夏場の仕事の特典を奪った。つまり、雪かきという仕事は歩道を掃き清めるよりよほど骨が折れ、よほど多くの時間を要したのだ。確かに、割り当て区域の清掃の歩合いは上がった。だが、わたしにとってはそれはどうでもいいことだった。昨年の四月に管理人からヴォズドヴィージェンカ通りの左側の歩道、つまり、国立図書館から地下鉄のアルバート駅までと、スタロヴァガニコフスキ横丁からズナーメンカ通りまでの両側の歩道を半人分の賃金で清掃するという条件に同意した時、わたしは賃金についてはほとんど何も考えなかった。わたしはただプチブリ人に必要とされる仕事を示したかったのだ。冬は清掃夫たちから仕事時間外に自由時間を奪った。吹雪いている時が、仕事の時間だ。そして冬には、吹雪く日が定期的に訪れた。従って、有益な事業に費やす時間は少なくなる。それでも自由な時間をわたしは自分の人生の大事業について考えることに費やした。一刻も早く！ 我慢できない！ わたしは坊主頭と顔から雪を払いのけると、耳をぬぐって、帽子を被るためにあばら家の中に駆けこんだ。それから中庭に出ると、暗くて狭い物置小屋から幅の広い雪かき道具を取ると、通りに向かってどかどか

ある。最も重要なアイデア——つまり、人間という素材に基づいて新しい存在を創り出すこと——これを実現させる方法をよりよく理解するために読むのだ。わたしは創造という仕事に取りかからなくてはならない。知られざる突然変異を創造するという仕事に取りかからなくては。この驚嘆すべきプロセスを始めるためには、いったい何冊の本を読破しなくてはならないのだろう、いくつかの理論を再考しなくてはならないのだろう、知識の殿堂である図書館で過ごす時間、また、本を片手にうす暗い清掃夫の納屋のマットレスの上で過ごす時間はどれほどのものになるのだろうか！……冬は清掃夫から夏場の仕事の特典を奪った。つまり、雪かきという仕事は歩道を掃き清めるよりよほど骨が折れ、よほど多くの時間を要したのだ。確かに、割り当て区域の清掃の歩合いは上がった。だが、わたしにとってはそれはどうでもいいことだった。昨年の四月に管理人からヴォズドヴィージェンカ通りの左側の歩道、つまり、国立図書館から地下鉄のアルバート駅までと、スタロヴァガニコフスキ横丁からズナーメンカ通りまでの両側の歩道を半人分の賃金で清掃するという条件に同意した時、わたしは賃金についてはほとんど何も考えなかった。わたしはただプチブリ人に必要とされる仕事を示したかったのだ。冬は清掃夫たちから仕事時間外に自由時間を奪った。吹雪いている時が、仕事の時間だ。そして冬には、吹雪く日が定期的に訪れた。従って、有益な事業に費やす時間は少なくなる。それでも自由な時間をわたしは自分の人生の大事業について考えることに費やした。一刻も早く！ 我慢できない！ わたしは坊主頭と顔から雪を払いのけると、耳をぬぐって、帽子を被るためにあばら家の中に駆けこんだ。それから中庭に出ると、暗くて狭い物置小屋から幅の広い雪かき道具を取ると、通りに向かってどかどか

と踏み出した。吹雪は勢いを増してきていた。視界は五メートルから七メートルぐらいしかなかった。積雪は既にくるぶしのあたりまで達していた。『どうやってかれらは地下鉄の駅まで駆けて行くんだ?』ふとこう思った。『雪かきを始めなくては。ころんでけがをするじゃないか!』こうして首都の清掃夫としての三度目の冬が始まった。早朝と昼食後にわたしは雪かきをすることになっていた。が、その他の時間は読書に充てた。眠るのは五時間にも満たなかった。人間の貪欲さの観察を完遂するために、わたしは参謀本部で、あの後二、三度ぐらい『へたれサケ』を釣った。軍人たちとの逸話は繰り返された。ある欲の皮のつつ張った将校は金券一枚につき五ルーブリと値をつり上げてきた。払うより仕方がなかった! もちろん『人形』で。十一月の終わりになると、わたしはこの事業をやめることにした。アレクセイ・ポシバイロフの『七つ道具』をゴミ箱に投げ捨て、稼いだ金は貨幣価値を保つためにドルに交換した。二度目、三度目の『人間の中への参入』のためにその金が必要になることがわたしにはわかっていた。つまり、モスクワにいる文化人たちや政治家たち、そして科学者たちの活動分野に分け入る必要があった。わたしはそこで嫉妬と軽蔑の遺伝子を識別したかったのだ。わたしには文化人のサークルでこそこれらの人間の特性がはつきりと、醜悪な色合いでたちあらわれてくるように思えた。ある春の日の午後のことだった。わたしは自分の清掃区域の仕事を終えた後、かれらの施設に変なやつがやって来たと言って嘲笑する者がいないように、身体を洗い、きちんと髪を整えた。そして、前もって買っておいた中国製の衣服に身を包み、ベトナム製の短靴を履き、首都の有名な劇場へ向かった。小雨がしとしと降っていた。わたしはブレザーの襟を立てた。が、わたしのふさふさとした赤毛か

らは雨水が襟の中へと背信的に流れ落ち続けた。濡れそびたアスファルトの上で靴は柔らかくなり、歩を進めるたびに水泡が浮かんで、まるで風呂場のスポンジのようだった。わたしは職場の告知板の上の細かい文字をやつとのおもいで読んだ。『劇場の舞台係を数名募集中。問い合わせは人事課へ』この他に何かわたしのできることはあっただろうか? 舞台係とはまったく悪くない! 俳優どもを観察するにはまたとない機会だ。それほど高くもない階段を駆け上がると、守衛に尋ねる。『人事課にはどう行けばいいんでしょう?』面接の後、かれらはわたしを人員の中に加える。よく観察もせず、どうしてこんな若くて、背の高い、大柄な人間がビジネスや軍隊で金を稼ぐかわりに、劇場に仕事を求めるのかを少しも理解しようとせずに。舞台係としての知識を調べようなんて誰が考えるだろう? 舞台係にロシアの宇宙主義や時間や空間について聞いて何になるのだ? だが、もしもわたしがかれらの劇場でしつこく仕事をさせてくれという目的は何かと問う者があつたら、わたしは自分の動機を隠したりはしなかったことだろう。だが、人間の思い上がりというのは際限のないものである。確かに、人事課の監督官は『雄鶏』という表題の本を面倒くさそうにぱらぱらとめくりながら、いくつか質問はした。わたしの名は何というのか。性的な嗜好は何か。つまり、同性愛者か否か。この他に人間たちの興味を惹くことなどあるだろうか? 『雄鶏』は何か動物についての本で』わたしは考えた。『どうやら、鳥についての本のようだ。知性的な人間は何万年もこれについて調査している。ブラボー! ブラボー! だがどうして自分のことを知ろうとしないんだ? 鳥たちのことを調べるよりもよほど有益なはずだ!』わたしはワレンチン・セローフ美術館の清掃夫も続けられるように自分の一日の労働時間を配分

した。早朝、わたしは美術館の中庭とわたしにあてがわれた通りを清掃したが、十時十五分にはもう劇場にいた。十五時にもう一度割り当て区域を清掃したあと、十八時からは劇場の舞台に装飾類運び入れた。それは夜遅くまでかかった。この期間、わたしは実質的にほとんど何も読むことができなかった。わたしはこの時期を実験と観察、そして結論の時間と名付けた。セローフ美術館も文化の観察対象ではあった。が、わたしの労働の場は戸外だった。美術館の館員たちとはまだ一度も話をしたことがなかった。実際、館長と守衛以外に個人的に知っているものは一人もいなかった。わたしはセローフの作品の専門家たちすべてに挨拶をし続けた。が、それ以上には進まなかった。かれらはわたしに興味を示さなかったし、わたしもそれ以上にかれらに興味を持てなかった。まるでわたしのお辞儀に気づかないように、いつもかれらはわたしの傍らを通り過ぎた。劇場でもまた、同じようなことが起こった。クローク係の女性だけが黙ってうなずき、ほとんど気付かないほどのかすかな笑みを浮かべた。仕事場の同僚たちは憂鬱な人間たちだった。『早くしろ』『行くぞ』『立てろ』『持っていけ』『持ち上げろ』以外の言葉は、かれらの語彙にはなかった。俳優たちはわたしを、いや、わたしの同僚たちすべてを、まるで部外者のように避けて通った。ロシア人たちがゴミ溜めや死んだ猫、わなに掛かったネズミや不死のテーマなどを避けて通るように。わたしは科学的な探究心で、劇場の雰囲気を一心に吸収した。わたしは俳優たちの顔をつぶさに観察しようとした。かれらの知性の程度を測るためにだ。知性はこの職業にどの程度まで特有のものなのか。だが、かれらはこの問いに常に傲慢さで答え、わたしはその傲慢さに、不思議でもなんでもないのだが、ひそかな魅力を感じさえした。かれらの遺伝子がある種無

愛憎で傲慢なのが、かれらに引導を渡すべきだという確信を強めた。が、そんなある日のこと、事件がもちあがった。そのあと、わたしは職を追われ、一ヶ月の見習い期間も満了することができなくなった。わたしがリハーサルのために舞台装置を変えていた時のことだ。わたしは高くて重い棚付きの書斎机をどこかで見つけて舞台に持ってこなくてはならなかった。その机はおよそ二十五キロぐらいの重さがあったが、わたしにはそれは別段なんでもなかった。問題は別のことにあった。つまり、その机の高さは一メートル半ぐらいあって、わたしは勘で運ばなくてはならなかったのだ。机にさえぎられて目の前が何も見えなかったからだ。だからわたしは慎重にゆつくりと、まるで高価な細工物でも運ぶように机を運んできた。そのとき突然何かが軽く机に触れたのを感じた。いったい誰が机にぶつかったのかを見もせずに、わたしは立ち止まり、急いで謝ろうと荷を降ろした。見ると、わたしの前には怒り狂った女優が立っていた。わたしにはその女優がなんという名前なのか見当も付かなかった。ねぐらとしてあるあばら家にはテレビもなければラジオもない、クニヤギーニノからやって来た清掃夫にどうしてわかるだろう？ わたしには人間の顔はいつもこいつも同じに見えた！ だが、もう一つ別の状況がわたしを困惑させた。わたしは受刑者の入る青少年コロニーと収容所^{ライゲリ}に七年いたが、こんな卑猥な罵^{のの}り言葉は聞いたことがなかった！ それは単に常軌を逸した女性の罵りというだけではなかった。それは変質者の言葉か刑務所の常連たちの格言とでもいったものだったのだ！ はじめはいったい何が起こっているのか見当も付かなかった。その婦人が誰か他の人間に汚物を浴びせかけているのかと思っただけだ。机が女優に当たったのは別に悪気があったのではなく、女優の足を折ったわけでも、

ひどい皮下出血やあざを作ったわけでもない。だが、わたしはその女優が侮辱しようとしているのが自分であることを早々に察知した。女優は首を伸ばして、まるい目を見開いてわたしの方をまっすぐ見ており、舌は罵り言葉の調子に合わせて踊っていた。女は何やら理由のない憤怒と憎しみに恍惚となつてわたしをどなりつけていた。知性的な人間だけがこのような下品な言葉を並べ立てることができるようだろうか？ わたしは一連の罵り言葉を楽しみ始めていた。心臓は歓喜でとまりそうになった。わたしは足をとんとん踏み鳴らして、とんぼ返りをうったり、手で拍子をとったり、喜んで耳をこすりつけたりしたくなつた。女優の行動はわたしが確かめたいと願っていた事を立証したのだ。わたしは女優にこう言つてやりたいくらいだった。『お願いだ、女優殿、お続けください、どうぞ好きナだけ。もつと！ もつと！ どうか、わたしの仕事に発破をかけてくれ！ プチブリ人に為すべきことを教えてくれ！ 労働者を侮辱するんだ、遠慮なんかしなくていい！ 刑務所で囚人仲間の雑用を安く請け負うやつらが足でこづかれるように、あんたはわたしの顔を鞭打ちつづけるんだ！ ロシア語には下品で粗野な言葉が五万とあるんだから。わたしは、傲慢さと退廃というあんたの遺伝子の特殊性をはつきりと理解することだろう。わたしにはこうした情報が大切なんだ。なんといつても今は実験中なんだから』この短時間に起こつた混乱によつて、実に多くのことがはつきりとした。『本当に、なんて不幸せな女なんだろう』わたしは思った。『遺伝子の組み合わせの誤りは人間たちをどこまで追い込んでしまふんだろう！』非常識な女優の叫び声を聞いてわたしの上司のアフリカントフだかコリファントフだとかいう男が駆けつけてきた。男はわたしを脇に押しやると、言った。「おまえ、退職届を書くんだ。この

女はとても力のある方なんだ。国民的女優のエンポリワだよ。おれだってこの女は悪い。それに、ご主人は、とても高名なお人なんだ。おれにはアパートの入居順が回つてきてるんだ。おまえが依願退職願いを書くなら、ポリシヨイ劇場の仕事の世話をしてもいいんだ」ほら、またこれだ、やつら人間どもときたら。頭には粘土製の桂冠をひつかぶっているんだ！ わたしは退職届を書いて、別れを告げるとそのまま外に出た。もう元となつたわたしの上司が後ろから怒鳴つた。「ポリシヨイ劇場ではナクリヤーキンに頼むんだ。おれが電話をかけておく。おまえを助けてくれるはずだ」「ありがとう！」わたしは振り返つた。ビュッフエに通りがかった時、わたしはチーズの乗った黒パンと、赤いりんご一切れとコーラをコップ一杯買い求めると、憂鬱な気分でこの簡単な昼食を済ませ、通りに出た。孤独のエネルギーがわたしを満たした。それはまたプチブリ人の人生の最大の喜び、つまり、一時的な生物学上の種族を追放することについてのあれこれの自由な思索を思い出させた。その数週間後には、わたしは既に新しい雇用者のもとで働き始めていた。そしてロシアの文化的空間の聖地とでもいえる場所に仕事を見出したことにわたしは非常に満足していた。もちろん、それは異質の世界だった。が、わたしはそれを心静かに、内心の葛藤なしに受け容れたのである。ポリシヨイ劇場をわたしは国立図書館と同一視していた。ここであら、きつと人間の中でもっとも優れた人々に会える、わたしが図書館の書庫から請求する書物の作者たちと同じぐらい優れた人々に会えるという幻想をわたしは懐いた。正直なところ、わたしはすこし迷っていた。かれらの種族の中の選良とも言える人々と知り合う意味はあるのだろうか？ かれらと直接のコンタクトを持つべきなのか？ それとも、かれらを外側から観察す

るほうが好ましいのだろうか？ わたしはポリシヨイ劇場の中でもう一人のエンテリホーワと会うということは考えたくもなかった。本の中では無教養な存在との会話はあり得ず、思想家や知識人たちとの語らいがあるだけだったから。そこでわたしは薄笑いを浮かべた。わたしは実にいろいろな作者の本を読んでいる。先だってもヴィクトル・マロフェーエフの本をたまたま見つけた。これは、かれらの生物学上の種すべてに対する宣告だ。人間たちの醜悪さの賛美だ！ その時わたしはこの作者と同じ時代に居合わせたのを恥じたくらいだ。ところが、かれらはこうした現象に落ち着き払って対処している！ もうたくさんだ。かれらはすでにわたしを充分納得させたのだ。かれらの種では知性が低ければ低いほど人気は高くなると。これがかれらの時代の顕著な特性なのだ。だが、今のわたしは新しい仕事について考えることの方が多かった。自分の主要な問題に最適な答えを出すべく、わたしは実験を続けたいと思った。さて、舞台係などには難くなれた。ポリシヨイ劇場では舞台係がおおいに不足していたのだ。誰が喜んで月七十ドルで働こうなんてするだろう。そんなはした金のためにくそ重い舞台道具を引きずりたいだろうか？ 朝も晩も！ その頃には、ルーブリの価値は最も低くなっていた。だから、ロシアの首都では、いや、どうやら国中どこにいても、かれらはドルでのみ計算をした。実験は続けられた。ワレンチン・セローフ美術館の清掃夫とポリシヨイ劇場の舞台係としてわたしは一日中仕事に追われていた。公演中わたしは、たいてい三階の劇場労働者用の棧敷に座っていた。ここにはめったに人が来なかった。そこからはバトンにかかったごわごわとした道具類しか見えなかった。そう、わたしは舞台を観ているのがいやだったのだ。わたしの耳元には嵐のような拍手と「アンコール」

とか「ブラボー」という甲高い叫び声しか届いて来なかった。わたしが唯一しばしば眺めやったのは鐘楼だった。そこにはいろんな大きさの鐘が特別なブリッジでつなぎ止められて、正面舞台の後方に掛かっていた。一番大きな鐘は五トンほどもあったろうか。わたしはそれを眺めながら、ある晴れた日、この鐘の力を借りて、観客たちやモスクワっ子たちに、いや、世界中の人々に向かって、新しい時代が、プチブリ人の時代がやって来たことを告げることを想像していたのだ！ ホモ・コスミカスが交代にやって来たのだ！ 心の中の喜びはどれほど大きいことだろう……。さて、どういうわけか、わたしのところに同僚の一人がやって来た。髪をきちんと分けた、体格のいい男だった。その男はよくつなぎの作業服にまだらの飾り布をつけて歩きまわっていた。男の名前をわたしは知らなかった。「おまえ、なんだっていつも棧敷でぶらぶらしてるんだ？ どうしてちっとも舞台を見ないんだ？ おまえ、何考えてるんだ？」わたしは話を始めたくなかった。わたしは男の方を見て、にっこり笑うと、口の中で何やらわけのわからないことをもぐもぐ言っていた。男が再び言った。「夜番がないなんて運のいいやつだなあ。一晚中根を詰めて働かなきゃならないこともあるんだぞ。重いものなんのって！ おまえ、知ってるか、おれたちの仕事の中で一番軽いものは何かって？」「いいえ」わたしは言った。「給料だよ、給料！ ハッハッハ！ どうだ、わかっただろう？」「はあ！」わたしはほとんどささやくように言った。が、頭の中ではこう呟つぶやいていた。「なんだってこんなやつと話をしなくちゃならないんだ？」「おい、ちよっと聞くんか。おれたち、あしたはペアを組むんだよな。金儲けをしたくないか？」「そうですねえ、別に」「依頼人ライアントは金持ちで、たんまりと払ってくれるはずだ。酒瓶を投げってくれるだけだなんて思っちゃい

けない。ちゃんとした金包みを解^{ほど}いてくれるぜ。どうだ？ ハッハ！ 一人頭^{あた}十五ドルにはな
ると思うぜ」プチブリ人のステータスへの確固とした信念がわたしを微笑^{ほほえ}ませ、こう言わせた。
「いいでしょう、手伝うことにしましょう。ですが、わたしにはお金は必要ありません」「なんだ
って、いらないうて？」「一人住まいですから、十分に足りてます」「月に七十ドルでか？ おい、
おまえ、病気か？ そんなはした金でどうして足りるんだ？ ハッハッハ！ まあいい、それで
結構。つまるところ、手伝ってくれるんだな？」おそらく、心の中では思っていたにちがいない。
『おれは、今うすのろと話してる、それでも、金は自分だけのものになるんだ！』と。「はあ」「明
日はユーリイ・グリゴリエフの出る『白鳥の湖』の初日だ。かれの友人、それとも、スポンサ
ーと言った方がいいかな、まあ、その方が二つ白鳥を運びこんでくる。ハッハッハ、といっても、
もちろん、本物じゃない！ 白鳥の形に造った針金の骨組みの上に菊だとかアスターとかバラの
花を埋め込んだものだ。花籠とか花束なんてもんは毎日のように劇場に持ち込まれてくる。だが、
一メートル半もある白鳥、しかもその上に二千本もの花を埋め込んだものなんて、そんなプレ
ゼントには、もう二十年もこの仕事をしてるが、まだお目にかかったことがないぜ！ そいつをト
ラック『ガゼル』の上に乗せて運んで来るんだ。上の人とはもう話がついている。賄賂^{たくり}なしには
管理者と掛け合うことはできないんだ。内職で稼ぐのが嫌いなやつなんているか？ ハッハッ
ハ！ 一緒に『ガゼル』から荷を降ろして、昇降口を通して、花の白鳥を舞台裏に運ぶんだ。そ
して劇が終わる頃に舞台のエプロンステージにそれを運び込む。これがおれたちの内職の全部だ。
そして観客席といえば、拍手の嵐！ 偉大なるバレエのファイナーレは、巨大な花の白鳥！ す

てきたぜ！ こいつはいい！ グリゴリエフはもう七年もポリシヨイ劇場に足を踏み入れてい
ないんだ。ワシーリコフの陰謀が集団でモスクワ中にひろがって、偉大なる巨匠にひどい怪我を
負わせたんだ。だから明日の事件はだな、赤毛、ものすごいことなんだ！ あの人^たは、類まれな
巨匠なんだ！ 踊りの振付けは世界一さ！ サッカーならペレ、ボクシングならルイス、宗教界
なら総主教、チェスならカスパロフ、そして、バレエ界ならユーリイ・グリゴリエフという
わけさ。おい聞いているのか？」「聞いてますとも！」わたしは言った。「じゃ、グリゴリエフの
榮譽のために一働きしてくれるんだな」「もうやると言ったじゃありませんか」わたしはぞんざい
に言った。が、ひそかににんまりとした。『報酬のことは忘れきってる。もう一言も言わないぞ。
まったく、こいつらはいつもこうなんだから。まあ、驚きはしないがな！』次の日の夕方五時近
く、舞台の仕事の始まる三十分前にわたしは劇場にやって来た。すると昨日の髪をきちんと分け
た同僚がわたしの方にすっ飛んできて大声で喚^{わめ}く。「てめえ、おれをしくじらせたのか？ 昨日
ちゃんと約束したのに、こんなに遅れやがって。お客^{クライアント}さんがお待ちだ。いったいどこをほっつい
てたんだ？」「何時に来いと、はつきりおっしゃいませでしたか」わたしは答える。「何言っ
てやるんだ。新入りでもあるまいに。今日ポリシヨイ劇場じゃすごい催しものがあるんだってこ
とぐらいわかってるだろ。切符は完売。劇場の前はもう人で一杯だ」「わたしが何を知っていなき
やならないんだって？」「さもない顔立ちでいまにも喧嘩を吹っかけてきそうな男の顔を見ながら、
わたしは忍び笑いを浮かべた。『こいつの顔には生まれたばかりの赤ん坊の特徴が透けて見える。
知性が未発達であることの最初の兆候だ。こいつと何を話さなくちゃならないんだ？ だいたい

わたしは人間たちとはあまり話をしないんだ。それにこいつの顔はホモ・サピエンスに似てはいるが、実際のところ、あるかないかの知性はネアンデルタール人と縁戚関係にあるといってもよさそうだ』ところで、わたしの感情は服従という境界をはみ出したことがない。わたしは常に平静で、いくぶん冷淡な態度を保っていた。「さあ、急ぐんだ」男はせかした。昇降口を通ってわたしは中庭の『ガゼル』トラックの方に降りていった。わたしたちは白鳥をトラックから降ろすと、入り口の傾斜路^{ランプ}の上を引きずって行った。初日のプレゼントは四十分後にはもう楽屋に立ち並んでいた。わたしはそれに何の注意も払わなかった。ところで、外界の様々な出来事への冷淡さとか、職場の同僚に対する感情とか、自分のまわりのすべてのものへの軽蔑とかいったものを、わたしは一切表に現さなかった。それはわたしが何かを恐れていたとかいうのではなく、単にホモ・コスミカスの繊細さがわたしの一連の行動を指し示したのである。だが、舞台係やダンサーたちは感嘆のあまりため息をついた。かれらは花のこしらえ物を傑作だと思ったようなのだ！わたしは舞台装置の準備にかかっていた。第一場の『ワルツ』の準備にはかなりの仕事があった。まず、王様とお后様^{Queen}のための玉座、従者の座る肘掛椅子を持って来て、机と大杯^{おわさかずき}と燭台を立てる。そのあと、背景幕をおろし、ベニヤ板を張って布地で仕上げた人工の洞窟を据えなくてはならなかった。時計が七時を打ち、いよいよ『白鳥の湖』が始まった。第一場の上演中、わたしは自由だった。孤独のための避難所を求めて、わたしはまた三階の棧敷に上がった。そして仰向けに横になると、人間の中の天才、チャイコフスキイの音楽を聞き始めた。この偉大なる音楽を聴いて、わたしは思った。この音楽はバレエのために書かれたものではない、プチブリ人へ、人間

たちの終焉のために書かれたものだ。この音楽は別れの讃歌なのだ。まさしくこの音色のもとに、ホモ・サピエンスたちはこの現実世界から永遠に消え去っていくべきなのだ。だが、その時まったく別の考えがわたしを混乱に陥れた。『ひょっとしたら、かれらは未来永劫、意識から消え去るべきではないのか？ ただすぽんとわたしの頭からいなくなる。そうして、飛び去ってしまうんだ！ やつらは、いない！ もしわたしがかれらを思い出そうとしなければ、かれらがわたしの頭の中に入ってくることはないんだ。かれらは単純に存在することをやめるんだ。虫や蝶、そしてナマコにとつては、人間なんか存在しないじゃないか。だったらどうしてプチブリ人に人間たちが存在する必要があるんだ？ わたしにはかれらが生きていようが死んでいようが関係ないんだ。重要なのはかれらがわたしの意識の中にいないということだ。わたしがかれらの存在を見たり、聞いたり、感じたりしないということが重要なんだ！』その後、もう一つの、非常に単純な考えがわたしをにんまりとさせた。『もしも聴覚や視覚を失くし、啞^{おし}になったとしたら？ 宇宙全体がわたしの意識の中にのみ存在することになる。わたしがやつらの種族とのコンタクトを絶てば、やつらはもうそれ以上存在しなくなるんだ。わたしには紫外線もガンマ線も見えないし、顕微鏡なしには放線菌も細菌も胞子も識別することができないじゃないか。それなのに、どうしてわたしがクロマニヨン人たちを見たり、感じたりしなきゃならないんだ？ やつらの改善だの運命だのに頭を悩ます必要がどうしてあるんだ？ われわれは確か同時進行の世界に存在するとはできないのではなかったか？ 自分はハエをどのように変えるべきかなんて考えもしないじゃないか？ いや待て、考えてもいいんじゃないか？ ハエやニンジンやキノコからだって何か

知性的なものが創りだせるかもしれない。ひょっとしたら、人間から創るよりも、もっと知性的なものができるかもしれない。クロマニヨン人を他の生き物から分けているのは遺伝子の中のたった五パーセントだし、豚とは四パーセント、ネズミにいたっては、たったの三パーセントしか違わない。では、どれからプチブリ人を創り上げるべきなのか？ 人間からだということがまだはつきりしていないとすれば、ネズミや豚から創るということも充分可能はずだ。それともホモ・サピエンスとネズミと豚の極上の遺伝子からなるブーケを創るというのはどうだ？ これは熟慮すべきテーマではある。まあ、神のみぞ知るだ！』この時、思いもかけない考えが不意にまたわたしを捕らえた。『近似の生物学上の種族と相容れないというのが、純粹にロシア的な現象だとしたらどうだろう？ たしかロシア語こそが、他を受け入れることができないというかれらの本質の最大の原因ではなかったのか？ ロシア語を今後一切、すべての場所で禁止するというのはどうだ？ 言葉がなかったら、かれらの世界自体がどこかへ行ってしまう、消え去ってしまうことだろう。もしかしたら、祖国というのかなり罪つくりなのではないか？ ロシアとその永遠に続く倫理的な混乱の原因なのではないか？ 待てよ、わたしもまたかれらの同胞じゃないか？ いや、絶対に違う、とんでもない！ だが、言葉は？ ここに何か秘密がありそうだし、もしわたしが、例えば、イタリアなんかに移り住んだとして、イタリア語を全然学ばなかったら、つまり、その土地の人々をまったく理解しようとしなかったら、かれらに親近感とか同族性とかを感じるだろうか？ かれらを知性で容認するのだろうか？ このわたしの仮借なき敵愾心は消えてなくなってしまうのだろうか？』その時わたしは機械のきしる音を聞いた。幕がするすると

下りてきた。第一場の終了だった。わたしは下に駆け下りて行って、肘掛け椅子やら椅子、その他の細々とした小道具類を片付けた。舞台は開けられ、布製の舞台背景も変わった。バトンには他の細々とした小道具類を片付けた。舞台は開けられ、布製の舞台背景も変わった。バトンには書割の白鳥の湖が降りてきた。第二場の『白鳥』が始まった。そこで、わたしはまた舞台裏から自分の機数へと駆け上がって行った。自分のもつとも好むこと、全き瞑想に耽ることを続けるために。おそらく、次のような問いかけがなされることだろう。「ワシーリイ・カラマーノフはかれら人間との密度の高い会話なしにどうして人間界で実験などできるのだろうか？ そのような非社会的な調査研究にどんな意味があるのか？」と。実際のところ、人間の観察にわたしはプチブリ人的に臨んだ。つまり、穏やかに、何の計略も、たくらみも、挑発することもなく臨んだのだ。かれらの生き方や行動のすべてがわたしには興味深いものであったし、と同時にまったくどうでもいいもののものであった。わたしは今まで何も書き留めてこなかったし、自分の作業予定表に従うということもしなかった。写真も撮らなければ、ビデオ類も集めなかった。わたしの認識の焦点はかれら、ホモ・サピエンスの中の私、つまり、ホモ・コスミカスであり、また、すべての人間的なものに対するわたしの反応だった。本能はどのように発達しているのか、どのような遺伝子がどのような形で攻撃性を発揮するのか、人間たちの何が萎縮していて、何が足りないのか、また何が余分なのか。わたしがようやく自分の場所で落ち着いたかと思うと、わたしの方に髪をきちんと分けた例の同僚が上って来た。男は額からありもしない髪の毛を払うようないつものしぐさをしながらやって来た。手にはウォッカ『グジェルカ』の瓶と半分に切ったレモンを持っていた。「ワシーリイ、一杯やろうじゃないか」男の聞き覚えのない、部外者ともいった声か

わたしを憂鬱にさせた。「おまえ、ここへ来てもうかなりになるのに、まだおれたち一緒に飲んだこともないんだぜ。まったく非人間的だ！　おい、やろうじゃないか。今日おまえはおれを手伝ってくれた。ワシーリイ様々だ、どうか一杯やってくれ。そうして舞台がはねたあと、もうあと二本空けようじゃないか。どうだい、ワシーリイ、これが、おれたちの流儀だよな。マンドルイキンを手伝ってやったのに、あいつ自分一人で飲んでやがるって、腹をたてないようにな。それにな、正直に言うがな、マンサラッゼの陰気な絵をみたあとはいつも飲みたくなるんだよな。おまえ、あの画家の絵は大丈夫か？」長ったらしい空疎な会話を避けるために、自分は酒を飲まないということを言わずにおいた。わたしはいままで一度もこの忌むべきものを口にしたことがない。不自然なやり方で自分の頭脳や感情を刺激したくなかったからだ。舞台の画家についても、わたしは何も知らなかったし、まったく何の興味もなかった。アルコール？　こいつはまたどうしてかれらに対しこんな信じられないほどの威力を発揮するのだろうか？　これは人間の愚かしさと弱さの証^{あかし}なのだろうか、それとも、アルコールに対するかれら共通の遺伝的牽引力を示しているのだろうか？　もしもここで遺伝学に問題があるとすれば、問題は今すぐにでも解決できる。ほんのちよつとした遺伝子操作で……。ここで、わたしはこの招かざる客とはやく袂を分かつべきだということを思い出して、わたしはだしぬけにマンドルイキン氏に向かって言った。「申し訳ありません。ひどくトイレに行きたくなくなっちゃって」そうして、男の返事も待たずに、階段を駆け下りて入り口の傾斜路^{ラング}へと向かった。『幕間までトイレの中に隠れることにしよう』わたしは思った。『あの同僚は飲んだくれる。そして、願わくばだ、わたしと一緒にひまつぶしをしような』

なんて考えは忘れてくれ。あの男を怒らせるのは、もちろんのこと、わたしの主義に反する。わたしは照明室のそばを通り過ぎ、舞台装置の後ろにすばやく身を隠し、トイレに下りて行ってトイレのドアを閉めた。劇場のトイレの壁はペンや鉛筆で下卑た落書きや破廉恥な絵が書き散らされており、自然の覇者の所業としてはあまりにも恥ずかしいものだった！　だが、またしても、まったく別の考えが脳裏に浮かんた。わたしは自分をホモ・コスミカスの始祖であると考えている。そこにわたしの真実がある。だが、残念なことにそれは真実の一部に過ぎない。というのもクロマニヨン人の歴史を紐解くと、実際にプチブリ人の特性のかなりの部分を有した人間たちに遭遇するからだ。最も初期のプチブリ人の人物はコペルニクスだ。かれこそが現代の天文学への道を切り開き、宇宙に対する見方を決定的に変えたのである。コペルニクスは地球が世界の中心ではなく、もつとも小さい惑星のうちの一つ、限らない宇宙の中の砂粒のようなものに過ぎないことを証明した最初の人物だ。これと同じく、自分たちが中心的な役割を果たしているという人間たちの思い込みも根柢薄弱なものであると言えよう。まったくの偽物だ！　謬見だ！　詐欺だ！　コペルニクスはまたかれらに惑星上でのかれらの存在が一時的なものであることを示した最初の人物である。だが、宗教がかれらの遺伝子工学の道に立ちふさがり、個々人の知性の限らない可能性を切り開く道を阻んだのだ。自主的に、自分たちを技術的ではなく、生物学的に完成させようとする道を阻んだのだ。今こそ、絶対的な知性の信奉者である、わたくしカラマーノフが、断固としてこの道に踏み出そう。わたしはホモ・サピエンスの生活の『物質主義的な考え』を打ち破り、かれらの遺伝子編成の中の部分的なもの、二義的なものへの集中を断ち切ろうと思う。

人間たちを人間的なもののすべてから切り離し、宇宙にふさわしい新しい存在を提示しなければならぬ。『まあ、なんてきれいな花束なこと、なんと素晴らしい画家なんだ、なんと壮麗な建物だろう、優雅な洋服なこと、いい車だなあ、なんてきれいな女なんだ！』こうした感情は断じてプブリ人のものではない。こうした表現のすべてはごく近い将来、人間的な時代錯誤となるべきものである。ホモ・コスミカスはこれとは全く異なる物質や現象を評価する。『物質的な因果関係のシステムの完璧さと優秀性はどうか。なんという強靱な知性。ホモ・コスミカスは自分の仕事を宇宙空間へ移動することから始め、MR惑星との全体的な思索で終わるのだ。ああAR銀河はなんとまあ魅力的な宇宙景観なんだろう！』この時、仕事の開始を告げるベルがわたしの思索を中断した。そして、わたしはエプロンステージへと急いだ。バレエ『白鳥の湖』は二幕四場からなり、休憩時間が一回はある。第三場の舞台装置は実質的に第一場の繰り返しであり、第四場は、第二場の繰り返しだった。わたしはもう一度玉座を運び込んだ。そして二つ目の玉座も。誰かが机と肘掛椅子を据え付け、あともう一人が、小さな洞窟を据えた。布製の舞台背景が降りてきた。舞台はできあがった。第二幕の開始を待って、その後またトイレに身を隠すために、わたしは鐘楼のそばにとどまった。左側の二つ目のカーテンの後ろに花の白鳥が立っていた。ひよっとしたら、これらは実際に見事なものであったのかもしれないし、人間たちがそれを見て、有頂天になるということも、まんざらないわけではなかった。だが、わたしはそれについては考えなかった。わたしはマンドレイキンの姿を見失った。が、またあの男に出くわして、アルコールについての無益な会話が始まるのを避けるために、わたしは急いで下に降りていった。すこしで

も早く幕が開いて、第二幕が始まってくれるように！ 知性との限らない戯れのために、自分の自由時間のすべてをたった一人で過ごすという状況をわたしは少しも厭いはしなかった。それはわたしを夢中にさせたのだ！ わたしはそれだけのために存在していた！ 人間たちはわたしが幻想の世界に生きていると思ったかもしれない。だが、それは全くそうではなかった。わたしは、運命により宇宙空間を住み慣らす機会を贈られた未来の世代について常に考えていた。プブリ人の冷静な賢明さがわたしの瞑想の友であった。かれらにはかれらの衰えきった知恵とホモ・コスミカスの燃えるような知性との計り知れない違いがわからないのだ。わたしが知識を得るやり方は、脱脂されたトマトスープを匙ですくうようなちやちなものではない。クロマニヨン人が発見した金を両手でわしづかみにするように食欲に知識を得るのだ。そこに大きな違いが……。三度めのベルが鳴った。わたしはいままで暖めてきた場所にすばやく身を隠した。そうして、しっかりとトイレに腰を落着けると、再び思索に耽り始めた。死すべき普通の者には意識の境界を越えて、物を観ることができない。今回、わたしは学者らが天才の特性をかれらの体内における尿酸の過剰と見なしているのはなぜなのかについて考えていた。『人間たちの欠陥だらけの逐次性』その時わたしの頭にふとこんな考えが浮かんだ。『トイレの中で尿酸に関する思索に耽っている。やつらは笑うだろうな！ それでも、わたしは、考え続けるぞ！』けれども、わたしは突然に浮かんだこの思い付きになんら本質的な意味を見出さなかった。知性の流れは次の段階へと移っていった。『天才たちを他から分けているのは頭脳の容量でも、特別な遺伝子構成でも、極秘の物質でもなく、極く普通の尿酸——OC-HN-CO-C-C-N-HN-CO-NH-C——なのである。しかし、

もし尿酸がことほどさように人間たちに作用するものならば、胎児発育期に体内での尿酸の増加を促すような化学式を発見するというのは悪くない。とすれば、世界中がコペルニクスやニュートン、チャイコフスキイ、ショーペンハウワーといった天才たちで一杯になる……：しかしながら、こうした天才たちはどのように生活していくのだろうか？ アインシュタインは最上の座を占めているのだが、その膝元に座れるのはいったい誰なのだろうか？ 誰がこの人間の知性の最上位を占めるものの世話をするのだろうか？ それに付随する複雑な下部構造抜きでは人間の知性は活動できないのだ。われわれ、プチブリ人にはそうした下部構造は必要ない。われわれは一人一人独立した存在だから！ かれらはどうか？ かれらは転轍手や料理人、錠前屋、設計者、メイドなしではやっていけないのだ！ 天才は花を咲かせず、その実は秋になっても稔らぬままに終わる。まったくのところ天才の考えの大本がわかるのは才能ある少数の人々だけであり、才能ある人々はそれを能力のある者たちに伝える。能力のある者たちは才能のある者たちよりも数は多い。能力のある者たちは伝えられた事を、相応の力を持ったものに解説してやる。相応の力を持った者たちの数は能力ある者たちの数よりも多い。ここまでで伝達の経路は閉じる。相応の力を持った者たちに伝わるのは天才の考えのほんの一パーセントだけだ。能力のある者たちに伝わるのは、十から十五パーセントで、才能のある者たちには、四十パーセント。残るすべての天才の資産は失われてしまうのだ！ 書庫の棚の上で埃にまみれたり、大判の本の中でカビに覆われたり、文書保管室で悪臭を放つようになるのだ！ それに、わたしはもつと恐ろしい統計を知っている。もし仮に人間の知性を何か特別の単位で測ることにすると、ニュートンとかアインシュタインは、

おそらく、百四十単位を有することになり、ドストエフスキイとかヘーゲルは百三十、プランク、ベルナツキイ、チャイコフスキイは百十五、チジェフスキイとかファラデーは百十、ワレンチン・セローフとかロバチエフスキイは百。マンスローフとかガッベは九十、ハムイキンとかトリヨスは八十で、イワーノフとかペトロローフとかシードロフは七十になる。ところがどうだ、プチブリ人はなんと、千単位を有するのだ！ 五千単位かもしれない！ これほど気違いじみた違いがあるのだ！ それで、どのような未来が人間たちを待っているというのか？ いや人間には未来なんかないと言ってもいい！ それに、ホモ・サピエンスはまた、その知性の容量によって個別のグループに分けることができる。一つ目のグループは七十単位とそれ以上の者たち、つまりイワーノフ、ペトロローフ、シードロフたちからニュートンまでだ。二つ目は、イワーノフ、ペトロローフ、シードロフたちから先天性精薄者たちまでだ。二つのグループの割合は五十対五十。つまり、人間たちの五十パーセントが知性の容量が七十単位以下の存在であるということになる。これはなんと三十億人以上のクロマニヨン人に相当する！ この数字を百パーセントに換算すると、それは三つの部分に分けることができる。ゼロから二十五単位までが三十パーセント。二十五から五十単位までが三十パーセント。そして五十から七十単位までが四十パーセントとなる。一つ目のグループは使用言語量が百語に限られている者たちで、その数は、およそ五億人ほどである。全部で百語だ！ それ以上は一言だってないんだ！ これが宇宙の主人となりうる知性だと言うのか？ 二つ目のグループは一千語を有する者たちで、その数はやはり五億人ほどである。このグループから出てくるのはわたしと同じような職業の人間たちだけである。清掃人、荷役労働者、

汽車の車掌、刑務所の看守、下級の警官といったところだ。三つ目のグループは、使用言語がおよそ三千語ぐらいを越える者たちだ。これらの人間たちは店員、運転手、ラジオやテレビのアナウンサー、建築現場や工場の労働者、また、ポップ音楽のショーマンになれる。だが、かれらの中に「自然の覇者」のタイトルを要求することのできるものがあるだろうか？ プチブリ人のプログラム、つまり、地球の知性の宇宙空間への移住という観点から見て、かれらの矮小な知性を有効に使うということなどできるのだろうか？ が、それではこれらの無価値な愚人どもをいつたいどうすればいいのか？』その時また、脳裏にまたこんな考えが浮かんだ。人間たちの使うパスポートとは、まったくのところ古い様式の賛美であり、かれらの意識の無邪気さを表しているんじゃないか。自分たちで問題を多くしているのだ。二十一世紀が始まるうとしている今になっても、こんな原始的な書類に頼っている！ 名前、父称、名字、生年月日、居住登録！ やつらすべてを新しいロシアのパスポートで同一化し、幸福にしてやるなんて、なんと恥ずべき、愚かしいやり方なんだ。今でもまだクロマニヨン人たちは自分たち一人一人を詳細に区別する必要があるのだろうか？ なんていう愚かしさだ！ レフ・トルストイやツイオルコフスキイのパスポート情報に、知識人やプチブリ人が興味を示すともいうのか？ わたしは反対意見を予測する。パスポートの情報は、知性の糧ではさらさらない！ それらは特別のサービスのための餌なのだ！ そうして、そのサービスは人間の完全な破綻を示すものである。有名な人物のパスポートについて問うとき、わたしは以下のように言い換えることだろう。『あなたの遺伝子の情報を見せてくださいませんか。あなたがどなたであるか、たちどころに言い当ててみせましょう！』パス

ポートには遺伝子こそを記入すべきなのだ。遺伝子とは決して模倣することのできない指標であり、指紋の押捺^{おなつ}なんかよりよほど正確なのだ！ 例を挙げてみよう。ミトコンドリアのスーパーオキシドデヒムスターゼ (SOD2)、グルタチオンペルオキシダーゼ (GPXI)、パラオキシナーゼ (PONI) またはApoe、リポ蛋白質リパーゼ (LPL)、エンドセリン (EDNI)、アンジオテンシノーゲン (AGT) 等々。プチブリ人のパスポートはこのように表示されるべきなのである。パスポートを見れば、ホモ・コスミカスについてのすべてがわかる。どのようなタイプに属するか、特性、興味、可能性、奇矯^{ききょう}な行動をとる傾向があるかどうか。ここで大切なのは、誰かほかの者と取り違えることは絶対にならないということだ。大学入学、就職、議論への参加の際に、自分の遺伝子情報を提出すれば、希望する場所に受け入れられるかどうかはすぐわかる。だからこそパスポートは内務省発行のものではなく、遺伝子情報を載せたものでなくてはならないのだ。アルコールの異常摂取がある種の遺伝子型を持つ者にとっては情状酌量の事実であり、その逆ではないということがかれらにはどうしてもわからないのだ！ かれらが遺伝子的に平均の値しか持たないとしたら、たとえ社会的、法的な標準が平均以上であったとしても、アルコールの影響下で自分を制することはできない。必要不可欠の応力を欠いていたために回転が減少し、部品が壊れてしまったからという理由で、工作機械を罰するわけにはいかないのだ！ モーターが動かなくなつたために、肝心なところで停まってしまったからといって、自動車を罵^{のの}るわけにはいかない。それと同じく強姦者を刑務所で矯正することもできない。さらなる法的追求がなされないよう、遺伝子工学が母親の胎内で強姦者を助けてやらなくてはならないのだ。人間たちに法に服従する

のではなく、遺伝子の常なる伴奏に耳を傾けるように教えなくてはならない。かれらにはこんな簡単なことがわからないのだ。かれらはこれについて思索しようとさえしない！ 文明と自然との衝突は日々激化し、次第に力を蓄え、今後の展望をはっきりと描き出している。今後更に人類が地球上に留まるのは物質の発展と矛盾するのだと。それ以上でもそれ以下でもない！ 財力と知力をこうした問題解決に投ずるのだ。そうすれば、検察庁や内務省や裁判所に勤める者たち、それに弁護士といった者たちの多数は、その無益性によって、通りに放り出されることだろう！ もし人間を、法を犯すこともなく、また法を犯したいという要求すらない持たないよう創り上げるなら、どうして警察なんかが必要になるだろう？ しかしながら、自然界の突然変異の結果はかれをそのようには創らなかつた。かれを変えなくてはならない！ これが実現した暁には、何人の懲罰機関の役人たちが罷免されることか！ 国家の金庫にどれほどの財源が蓄えられることか！ かれらが自分たちの種の完成にむけて使える物質的な資源はどれほどのものになるだろう！ だが、かれらはこのための充分な知性を欠いている。六十五億の人間たちの中でこのプログラムに加わることができるのは五万人そこそこしかないのだ！ これは全人類の〇・〇〇一パーセントにも満たない。この少なさはどうだ！ いや、かまうもんか！ かれらはわたしの参与なしでは、この問題を解決することなどできっこないのだ！ 医療関係者についてはどうだろう。プチブリ人に医者はいらない。が、移行期間には、外科医、産科医、遺伝子学者の内科医は残してもいい……。この時、作業の開始を告げるベルが鳴り響いた。わたしはすぐさま自分自身との会話を中断し、^{ひとけ}人気のないトイレから飛び出すと、舞台の方に駆けて行つた。第三場が終了し、

舞台装置を取り替えなくてはならなかつた。劇は第四場で終わりだつた。舞台の袖にはバレエや劇場関係の上層部の者らが詰めかけていた。絹やビロードの装飾を凝らした衣装に身を包みダイアモンドを全身にちりばめた女たちに、タキシードに身を固め蝶ネクタイをつけて目のまわりに墨を塗った尊大な様子の男たちだ。舞台の袖の向こうにはいくらか様子が劣る連中が集まっていた。その中にわたしの知っているものは一人もいなかった。だが、すぐにかれらのうらやましそうな眼差しにはっと気がついた。かれらは舞台の袖に立っている人々を神経質そうにちらちらと見やっていた。誰かが社会的な地位の高い知人に懇懃^{いんぎん}にあいさつしながら手を挙げていた。ある者は厚地のカーテンの向こうに歩を進めながら、頭を下げたり投げキスを送ったりしていた。だが、ほとんどみんなが花の白鳥のほうに驚きの目を向けていたのである。菊の花の美しさとみずみずしさ、それを包んでいる神秘的な白い輝きは誰からも注目された。嫉妬深い眼差しの多くは羨望でぎらぎらと輝いていた。舞台の袖に集まったものたちは、主役のグリゴリエフその人や、チャイコフスキの音楽や、ダンスの舞台芸術よりむしろ風変わりなプレゼントにひそむ策略に興味を持ったように見えた。劇の最後の第四場は最も短くて、二十五分ほどで終わる。劇場作業員たちは舞台裏から離れることを禁じられていた。だから、わたしも作業班の同僚も巨大な施設の作業場である機械装置や壁などのまわりにひしめきあっていた。そのわたしたちを取り巻いている花の籠や花束にはカードがピンで留めてあつた。『ツイスカリッゼへ、ネリー・ドマンスカヤより』、『ヴォロチコワへ、マリーカ・ロールアより』、『ウヴァーロフへ、ジファ・バシーロワより』、『メドベージェフへ、ニーナ・マルチャーノワより』、『素晴らしきベスメルトノーワへ、ミ

ハイル・メリヤーンより』等々。ただ花の白鳥にだけはカードがついていなかった。こうした状況がこの策略に独特の色あいを与えていた。ポリシヨイ劇場といえど、これほどの豪華なプレゼントが届いたことはまだなかった。花籠や花束を持ってきた者たちは、匿名のライバルの信じがたい気前よさの前にたじたとなっていた。わたしのそばにいた婦人が、誰かと話していた。「この手のタイプは知ってるわ。派手なプレゼントでもって劇場の一团の中に愛人でも見つけようって魂胆にちがいないわ」婦人の近くにいた男が異論を唱えた。「グリゴリーエフは黒海の海底パイプラインのプロジェクトをあるビジネスマンにさせるよう政府に圧力をかけたんだ。このプレゼントはだな、その感謝の印しるしというわけさ」五人の芸術家仲間、互いに互いの話の腰を折りながら、いい加減なうわさ話に花を咲かせていた。「こいつは、やつが自分で注文したんだ！ ハッハッハ！ おれは騙だまされないぞ！」「この白鳥は、ゲイのお仲間がお贈りくださったのさ」「ゲイだつて？ やつには愛人が五万といるんだぞ！」「どうやら、ドウシコーフからのようだ。いや正しく言えば、かれからじゃなくて、そのスポンサーからだ。そのスポンサーが市長の指図通りバレエの巨匠にプレゼントを贈ったというわけさ」「これは白鳥の花束じゃない、白鳥の花輪だ！ ああ、目を見てみる、あんなに赤いなんてことがあるか？ 白鳥の目が赤いなんてことはないはずだ」果ては、もう聞くに堪えないことまで言い出す始末。「この花は新鮮じゃないぞ。どうも、墓場から持ってきたみたいだ。こうしたトリックは先刻承知さ」わたしは劇場の貴族の代表者どもと目を合わせないように、天井に目をやった。人間たちの羨望というでき損ないの遺伝子がわたしの目の前で花を咲かせていた。人間たちのうち誰一人として劇について、巨匠の仕事について語る

者はいなかった。わたしは芸術については何も理解できなかったが、人間どもの欠陥の遺伝子モザイクは充分に理解することができた。それこそがわたしが興味を持ったことだった。やつらはお互いに食い合い、白鳥の花を全部食いちぎり、バレエの作者からはその栄冠をもぎ取り、果ては作者自身を食ってしまったおうとまでしていた。おそらく、羨望からそうする者もいれば、喜びを抑えきれずにそうする者もいたことだろう。わたしにかれらの世界を、かれらの文化を、またかれらの遺伝子構成を取り入れることなどできただろうか？ かれらはそんなふうだから、ほんの束の間しか生きられないのでは？ 不幸せな者たち！ 自然はひとりでにかれらから離れていく。自然はもうかれらが必要としていない。完全に枯渴した資源はもう要求されることはないのだ！ 実際のところ、六十年や七十年にいったいどんな意味があるというのか？ 指をはじく一瞬にすぎない！ わたしは思考を中断しようとしてとめた。そうして劇の終了を辛抱強く待っていた。ついに、うなるような拍手の音と喚声の嵐、靴を踏み鳴らす音、棧敷席からの口笛などが響き渡った！ それはしばらくの間続いた。その歓喜の様は言い表しようのないものだった！ 正直に言おう。その時わたしの脳裏に浮かんでは、かれらが自分たちの遺伝子の改良の知らせに狂喜しているという考えだった。だが、わたしはすぐさまその考えを改め、自分の仕事を待った。わたしのなすべきことは舞台装置を撤去することと、舞台に花の白鳥や花籠、花束を運び入れることであつた。ところが、幕が下りるや否や、誰だか肥ったマネージャーが駆け込んで来て、怒鳴りだした。「白鳥を下げるんだ、車寄せへやれ！ 昇降口へ！ そいつを舞台から下げて、わたしの目の届かないところへやるんだ。誰にも見えないようにな！ 早くしろ！ カラマーノフ、マン

ドルイキン、わかったか？ すぐにだ！」舞台の袖に集まっていた劇場の貴族たちとその向こうにいる輩は、驚いて口をあぐり開けた。なんだって？ どうなってるんだ？ 誰かが叫んだ。「リストーフキンさん、いったいどうなさったんです？ こんな素晴らしい白鳥を下げようなんて！ 舞台に出してやればいいじゃないですか。グリゴリエフへの贈り物なんですよ！」こう言う者もいた。「バレエは一人の俳優だけの劇じゃないんだ！ どうして、ご立派な白鳥をもらうやつがいたり、花束をもらうやつがいたり、握りこぶしの中から親指を見せて嘲笑されるやつがいたりしなくちゃならないんだ？」「いったいこのどなたがこんな花の白鳥なんか贈ったのか知りたいもんだね。われわれをちよいと笑ってやろうとでもいうのかね？ 独占資本家が芸術家たちを侮辱しているんだ！ こんな白鳥なんかぶっ壊せ！」その時、リストーフキン氏の命令口調の声が聞こえてきた。「早くしろ！ 管理部の命令だ。白鳥を昇降口へ。バレエの巨匠に白鳥が要するというのなら、さつさとやつの家に持っていき！ ボリシヨイ劇場の舞台は花屋のコンクールじゃないんだ！ さつさとやれ。幕をまた上げなくちゃならんだ！」グリゴリエフはこの屈辱的な騒ぎから目をそらそうと、背を向けた。白鳥を撤去しろと言う者がいるかと思えば、そこに置いておけと言う者もいる！ すると灰色の髪の毛を短く刈り込んでタキシードに身を包んだ中年の紳士がリストーフキン氏に駆け寄り、氏のポケットにドルの札束を文字通りねじ込み始めた。だが、劇場のマネージャーは当惑しきった様子で、両手で頭を抱えた。「ダメだ、ダメだと言ったらダメだ」マネージャーはガンとして言った。「管理部が禁止したんだ。困った、おれは仕事をやめさせられるかもしれんだ！」「お願いだ。白鳥を舞台に出してくれ。そう、五分間でいい。

たったの五分間でいいんだ！ じゃあいい。三分でどうだ！ その後、幕を引くなりなんなり、好きなようにすればいい」見知らぬ客人は拝むような声で言い張った。「ダ、ダ、ダメだと言ったらダメだ」困惑した劇場マネージャーは繰り返した。「おい、カラマーノフ、マンドルイキン、白鳥を昇降口へ持って行くんだ。お願いだ。いや、命令だ！ ああ、神様！」「五千ドル出します。舞台上の電光掲示板に、『ユーリイ・グリゴリエフのボリシヨイ劇場への帰還を祝して！』という文面がすぐさま現れるように手配してください。どうです、やってくださいますか？ 五千ドルで。それに、白鳥を舞台に上げてくださるなら、一万ドル差し上げます！ あんた、なんて頑固なんだ。わたしは気が狂いそうだ！ 現金を出すって言うてるんですよ！ グリゴリエフは舞台の上です。政治とは何の関係もないんです！ 偉大なるバレエの巨匠に敬意を表したいというだけなんだ！ あんたは気が違ってしているわけじゃないんだろ！ ロシアはいったいどうなってるんだ！」「ダメ、ダメ、ダメだ！ 支配人に聞いてくれ！ こういう問題は上の人が決めることなんだ！」リストーフキンは金切り声を上げた。そして、長らくつつ立ったままのプレゼントに駆け寄ると、それを強く抱きしめ、必死の声で叫んだ。「カラマーノフ、マンドルイキン、手伝うんだ！ いいか！ 昇降口まで押していこう！」そして、一二、三分のちに、突如宣言した。「もういい！ 舞台に出る時間だ。おれだって劇の関係者なんだ！」舞台の袖に立っていた群衆の一部が花の白鳥にわっと駆け寄り、菊だのバラだのを筆^{むし}り取り始めた。だが、人々が仲間同士であったのはほんの一時のことで、落胆した群衆は舞台裏に筆^{むし}り取った花を投げ捨てた。わたしがマンドルイキンと一緒に白鳥を昇降口まで引きずりこんだ時には細い金属棒でできた空^{から}の骨組しか残っ

ていなかった。なんとも無残な光景だった！花を筆り取られた白鳥はみすばらしく見えた。それはかれらの文明の捨てられた残骸に似ていた。もう誰も白鳥に注意を向けるものはいなかった。幕が開いた。バレエの一团と劇場管理者たちはみなお辞儀をするために舞台に出ていった。拍手喝采は十五分ぐらい続いた。花籠や花束が主役たちの足元に置かれていた。かれらは何度もお辞儀をし、微笑んでいた！今日の仕事はこうして終わった。わたしは今晚こそ、この文化の最高の施設を永久に後にしなくてはならないと思った。ポリシヨイ劇場におけるプチブリ人創造の素材探求の実験は完全な失敗に終わった。けれども、わたしは今晚モスクワのど真ん中で起こったこの出来事に落胆などしていなかった。わたしは幻想はまったく懐いていなかったし、この極めて人間的なフィナーレを予想してもいた。それにこうしたクロマニヨン人的な行動はごくありふれたものであり、わたしはもう慣れっこになっていた。孤独に深々とひたることだけを望みながら、わたしは黙って劇場をあとにし、スタロヴァガニコフスキ横丁の自分のあばら家へのろのろと歩いて行った。空は雲もなく静かに晴れ渡っていた。モスクワの夕べは終わろうとしているその日の匂いを集め、街灯の火はまるでわたしのみすばらしい住処^{すみか}への道を照らし出しているようだった。新しい考えがわたしを元気づけた。『人間たちが星の瞬く夜空を眺める時、かれらは無限の知性の広がり^{ひろがり}に恐ろしさを感じる。だが、わたしは無数のきらめく星を見ては、意識の中に大いなる調和を感じる。この広大な宇宙がわたしの頭脳に整然と位置しているんだ……』本を読めば読むほどに、自分を取り巻く世界と関わりたいという気持ちが薄れていく。オドエフスキイ、ウモフ、ソロヴィヨフ、ベルジャエフ、フロレンスキイ、かれらがみなわたしの知性を

驚異的な方法で広げていった。が、わたしが注目したのはロシアのプチブリ人の先人だけではなかった。海外の作者たちにも同様に、いや、それ以上にわたしの想像力を傾注したのであった。寺崎、ロビンス、アンジェリ、ボーン等。わたしはこれらの作者の本も他の作者の本も、常に変わらぬ勤勉さでむさぼり読んだ。わたしはセローフ美術館で清掃人として働き続けながら、自由時間にはきまって図書館の閲覧室にすわって遺伝学や哲学について学んだ。ある日世界中に向かって『始まった！』と声高く宣言できるように。わたしはその日をどんなに待っていたことか！その日が少しでも早く来るように！わたしにはワシーリイ・カラマーノフの運命の空間が二つの世紀にまたがっていると思われた。わたしこそが地上に住む者たち——歴史の幕を引き、新しい世紀、限らない知性を持つ者たちの世紀を開くよう運命づけられているのだと思われた。わたしはまた最近とみに自分の納屋に敬虔な気分^{けいけん}で臨むようになっていた。それはあたかも、キリスト教徒が教会に、ユダヤ教徒がシナゴグに、イスラム教徒が回教寺院に対するような敬虔な気分であった。この貧しい住処がわたしには寺院であり、そこでわたしは世界の再建について夜ごとと考え続けていた。自分の周辺だけではなく全宇宙の再建を考えていたのだ。こうした夜ごとの思索はわたしの頭に夢幻的な絵を描き出したばかりか、意識をも喜ばせたのである！そうした幻想的な絵の最後は必ずコンピューター・グラフィックがくつきりと描き出すある画像で飾られた。ワシーリイ・カラマーノフが赤いリボンを切り落とし、ホモ・コスミカスたちが静々と、自らの尊厳を感じつつ、新しき悠久の認識の世界へと入っていく画像である。今もまたわたしは自分のマツトレ

スに横になり、流行おくれの肩掛けにくるまって、思索を続けていた。今度はプチブリ人の肉体的可能性について。人間は突然変異を経て進化してきた。が、ある特定の条件の中でのみそれは可能であった。過去数千万年の間、地球上の気温は一定で落ち着いていた。それゆえかれら地球人は、ラマピテクスからクロマニヨン人まで——それは千五百万年以上になるが——おおよそ同じような気候的条件で進化してきた。結果は悲惨だった。かれらはある一定の気温以上でもそれ以下でも生き延びることができない。解決を迫られる第一の課題は、遺伝子の突然変異の力を借りて宇宙的な遺伝子の組成を創り上げ、そうすることによってプチブリ人が、地球上でありうる気温よりかなり高くても低くても生き延びることができるようになることだ。それによってプチブリ人が宇宙で自由に移動することも、どこか他の惑星で生き延びることも可能になる。この他にも呼吸に関する問題を解決しなくてはならない。そこでは遺伝子工学がホモ・コスミカスの肺をラクダのこぶと同じ役割を果たすように造形する手助けをすべきなのである。ラクダのこぶと唯一の違いは、こぶが水を貯蔵するのに対し、プチブリ人の新しい肺は酸素をたくわえ、一日に一度、いや、一カ月、一年、十年に一度ずつの呼吸で吐き出す点である。同様な改良を胃についても行わねばならない。現在、体内温度を保つために人体は食べ物を細かく刻むという方法を取っている。そうして必要とされるカロリーを確保しているのだ。だが、プチブリ人の身体は体内と対外にあるバッテリーの助けを借りて体温が一定に保たれるように創り変えなくてはならない。体内のバッテリーは止むことなく充電され続けることだろう。それは、まず第一に細胞の運動と収縮とによって、第二に太陽光線とガンマ線、そしてプチブリ人が乗って行くことになるい

ずれかの装置の運動の速度によって、そして体外のバッテリーは、人工的な特別の放熱によって充電される。携帯電話の伝達と同じタイプだ。もうそろそろエネルギーの遠距離伝達のプロジェクトに取り掛かってもいい時期である。これらの主要課題の解決は必要な睡眠時間というテーマを緊急課題からはずしてくれる。人間たちは睡眠に人生の三十パーセントを費やしている。ロシア人の平均寿命は六十三歳で、ヨーロッパ人は七十九歳である。つまり、ロシア人は二十年と少し、ヨーロッパ人はおよそ三十年眠ることになる。実験の開始当初ホモ・コスミカスは一日二十四時間の十パーセント以上を睡眠に費やすことはしないはずだ。そして、この数値は三ないし四パーセントまで引き下げられなくてはならない。これはすなわち、ホモ・コスミカスはどうかつても一日に一時間以上睡眠に費やすことはないだろうということだ。つまり、一年に十五日間、あるいは、八十年間に三年弱しか眠らないことになるのだ！ そうすれば、プチブリ人は、より生産的になる。いや、それ以前に、よほど経済的になろうというものだ。食事をするのは一年に五回、もしくは十回だけなのだから！ そもそも、一番の問題は一人の人間の生命を維持するのは驚くほど高くつくということである。全世界の平均値を示すとすれば、保健に費やす金額は一年に千ドルである。これには次のすべてが含まれる。病院の建設、医療器具の買い付け、治療、医薬品、そしてリハビリテーション施設。六十五億に千ドルを掛け合わせると、六兆五千億ドルになる。人間一人に要する食料は年間で二千ドルだ。これもまた地球上の人口六十五億を掛け合わせると、十三兆ドルとなる。アパート、オフィス、交通機関の暖房費については、その世界平均は以下の通り。一人の人間が一年に費やす暖房費は二百五十ドル。総計で年間約一兆五千億ドル

だ。暖を取るための衣料費は一人頭平均二百ドル。総計で年間一兆三千億ドルである。刑務所の経営、服役者、管理の職員、その制服や刑務所施設の警備装具などに費やす金額は年間一兆ドル。全世界の内務省の予算は十五兆ドルで、軍備費には六十兆ドルが加算される。行政機構の七十パーセントの簡略化で三十五兆ドルまで支出が削れる。こうして節約できる金額の総計は、なんと百三十兆ドルあまりにもなる！ これはアメリカの予算の四十倍以上で、ロシアの予算の五百倍に相当する！ 人間とはまったく採算の取れぬもので、完全に破綻している！ だからだろうか、かれらの経済学者たちはロシアの財政健全化のための方策をどうしても提案することができないでいる。このような条件の下では絶対に提案なんかできっこないのだ。どう考えてもチャンスはない！ そこから始めるべきではないのだ！ まず人間を変えなくてはならない。かれらを採算の取れるものにしなければならぬ！ すべての鍵はここにある！ その成員の多くがまったく採算の取れないものである時に、国の収益性を高めることなど期待できるだろうか？ わたしのプチブリ人たちは収益性の非常に高い存在となるだろう！ 人口が六十五億人の水準を保っているという条件のもとでなら、年間の国家予算からプチブリ人は一人あたり二万ドル受け取ることになる。現在、ロシアの勤労者は年平均で八百ドル以上は受け取っていない。それなのにプチブリ人が受け取るのが、二万ドルとは！……ここでもわたしはロシア人の哲学者ニコライ・フョードロフの有名な金言が頭に浮かんだ。『われわれの身体が、われわれの事業となるだろう』。ウラジーミル・モノマフが東方に広がる無限の大地を開拓するために自分の子供や孫や甥たちを送ったように、ワシーリイ・カラマーノフもプチブリ人たちに無限の宇宙への道を開け放とうと

思う。宇宙を開拓するがいい！ 征服するのだ！ 自己を完成せよ！ キエフ・ルーシが、偉大なるロシアのために雄々しい若人を育成した巢となったように、地球も、宇宙を切り開くプチブリ人たちを育てる温床となるのだ。人間たちは、かれらの目からすれば、愚にもつかないこのよきな考えに身震いすることだろう。だが、ホモ・コスミカスの遺伝子建築の将来設計の新しい図面を心に浮かべながら、わたしは頭脳の回転を強化した。もし人間たちが退屈に倦み果て、知性の逍遙にではなく、その影に、欠陥だらけの本能の中に己を見出していたとすれば、わたしは創造のエネルギーで文字通りはちきれそうになっていた。わたしは常に、いままで誰も考えなかったことについて思索していたのだ。わたしの意識はいつも至純の、宇宙の底からふつふつと自然に沸き出る考えに満たされていた。そのときわたしの耳の中にチャイコフスキイの『白鳥の湖』からの一節が鳴り響いた。それは人間たちとの決別を告げる賛歌であった。わたしはボリシヨイ劇場を、花の白鳥の骨組みを、そして、たまたま観察することになった羨望や憎悪の渦巻くフィナーレを思い出した。もしかしたら、かれらすべてがあんなふうではないのでは？ ボリシヨイ劇場にだけ嫉妬深い人間たちが集まったのではないか？ どこか他の有名な劇場で試してみてもどうだろうか？ 例えば、ヤウザ河畔にあるネリユーボフのところはどうか。権威あるモスクワの演劇集団。そこではあんなことは起こらないのではないか、わたしはそこはまったく違っていることを願ったのだ！……何日か後に、わたしは小物を作っている作業場に出かけ、針金で作った一メートル半のワイングラスの骨組みを注文した。その後、それを花屋に持って行って全体を花で埋めてくれるように注文した。そして、ワイングラスの台と脚には白い菊の花を、グラスそ

のものは、赤いバラの花を埋めるよう頼んだ。清掃人としての稼ぎの他に、わたしには『人形』で貯めた金が残っていた。わたしは十二月の十二日にヤウザ河畔にある劇場でボリス・パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』が上演されることを知り、劇場に行くと、簡単に切符を手に入れた。そして、切符売りの女性に訊ねた。「すみませんが、お宅の劇団で一番有名で、一番優れた俳優さんは誰か、教えてくださいませんか?」「『ドクトル・ジバゴ』に出演している役者の中でですね?」切符売りは念を押した。「ええ、そうです!」「ウラジミール・セレブリューヒンだわ! わたしたち皆かれのファンよ。かれがジバゴを演じてるのよ。あなたにもきつと気に入ると思うわ」「セレブリューヒン? ウラジミール?」「ええ、その通りよ!」「ありがとうございます」わたしは一札すると、すぐに守衛のところに行った。「お願いです、舞台に行くはどうすればいいのか教えていただけませんか?」「舞台にだって? 舞台には誰も通さないことになっている。どういうわけなんだ?」「今晚の劇の券をもっているんです。この劇場に来るのは初めてですが、セレブリューヒン氏に花を贈りたいんです」「花束かい、それとも、花籠か?」「花籠よりもいくぶん大きめです」「じゃ、マネージャーに聞きなさい。マネージャーのオフィスはあちらだよ」マネージャーとの話し合いはごく簡単なものだった。詳細を良く考えようともせずに、マネージャーは十ドルで花を舞台に立てることを許可してくれた。わたしは金を払うと、尋ねた。「花は誰に渡せばいいんですか?」「業務用入り口に持って行きなさい。そしてポターポチキンにお渡しなさい。こういうことはかれが取りしきっています」「その人はあなたが許可したことが、わかってるでしょうか?」「もちろんですよ、ちゃんと連絡しておきますから」「じゃあ、三時頃にそちらに参ります」

「いや、五時三十分のほうがいい。夜勤班はその時間までには全員部署についているから」それで、われわれは別れた。わたしは『ガゼル』トラックを借り、五時半きっかりに業務用入り口についた。わたしの花のワイングラスはセンサーションを巻き起こした。そんなものをかれらはまだ見たことがなかったのだ。ヤウザ河畔の劇場の業務用入り口の状況はボリショイ劇場で起こったことを思い起こさせた。俳優たちや劇場作業員たちはわたしのプレゼントを見やつては、互いに言い合っていた。「この豪華なプレゼントはいったい誰へのものなんだろう? この傑作を受け取る資格のあるのは誰だろう?」その中の一人は感激のあまり口笛を吹いた。「こいつはまたすごい花束だなあ!」その時、ポターポチキン氏がわたしのそばにやってきて耳元でささやいた。「この豪華なプレゼントのために、おまえさんから二十ドルいただくでしょう! 劇が終わったあと、おまえさんのプレゼントを舞台のど真ん中で、しかも、聴衆のまん前で、セレブリューヒンに効果的に手渡すのをおれが個人的に手配してやろうじゃないか。えっ、どうだい?」われわれは合意して別れた。わたしは劇場に向かい、九列の自分の席に就いた。わたしは最後まで座っているのがつらかった。やっとのことで劇が終わると、わたしは元気づいて舞台の上を注意深く眺め始めた。花籠は白髪の小太りの人物に手渡された。その人は俳優ではなかった。わたしは、この人がヤウザ河畔の劇場の主であるネリユーボフではないかと思った。貧弱な花束が主役を演じた俳優に贈られた。どうやらこれがセレブリューヒンであるらしかった。二つ目の花束は、ある婦人へのものだった。わたしは芝居をよく見ていなかったの、その女がどんな役を演じたのかわからなかった。他には花はなかった。人間たちをまだ発展段階にある物質で、緊急に修繕や改

良を必要としているものと見なしているわたしは、花のワイングラスが舞台に持ち運ばれなかったことに、全然驚きはしなかった。わたしはすぐさま悟ったのだ。『花の褒章』は他の褒美が意味することと同じように、かれらの人生では完全に一定の秩序に基づいていると。支配人には、より大きく、独創的なものを、そして、俳優たちには、小出しに、小さめのものをというわけだ！

『自分は完全に正しかった！』とつさに頭の中にひらめいた。『まるでお見通しだ。文化人からプチブリ人がもらうものなど何もない。まったくのゼロだ！』かれらは豪華な花のワイングラスを舞台に運び込まなかった。またしても羨望か？ それとも憎悪か？ それに違いない！ だがもしかして、結論を出すのはもう少し差し控えたほうがいいのか？ ワイングラスが倒れたのかもしれないし、花が枯れてしまったり、ネズミが菊の花を食べてしまったのかも……。だが見る、すべては終わってしまったじゃないか。ロビーに出る。劇場作業員にドルを手渡して、ポターポチキンを呼んでくれるように頼む。ポターポチキンは困惑した様子で現れる。「どうしたんです？」「わたしは尋ねる。「おれはこれには無関係なんだ！ ネリユーボフとその奥方さ。おまえのプレゼントを見たたん奥方は言ったもんだ。『誰へのプレゼントなの？』おれは答える。『ウラジーミル・セレブリユーヒンでさ！』『ゲオルギイ、あなた、なんで許可したんです？ あなたには花籠で、かれにはこんなすごいプレゼント！ これは挑戦よ！ どうするつもりなの？』『舞台には運ばないでくれ！ わかったか？』ネリユーボフがそう言ったんだ」ポターポチキンは両手を広げて見せた。「どうしようもないじゃないか……」「だが、金は払ったはずだぞ。それにあんた約束したじゃないか」わたしは言いつのる。「何を約束したっていうんだ？ おれはおまえの

ワイングラスを持って、あつちへ行ったりこつちへ行ったり。おまけに、一司の解りは由緒と隣りかかってくるわ。お願いだから、もう行っちゃまってくれ！ こんなプレゼントはもう二度と持ち込まんでくれ」再びあまりに人間的な逸話が繰り返された。何度実験すればいいというんだ？！ だめだ、やつらは絶対にこの世界から出て行かなくてはならない。リストーフキン、パンチューフ、ポドベード、セミハトーフア、そうしてポターポチキンたちが一番先に消滅すべきなのだ。わたしはこっそりと薄ら笑いをうかべ、劇場からゆつくりと出て行った。クロークからわたしの方に俳優のウラジーミル・セレブリユーヒンが駆け寄って来た。「どうか気を悪くなさらないでください。今度は花籠か花束をお願いします。どうしようもないじゃありませんか？ わたしたちには何か簡単なものでいいんです！」こう言って、困ったように微笑んだ。わたしたちはだまって別れた。だが、その時いくらか滑稽な不安がわたしを襲った。『もしたった今ここにネリユーボフが現れて、謝ったあと、自分の妻との喧嘩を引き合いに出したりしたら？』苦笑して、わたしは劇場を後にした。『いや、わたしはもう今後絶対この種の施設には足を踏み込むことはないだろう』この瞬間わたしはふと思った。もしわたしが幼い頃から豊かで、まっとうな家族の中で、乳母や女中などの注意を一身に集めて育っていたとしたらどうだろう、わたしの意識はプチブリ人化していただろうか、それとも、人間という種のごく普通の典型のままだったのだろうか？ わたしの意識に突然入り込んできたこの苦々しい考えは、しばらくの間わたし自身にわけのわからない不快感をもたらした。『ワシーリイ、自分を苦しめるのはよせ』その時わたしは自分自身に言い聞かせた。『今こそはっきりと理解するがいい。貧しさと周囲の者たちへの嫌悪という事実は、

遺伝子構成の変換という動機とはとても比べようのないくらい些細なものにすぎない。おまえはホモ・コスミカスとして生まれてきたのだ。そうして人間的なもののすべては本質的におまえとは異質なものののだ』一連の思索のあと、おそらくは生活の調和を乱されるのを危ぶんで、わたしはこれまで以上に人々を避け、ひたすら完璧な孤独にひたることに決めた。無限の理性による新しい時代を空想すること以外にわたしは何も必要ないのだ。わたしは自分のあばら家まで歩く事に決めた。ヤウザ川に向かって降りていき、サリヤンカへと突っ切り、セローフ通りを『子供の世界』まで登りつめ、オホートヌイ・リヤードを通ってわたしはヴォズドヴィージェンカまで来た。わたしは人間という生物学上の種族は、単なる突然変異の停車場に過ぎないのだということに以前にもまして強く確信するようになった。優性への進化を辿る履歴書バスの運行経路がわたしの頭に浮かんだ。オルドヴァイ(ケニヤ)―ハダール(エチオピア)―トウルカナ海岸(モロツコ)―コツエタンダ(中国)―ネアンデルタール(ドイツ)―カルメル山(ユダヤ)―クロマニヨン(フランス)―プチブリ。履歴書バスは運行の途中で下車させられる乗客の種がどんどん複雑になった。わたしは思った。おそらく、運行途中でまったく偶然に、論理とは全然無関係に、プチブリ人の先駆者たちがバスからこぼれ落ちたのだと。例えば、最近では一七七〇年の十二月十七日にボンでバスからルートヴィヒ・ファン・ベートーベンがバスから落ち、一八二一年十一月十一日にはモスクワでフォードル・ドストエフスキイがバスから這い出した。一八四四年十月十五日にはレッツェン・バイ・リュッケンでフリードリヒ・ニーチェがバスから飛び降り、一八四九年九月二十七日にはリヤザンでイワン・パブロフがバスから抜け出し、一八七九年三月十四

日にはドナウ川沿岸のウルム市でアルベルト・アインシュタインがバスから駆け落ちした。そうして一九七〇年一月五日にプチブリでバスはついに停車することになった。そこから降りたのはワシリー・カラマーノフであった。わたしはプチブリにこの世界を変えるために出現したのだ。だが、自然はおのが仕事を急ぐことなく淡々とこなしていった。自然はこれらの種のおのの独自性と特性とを与えた。アウストラピテクスにはどのような悪徳があったのか？ かれらはそもそも悪徳という概念が理解できたのだろうか？ ひよつとしたら、かれらは美徳と抑えることがよく理解できたのではないか。いずれにしても、かれらの美徳は自らの攻撃性を抑えることができたことにある。他に何かあるだろうか？ 語彙の蓄えがたったの百語の時、美徳などが期待できたのだろうか！ ではネアンデルタール人はどうか？ かれらには悪徳や美徳が何であるかわかっていたのだろうか？ かれらが発音できた五百語で悪徳や美徳を理解することができたのだろうか？ 目的とか志向や義務といったもろもろの観念が、かれらの矮小な頭脳をかき乱すことなどあったのだろうか？ だとしたら、どうしてかれらに美徳など理解することができたろう？ 悪徳はどうか？ いや、悪徳もそして美徳も、極めて人間的な発案である。人間たちは自分たちの社会を善人と悪人、あるいは、強者と弱者、責任能力のある者とならない者に基づいて、どのように階層分化させればいいのかどうしても理解できないでいる。社会を分けるのは社会的な地位でも出身でもなく、何か抽象的な捕らえがたい基準に基づくものだということがわからないのだ。遺伝子の組成について、遺伝子のタイプについてかれらは何も知らない。だから様々な探求のあけく、二つの非現実的な観念である悪徳と美徳に辿り着いたのだ。そうして自分たちを

徳の低いものと高いものに分けたのである。それでどうなったのか？ 得たものは何もない！ 大衆はかれらの公準を受け入れなかったんだから！ 現在のロシアに徳の高い人物などという古典的な特性を持った者がいるだろうか？ もしいるとしたら、それを証明してほしい。そうしてそれが誰なのか示してほしい。『徳の高い者たちよ、名乗れるものなら、名乗り出てくれ！ 顔を出してくれ、名前を言ってくれ！』わたしは心の中で叫んだ。そんなものはない！ いるはずがない！ 高い徳性などというのは埃まみれの書物の中にしか存在しない。ほとんど聴くものもない講義における退屈極まりない議論の中にしか存在しないのだ。電灯とかプロジェクター、それとも媒体とか特別な機器の手助けによってしか見出せないものであるとすれば、それは美徳がかれらによって要求されたものだからではないのか。かれらはホモ・サピエンスが生物学的にまだ辿り着いていないものを推奨し、要求しているのだ。かれらの本来の組成は何か別のものなのだ。かれらはこれらの公準を受容するために必要な遺伝子的な構成を欠いているのである。もし徳の高い者が見つかったとしても、それはとてもまれで、偶然で、しかも標準的な遺伝子的根拠を欠いているのだ。真実はこうだ。ホモ・サピエンスの中に徳の高い人物が現れるのは、かれらの体内にメチレンテトラヒドロ葉酸還元酵素 (methylene tetrahydrofolate reductase, MTHFR) が充分に存在している時に限られる。文明の徳性の高さという標準とかれらの種の生物化学的構成要素との間の単なる相関関係とは、なんて平凡極まりない事実なんだろう！ まったくどうしてあなたがたの聖書など学ばなくてはならないのか。人間には人間的なものを与えればいいのだ。もしかかれらに MTHFR がなければなら、注射をするなり、皮下注射をするなり、錠剤を与えるなり

すればいい。どうして寺院などを造る必要があるのか？ どうして賛美歌など歌わなくてはならないのか？ 神の言葉を唱える必要はあるだろうか？ 実際、いったい誰が聖書などを読むだろうか？ そうだ、わたしが国立図書館で興味深く思ったのは、誰一人として聖書を閲覧しようとする者がいないという事実だ。私見によれば、コード化されシンボルに基づいて書かれたあの聖書のテキストを、理解できるどころか、読み通すことのできる者でさえほんの一握りしかないのである。つまり、物理学者アイザック・ニュートンや哲学者アレクセイ・ローセフ、作曲家のドミートリイ・シヨスタコヴィチ、作家のミハイル・ブルガーコフ等と同等の者たちである。だが、こうした人々がいったい何人いるだろうか？ ロシアの中だけではなく、世界中で何人いるのか？ 十万人、三十万人、もしかしたら、五十万人程いるのかもしれない。だが、これはかれらの全人口からすれば、0.005 パーセント以下にしかないのだ！ それに、わたしは教会関係者のすべてが聖書を理解しているわけではないと強く確信している！ そしてまた、これは事実なのだ。変えなくてはならないのは人間たちの精神的、意識的な標準ではなく、遺伝子の標準なのである。そもそも高い知性とは、ただ単に生体内の尿酸の増量によるもの過ぎない。そして、外部に現れるものは、痛風である。もし痛風を病んでいるとすれば、聖書のテキストは簡単に理解できるというものだ！ それだけのことだ！ 聖書のテキストに従うか否かは、またまったく別の問題である。あなた方には選ぶ権利がある。一方、わたしには、あなた方の知力に診断書を提出する権利がある。あなた方の前で永遠への扉を開くかどうかという診断書を。わたしは、先駆者たち、プチブリ人の深遠のかすかな徴しるしを持つものたちを、自分がむさぼるように読んだ本

の作者の中に見出すことができる。だが、かれらはそれ以上に進化しなかった。諸君、突然変異をもつてしてもだめだったとはいったいどうしてなのだろう？ 聖書の戒律はかれらの逃走を止めることができなかったのだ！ アウストラピテクスたちはおよそ四百万年の間突然変異を重ねた。ネアンデルタール人たちはすでに何十万人もいたのだが、かれらには突然変異の時間が二十万年あった。人口六十億以上を数えるクロマニヨン人たちはといえば、今後五百万年以上は突然変異を重ねることはできない。そうして、このかれらの突然変異の期間はもう尽きようとしているのだ！ かれらの時間は終わろうとしている。人間たちは突然変異の過程のテンポが急激に加速されるような生活環境を作り上げてしまった。愚か者たちだけが生まれて来るだろう時代もそんなに遠くはない。その第一段階は、ポップ・カルチャーに犯された若者たちである！ かれらは既に空間を侵略し始めている。もしも最初に突然変異があつて、そのあと知性が生まれたということがまだわからない者は、何の役にも立たない停滞に永遠に留まることは不可能だということを認識すべきである。これは物理の法則に矛盾する。突然変異こそが、時間であり、また空間であるからだ。これが宇宙のすべての容量なのだ！……。そんなことを考えながら、わたしは自分の清掃人のあばら家まで辿り着いた。ひどく疲れていて、マッドレスにどつと倒れこんだ。『文化の実験のプログラムは終了した。次はぜひとも政治を試してみなくてはならない。何から始めればいいのか？ 政党の一般党員に登録してみてもどうだろう。もうすぐ国会議員の総選挙がある。もしかしたら、わたしを党の活動家として使ってくれるかもしれない。ロシアの政治社会の診断を下すには、おそらく二つか三つ課題があればそれで充分だ。どの党に登録すればよいのだら

う？ うん、選挙までにはまだ充分時間がある。ということとは、別段急いで決めることもないんだ』わたしは電気を消し、何も考えずにしばらく横になっていた。そうして、うつらうつらとし始めた。何分か後には、わたしはもうぐっすり眠っていた。何やら短い象徴的な夢を見た。最初わたしは本が何冊か積まれているのに気付いた。フォードロフ、フロレンスキイ、ムラヴィヨーフ、ベルナツキイ、チジェフスキイなどの本だった。その後突然分厚い書物は消え失せて、代わりに印刷された大きな文字で埋めつくされたメモのようなものが現れた。それらは知識の殿堂の壁にべたべたと張り巡らされていた。わたしはこれらの文字の配列を自由に読めたばかりでなく、読みたいと願ったのだ。『三元の可能な解法として提議できるのは、マーティン体系における公理の数が無限に』だが、どうしてこの続きがないんだ？ わたしは思わず叫びそうになった。『おい、誰か、この先はどうなるんだ？』が、わたしは自分をおさえた。突然もつと興味深いテキストが現れたからだ。『ここに多角形のセットがある。所与の多角形で重複することも隙間もないようにユークリッド平面を覆う事ができるか否かを確かめよ』待てよ、これは、ロバート・バーカーが『計算手段では解決できない』と述べた課題じゃないか。わたしはほくそ笑んだ。諸君、わたしを試そうとでもいうのか？ プチブリ人であるこのわたしを！ ハオ・ワンはこれについて次のように主張した。『多角形のプレートは実数の助けを借りて表わすことができる。つまり、普通の演算規則が整数だけで操作可能であるように、無限の小数という形で表わされる数字によって描写しうるのだ。こうすることによって不都合は回避される……』この瞬間、誰かがわたしの頭をぐいとねじ向けた。そして板の上にわたしはもう一つの引用句を見出した。『われわれの中の自然

は自己を認識するだけでなく、自己を管理し始めた』その下には次のように書かれていた。『地球上のかけらとして生まれた無限の空間の観察者、この空間の世界の観察者が、世界の住人に、また管理者にならなくてはならない』これに続いて、『自らを原初の物質、原子や分子で創り変えた時、すべての天上の空間、すべての天上の世界が人間の手に負えるようになるだろう。なぜなら、その時初めて人間はいかなる環境でも生存でき、いかなる形をも取ることができるようになるからだ』『わたしの意識に何が起こったのだ？ この人間たちの思考との類似性はなんなのだ？ わたしのプチブリ人化の始原がかれらの中にあるとでもいうのか？ 違う、ぜったいにそんなはずはない！ わたしは宇宙哲学者の書いたものをモスクワで読み出したんだ。突然変異に人工的な刺激を与える必要性があるという考えは少年の頃からわたしに付きまとっているのだ……』『不満がわたしの夢を破った。わたしは目を覚ました。これは単なる夢にすぎないと自分自身に言い聞かせたあと、わたしは他のことを考え始めた。『自分は今までプチブリ人は一日数分しか寝ることとはないだろうと夢想してきたはずじゃないか。それなのに夜つびて奇妙な夢に苛まれるなんて。どうやら、まず自分自身を完全に「プチブリ人化」する必要がありそうだ。そうでないと、だめなんだ、ひどく人間的なものがまだ自分の中に現れてくる。夢の中であつたとしても恥ずかしいことだ！』わたしはマットレスの上で思わず身をよじり、姿勢を変え、枕に顔をうずめた。が、寝付くことができなかった。『そうだ、ひょっとして、政治団体の「進め、ロシア！」に登録するのはどうか？』という考えが思いがけなく頭に浮かんだ。『だが、どうしてそこでなくてはならないんだ？ 政党の数はいくらだってあるんだ！ いや、それにどんな違いがあるというんだ』真

心の遺伝子の調査にあたつて、政党が何かということには何の意味もない。『進め、ロシア！』が頭に浮かんだのなら、数日後、かれらに自分が奉仕したい旨を伝えればいいんだ。かれらが何を要求するのか、興味津々というところだ。献身か、信念の堅固さか、それとも党指導部の要求に敏感であることか？』『とんでもない、それはわれわれの政治についての誤った考え方だ』わたしは頭のてっぺんに誰かの聞き覚えのない声が響いた。『われわれの社会は民主主義なのだ！ われわれの目的は、国民の繁栄なのだ！ われわれは祖国同胞が幸福であるのが見たいんだ！ おまえは他に何を望むのか？』その声は、どうやら、わたしを辱めたいかのようであつた。が、残念ながらその逆の結果を招いた。わたしはにんまりと笑つて、言い返した。『その通り、あなたがたは公正という理想へのご自分の忠誠を証明する莫大な可能性をお持ちだ。人間はもう千年以上にわたつて公正さを待ち続けているのだ！ いったい何度書かれ、語られ、予言されたことか。シメールやアラムの遺跡や、聖書やローマ法典に始まり、現代の分厚い書物や声明書にいたるまで、人間たちはもうすぐ財産を蓄えることよりもむしろ知識を蓄えることを選ぶようになり、知性を物質よりも高く評価するようになるのだと！ だが、結果はどうか？ 無だ！ 財産は知識に最終的に勝利したのだ！ そうとしか考えられない！ 人間たちの遺伝子のパスポートを見るがいい。すぐにでもこの結論の客観的な証拠が見つかることだろう。市場を観察して見るがいい。そして、真面目な読者の数を確認することだ。そうすれば、誰の頭にも露ほどの疑いものもないだろう！』内なる声は何も答えなかった。そうしてわたしの頭の中の会話は中断した。わたしは再びうとうとし、とうとう穏やかな眠りに就いた。モスクワの清掃人にとっては、朝は

一番忙しい時間だ。巨大都市には、いつも仕事をごまんとあつた！　だが、わたしは朝まだきに仕事をするのが好きだった。早朝の都心には、人の姿は実際ほとんど見られなかった。セローフ美術館の館長はわたしに苦情を言ったことは一度もなかった。館長はわたしのことを気にもとめていなかった。どうやら、労働者が勤勉に働いているなら、そつとしておけ、これが人々のやりかたのようだった。わたしにはかれらのこうしたメンタリティーが都合よかった。わたしは自分の義務を骨身を惜しまず果たし続けた。そうして自由時間を図書館で過ごした。書庫からは新しい本が次々とわたしの方へ持ち込まれた。それらの本はまた、人間の遺伝子構成の誤りをわたしにより深く確信させた。かれらの強欲さ、貪欲さ、性的な放縦、羨望、憎悪、弱腰、買収されやすさ、権利に対する虚無主義、虚言癖、挑発癖、アルコール中毒、策謀に長けていること、知性のレベルの低さ、これらすべてが、かれらの悪徳に付随していた。そうして、今も付随しているし、将来もまたそうであろうと思われる。異教やユダヤ教、イスラム教、キリスト教の助けを借りて、これらの悪徳から人間たちを解放しようとする企ては何ももたらさなかったし、また何ももたらすことができなかった。人間の歴史には、貴族が支配した時代があつたし、軍人が世の中を治めた時代もあつた。また、政治が支配的地位に立つたこともあれば、物理学者たちに最後の決定権を与えたこともあつたし、金融資本家たちが支配した時代もあつた。現在では、地球主義者^{グローバルリスト}たちが指導権を持っているようだ。だが、これでおしまいだ。ここに、黒々とした大きなピリオドを打つことができるのだ！　かれらのうちの誰一人としてホモ・サピエンスを変えることができなかつた。かれらの悪徳は消え去らないどころか、増えてしまったのだ！　悪徳は華麗な花を

咲かせ、芳香を発散し始めている。その値段も上がっているのだ。今では、自分を悪徳の冠で飾るために、金を払わなくてはならない始末だ。タイトルを獲得するためのコンクールがいたるところで開かれている。『華麗なるほら吹き』、『セックス・クイーン』、『輝かしき陰謀家』、『堂々たるねたみ屋』、『偉大なるアル中』、『悪の天才』、『驚くべき浮気者』、『犯罪界の統率者』、『ビジネスの王様』。教会関係者よ、思想家よ、宣伝活動家よ、新聞記者たちよ、作家、政治家、法律家、そうして、支配者たちよ！　ついに大声で告白するときが来たのだ。あなたがたには何もできなかったと。成果は何もなかったのだ！　あなたがたの努力は無に始まり、無に帰したのである！　ホモ・サピエンスという種族は退化しているのだ！　徳性と知性の下降の速度は増大している！　諸君、遺伝学者に席を譲る時がきたのだ。かれらの時代がついに到来したのである。かれらにはできるはずだ、何と言っても、かれらを指揮するのはホモ・コスミカスだから！　このわたし、ワシーリイ・カラマーノフなのだから！　人工的な突然変異と遺伝子操作との助けを借りて、わたしはあなたたちからプチブリ人を創り出すだろう。進化の現象は歩みの遅さゆえにわたしを満足させない。わたしは独自に行動するし、また行動したいと思う！　すばやく！　徹底的に！　希望をもって！　休むことなく！　信じてほしい、聞いてほしい、あなたたちに要求することは唯一つ、邪魔をしないでほしいということだけだ！　反対しないでほしい！　あなた方のメンタリティーにとって、知性にすべてを託すのがどれほど難しいことかはわかっているが……。通りを掃き清めながら、わたしは自分の世界に深く沈んでいった。そうして、現実を、自分を取り囲む世界をすっかり忘れ去った。そのためか、わたしは自分が仕事をしているということに気付か

ず、また感じもしなかったばかりか、スコップや箒ほうきやシャベルやレーキの動きも一つとして思い出すことはあるまいと思われた。こんなわたしの現実世界でのあり方を見たら、誰だって深い疑惑を懷くに違いない。わたしをじつと見て、ちゃんとした紳士は叫ぶことだろう。『人間はこんなふうには生きない！ これは人間じゃない！ こいつを助けてやってくれ！』と。確かに、深い集中力と、外部を取り巻く人間たちへの無関心、人間嫌いの思考の包括性、孤独への傾倒、絶対的な知性への没頭はわたしを周囲の者たちと截然せつぜんと区別した。だが、外面的にはわたしはかれらと何一つ変わらなかった。ただ、あざやかな赤毛であるという点を除けば、基本的には、何も目立つものはなかったのだ。わたしは多くのロシア人がそうであるように目が青く、同年代の大多数がそうであるように、平均より多少背が高かった。わたしはロシアの大衆のほとんどがそうであるように、貧乏で財産がなかった。それに、故郷も持たず、自分の家系も知らなかった。だが、そんな人間はロシアには何千万もいるのだ！ わたしを他の者たちと区別する唯一の点は、自分がプチブリ人として生まれてきたという信念であった。地球上に住む者たちのために、新しい将来性のある特性を獲得したいという願望であった。一億五千万の同胞の中でただ一人、わたしは自分をプチブリ人と呼び、かれらを人間的なもののすべてから解き放とうと願ったのである。現在の世界の侮蔑的ともいえる混乱こそが、新しい力でわたしを突き動かし、国会図書館で多くの時間を過ごさせたのであった。人間的な知性の逆説がわたしの意識を挑発し興奮させた。稀にしか見られない優れた者の知性と大衆の知性との振幅の無限の大きさがわたしの平安を乱した。わたしはここにこそ種の生物学的な突破口の驚くべき可能性を見た！ 非常に大きな生物学的進化の

可能性を見たのだ！ そうして、その時わたしは、なにかかれらが自分たちを『知性的なもの』と呼んだのかを理解したのだ。自分たちの卑しい直感を、漸新世の名残が自分の中に現れているのを、かれらの中の稀に見る優れたものたちは自分たちの目で見たのだ。そうして、驚きの声をあげたのだ！ こうした落胆こそが、かれらをプチブリ人たちに近づけたのだ！ 知性に近づけたのである！ こうして何世紀にも渡って蓄えられた材料が、わたしの前に立ちはだかる課題を成功裏に解決するのを手助けしてくれると確信している。現在わたしの実験は質的な変化を遂げた。わたしは既にメモを取り、突然変異のシステムを設計した。遺伝子構成を変えることのできる科学的なカクテルを理論的に調合し、DNAの根本的な調査に着手した。そうして、精神病と精神異常と天才の誕生とが正の相関関係をなす時の、特別の遺伝子編成に今一度戻ってみることにした。そうした例の一つは、癲癇てんかんである。癲癇とは、一方では、細部を限りなく、執拗しつようなまでに掘り下げる才能と結びついており、またもう一方では、自分の中の良いもの、いや、最良のものを示したいという代償的な表現行為への抑えがたく透徹した要求と結びついている。このタイプの典型は、三代以上にわたって癲癇の診断を優性単一的に受け継いだフォードル・ドストエフスキイである。才能の特殊性こそがあの病理的な緊張状態と、個性的な表現への強い刺激を頻繁に引き起こしたのだ。これはおよそすべての天才について観察されることだ。レールモントフは自分の個人的な問題に完全に呑み込まれており、どの主人公もみなレールモントフ自身なのである！ また、エフロイムソンを少し調べてみると、また異なる典型に逢着することができ……『ああ、自分はいったいどうしたんだ？』わたしは思った。『考えが文字通り頭を引き裂くようだ。』

いったいいくつかの考えが入り込んでいるのだろうか？　これでは宇宙的な規模の底なしだ！　もしかしたら、わたしもこの病を病んでいるのではないか？　わたしの両親たちも奇妙な存在であつたじゃないか……』わたしはこの時初めて知性に対して恐怖を感じた。『いや、いや、知性の容量はていねいに広げてやらねばならない。ゆつくりと、巨大な常緑のモミの木の苗木を育てるように。でなければ、本当に気が狂ってしまうぞ』わたしの清掃夫のあばら家にはすでに調査に必要な機器が整い始めていた。わたしはコンピューターや分析器やその他の有益な機器を買い整えた。自分が今すぐにも真剣に本格的なプチブリ人の遺伝子の創造を始めそうな気がした。この種族の素晴らしい将来性がわたしを際限なく奮い立たせた。わたしは常に自分に言い聞かせていた。『わたしの時間が来た！　わたしの時間が来たのだ！　物質の世界の豊かさにゆつくりと浸っている時代は終わつたのだ。かれらの歌、踊り、悪魔的行動は、知恵の不足のせいなのだ！　かれらは贅沢ができないからと言つてうめき、衣装箆笥の過剰に悲鳴を挙げているのだ！』しかしながら、かれらの正直と秩序の遺伝子を調べようという考えはわたしを放つてはおかなかった。選挙人たちで公約をしたあと、自分の行動や考えにどれほど誠実であり続けられるのか？　政策が目の前でころろと変化するという宿命的な状況にわたしは深く絶望していた。かれらが選挙の前に言う事と、選挙後の行動とは全く別物だつた。『この実験はもしかしたらたいへん有益かもしれない』わたしは思った。『主要な操作を始める前にわたしにはこの種のデータが不足しているのだ。かれらの遺伝子の特性の複雑なもつれを解明しなくてはならない』課題の新しさはわたしを元氣付け、想像をかきたてた。ある日の正午のこと、清掃の仕事が一段落したあと、わたしは例の中国製の

洋服に着替え、例のベトナム製のジョギングシューズを履くと、近所の『進め、ロシア！』の党支部へと向かった。かれらのオフィスはレフ・トルストイ通りにあつた。ペンキを塗り替えたばかりの三階建ての建物は国旗で飾られていた。「おい、どこに行くんだ？」守衛がわたしに訊ねた。「党員になりたいのですが」「そうか、それなら右だ、十一号室に行きなさい」わたしを迎えたのは中年の男だつた。丸顔で禿げで、小さなくしゃくしゃの耳を持った、頬に傷跡のある憐憫の情を催させるような暗い表情の男だつた。「何の用だ？」男はわたしの方を向いた。「党員になって来ました」「金はあるのか？」「ありません！」「まさか、金を稼ぎにやってきたんじゃないいな。どこで働いているんだ？」「清掃人をしています。中央区で」「そらきた！　おまえ共産党に行くべきじゃないか。なんでおれたたちのところに来たんだ？」「共産党に行くことも、もちろん、できます」「何を期待してるんだ？　おれたたちのところに何か都合のいいことでもあるのか？　おれたたちに何を頼むつもりなんだ？　地区の上級清掃職の役職か、『ロシアの最も賢い清掃人』のタイトルか、それとも住宅管理局の局長職をねらっているのか？」「いいえ、わたしにはそんなものは必要ありません！」「なんだと？」「わたしは何もほしくはないのです」「精神病院の証明書は持っているのか？」「何についてのですか？」「健康だつていう証明書さ」「いいえ、一度もそのようなものを請求したことはありません。必要なら持ってきますが」「まあ、どちらでもいい。おまえはなにか、おれたたちの主義の信奉者なのか？」「どんな主義です？」「おれたたちのだ！　他の党のやつらは国会で気まずい思いをしてるのさ。なんといつてもおれたたちのが一番だからな」「そうでしょうね」「どんな課題を遂行したいんだ？」「何でも構いません」「何でもいい、何でも

いいんだな?」「はい! 何でも結構です」「じゃあ、証明書はもういい。おまえの都合のいい時間はいつなんだ?」「午後、二時から五時と、七時以降は空いています」では、われわれのオフィスの掃除でもするか? ここではゴミはあんまり出ない。タバコの吸殻か紙くずぐらいだ。給料はなしだ。社会奉仕の精神でやってもらおう。だが、小さいが、窓のある部屋をやろう。五メートル四方ぐらいだ。やるか?」「やります! ご提案に異存はありません。わたしはここに仕事の契約を結びに来たのではありませんから」わたしがこんなにやすやすと同意したので、男はわたしに何か下心でもあるのではないかと疑ったようだ。この男の論理では普通の人間がこんな不利で屈辱的な提案をかくもやすやすと受け入れるということは、どうしてもあり得なかったのだ。「おい、あれあれ、何とか言ったな、おれたちの蒸し風呂用の箒ほうきを持ち出そうというんじゃないかな?」男は目を細めた。「今、そいつは一ドル以上する。用務室には三本もあるんだぞ! それに道を掃くための箒も立ってるし、シャベルやスコップ、トイレトペーパーもある。おまえ、それを盗み出そうとでも言うんじゃないかな、どうなんだ?」「そのようなものに興味はありません」「誰だつてきれいごとは言えるんだ。そうだよな? もういい、さっさと仕事を始めろ。どうするか見てるからな。覚えておけ。おれたちの党の周辺は警官たちが取り巻いているんだからな! 見習い期間が終わったら、用務員室の鍵を渡してやるかもしれない。大事なことはだな、おまえは商業機構の中で働いているんじゃない、有名な社会組織のために働いているということだ。ここに本質的な違いを認められんようなら、おまえはまだ若いということだ。成熟しておらんだ! われわれの党は、この国一番の党員数を誇っている。つまり、おまえはわが祖国のために

働き始めるということだ。これはたいへん名誉なことなんだ。わかるか。もっと大事な任務を遂行することになるかもしれない。例えばだ、おまえに特使として働いてもらうかもしれない、大切な施策を果たす役目を負ってもらうことになるかもしれない。おまえの筋肉は、すごいもんだなあ! どうだ、わかったか?」わたしは頷いた。そしていくつか実際のな点を確認した。施設の内部すべてを清掃するのか、床磨きの必要はあるのか。あるとすれば、何で磨くのか。ゴミのタンクはどこに設置されているのか、等々。ところで、わたしが出したいくつかの質問は、これまで考えてきた実験の条件の中に含まれていた。わたしは将来の新しい遺伝子構成の創造にあたって考慮すべき独自のものが政治社会の中にあるかどうかという問いに対する回答を求めているのだ。だからこそ、その翌日には既に『進め、ロシア!』党のオフィスの清掃夫として働き始めていたのである。目下の実験にわたしは時間の限定を加えず、党員たちの独自性、かれらの良心の遺伝子の特徴が立ち現れてくるだろう機会を淡々と待ち続けた。かれらの中に何かプチブリ人にとって興味深いことはあるのだろうか? 『あまりないだろうか』実際のところ、わたしは懐疑的であった。『だが、もし突然何か、有益でさえもあるものが見つかったとしたら? かれらの選挙前のアピールの月並みな思想以外にも、まだ究明されていないものが何かあるはずだ。この種の人間たちが存在することを可能にし、かれらを将来性のあるものになっている何かがあるはずだ。だが、それは何だろう?』トルストイ通りのオフィスの日々は憂鬱に過ぎていった。わたしの興味を惹きそうなことは何も起きなかった。だが、今すぐにも生物学的な進化の勝利が地球を訪れるという考えがわたしを捨てることはなかった。けれども、この状況はわたしを上機嫌に

することもなかった。わたしは二つの労働の場で自分の役割を遂行し続けた。わたしの善良なる意志と勤勉さは党の施設の清潔さとしてはつきりと表れた。施設の様子は一変した。自分の『人形』で稼いだ金で、わたしは空気を浄化する芳香剤を定期的に買い求め、灰皿を購入し、窓辺には花の鉢を置き、トイレの部屋と便器を真っ白に磨きあげた。しかし、常に閉鎖的で寡黙なわたしはかれらに警戒心と不信感を呼び起こした。ある者はわたしを根っからの馬鹿だと思ったようだし、ある者は、密告者が潜入しているとでも考えたようだ。「あんな赤毛なんかどこかに行っちゃまえばいい。あいつの前では話をする気にならない」「あの精神薄弱を見つけたやつはどいつだ?」「床を磨くかわりに、あの低能なウドの太木には競争相手の頬骨をへしおる役でも受け持たせりゃいいんだ」わたしの研ぎ澄まされたホモ・コスミカスの聴覚は別のやじも聞きつけた。「おまえにも結婚する時が来たようだぜ。まるで過ちをしでかした夫のように、床をピカピカに磨きやがって」「ほんとに女みたいだなあ。卑猥なことも言わないし、酒も飲まない。やつめ、若い男たちとお楽しみなんじゃないか?」「やつにはすっかり支払いを済ませた方がいい。客人を駅や飛行場にお出迎えする役でもさせればいいんだ」人間の視点からすればこうした侮蔑的な見解も、プチブリ人のメンタリティーがかれらのそれよりよほど優れていることを更に深く確信させたに過ぎなかった。自分とかれらとを引き比べながら、わたしは何度も何度も人間という種族の悲惨な運命とホモ・コスミカスの明るい将来について考えた。孤独はこうした比較の絶好の機会を提供したが、今のわたしは清掃夫の納屋のマットレスの上だけでしかその孤独を楽しむことはできなかった。毎日何百という人々が『進め、ロシアー』党のオフィスのある建物の敷居をすりぬけ去っていった。

それはわたしの意識を苛んだ。実験のためにわたしに必要なのはかれらのうちの一人でもよかった。絶望的に病んだ時代の人間たちの集団ではなく、党の最も典型的なクロマニヨン人一人でもよかったのだ。そんなある日のことだった。突然わたしは党のある有力な専従の部屋に呼び出された。専従は訊ねた。「おい、赤毛、おまえはちゃんとした服を持っているか?」「おっしゃることがわかりかねます。ですが、中国製の上着は持っています」「それにいくら払ったんだ?」「四十ドルくらいです」「靴はどうだ?」「ベトナム製のジョギングシューズがあります」「価格は?」「八ドルでした」「それだけか?」「それで足りてます」「おまえ、そんなガラクタをどこで調達してるんだ?」「わたしは何も答えなかった。専従は運転手呼び出すと、高圧的な調子で言いつけた。「赤毛をカリグラ商店に連れて行け。おれがこいつの服を全部取り替えるように電話しておく。こいつをこんなペテン師じゃなくて、われわれの党の代表に見えるようにしなくてはならんだ。わかったか?」いま赤毛をそちに降りて行かせる」その後、わたしに向かつて、「十六時にシエラメーチェヴォ空港にエカテリンブルグからわれわれの客人が到着する。おまえは迎賓室ホールでストルゴフシコフ氏をお迎えせねばならん。氏はお一人ではないはずだ。たいへん力のある方で、わが党のスポンサーである。お荷物を車にお運びしたあと、ホテルにお連れして、くつろいでいただくのだ」専従は机から財布を取り出すと、三百ドルを抜き出してわたしの方に放り投げた。「取れ!」迎賓室にはバーもある。客人はコアントローが好きなはずだ。それと絞ったオレンジジュースを前もって注文しておくんだ。お姿に気付いたらすぐに駆け寄って『進め、ロシアー!』の者です。モスクワにようこそ』と声をかけるんだ。バーの女主人はそこですぐさま客

人に飲み物をお勧めする。随行員がウォッカとかウイスキー、コニヤックなんかを希望したら、すぐに注文するように。わかったな?」「承知いたしました。ですが、その方をどのように見分ければいいんですか?」「おまえ、テレビでストルゴフシコフ氏を見たことがないのか?」「申し訳ございませんが、ありません」「この田舎者!」パスポート・コントロールに行つて、五ドル渡すんだ。そうすれば教えてくれる。これで全部わかったな?」「はい、わかりました!」「新品を着ていることが、はっきりわかるように! それに、あんまりしゃべるな。おまえの仕事について尋ねられたら、駆け出しの実業家で、党の活動家だと言っておけ。雑巾だの^{ほうき}のという言葉は厳禁だ! わかったな?」「はい、承知しました」「運転手がおまえを待つておる。まずは身奇麗にすることだ。行け!」「カリグラ」で衣服と靴を揃えたあと、わたしは党の第一番目の任務に取り掛かった。迎賓室^{VIP}ホールはあまり大きくない部屋のように見受けられた。もちろん、国会図書館の閲覧室や『進め、ロシア!』党が多くの客人を接待する部屋に比べればの話だが。わたしは国境警備員に近付くと、五ドルを差し出して、助けを求めた。ありがたいことに、その男はストルゴフシコフの顔を知っており、ちゃんと教えると請合ってくれた。どうやら、わたしは本当に堂々としているように見えたらしく、人々はわたしに敬意を払い、また興味を懷いたようでもあった。わたしはコアントローとオレンジジュースのグラスを三杯頼んだあと、パスポート・コントロールから二、三メートル離れたところで、党の客人を待ち始めた。しばらくすると、中年の男性が満面に笑みを浮かべながらわたしの方にやって来た。頭が大きくスポーツマン風のがつしりとした体格をしていて、ヨーロッパの洋服で身を包んでいる。わたしは国境警備員のほうを見

た。隊員はわたしに、にっこりと微笑んだ。『ストルゴフシコフだ!』わたしは合図をその解として、男に向かって歩き出した。来客はわたしの方に大きく手を広げた。「やあ、どうも!」「こんにちは」「ところで、あんたは?」「ワシーリイ・カラマーノフと申します。『進め、ロシア!』党の者で、ビジネスをしております……」「どんな仕事をやってるんだ?」わたしはどう答えていいかわからず、口ごもった。が、かろうじて答えた。「貿易関係です……」「そいつはいい、結構だな。貿易は、ビジネスの花だ! わがロシアは今ゴールドラッシュだ! ところで、おまえさん、ちよつと手伝ってもらえないかな?」「もちろんです!」「聞いてくれ。おれはたった今パリから戻ったところだ。娘に靴をいくつか買ってやると約束したんだが、買う暇がなかったんだ。おれは明日の朝シベリアに発つて、新しい映画の最後の撮影にかかるつもりでいる。娘の靴のサイズは三十六だ。できたら、何組か、冬用のと、合いの靴を買ってきてくれないか?」その時バーの女主人が近づいてきて、盆を差し出した。「何があるかな?」「コアントローと新鮮なジュースでございます!」「コアントローは、おれの好みじゃない!」男は盆からジュースのグラスを取ると一気に飲み干した。バーの女主人は遠慮がちに微笑んだ。「おまえは『五つのD』^{ピヤーチ}という会社を知ってるか?」男は聞いた。「いいえ」「これがホテルの宿泊者証だ。おれの頼みを聞いてくれるか?」「はあ!」「オーケイ! いいか、娘の靴だぞ!」こう言うと、男はさっさと行ってしまった。「あなた、あの方をよく知ってるの?」バーの女主人が尋ねた。「いいえ、会うのは初めてです!」「有名な俳優で監督でもあるミケータ・ミハイロフを知らない人がロシアにいるの? あなた冗談を言ってるの? あなたにサインをもらつてもらおうと思つてたけど、もう頼まないわ!」

侮辱でもされたかのように女は言った。「いや、本当に、あの人に会ったのは初めてなんですよ……」そのとき国境警備員がわたしに手を振って、めかしこんで野心的な顔つきをした男の方を目で指し示した。「すみません、ストルゴフシコフさんでいらっしゃいますか？」わたしはその男の方に駆け寄った。「ストルゴフシコフはわたしだが」「進め、ロシア！」の者です。モスクワによろこそいらつしゃいました。コアントローをお勧めしてもよろしいでしょうか？」「コアントローはいつでも歓迎だ。ソーネチカ、おまえはどうするかね？」男は自分の同伴者の方を向いた。「何を飲もうかな……何を飲もうかなあ……レモンを一切れいただこうかしら」「レモンを一切れお願いします」バーの女主人に向かってわたしは言った。「砂糖漬けがよろしいかしら？」女主人は訊いた。「ええ、そうしてちょうだいな」ストルゴフシコフの連れの女は言った。バーで少し休んだあと、わたしたちはバルチュグ・ホテルへと向かった。そこでわたしたちは別れた。わたしはトルストイ通りのオフィスに戻った。支払い明細書を書いて、わたしに任務を依頼した専従の来るのを待った。空港でのストルゴフシコフとの会合を話してから机の上に残りの金を置いた。ミハイロフについては何も話さなかった。ミハイロフの飲んだジュースはわたしの金で支払いを済ませておいた。「おまえ、どこでこんなきちんとしたやり方を学んだんだ？」党員は驚きの声をあげた。「おまえはなんてやつなんだ！ おまえ、なにか、出世を望んででもいるのか？ 正直に言え、望んでるんだろ！」「いいえ」「じゃ、どうして支払いについて、たったの二行しか書かないんだ。それに、釣り銭までもつてきたりして。どうも、何か変だ！ 実に疑わしい！ もし代表団を迎えに行くやつらが、おまえのきちんとしたやり方を知ったら、おまえのわき腹をぶん殴るだろうよ。やつらなら、一回目の任務で三、四ページに及ぶリストを書き上げることだろう。二回目、三回目にはもうノート一杯に書いてくるはずさ。それなのにおまえときたら、たったの二行だ……。おまえにもう一つ別の任務を頼みたいんだが。おまえ、今週の日曜日にモスクワで市議会選挙があることは知ってるだろうな」わたしは黙っていた。それについて何の知識もなかったからだ。「それで、明日わたしの名前でヴィゴナ社に行つて、ウードチキン氏に面会するんだ。その方はおまえに五万ドルくれるはずだ。その金を親ファシズムの党『民族の怒り』のオフィスのポコールヌイ氏に持って行つてくれ。かれらはわれわれの対立候補を支援する大集会を組織するはずだ。金を渡して、やつらがどのようにこの集会の準備しているのか調べてくるんだ。わたしはこの行進のために使われるプラカード、ポスター、横断幕、ビラの数が何枚かということは何としても知らねばならんだ。やつらは通りに七千人ぐらい集めると言っておる。集会まであと二日での数字は可能なのだろうか？ 調べてこい。わかったな？」「はあ」「わたしに何か質問はあるか？」「申し訳ありませんが、あなたのお名前をお教えください。あなたがわたしの上司だということは承知しています。が、それ以上は何も……」専従はにやりと笑つて言った。「上司の顔を知っているだけはいかんな。わたしの名はクラーク・キン、ステパン・ステパーヌイ・クラークだ。わかったな？」「はい、わかりました」事務局でわたしはヴィゴナ社の住所を訊いたあと、オフィスを出了。わたしの清掃人の部署にはもう他の若者が配置されていた。『どうしてかれらはファシストたちの集会に資金援助をしてやるのか、それにどうして自分たちの対立候補を支持するのだろうか？』わたしは考えた。『どうやら、そいつの評判を落とすためらしいな。選挙民が対

よ。やつらなら、一回目の任務で三、四ページに及ぶリストを書き上げることだろう。二回目、三回目にはもうノート一杯に書いてくるはずさ。それなのにおまえときたら、たったの二行だ……。おまえにもう一つ別の任務を頼みたいんだが。おまえ、今週の日曜日にモスクワで市議会選挙があることは知ってるだろうな」わたしは黙っていた。それについて何の知識もなかったからだ。「それで、明日わたしの名前でヴィゴナ社に行つて、ウードチキン氏に面会するんだ。その方はおまえに五万ドルくれるはずだ。その金を親ファシズムの党『民族の怒り』のオフィスのポコールヌイ氏に持って行つてくれ。かれらはわれわれの対立候補を支援する大集会を組織するはずだ。金を渡して、やつらがどのようにこの集会の準備しているのか調べてくるんだ。わたしはこの行進のために使われるプラカード、ポスター、横断幕、ビラの数が何枚かということは何としても知らねばならんだ。やつらは通りに七千人ぐらい集めると言っておる。集会まであと二日での数字は可能なのだろうか？ 調べてこい。わかったな？」「はあ」「わたしに何か質問はあるか？」「申し訳ありませんが、あなたのお名前をお教えください。あなたがわたしの上司だということは承知しています。が、それ以上は何も……」専従はにやりと笑つて言った。「上司の顔を知っているだけはいかんな。わたしの名はクラーク・キン、ステパン・ステパーヌイ・クラークだ。わかったな？」「はい、わかりました」事務局でわたしはヴィゴナ社の住所を訊いたあと、オフィスを出了。わたしの清掃人の部署にはもう他の若者が配置されていた。『どうしてかれらはファシストたちの集会に資金援助をしてやるのか、それにどうして自分たちの対立候補を支持するのだろうか？』わたしは考えた。『どうやら、そいつの評判を落とすためらしいな。選挙民が対

立候補の「支持者」を知ってあつと驚くように。そうして、**かれら**の候補者に投票するようにするんだ。人間たちは本当に何というゆがんだ知恵を持っているのか！ だとしたら、**かれら**の選挙前の公約などというのはいったいどういう意味を持つんだろう？ 嘘つきの遺伝子は**かれら**の中で最も信じられない形で発達してしまったようだ』その日の夕刻をわたしはミハイロフ氏のために費やすことにした。清掃人の納屋に戻り貯金の一部を取り出して、サドーヴォエ環状並木道のプラネタリウムの近くにある靴屋に向かって小走りに歩いて行った。ただ単に好奇心を持ったのではなく、わたしはこの靴の実験を敬虔な気持ちで行ったのだ。人間の素材についてもう一つの見方を持つために、この話の詳細をことごとく思い出そうと努めながら。わたしの考えでは、それは早急な種の変形のために必要となるはずであつた。『ワシーリイ、この不思議なページがどのように終わるのか見てみよう。初めて会った人間に娘の靴を買うように頼むなんて。それに、依頼人はエリート社会を代表する人物だつた。なんといい素晴らしい筋立てなんだろう！』とわたしは思った。わたしは店員に自分は今まで女の子の靴を買ったことが一度もないと告げて、手伝ってくれるように頼んだ。「サイズはおいくつですか？」店員は訳知り顔ににっこりと微笑んだ。「三十六です」「三十六サイズの冬用の靴を試さずに買うのはちよつと危険です。小さすぎるといふこともあります。三十六と三十七の二足をお持ちになるといいかがですか？ どちらか一足、合わない方をお戻しくださいければけっこうです」「わかりました」わたしは合意した。つまるところ、店員はわたしに八足の靴を買うことに同意させたのだ。冬用の靴に、二つの異なるデザインのもの、二足ずつと、合いの靴にも、同様に二つのデザインのものを二足ずつ。『うまくも

したな。商品売りさばいて、回転を早くしたわけだ』そう頭の中をひらめいた。わたしはもうとつくの昔からわかつていたのだ。人間たちを既存の方法で変えることはどうあつてもできないのだと。『突然変異の停滞がこの種族を支配している！』わたしはにんまりと笑つた。五つのD商会は大コズロフ横丁にあつた。わたしはサドーヴォエ環状並木道の内側へと渡り、宿泊者証に書かれている住所の方角へとこのろろと歩き出した。その時だ、自分を真正のプチブリ人だと見なすために故郷に帰るのが必要不可欠なのではないかという考えが執拗にわたしを襲い出したのは、『なんだって？ プチブリの知り合い連中と肩をふれあつて共に暮らそうとでもいうのか？ だが、どうしてそれがいけないんだ？ わたしは人間になろうとしてるんじゃないんだ、**かれら**からプチブリ人を創り出そうとしているんだ』わたしの苦々しい幼児期の光景が容赦なくわたしの後を付きまとい始めた。だが、もし以前、といつてもそれは文字通り二、三年前のことだが、こうした光景がわたしに限りない苦しみと、**かれら**の少しでも早い消滅のためには何でもしてみせるという要求を引き起こしたとすれば、今のわたしはこうした人々に対して、いや人間一般に対して、哀れみと憐憫、そして軽い皮肉を感じるだけだつた。わたしの心の中には憎悪はもうなかつた。さながら**かれら**と肩を並べて存在するホモ・コスミカスというステータスを甘受したかのよう。成人し、多くの蘊蓄のある書物を読んで、わたしは**かれら**を研究するより、自分についてよほど多くのことを知つた。そうして突然自分の中にこれらの欠陥だらけの存在と自分を結ぶ、以前は気付かなかつた精神的な糸を見出したのである。いや、わたしの中に**かれら**に対する同情などというものはなかつたし、あり得るはずもなかつた。だが、もし今まで知恵がプチブリ人を

守り、意識のみがかれらを突き動かすのだということを確信していたとすれば、その時何か新しいもの、心の中の何かが突然開いたと言っている！ わたしは自分の中に心が、ある機能を持った臓器としての心臓ではなく、何かを感じ取るものとしての心というものがあるなどと考えたことはなかった。これはいったい何だろう？ それは、細胞に酸素を満たす器官としてではなく、何かを感じる一片の物質としてのそれは、ホモ・コスミカスにとってどれほど必要であったのだろうか？ 全世界ではなく周辺を、全宇宙ではなく自分自身を感じる物質などが必要なのか。わたしは自分の中に芽生えたやさしさや人間たちに対する寛容さは自分の中に『心が開かれた』結果だと考えている自分に気がついた。わたしはかれらを憎悪することはなくなった。ただかれらの未完成ゆえに皮肉を言うだけだった。かれらの欠陥は、別に何か悪い企みによるものでもないし、ホモ・コスミカスとかれらとの出会いは時期尚早であつたのではないかとも考えるようにもなつた。もしわたしがクロマニヨン人たちと百万年後に出会うとしたら、かれらの遺伝子構成は突然変異、つまり、自然そのものによって合理的に変えられているに違いない。そして、わたしは共に宇宙のどこかで快く共生することのできる、宇宙的な知性を付与されたプチブリ人に似た存在を見出すことだろう。それなのに、今わたしは誰に腹を立てようというのだ？ 自分が適当な時期にプチブリに現れなかったと云うて誰に文句を言えはいいのだ？ しかし、その時また別の考えがまるで最前の考えに逆らうかのように現れた。『もしすぐに人間たちを変えなかったら、一万年後にはもう誰にも会えないのではないか。誰にも聞こえず、要求されず、知覚もされない知性は自らを殺してその生を終えるだろう。こうしたケースはもう既に書かれていることだ。残念だ』

わたしかかれらを『わたしの無邪気な従兄弟たち』と呼ぶようになったのは、こうした思索のあとであつた。その時、わたしははっと我に返り、あたりを見回して通りの名前を確かめると、もうほとんど目的地に着いていることがわかつた。二つほど建物を通り過ぎると、わたしは既に大コズロフ横丁十一番地の建物の前に立っていた。守衛がわたしを迎えた。「どこへ行くんだ？」「ミケータ・ミハイロフ氏の頼みで靴をお持ちしました。お嬢さんの靴です」「おまえは誰だ、パスポートは持っているのか？」「セローフ美術館の清掃人の証明書を持っています」「おまえ、何だつてそんなに急いでるんだ、どこの清掃人だつて？ おまえ、五千ドルぐらいしそうなもんを着てるな！ おい、赤毛、袋を開けろ」守衛は棍棒に手を掛けた。わたしはポリ袋を開けた。守衛は靴を調べると、訊ねた。「おまえ、本当に清掃人か？」「そうです」「給料がよっぽどいいのか、それとも、絵を売りさばいてるのか？ おまえのところのセローフはいくらするんだ？」「そんなことは知りません。給料は普通ですし、絵を売買してもいません。セローフのカンバスがいくらかということも知りません」「おい、聞け。馬鹿話はやめだ。わかつたか？ もしかしておまえ、靴の商売もしてるんじゃないか？」わたしは思った。『未完成のものに腹を立ててどうするんだ？ この男はまったくなんにもわかっていないんだ。そうして、かれらは哀れむべき存在なんだというところがこの男のまわりの誰にもわかっていないんだ。不良品に腹を立てても仕方がないし、それを創ったものに犬をけしかけても仕方がない。自然に向かつて吠えてどうなるっていうんだ……』「で、通してくれるんですか？ それともここに靴を置いていきましようか？」わたしは守衛に目を据えた。健康そうな筋肉質の若者で、三十歳ぐらいだ。目は緑で、小さくて、まるで『進め、

ロシア!』の食堂のボルシチのなかのオリーブの実のような形をしている。頬骨が張っていて、口が大きい。そいのような顎。「なんだ、ねめつけやがって?」守衛は棍棒を腰のところまで持ち上げる。「待ちましょう」守衛はいやそうに受話器を取る。「ボスに靴を持ってきた者がいます。注文されたもんだということです。どうしますか? は、承知しました!」そのあと、わたしの方に受話器を渡す。「答えろ!」「どういうことですか? 事情をお聞かせください」受話器から男の声が聞こえた。「ミハイロフ氏がわたしにお嬢さんの靴を買うように依頼なされたのです。わたしはそれをお届けに参りました。それだけです」「袋の中にはいつているのは靴だけですか、何か他の物もあるんですか?」「他には何も入っていません。靴が八足入っているだけです!」「購入金額だけ受け取ったのですか? それとも釣り銭を置いていきたいのですか?」「金銭は全く受け取りませんでした。氏は冬用の短靴と合いの靴を買うように言われました」「どうしてまた八足も買ったんです? それに、誰のお金で?」「袋をお受け取りください。それとも、わたしをミハイロフ氏と話させてください」苛々してわたしは言った。「少々お待ちください……」。氏はただいまお忙しいようです。ですが、靴は守衛にお渡しくださるようになります」そのほかに何も言われなかったのですか?」「これ以上何かお聞きになりたいことがあるんですか?」「何かですって?……」だが、わたしはその時すぐさま受話器を守衛に渡して、買い物を床に置くと、通りに出た。このちよつとした逸話は少しでも早く人間たちの遺伝子に介入しなくてはという願望を強めたにすぎなかった。『なんて不幸せな者たちなんだろう。かれらは自分たちを客観的に見るということが全くできないんだ!』わたしは環状並木道をのろのろと自分の住むスタロヴァガニコ

ワスキー横一の方角に歩いて行った。履きなれない流行の靴を履いていたために足にはりがいくつかできていた。国会図書館前でわたしを党のメルセデスが拾って、ヴィゴーナ社まで送り届けた。そこでわたしは即刻ウードチキン氏の豪華な執務室に案内された。ウードチキン氏は一見三十五歳か四十歳といったところだった。短く刈り込んだ金髪、ほとんどめだたない頬髯^{ほおひげ}、落着きのない目、そして、上を向いた小さな鼻。『進め、ロシア!』、まあ聞け。おれはもうあんたたちの支部のスポンサーをするのにくたびれきっている。ステパーヌイチにおれの会社は官僚たちに四方から包囲されていると言っても言ってくれ。みんなが頼みごとを言い、しつこく頼み、はては筆^{むし}り取っていく。疲れた! 時には全部放り投げて、メキシコにでも行ってしまいたくなる。そこならビジネスのビの字もない! なのに、専門家だの頭のわるいの学者だのをどんどん送り込みよって……。本は出版してやらねばならず、フランスへの出張費は出してやらねばならず、それに、金銭的援助までしてやらねばならんだ。やつらは勝手に、誰が欧州共同体を考え出したのなんて言い争いをしてる。で、おれの方は金を払わなきゃならないんだ! 今現在、おれは投資会社の頭の空っぽの出世主義者の女——プリンキナとかムリンキナとかいったけ——その女に捕まっている。あんな女なんか××に送り込んでやりたい。今はそのミーティングの真つ最中だ。金は持って行け、でも年度内はこれ以上おれのことを当てにしないでほしい。もしステパーヌイチが官僚やら専門家たちの包囲網を解かないようなら、来年おれはどこか他のもっと居心地のいい所に落ち着くからな。今言ったことをちゃんと覚えて、逐一おまえのボスに報告するんだ」男は包みをぞんざいに机の上に置いた。「約束通り、袋の中には五万ドル入っている。さっさと取る

んだ！ 質問はあるか？」「ありません。すべて承知しました。ではもう行ってもよろしいんですね？」「金を受け取るまではウードチキンやまかがしのまわりをまるで山棟蛇やまがしのようにくるくる回って、金を受け取った途端、気違いのように全力疾走で消え去るというわけだ。他に何か言いたいことはあるかね？」「申し訳ございません。ウードチキンさん、わたしはただの使いの者です。他に何も任されてはおりません。ですが、あなたのお言葉は確かにクラークンにお伝えします。何か他にわたしにできることはございますか？」「何もない！ 使いの者に言うことなぞあるかね？ それにしても、おまえ、海外のジェントルマンみたいな格好だな！ では、さようならだ！ ステパーヌイチに官僚と何の役にもたたない学者どものために働くのはもう御免だと、しつかり伝えておいてくれ、忘れるんじゃないぞ。あんなやつらはみんな××に送り込んでしまえ」『もしかしたら、自分は普通の人間ではないのか、ただほんのすこし気違いじみている程度の？』突然わたしにはそう思われた。『いや、ほんの少しじゃなくて、完全に気が狂っているのかもしれない。そうして、ホモ・サピエンスなる種族が破産状態だという考えもすべて、わたしの病的な想像の産物なのであるまいか。見ろ、わたしの母親は麻薬中毒者で、父親は殺人者だ。人間たちの目からすればわたしは根っからのでき損ないか何かなのだ！ かれらはわたしについて、わたしが自分について知っているよりずっと多くのことを知っているのかもしれない。わたしを受け容れてくれるところなどないし、誰かがどこかへわたしを招待してくれたことなど一度もない。女の子の中の誰一人としてわたしと知り合いになろうとはしなかったし、若者の中の誰一人としてわたしと話をしようとしなかった。図書館の中にはあんなにたくさんいるのに！ もちろん、店の中にも

やつら——そこには何百人という若者がいる——に比べればほんの少数だが、それでもいることはいるのだ！ 図書館の中にいるやつらはわたしに気付かないし、美術館で働いているやつらは何年ものカラマーノフを避けている。劇場からは追い出された。わたしは「進め、ロシア！」党のオフィスで何ヶ月にもわたって床をピカピカに磨き、窓やトイレの便器を磨き、花を飾ったりにしていた。それなのに、誰もわたしに注意を払う者はいなかった。ミハイロフは靴を買うように頼んだ。なのに受け取りさえしなかったし、ありがとうとも言わなかった。それに、代金を払ってもしなかったんだ！ かれらは口を揃えたようにみんな、わたしを白痴であるかのように扱うんだ。感情のない存在、ロボットに向かうように言うんだ。「それをくれ、こっちへ持って来い、あっちへやれ、ここを掃け！」「ワシーリイ・カラマーノフは他に何ができるのか？」こうしたことすべてが、なんてよくあいつらの本性を表わしていることか！ かれらはわたしの中に頭の空っぽな人間、クレチン病患者しか見ないのだ。かれらの中のわたしと同年代の者たちのうちに、嬉々として道を掃いたりする者などいるか？ 失敗者だ！ 精神的に病んでいるのだ！ 欠陥者だ！ 見ろ、他の者は財産や、社会的な地位や、パーティーの場所や、性的快楽を求めるのに躍起きになっっているじゃないか。わたしは誰なのか？ もしこうした願望がわたしを少しも動かさず、また、かれらがロシア人のなかでも最もロシア的な者たちだとしたら、かれらはわたしをどう扱うのだろうか？ わたしを誰だと思うのだろうか？ ああたまらない、自分が本当に気違いであるというこの感覚！ ひよっとしたら、わたしが気違いであることを示す例の理想を捨てて、わたしの無邪気な従兄弟いとこたちの生活の中に幸せをみつけたほうがいいのではないか？ 現在の生活の中

に？　つまり、将来について思い惑うこともなく？　狂人だけが何世代も後になって実現される計画について思索することができるのかもしれない。いつか、どこか、未知の場所で！　普通の人間は自分に与えられた時間の中ですべてを受け取る事を夢想する。かれにとつて未来とは何か？　過去は意味を持つのか？　まったくのところ、知性をあおりたてるのなんかよして、かれらの存在の原則でも受け容れたほうがいいかもしれない。それはそれほど難しいことではないはずだ！　金を稼ぐやりかたはもう既に学んだ。わたしが参謀本部の玄関で使った手口は、かれらの間ではいつだってどんな階層でも見られることだ。みんなが将校を、年金生活者を、郵便配達夫を、すべての所轄官庁の役人たちを、そして、国全体を欺いているのだ。金持ち！　巨大独占資本家！　美人！　見ろ、どれだけ嘘つき野郎が社会にのさばっていることか。社会はそいつらで膨れ上がっている。そうして、やつらは必要とされているのだ。スクリーンで、広場で、そして、クレムリンでも！　かれらのために頌詞しょうしが書かれ、詩や音楽が作られ、かれらは大臣や、参事官や、国民俳優に任命される。わたしも試してみようか？　もしうまくいったとしたら？　会社「私ヤ」の創始者であるワシーリイ・ダニーロヴィチ・カラマーノフ、実業家カラマーノフ、博士、ロシア科学アカデミー会員、名誉法律学者、世界的水準のスポーツ選手、「進め、ロシア！」党最高理事会会員、総主教側近、政府議長と企業のエリートたちとの会見の常連、社会運動「質的復興」の主なるスポンサー、雑誌「見識の高み」の編集スタッフ、国会議員、連邦政府の大臣、モナローフスカヤ、ポカマーダ、ロリーナの愛人、「アレグロ」銀行理事会副議長、市長の友人、イレズネフ上院議員の飲み友達、安全保障理事会の書記官顧問、巨大独占資本家の私生児養護施

ロイセーエフの妖術師、ピロノーフの親友、ダボス世界経済フォーラムの常連、ロシアの巨大雇
用者のためのメーデー祝宴幹事！　さあこうしたところだ！　カラマーノフは会員になれるだ
ろ
うか？　このワシーリイ・ダニーロヴィチを愛するようになるだろうか？　仲間内のパーティー
に呼んだり、お茶に招待したり、羊肉シヤシルイの串焼きをご馳走したり、唇にキスをしたり、かれのベッ
ドに忍び込んだり、バツカスへの讃歌を共に歌ったり、名誉ある称号を与えたりしてくれるだ
ろ
うか？　だがそもそも、これらすべての楽しい暇つぶしに対する二者択一ということ自体がひど
く疑わしい！　あいつらの見方からすれば、これは単に気違いじみた選択にすぎないのだ。マッ
トレスの上で、すりきれた古着くるに包まって、むさくるしい納屋に住んで、たいして有名でもない
著者の書いた本を読み、プチブリ人の新しい遺伝子構成について思索に耽ふけり、常に実験をし、検
査にあけてくれている、寡黙な清掃人に何か魅力的なものなどあるだろうか？　そのすべてに何か
心をそそるものなどあるだろうか？　自分の人生をこんな人生と取り替える用意のある者などい
るのだろうか？　一つ目の人生を二つ目の人生の名のもとに軽蔑できる者などいるのか？　わた
しがひきずつている影のような、哀れな存在を好む人間などいるだろうか？　自分の私ヤにへびこ
つらう以外の何か別のことに従事するだけの強い精神力と大きな意志とをいったい誰の中に見出
せるというのだ？　人間の世界の誘惑を忘れ、見せかけの派手さに注意を払わず、贅沢を無視し、
高位顕職を軽蔑し、富には興味を持たず、女性の前では心を閉ざし、賞賛には耳を貸さず、外見
を屁へとも思わず、この世の強者にも擦り寄らない、こんなロシア人がいるとでもいうのか？　そ

クラークンになさるべきかと存じます」「そうか、ところであなたはお金をお持ちかな?」「はあ」「いくら持つとるのかね?」「五ドルか七ドルです」「それをわれわれにいただきたい! わが党の支出は莫大なんだ。七万人を結集するなんて、冗談じゃない! あんたの金を出してくれ。お願いだ!」わたしは五ドル札を差し出した。「あんた確か、七ドルって言ったね。それなのになった五ドル! どうしてわれわれへの出費を節約しようとなさるんです? 革命は高くつくのです!」わたしは全く別のことを考えながら、もう二ドル渡した。が、ポコールヌイはしゃべり続けている。「吾輩はロシアの復興という理想に無条件にわが身を捧げておるのだ。わしが一番腹を立てているのは巨大独占資本家どもだ。やつらは現在農民に分与された土地を買い占め始めておる。大地主どもをいったいどうすればいいんだ? やつらの数は千三百万人以上だ! 『金持ち用の強制収容所を!』これがわが党の選挙前のスローガンだ。あんたには呼びかけの規模の大きさがわかるかね」男の甲高い声がわたしを現実にも連れ戻した。「クラークン氏はおたくが集会への準備をどのようになさったのかお知らせになりたいようでした」「われわれは五万ドルでできるだけのことを準備している。それ以上のことはできない! あと五万ドル加えてくれ、そうすれば十万七ドル分の準備ができようというもんだ。そうお伝えするんだ! プラカードが十三枚。プラカードではわが党の制服を纏った女子職員が、当落線にあるあんたがたの対立候補パレナーゴにキスをしておる。『わが党とともにパレナーゴはロシアと全世界を改革する』と書かれた横断幕が五十枚。ポスターは百枚用意した。パレナーゴがわが党の黨員とともに歩んでおるといふポスターだ。ポスター上ではパレナーゴは党の制服を着て堂々とした姿をみせており、『民族の怒り』党の候

補に投票しよう!』という書き込みがしてある。満員かね? クラークンに伝えるんだ、われわれははつきりとしたアジェンションを二倍に増やすこともできるんだと。そうすればあんたがたの対立候補にチャンスは全く残らない。投票が行われる地区でのわが党の支持率は三パーセントだ。われわれの大衆にあらずだ。わが党は他の地区、他の階層で強みを発揮する。これはあんたたちに何を意味するのか? つまるところ、パレナーゴは五パーセント以上の票は集められない! あんたがたの候補が市議会に当選する。勝利を祝うんだ! あと五万ドルで、すべてに片が付くんだ。クラークンにそう伝えてくれたまえ」わたしは黨員の情熱的な語りを静かに聴いていた。男には言葉を捜しあぐねることがまったくなく、まるで暗誦された文句のように滑らかに話した。「わかりました」こう答えて、わたしは半地下の建物から通りに出た。人間における遺伝子装置の完全な混乱の教訓的なサンプルをわたしはポコールヌイの例の中に見出した。かれらの精神的な現実の深淵があまりに醜悪で予知ができないだけにわたしをうんざりさせた。わたしはあらためてプチブリ人にあつては知性こそがすべてを支配すべきであると思った。二十分後にわたしはもう『進め、ロシア!』の党事務所にいた。わたしは一時間ほどクラークンを待たなくてはならなかった。クラークンは何かの会議の演説原稿を用意していたのだ。わたしはウッドチキンとポコールヌイとの会見の次第を報告した。クラークンはわたしの話にはほとんど耳を貸さず、電話でなにやら話をしていった。そうして何かの折にわたしの話の腰を折った。「ワシーリイ、よく聞け。おれは悩み苦しんでるやつらのうめき声には全然興味はないんだ。ウッドチキンにわれわれの勘定を払ってもらうのはやめだ。やつとのビジネスはおしまいにしよう。話は簡単でいい。

クラークンになさるべきかと存じます」「そうか、ところであなたはお金をお持ちかな?」「はあ」「いくら持つとるのかね?」「五ドルか七ドルです」「それをわれわれにいただきたい! わが党の支出は莫大なんだ。七万人を結集するなんて、冗談じゃない! あんたの金を出してくれ。お願いだ!」わたしは五ドル札を差し出した。「あんた確か、七ドルって言ったね。それなのにたった五ドル! どうしてわれわれへの出費を節約しようとなさるんです? 革命は高くつくのです!」わたしは全く別のことを考えながら、もう二ドル渡した。が、ポコールヌイはしゃべり続けていた。「吾輩はロシアの復興という理想に無条件にわが身を捧げておるのだ。わしが一番腹を立てているのは巨大独占資本家どもだ。やつらは現在農民に分与された土地を買い占め始めておる。大地主どもをいったいどうすればいいんだ? やつらの数は千三百万人以上だ! 『金持ち用の強制収容所を!』これがわが党の選挙前のスローガンだ。あんたには呼びかけの規模の大きさがわかるかね」男の甲高い声がわたしを現実に戻した。「クラークン氏はおたくが集会への準備をどのようになさったのかお知りになりたいようでした」「われわれは五万ドルでできるだけのことを準備している。それ以上のことはできない! あと五万ドル加えてくれ、そうすれば十万七ドル分の準備ができようというもんだ。そうお伝えするんだ! プラカードが十三枚。プラカードではわが党の制服を纏った女子職員が、当落線にあるあんたがたの対立候補パレナーゴにキスをしておる。『わが党とともにパレナーゴはロシアと全世界を改革する』と書かれた横断幕が五十枚。ポスターは百枚用意した。パレナーゴがわが党の黨員とともに歩んでおるといふポスターだ。ポスター上ではパレナーゴは党の制服を着て堂々とした姿をみせており、『民族の怒り』党の候

補に投票しよう!』という書き込みがしてある。満ちかね? クラークンに伝わるんだ、われわれははつきりとしたアジェーシジョンを二倍に増やすこともできるんだと。そうすればあんたがたの対立候補にチャンスは全く残らない。投票が行われる地区でのわが党の支持率は三パーセントだ。われわれの大衆にあらずだ。わが党は他の地区、他の階層で強みを発揮する。これはあんたたちに何を意味するのか? つまるところ、パレナーゴは五パーセント以上の票は集められない! あんたがたの候補が市議会に当選する。勝利を祝うんだ! あと五万ドルで、すべてに片が付くんだ。クラークンにそう伝えてくれたまえ」わたしは黨員の情熱的な語りを静かに聴いていた。男には言葉を捜しあぐねることがまったくなく、まるで暗誦された文句のように滑らかに話した。「わかりました」こう答えて、わたしは半地下の建物から通りに出た。人間における遺伝子装置の完全な混乱の教訓的なサンプルをわたしはポコールヌイの例の中に見出した。かれらの精神的な現実の深淵があまりに醜悪で予知ができないだけにわたしをうんざりさせた。わたしはあらためてプチブリ人にあつては知性こそがすべてを支配すべきであると思った。二十分後にわたしはもう『進め、ロシア!』の党事務所にいた。わたしは一時間ほどクラークンを待たなくてはならなかった。クラークンは何かの会議の演説原稿を用意していたのだ。わたしはウッドチキンとポコールヌイとの会見の次第を報告した。クラークンはわたしの話にほとんど耳を貸さず、電話でなにやら話をしていった。そうして何かの折にわたしの話の腰を折った。「ワシーリイ、よく聞け。おれは悩み苦しんでるやつらのうめき声には全然興味はないんだ。ウッドチキンにわれわれの勘定を払ってもらうのはやめだ。やつとのビジネスはおしまいにしよう。話は簡単でいい。

わが党の前にはそういうやつらが列をなしているんだ。われわれがやつらを求めるんじゃない。やつらがわれわれに選挙資金を受け取ってくれと頼んでくるんだ。まったく、そうでなくちゃならんだ！ ファシストの提案は面白い。パレナーゴを徹底的に打ち負かすためには、要求の額をあのポコールヌイに支払わねばならん。おれには時間がない。だから、よく聞け。おれの電話なしでウードチキンのところへ直接出掛けて行って『民族の怒り』党のための資金を要求するんだ。もしやつが断るようなことがあったら、クラーキンがビジネスを取りやめると脅おどしていると言っても言つてやれ。やつはきつと必要な金額を出すだろうよ。そうして、金をファシストのオフィスに持って行くんだ。この件についてはこれでおしまいだ。その後、『基本的直感』印刷所に行くように。プレスニャ河畔にある。そこでパレナーゴを支援するビラ七万枚と三万五千ドルを受け取るのだ。注文の割り当ての移動だ。ビラの制作費はわが党のスポンサーである信託会社『マモン』が支払いをする。これを全部コンサルティング会社『ヤミンとその娘たち』に持って行け。やつらは日曜の朝までに地区全域で車という車のフロントガラスにそのビラを貼り付けてくれると約束した。ビラには特別の糊のりを使用するからそう簡単には剥はがせないようになっておる。ふふふ、ここには腹黒いやり方が必要なんだ。こうしてわれわれの対立候補のパレナーゴは長く選挙民の肝臓に突き刺さることになる。その後、ゴルピニツツのところへ行け。住所は運転手が知っている。そいつから爆発物の入った箱を受け取って『わが祖国』党と選挙民との集会の開始時刻に間に合うよう持つて行くんだ。集会は『ロシア』ホールで行われることになっている。そこで爆発物入りの箱をルイロボイシコフに渡すように。おまえはその人を知っているはずだ。よく十

四号室でぶらぶらしてるからな。集会が始まってからさっさと十五分後に箱を爆発させるように念を押せ。心配には及ばない。本物の爆薬とはまったくかけ離れた代物しろものだからな。特別のガスだ。ひどい悪臭を放つ。全員が頭くその先から糞の一杯つまった穴蔵に入り込んだような具合になるはずだ。一分としないうちに参加者全員があちこちに逃げ去るだろうて。集会はもうめっちゃめっちゃあいつらの選挙民の票はわれらのよりぐっと少なくなることだろうて。さあ、行け。おれはもう行かねばならん。明日の朝、首尾を報告するように」わたしは執務室から出て、自分の小部屋へと降りて行き、椅子に腰を下ろした。『これがかれらの典型的な生き方なんだろうか？ ここにかれらの政治倫理があるとでもいうのか？ エリート階級のイメージがこれか？ 階級が高ければ高いほど、モラルがひどくなる！ 新しいロシア人が裕福であればあるほど、かれらの行動は不道徳になる。刑務所やラーゲリの中でさえこんな背信行為にはお目にかからなかった！ やつらのところから逃げ出さねば。即刻、孤独へと避難せねば』わたしは外国製の流行の服を脱ぎ捨て、ネクタイをはずし、ワイシャツのボタンをはずし、短靴を脱ぎ捨てて、ほっと一息ついた。自分は、確かに一時的なものではあるけれど住み慣れた環境の中に戻ってきたという感覚が沸き起こってきた。新しいプチブリ人的な生活への願望が全身をこれまで以上に執拗しつように包んだ。だが、内なる声がわたしをなだめた。『カラマーノフ、待つんだ！ もう少しだけ我慢しなくてはならない。すぐ、今すぐにすべてが始まるだろう』しつかりした足取りで、次の行動に移ること、容認された境界を踏み出して自分を発見するぞという決意に満ちて、わたしは『進め、ロシア！』党のオフィスを永遠に後にした。自分のあばら家に戻る途中、補足的実験を行うためにある期間学

者の間で時を過ぎそうと思ったことをわたしは突然思い出した。かれらは新しいことを何か与えてくれるだろうか？ また、どの学問を選ぶべきか。わたしのプログラムの中でかれらの有用性を理解するためには、学問のある人間たちとの交際のエピソードが一つか二つ必要だった。数学者のところに行くべきだろうか？ これは漠然としていて手間もかかる。物理学者のところはどうか？ 『非対称性のテンソル界のコンセプトの同一性』あるいは何か他のテーマについての実験をするという資格で？ だが、権威ある物理学者たちは、かれらの中枢機関への特別な通行証を持つてゐるはずだ。それを得るために一カ月はゆうにかかる。わたしには時間を無駄にすることは許されない。遺伝子学者たちの門戸をたたくというのはどうか？ 思うに、かれらは非常に保守的で、沼地のようにどろどろしているかもしれない。そこから抜け出るのもそれほど簡単なことではないだろう。それに、これもやはり時間がかかりそうだ。生物学者、化学者、経済学者はどうか？ 経済学者たちが、最も移動の可能性がある。それに、かれらと直接接触する必要はまったくないのだ。コンピュータの統計を選んで、鉛筆を取って分析をまとめる！ 今は二〇〇四年の四月の初めだ。つまり、二〇〇三年の所轄官庁の統計的な数字はもう出ているということだ。そこで、テーマは『ロシアにおける二〇〇三年度の経済成長の分析』となる。論文を書いて、いくつかの研究所に持って行き、検討してもらうように申し出る。やっぱり、接触があるじゃないか！ いや、それはわたしにとって必要なことなんだ。つまり、全く新しい遺伝子の花束を作るためにかれらの特徴やら有益性の程度が研究できるわけだ。よし、これでいい。随分と早く結論に達したな。さっそく明日仕事にかかることにしよう。図書館のインターネット・ホールに行っ

て指標の動きを観察し、論文の資料を作るんだ。そう考えながらわたしはスタロヴァガニコフスキイ横丁のあばら家まで辿り着き、政治的策士たちの社会とこんなに早く手が切れたことに安堵を覚えながら、マツトレスの上に倒れこんだ。その時、社会の色々な階層の中で清掃夫が最も独立した職業だという考えがふと浮かんた。もつとも、わたしにはこのような結論を出す資格はないのかもしれない。中庭や通りを清掃する自分の同僚たちを一人として知らないのだから。その後、わたしの想念はみるみる拡散していき、何かはつきりしない、短い、透明な幻想へと形を変えて行つた。わたしのまわりを無人の空間が取り巻いた。そして遂にわたしは目の前に汚物溜めの穴をはつきりと見出した。そうして誰か聞き覚えのない声が執拗にわたしに命令した。『おい、赤毛、始めるんだ！』『こいつ、何を言おうとしてるんだ？』わたしは思った。そう思う間も声は続いた。『この三メートル四方の穴をきれいにしないうちは、おまえにはプチブリ人の帝国は見ることはできない！』最初はとまどいながら、わたしは両手で我とわが身をしっかりと掴んだ。『わたしを脅かそうとでもいうのか？ わたしは人間ではないのだ。仕事なんか恐れるもんか。三メートル四方の穴だって？ いったい、どのぐらいかかるんだろう？ 二時間、三時間、それとも五時間か？ 生物学上の進歩のためなら何でもするぞ！ もしお望みなら、百年かけてでもきれいにしてみせる！』プチブリ人の深い集中力はわたしが熱心に粘り強く働くことを可能にした。右にも左にも人間たちの残留物の山が堆積していった。むっとする匂いは耐え難いものだった。一年以上も経ったかと思われたが、穴の中の糞はすこしも減る様子がなかった。それどころか増大していった。そうして聞き覚えのない声はどこかに消え去り、わたしのまわりには人っ子一人い

なくなった。が、わたしはそれでも働きに働き続けた。糞の中に腰までつかりながら、わたしは遂にこう考えた。どうしてわたしはこのシーシュポスの仕事にかかずらわなくてはならないのか？ これは何を暗示しているのか？ 誰かがわたしにプチブリ人の世界はいつまでたっても来はしないというシグナルを送っているのか？ ナンセンス！ われわれの世界は来るに決まっている！ こんなことをしてもやつらの得るものは何もない。こうしている間にも糞はわたしの喉の高さまで達した。四方は見渡す限り悪臭を放つ糞の海が広がっていた。戦いを続けるために、また、すべての者に、分けても自分自身にホモ・コスミカスとは知性の発達の新しい発展段階であることを示すために、わたしは泳ぎ始めた。熱心に力の限り泳いだ。悪臭を発する自然との戦いは果てしなく続いた。夜と昼が何万回となく交代した。だが、体力はわたしを見捨てるところか、いや増しに増してきた。遂に西方の水平線上に一筋の青い線を見つけた時、わたしにはそれが蜃気楼しんきろうなのではないかと思われた。だが、この一条の線に近付くにつれ波の音やカメメの鳴き声が聞こえ始め、海からの塩分を含んだ微風も感じられた。わたしには透明な太陽の光を浴びた海水が、イルカイルカの戯れたわむが、飛び魚の飛翔が見えていたのだ。わたしは思った。『これがあの、人間たちの糞尿ふんにょうとプチブリ人たちの天国の木々の茂みとの境なのだろうか。生物学上の種においては、去り行く者たちと、次に来る者たちとの間には何もはつきりとした境はないのか？ ひどい悪臭を放つ黄色いどろどろした溶液が途切れたかと思うと、文字通りすぐそこから素晴らしいプチブリ人たちの世界が始まるとは？ これはつまり、われわれの間には一歩の違いさえないということか？ わたしはそれほど人間たちに近いのだろうか？ 二つの種族、ホモ・サピエンスとホ

モ・コスミカスとが濁り水の中で共生できるような中間地帯というものは存在しないのだろうか。人間のいくつかの特色をなくし、プチブリ人のすべての特徴をまだ備えきれずにいる種族が現れるような中間地帯というものは存在しないのだろうか？ ロバと馬の間にはラバが、タイガとツンドラとの間には森林ツンドラ地帯が、魚類と哺乳類との間には両生類が存在し、昼と夜との間には黄昏たそがれがあるではないか。どうしてクロマニヨン人とプチブリ人との間には何も存在しないんだ？ だがしかし、ネアンデルタール人とクロマニヨン人との間にも何も存在しはしなかったんだ！ 数千年の間かれらは共存し、そのあとネアンデルタール人は絶滅したのである。どうやら人間から正真正銘のプチブリ人を創り出すためには千年は必要らしい。だが、もし重要な課題——寿命を著しく引き伸ばすこと——が解決できないとしたら、わたし一人でどうしてこれを成し遂げることができるだろう？ 自分には時間が決定的に足りないのだ！ そうだ、蜘蛛くもを例にとってみよう。蜘蛛がプチブリからウラジオストクまで行き着くには千年の月日が必要となる。おい、カラマーノフ、もう少しきちんと計算しようではないか。この二つの町を隔てているのは、八千キロで、つまり八百万メートルである。ごく普通に家の中で見られる蜘蛛が一日に移動できるのは十メートル、よくて二十メートルというところだろう。いずれにしても、この蜘蛛が八万メートル移動するには千百年から二千二百年ぐらいかかるということだ。だとすればこのわたしにしても、いったいどこからこの時間的な資源を調達することができだろうか？ それを解決するには、不死を手に入れるしかない。で、わたしがたった一人で解決するのか？ そうだ！ いまは確かに一人だ。だが、わたしはたった一人で永遠のように思われた時間の中を人間の糞くその海

からプチブリ人の海洋へと辿り着いたではないか！ それに途中でホモ・サピエンスの手助けなぞ少しも感じなかったではないか！ 未来の社会には人間なんか絶対に必要とはされないのだ！ わたしがまず真つ先にかれらの前に遮断機を下ろすことだろう。かれらは進化の呼びかけに応える状態にはいないのだ！……。だが、待て、蜘蛛をマツチ箱に入れて飛行機でラジオストックまで運ぶことだってできる。そうすればラジオストックまで十時間とかからないじゃないか！ つまり、わたしもまた最新技術を駆使して突然変異を加速させ、自分の生きている間に不死を手に入れることができるということだ。自分のためだけにそうするのか？ もちろん、そこではかれらのうちの誰一人としてわたしには必要ではないのだ！ だが、わたしが嬉々として読みふけている本の作者である老齢の学者たちはどうするんだ。ジェームズ・ワトソン、ビクター・マキュージック、ジョゼフ・ステイグリッツ、イリヤ・プリゴジン、ロバート・マートン、レオニード・コロチキン、アレクセイ・アブリコソフ、ユーリイ・アルトウホフ等、まだ何十人、何百人という数の老齢の学者たちがいるのだ。かれらをいったいどうすればいいのだろうか？ かれらの思想に感嘆しながら、かれらの不在に気付かずにいるとでもいいのか？ 一滴の同情も注がず、自分自身が喪失を悲しむこともなくかれらを永遠の虚無の中に送り出そうとでもいうのか？』その時、わたしの中で再び内なる声が目を覚まし、こうした感情がまったくプチブリ人的ではないこと、そうしてこの難題に何とか妥協案を見出さなくてはならないと告げた……。だが、岸はいったいどこなんだろう？ どこへ向かって泳げばいいのか？ 岸まで、ただどのくらいあるのだろうか？ それとも、真のプチブリ人になるためにはまず水の中で生息する

ことのできる存在にならねばならないのか？ ところが、この思いがけない考えは、わたしを少しも驚かせはしなかった。それどころか、誰からホモ・コスミカスを模るのかと考えるのはよくそ笑みさえした。まわりにはわたし自身以外は誰一人としていなかったのだ。ワシーリイ・カラマーノフからしかできないとでもいうのか？ もし状況が必要とするなら、喜んで呼び出しに応じようじゃないか！ わたしは青海原の上を泳ぎ続けたが、岸はなんとしても見えてこなかった。だが、わたしには慰めなどいらなかった。一人で果てしない海の広がりの中にいるということが愉快ですらあったのだ。わたしはこの光り輝く無限を制服し、その知的な支配者となることを夢見ていた。プチブリ人ワシーリイ・カラマーノフはいままで一度も物質的な豊かさを夢見たことがないということをおかねばならない。金銭や高価な品々、その他の財産がわたしの興味を惹いたことは一度としてない。もしモスクワでもどこかの町でも、そこでの生活に別れを告げることになったとしても、わたしには捨てなければならぬものは何一つなかったのだ。細々としたアクセサリーにあふれた居心地の良い家もなかったし、そんな家を持つとと夢見たこともなかった。わたしには必要のないものだったのだ。あばら家での禁欲的な環境が、純粋なプチブリ人的思考を絶えず刺激し、孤独への絶えざる願望を満たしてくれたのだ。けれども、知性の偉大さ以外は、どんな偉大さもわたしには時代錯誤の代物にすぎなかった。ホモ・コスミカスにとつて贅沢とか名誉とかに何の意味があるというのか？ 贅沢とか名誉は、わたしの無邪気な従兄弟たちを有頂天にすることができたのだ。わたしたちの遺伝子には贅沢とか名誉への願望は組み込まれていないというだけなのだ。そこに何か誇るべきものなどあるだろうか？ そうして

もう一つ、ちょうどその時わたしは自分が稀に見る才能を身につけていることに気付いたのである。それは何も食べないということ。わたしは海の水は飲んでいたが、すこしも塩辛くはなかった。そうして、他には何もほしいと思わなかったのだ。こうした状況はわたしをひどく喜ばせた。プチブリ人は採算の取れるものでなくてはならないという自分の予測を思い起こした。そうしていま自分自身の中でその予測が実現されているのだと感じた。これほど自分を喜ばせる状況は考へることもできなかった。わたしはこれまでひたすら完全な孤独に憧れ続けてきたのだ。そうしてそれが今手に入ったのである！ 完全な孤独！ 無限の孤独を手に入れたのだ！ その思いが目覚ましの音で断ち切られた。わたしは目を覚ますと、いやいやながら、なんとか目を開けた。そうしてわたしが現実だとばかり思っていたことが夢に過ぎなかったことに気付いて薄笑いを浮かべた。意識が次第にはっきりしてきて、わたしは完全に目を覚ました。そして身支度を整えて、朝食を取ると、仕事に出かけた。美術館の中庭を掃除していた時、わたしは自分がロシアの経済状態についての分析をしようとしていたことを思い出した。そして当惑のようなものを感じた。この計画は現実自分が考え出したものなのだろうか、それとも夢に見たものなのか？ この疑問に対するはつきりとした答えはなんとしても見つからなかった。『記憶の混濁だろうか？ 新し何かがわたしの頭の中で起こっているようだ』仕事を終えると、わたしは納屋に戻り、身体を洗い、着替えをして、国立図書館に向かった。わたしは自分の論文に『過失の危機にあるロシア経済』と題した。二週間の間わたしはこの論文に没頭した。粘り強く統計学を学び、数字を分析し、改革の経過を考察し、管理部門の再編成の可能性について考えた。数多くの資料を集め終え

た後は、仕事の自由時間をいつも自分のあばら家で過ごすようになり、古いコンピュータを使って懸命に論文を作成した。経済的な分析と社会評論的な考察がわたしの論文の基本だった。そこにはとりわけ表現豊かなところも印象深い点もあるわけではなかった。それは独立した調査であり、今日のロシアには絶対的に不足している、客観的で妥協のない論文であった。論文を書き終えると、わたしはコピー用紙を買求めた。わたしはインターネットは使ってなかった。そうして、何部か印刷した後、いくつかの科学調査研究所と新聞の編集部を尋ねることにした。プチブリ人の仕事を首都の専門家たちがどのように評価するのか興味津々だった。多くの中央新聞の編集部は首都の中心部に位置していた。つまりワレンチン・セローフ美術館のすぐ隣にあったのである。報知社^{ヴェスチ}まで歩くのに十五分もあれば充分だった。編集部の入り口で守衛が呼び止める。「どなたにお会いになるんですか？」「編集部に行きます」わたしは答える。「ミハイル・ボジョーキン氏にじきじきに会われるのですか？ あなたをお待ちなんですか？」「いいえ、こちらにわたしの知り合いは一人もいません。経済の論文を持参しました。新聞に載せていただきたいのです」が「それなら、電話の方どうぞ。問い合わせの電話番号はパネルの上に書いてありますので」わたしは所定の番号に電話をした。女性の声が論文を玄関に置いておくようにと言った。「わたしがあとで下りて、自分で引き取っておきます。数日後にご連絡ください」女性の声はこう告げた。その後、わたしは首都^{スタリーチヌイェ・ノボスチ}新報社に向かった。編集部は報知社^{ヴェスチ}の向かいにあった。その後、いくつかのロシアの全国紙も尋ねた。が、編集部員は誰一人としてわたしと会ってくれようとはしなかった。どこでも、論文を玄関に置いておくようにと、報知社と似たり寄ったりの対応をした。

『どうやら、やつらはワシーリイ・カラマーノフなどという無名の作者に何が書けるもんかと高^{たか}を括^{くく}っているようだ』という考えが頭をよぎった。次の日、わたしは経済研究所に行き、その後、財政科学調査研究所、世界経済研究所をまわり、移行期経済研究所へと向かった頃には、もう一日が終わろうとしていた。これらのセンターの科学的研究員たちと接触をはかる試みの成功率はどうやらゼロに近いように思われた。電話での会話はたいいひどく短いものだった。「こんにちは、ロシアの経済状況に関する分析的論文を持参しました。目を通していただければ幸いです」と、わたしが言いかけるや否や、次のような短いコメントが聞こえてきた。「こちらでは論文の査読は有料サービスとなっております。論文一ページにつき二十ドルいただきます。ご持参の論文を読むだけでしたら一ページにつき二ドルいただきます。まず次の点をご確認ください。料金に御異存はございませんか。次に論文のページ数をお知らせください」思いがけない質問にどう答えてよいかわからず、わたしは口ごもった。まったくもって、学者の世界に参入するのに金を払わなくてはならないなどと考えもしなかったのだ！ここで会話は途切れた……。自分の住んでいる国に、わたしはますます怒りを募らせていった。わたしには自分を取り巻くこの世界を瞬時に変えることができないのが残念でならなかった。自分の清掃人のつましい家へとゆっくりと歩を進めながら、わたしは改めて現在人間たちが陥っている深刻極まりない危機について考えた。モラルについて話しているのではない、かれらを待っているのは生物学的破綻なのだ！数日後、わたしは報知社に電話を掛けた。聞き覚えのある女性の声がぞんざいに言い放った。「ああ、カラマーノフね。論文は読ませてもらいました。でもあんまりにも膨大で。十五ページもあるでしょ

う。これは新聞の一面全部に相当するわ！全面に掲載となると、どうしても三万ドルから五万ドルいただくことになるわ。それで、編集の者とはもう話をしたんだけど、一万二千ドルであるたの論文を掲載することに同意してくれたわ。現金を持ってきてくれれば、二日後には掲載することができるわよ。もしもし、あなた、聞いているの？」ぶるぶると震えながら、わたしは受話器を置いた。どうして自分はこのことを書いたんだろう。掲載してもらうのにこんな多額の金が必要だなんてどういうことだ？論文の中にホモ・コスミカスの商品の宣伝でもあるというのか？それともやつらはプチブリ人化に対してわたしが報酬を取ることを、論文の行間に読み取りでもしたのか？そうしてその報酬が五桁のドルに算定されるとでもいうのか？わたしは自分の論文の中のいくつかのパラグラフを思い出して、事態がどうなっているのかを再度理解しようと努めた。わたしは書いていた。『現今のロシアの経済情勢を分析するにあたり、わたしには秘められた誘惑や悪意などというものは一切ない。政府の経済政策の重大な過失に初めて人々の注意を向けようという気にわたしがなった動機は、市民的感情の中に、すべてのロシア人がゆるやかにではあるが、入って行こうとしている意識と心の状態の中に見出せることだろう。この感情の中には、美徳の精神と民族の運命に対する痛みが透けて見えることだろう。』新聞はこんな文章を載せるのに金を取るものだろうか？いや待て、やつらは別の段落に請求書をつきつけようと決めたのかもしれない。『ロシアは今最悪の危機にある。われわれは書籍を開くことも少なくなり、ゴーゴリやドストエフスキイやトルストイを忘れようとしている。われわれはチャイコフスキイやムソルグスキイやショスタコーヴィチの音楽を聴こうともしない。ブリュローフやヴェレシヤ

ーギンやレヴィターンの絵画に感動することもなくなってしまった。われわれはもはやパブロフとかランダウ、ヴァヴィーロフ、タムなどの偉大な名前を思い出すこともない。われわれはまたカラムジンやソロヴィヨフやクリュチエフスキイを知ろうとしなくなっている。われわれはロシア人の精神は非文化、非政治、非科学、非経済を必要としていると確信している有様だ。若芽が酷寒に弱いように、学問的なもの、永遠なるもののすべては、われわれには有害なのだ。だが、このような有様で今後、われわれは自足した豊かな国に住んでいると真面目に語ることができようか？』このように明確に表現された考えがやつらを挑発し、ドルを要求させたのだろうか？現代のロシアは何百年にもわたって存在した秩序を変えてしまった。かつて専門家は自分の仕事に対して報酬を受け取った。だが、今では、どうやら、自分の考えを述べる権利に対して税が課されるようだ。これは、新しい文明の開花の徴しるしなのだろうか、それともその凋落ちようらくの徴なのか？だが待て、ことによると、この分析的な論文の中にわたしがはつきりと経済学者らしくないとわかる用語をいくつか加えたことに問題があるというだけのことだったのかもしれない。もしもわたしの論文がすべて以下のように書かれていたら、編集部はまた違った態度を取っていたかもしれないのだ。たとえば、こんな具合に。『もし仮に工業生産の変動を地域ごとに切り取って観察するならば、まったく驚くべき現象が明らかになる。工業生産の増加の大部分は石油とガスの産出地域とモスクワとペテルブルグにおける金属の生産が保障している。首都は国内工業の発展の四十パーセント以上を保障した。ちなみに、モスクワにおいては石油化学、薬理学、石油機械建設などの石油産業関係の部門が最も著しい成長を遂げている。ペテルブルグにおける工業成長の二

十六パーセントは輸取引における膨大な軍需品の発注によってなされた。ロシアのほぼ全域にわたって生産の停滞が観察されている。わが国はますますベネズエラやナイジェリア型の石油黄金郷エルドラドの観を呈するようになってきている。首都や石油生産地以外の場所を支配しているのは生産力の低下と暗澹あんたんとした赤貧なのである』わたしにはどう考えても一万二千ドルという料金の意味が理解できなかった。これだけの金を払って、連日発行される新聞に論文を掲載するのが、学者にとってどれだけの得になるのだろうか？その時、わたしはもう一つの段落を思い出して考えた。どうやら、ロシアでは政府関係者への批判に対して筆者は新聞に金を払わなければならないらしい。例えば、次のような一節こそが報知社の編集者に金儲けの意欲をそそったに違いないのだ。『短期国債・連邦債の総額は二〇〇三年の末までに約三百億ドルに達する。短期国債・連邦債の発行速度が加速されるという近年の傾向がこのまま続くなら、四年後には一九八八年の半ばに債務不履行に陥る直前に記録した国債残高を示す財政上のピラミッドよりも一・五倍高いピラミッドが記録されることになるだろう。債務不履行とそれが経済に及ぼす破壊的な結果を政府は既に忘れてしまっている。最も不思議なことは、国家によって発行される有価証券による新しいピラミッドを作ろうとする要求がまったくなくことである。一九九四年から一九八八年にわたって続々と発行された短期国債・連邦債の発行は官僚たちによって連邦財政の赤字を覆い隠す手段としてなされたものであった。しかしながら、こうした時代は過ぎ去った。現今、財政は年々剰余金を生み出しているのだ。こうした状況で、公債を増加させつつ新しい財政ピラミッドを作り出す必要がどこにあるのか？国はこれに対するなんらの回答も出してはいない』かれらの世界は

まったくもってビザンチン帝国の秘密と逆説に満ち満ちていると自分を慰めた後、わたしは一層慎重になって首都新報社に電話を掛けた。トクチャーエフとか名乗る人物が新聞社の財政問題や不透明な会社の将来やらについて話した。わたしは急いで受話器をおくと、途中で会話を終えたことに胸をなでおろした。また商業的な申し出を聞かされてはたまらないと思った。ひよっとしたら、それは杞憂きゆうであつたのかもしれない。が、ではどうして編集部の台所事情などを聞かされなくてはならないのか？ 他の新聞社にはもう電話さえしなかった。わたしの論文『過失の危機にあるロシア経済』がどこにも掲載されなかったところを見ると、わたしの判断は正しかったようだ。わたしの仕事は金銭的は興味を呼び覚ましただけだった。誰もがドルを要求した。学者やジャーナリストとの実験の結果、わたしはもう最終的な結論に達していたのだ。文化的な危機とは、人間たちの遺伝子的混乱が外面に現れたに過ぎないのだと。わたしの『人間世界への参入』の体験は何物も生み出さずに終わった。正確に言えば、それはプチブリ人にとって何か有益なものがかれらの中に見出せるかどうかを知りたいという希求から始まった。そうしてかれらの世界との交流体験のすべてが次のことを実証した。『かれらの中には「有益なもの」は何もない、もしくは、ほとんどない』と。その時わたしはどういうわけかヘルベルシュタインの格言を思い出した。『ロシア人は驚くべき儀礼を守っている。身分の低いものは馬に乗って高官の誰彼の門に乗りつけることは許されない。無名の貧乏人にはごく普通の貴族に目通りすることすらかなわない。貴族たちが民衆の前に姿をあらわすことは、ほとんどない。自らの威信と自分たちへの尊敬の念を保つためである』この観察は、二百年前になされたものだ。しかしながら、人間は旧態依

然として自分自身には属していない。自分の遺伝子構成の奴隷なのである。かれらにまだ何か秘められたものがあるのは事実だ。が、基本的なところはすべて明らかになったし、どうしても知りたいと思わせるものは何一つとしてないのだ。ただ一つだけどうしても答えの見出せない点がある。わたしがその知識に驚嘆した偉大なる書物の筆者たちをどうすればよいのかという問題だ。ところがその時思いもかけない推測がわたしを震撼しんかんさせた。『だが、もしかしたら、他の人々もならぬかの興味深い考えを持っているのかもしれない。ただかれらの生活習慣が嫌悪を起こさせるだけなのではないか？』そこで、しごく当然の結論が生じた。思考のプロセスを司る遺伝子と、生体の環境への反応を決定する遺伝子との間には、巨大な懸隔けんかくが存在すると。どうやらここにこそかれらのついに変わることのない欠陥の謎がありそうだ。思考は常に感情と闘っている。心の妨害にあつて知性はどうしても完全に開かれることがなく、自分の力を示すことができないでいる。知性にはまるで鍵が掛けられたような状態で、心の靈氣がその飛翔を妨げているのだ。わたしの課題は、この欠陥のコードを取り去ることだ。そうだ、確かにここから始めなくてはならないのだ！ 翌日、わたしは自分の重大な仕事に着手せねばならないという強烈な願いとともに目を覚ました。この願望はもうだい以前からあつた。だが、正直なところ、今までわたしはいつたいどこから始めるべきなのか、わからなかった。どこに最初の釘を打ちこめばよいのか？ その時、全く予期しなかった考えが頭に浮かんた。すべての『賛成意見』と『反対意見』を分析する裁判所の審理が必要であると。その時わたしは驚いて自分自身に問うた。だが、もし仮に人間たちのプチブリ人化のプログラムがわたしの意識にだけ存在しているとすれば、何のためにそれ

をするのだ？ もし誰もこれについて知らず、また知ることもしできないとすれば、誰が原告になるんだ？ いや、どうやらわたし自身が原告であるらしい。匿名で、人間という仮面を被ったわたし自身だ。では、弁護士は誰だ？ やはり、わたし自身がそれになるうではないか。弁護士の長いマントを羽織って。では、検察官は？ わたしが肩章の付いた窮屈な検察官の制服を着ようではないか。では、裁判長は？ それもわたし自身だ。白い巻き毛の鬘を被り、高い背もたれのある肘掛椅子に座ろう。だが、誰が証人になるのだ？ わたし自身がすべての事件の鍵穴を盗み見る地区警察署長になってやろう。では、誰が被告になるのだ？ これもやはり中国製の上着とベトナム製の靴を履いたわたし自身だ！ 審理はいつ始まるのか？ 今すぐにだ！ これからすぐ、通りの最後の清掃にとりかかろう、そして着替えをして、わたしのスタロヴァニコフスキイ横丁のあばら家が裁判所になるのだ。六人の参加者すべてが突然拍手し始め、にっこりと笑い、まるでこの決定を待ち望んでいたぞとも言わんばかりに軽く舌打ちをした。どうやら、かれらは自分たちが、わたしの想像の中に存在しているだけだということをすっかり忘れていらしい。驚いたことだ！ 想像の産物を人間たちに変えると、すぐにかかれらは自分たちの固有の権利を主張し始める。だが、このワシーリイ・カラマーノフはあなたがたを制止する力を探し出してみせる！ わたしは自分の調査には法的なステータスが必要だと確信していた。最終的なコンセプトを採択するためには、裁判の決定が必要なのだ！ 大胆で確固とした行動をとるためには、判決が必要なのだ！ 誰にも決してわたしのことを出しゃばりだと言わせないようにするために！ なんだか、わけのわからないことを思いついて、無意味なものを交絡させたり、相容れないものを混ぜ合わせたり、悪臭を発するものと芳香を発するものと混ぜ合わせたり、純粋なものと汚れたものを混ぜ合わせて一つのカクテルを創り出しては、突然変異の変種だといって大騒ぎをしているなどと人々は言っているらしい。わたしは俄然として清掃の速度を早めた。少しでも早く法廷に出るために。急がなければならなかったのだ。ついにすべてが明白になった。すべてが整然と論理立てられ、意識も落ち着いた。これまでの固有の私の探求は、子供のころからあれほど待ち望んでいた平安を得たように見えた。わたしは法廷へと急いだ。が、心は驚くほど平安だった。わたしは今日という日がわたしの困難な探求の終着点であり、わたしの終生をかけた事業の進展に強烈な刺激を与えてくれるだろうことを確信していた。どうか被告人のわたしには言うべき事があるのだということ疑わなくてくれ！ が、わたしには非難を聞く用意もあつたのである。いや、弾劾でさえも聞く用意があつたのだ。わたしは自分の納屋に駆け込むと、衣類を脱ぎ捨て、洗面台で顔と両手を洗い、清潔なシャツとジャケットを着て、自分の赤毛を梳きつけると、大声で厳かに宣言した。「起立願います！ 開廷いたします！」全員が自分の席から跳び上がった。この瞬間からわたしの存在がすべて裁判のプロセスに属することになった。わたしは質問者にも回答者にも測定の基準はただ一つ、突然変異の流れであると信じていた。また、遺伝子構成がそれに並び、あとの法的、倫理道徳的な構成要素は意識の中に永遠に消え去るものと考えていた。検事は面倒くさそうにちよつと腰を上げて、あくびをすると、また腰を下ろし、雑誌『赤の広場』の続きを読み出した。高い背もたれのある肘掛椅子に陣取った裁判長が真つ先に口を開いた。「ご列席のみなさん！ 本日の法廷ではロシア市民イワン・スペシフツェフのロシア市民ワシーリ

をするのだ？ もし誰もこれについて知らず、また知ることもしできないとすれば、誰が原告になるんだ？ いや、どうやらわたし自身が原告であるらしい。匿名で、人間という仮面を被ったわたし自身だ。では、弁護士は誰だ？ やはり、わたし自身がそれになるうではないか。弁護士の長いマントを羽織って。では、検察官は？ わたしが肩章の付いた窮屈な検察官の制服を着ようではないか。では、裁判長は？ それもわたし自身だ。白い巻き毛の鬘を被り、高い背もたれのある肘掛椅子に座ろう。だが、誰が証人になるのだ？ わたし自身がすべての事件の鍵穴を盗み見る地区警察署長になってやろう。では、誰が被告になるのだ？ これもやはり中国製の上着とベトナム製の靴を履いたわたし自身だ！ 審理はいつ始まるのか？ 今すぐにだ！ これからすぐ、通りの最後の清掃にとりかかろう、そして着替えをして、わたしのスタロヴァニコフスキイ横丁のあばら家が裁判所になるのだ。六人の参加者すべてが突然拍手し始め、にっこりと笑い、まるでこの決定を待ち望んでいたぞとも言わんばかりに軽く舌打ちをした。どうやら、かれらは自分たちが、わたしの想像の中に存在しているだけだということをすっかり忘れていらしい。驚いたことだ！ 想像の産物を人間たちに変えると、すぐにかかれらは自分たちの固有の権利を主張し始める。だが、このワシーリイ・カラマーノフはあなたがたを制止する力を探し出してみせる！ わたしは自分の調査には法的なステータスが必要だと確信していた。最終的なコンセプトを採択するためには、裁判の決定が必要なのだ！ 大胆で確固とした行動をとるためには、判決が必要なのだ！ 誰にも決してわたしのことを出しゃばりだと言わせないようにするために！ なんだか、わけのわからないことを思いついて、無意味なものを交絡させたり、相容れないものを混ぜ合わせたり、悪臭を発するものと芳香を発するものと混ぜ合わせたり、純粋なものと汚れたものを混ぜ合わせて一つのカクテルを創り出しては、突然変異の変種だといって大騒ぎをしているなどと人々は言っているらしい。わたしは俄然として清掃の速度を早めた。少しでも早く法廷に出るために。急がなければならなかったのだ。ついにすべてが明白になった。すべてが整然と論理立てられ、意識も落ち着いた。これまでの固有の私の探求は、子供のころからあれほど待ち望んでいた平安を得たように見えた。わたしは法廷へと急いだ。が、心は驚くほど平安だった。わたしは今日という日がわたしの困難な探求の終着点であり、わたしの終生をかけた事業の進展に強烈な刺激を与えてくれるだろうことを確信していた。どうか被告人のわたしには言うべき事があるのだということ疑わなくてくれ！ が、わたしには非難を聞く用意もあつたのである。いや、弾劾でさえも聞く用意があつたのだ。わたしは自分の納屋に駆け込むと、衣類を脱ぎ捨て、洗面台で顔と両手を洗い、清潔なシャツとジャケットを着て、自分の赤毛を梳きつけると、大声で厳かに宣言した。「起立願います！ 開廷いたします！」全員が自分の席から跳び上がった。この瞬間からわたしの存在がすべて裁判のプロセスに属することになった。わたしは質問者にも回答者にも測定の基準はただ一つ、突然変異の流れであると信じていた。また、遺伝子構成がそれに並び、あとの法的、倫理道徳的な構成要素は意識の中に永遠に消え去るものと考えていた。検事は面倒くさそうにちよつと腰を上げて、あくびをすると、また腰を下ろし、雑誌『赤の広場』の続きを読み出した。高い背もたれのある肘掛椅子に陣取った裁判長が真つ先に口を開いた。「ご列席のみなさん！ 本日の法廷ではロシア市民イワン・スペシフツェフのロシア市民ワシーリ

イ・カラマーノフに対する訴訟の審理を行います。原告イワン・スペシフツェフから法廷に提出された訴訟内容は以下の通りです。イワン・スペシフツェフはワシーリイ・カラマーノフ氏が政府の承認なしに独自に、人類を遺伝子的に変化させようとする実験を行っており、この実験はロシアの法律に違反すると確信しているというものです』『この偽名は何だ、へあわて者^{スペシフツェフ}だなんて？ 何かもう少しいい名前を思いつけたのではないか』——ふとこう思った。「この件に関して当法廷は」裁判長は続けた。「問題の本質についての原告被告双方から事情聴取を行う必要があると考えます。まず、スペシフツェフ氏から始めてください」わたしは長い象牙の柄の付いた拡大鏡を机にかけた緑のラシヤに沿って動かしている裁判長の両手を見ながら、わたしの無邪気な従兄弟^{いとこ}たちの知性を信じようと努めていた。だが、原告はひどく当惑しているように見えた。原告はまた首都の口やかましい官僚に瓜二つだった。ロシアのすべての生活様式を管理しようとする官僚にそっくりだったのである。そのせわしないそぶりはどうしたらそこで金を稼ぐことができるかまだはつきりとわかっていない収賄者だと、自分の素性^{すじよう}を暴露していた。ところが、この男は長らくあちこちに脱線していたあげく、どうやら鉅脈を探し当てたらしく、元気づいて話の核心に入った。「わたくしは次のようなデータを持っています。ワシーリイ・カラマーノフは幼少のころより人々を嫌悪し、どうしたわけか自分を『プチブリ人』あるいは、ホモ・コスミカスという名の卓越した存在であると思ひ込み、ロシア政府の許可も得ようとせず、わが同胞の遺伝子のモデルを変換することを目的に、自分の全人生を突然変異の公式の探求に捧げたのであります。スタロヴァガニコフスキ横丁の自分の私的実験室においてカラマーノフ氏は少しでも早くこの

プロセスに集中的な変化を与えんと欲しているのです。わたくしはロシア法の権利の主体として、人類に対する野心的で、科学を語るこの企画に断固として反対するものであります。わたくしは当法廷がカラマーノフ氏による人類の遺伝子構成への干渉を差し止めるよう要求するものです。ロシアは遺伝子工学の実験のために既に数多くの科学研究所を有しているのです。ヴァヴィーロフ記念生物遺伝子研究所、ロシア連邦ロシア科学アカデミー総合遺伝学研究所、遺伝学微生物品種改良研究所、またこの他にも幾多の調査施設が存在するのであります。熱意あるモスクワの一清掃人の調査が遺伝学においてわれわれに何か新しいものをもたらすともいいうのでしようか？ 中等教育すら満足に受けていない田舎者に？ この男のしていることはすべて、われわれにとっては致命的なことなのです。繰り返して言います。みなさん、全く致命的なのであります！ この男には任された区域の清掃を続けさせればよいのです。ワレンチン・セローフ美術館の床を磨き続けさせるべきなのです。そのほうがわれわれにはよほど有益なのであります。清掃人としての技術も習得し、仕事にも慣れ、勤続期間も充分に満たし、報奨金も受け取っております。この男に休暇を与えるべきなのです。黒海沿岸の保養地アナパにでも行かせればいいんだ。海風がゴミの詰まったこの男の頭をすぐにでも清めてくれるにちがいない。頭の中にゴミがつまった清掃人は、靴のない靴職人のようなものであります！」ここで原告は呵^か呵^か大笑^{たいしょう}した。うまく諭^{たと}えたもんだといわんばかりに！「休暇は労働法にも明記されておるのです。この男は労働法を犯しているのです。清掃人として働いてきたこの数年間にこの男は一度として休暇をとったことがないのです。美術館には罰金を課すべきなのだ！ 法の違反に対して、経営の各主体は罰

金を払う義務を有するのです。この男については、休暇のあと自分の仕事場にもどり、結婚してアパートを買い、子供を育てるという、ちゃんとした人間としてつましい生活をさせればよいのです。わたくしはこの男がこの馬鹿げきった反人類的な計画を、考えることすらも禁ずることを要求するものであります。この男は、**われわれ**を嘲笑^{あざわら}おうとでも考えたのでしょうか？ この男は何者なのでありましょう？ 清掃人ではありませんか？ わがロシアにはこのような馬鹿者は星の数ほどおるのであります。馬鹿者とは、いくら独創的なところがあつたとしても、やはり頭が足りないのだということは誰もがはつきりと知っていることであります。馬鹿者たちは、たいてい刑務所かアルコール中毒か治療不可能な精神障害で一生を終えるものであります。裁判長殿！ わたくしはあなたと共に、このおとなしく無害な人間であり、すぐれた労働者でもあるこの男を間違つた気違いじみた思想から救い出してやりたいのです。この男を野放しにし、法的な権限をあたえるなら、この男は、われわれすべてを絞殺するに違いないのです！ 子供や老人たちが可哀想だとは思わないのですか！ もしもわたくしの深い確信が一顧^{いっこ}に価するものでありますなら、いま一度声を上げて申し上げたい。カラマーノフはロシア社会にとって危険極まりない人物なのだ。この男の実験を法的に禁ずることを求めるものであります。わたくしの申し上げたいことは以上です」静寂がその場を包んだ。誰もが思い思いに自分の最も確信している論議を反芻^{はんすう}しているように見えた。**かれら**はわたしの想像の産物というよりはレフ・トルストイやミハイル・ブルガーコフの小説の中に登場する人物たちに似ていた。検事はあちこちあたりを見回しながら、熱心に、というよりはわざとのように上着からふけを払ったり、手で耳の穴をはじった

りしていた。弁護士は骨身を惜しまず、綿密に一字一字入念にメモを取っていた。どうやらそれは弁論の原稿か、自分がこれから審理の参加者の顔に投げたいと思っている反論を文章化しているもののようなだった。書きながら弁護士は出席者のほうをあらゆる悪意をこめて見やっていた。警察官はといえば、逆に、けだるそうに目をつむり、自分が最高の気分であることをはつきりと表わしていた。法廷の参加者など自分には全く関係がないというふうにも見えた。だが、これはまったくの嘘で、机の下で地区警察署長の右手は人差し指と中指の間から親指がしっかり出ていて、その先は弁護士に向けられていた。裁判長は左手で自分の頬をはじきながら、考え込んでいた。法廷の第一人者がとるべき落ち着いて賢明な態度を示そうとしていたのであり、終始沈黙を守っていた。裁判長のつまらなそうな顔つきはわたしに警戒心を起こさせた。『この人物にはわたしの意識の中にどんな火山が荒れ狂っているのかわかっていないんだ！』ついに、裁判長はわたしの方にまるで思い出したかのように鋭い視線を投げると、言い渡した。「被告の証言を許します。カラマーノフ氏、どうぞ。本件の本質について何か申し述べることがありますか？」「裁判長殿、最も重要な点から始めたいと思います。わたくしは自分がだいたい以前から人類を少しでも早く遺伝子的に変化せしめるといふ考えを心の中ではぐくんできたことを、当法廷にもロシア社会にも隠すつもりはありません。わたくしにはこう考えるに至つた理由がいくつもあるのです」「あなたには自分が神や国家の大統領であるかのように話す権利は何もない！ カラマーノフ、あなたは清掃人だ！ わたくしは抗議する！ 被告にはこのような宣言をする権利はない。つまり、人間という種族を変える理由があるなどということを宣言する権利は何もないのです。このよう

な公開の発言は法廷を侮辱するものと見なすべきです！」検事がわたしの発言をさえぎった。「裁判長殿」弁護士がすばやく立ち上がった。「法廷の審理を続けるために、われわれがカラマーノフ氏に申し立ての場を提供しない限り、この錯綜した事態を説明することはできません」「賛成です！」裁判長は言った。「被告、続けてください」わたしは地区警察署長の方をちらりと見やった。机の下からは相変わらず、中指と人差し指の間から親指を突き出した、むくんだ右手が弁護士の方を向いていた。『この男は何が言いたいのだろうか？』わたしは思った。『いや、法廷はまだ始まったばかりだ。しばらく様子を見てみよう』自分の意見を陳述する前にわたしは考えをまとめようと思った。頭の中にはきら星のように何千という表現豊かな考えが充満していた。ある考えは他の考えより乱暴だったりした。が、経験を積んだ映画監督が撮影済みのフィルムの中から不要なものを捨て、有用なものを選び^えすぐるように、知性はそれらを公平に眺め回していた。つまり、わたしは思考に際しては怜悯で、議論に際しては熱く燃えた。「裁判長殿、学者たちが農産物、例えば、とうもろこし、小麦、大豆、サトウキビなどですが、こうした農産物の遺伝子操作に携わっている時、社会の抗議がないのはどうしてなのでしょう？ 社会はなぜ沈黙しているのでしょうか？ いや、社会の人々はただ黙っているだけではなく、遺伝子操作された農産物を自分たちの食事の一定量の中に積極的に取り入れているのです。文明史上いまだかつてないこのような行為、つまり、十万年以上もかかってできあがった穀類やフルーツ、そして野菜の遺伝子の操作をかれらにさせたものはいったい何なのでありましょうか？ また、遺伝子操作の結果、パンの味は変わったのでしょうか？ ジャガイモをゆでることはできなくなったのでしょうか？ サト

ウイビから砂糖を採取することができなくなったのでしょうか？ いまではアブラナから油をとることができないのでしょうか？ ソバ畑からミツバチが蜜を集めなくなったのでしょうか？ そうではないのです！ 問題はすべてがもとのままだということなのです。遠い昔と同じだということなのです！ ここに最大の不幸があるのです！ 裁判長殿！ ロシアにおいて権力が完全に経済学者の手に落ちて以来、人間の遺伝子の構成は限らない収益性の攻撃にさらされているのです。収益性の向上はひとえに需要の動向の水準によっているのです。需要が多ければ多いほど、また支出が少なければ少ないほど収益性は向上するのです。このようにして、経済の法則はまだ発達しきっていないわが無邪気な従兄弟^{いとこ}たちの遺伝子の構成をゆがめ始めているのです。かれらの知性は低下し始めています。流行を追う現象がこの生物学的種族の基本を支配してしまったのです。人間たちは増え続けています。かれらの数は常に増大し続けています。が、知性の容量は減少しているのです。知性は乏しくなってきたのです。ここにこそ不幸があるのです！ 小麦が少ない費用でより多く収穫できるように、アブラナが一ヘクタールにつき四トンではなく、十トン採れるように、大豆から四十三パーセントではなく八十パーセントの油が搾り出せるように、その遺伝子进行操作しなくてはならないのです。人間たちについても同様の操作が必要なのです！ 人間が収益性の高いものになるために、また、テレビ画面の助けもなく、自主的に宇宙をわがものとする高い知性の呼びかけに応ずるようになるために、また、知性が自分や家族や同胞だけではなく、多くの飢えて貧困に苦しむ人々をも養うことのできるような状態であるために、また、人間がより少なく食べたり、飲んだり、息ができるようになるために、また、予期せぬ気

温でも快適だと感じられるように、最後に、人間たちが不死になる、つまり、最高の収益性のレベルにまで到達できるように、人間たちもまた遺伝子の修理と改良とが必要なのであります」すべての不快なもの、人間的なもの、ほんの子供のころからわたしの中に嫌悪を催させた憎むべきもの、それらが数知れず絡み合ったものに心を奪われることは近頃では、ほとんどなくなっていた。わたしは思った。『これは即ち、かれらの行動について考えることが少なくなったせいだ。かれらにはわたしの少しでも早い介入が必要だという結論に達した後は、かれらの生活の仕方に興味を持つことは、ほとんどなくなった。既に診断は下りたのであり、この生物学的な種族を研究する意味はもうまったくないのだ。十二分の知性を持った者などに会おうことがあろうか、誰かわたしと対等に概念に関する議論をすることのできる者がいるだろうか、地球の住人にはこんなものは不要だ、こんなことすべては出鱈目^{でたらめ}だとはつきり主張できる者はいるだろうか？ 人間たちのうちの最良の者たちの書籍を紐解き、かれらの思想をよく考えてみるがいい、そうして生活の現実を捨象するのだ。生活の実際は偽善的で、醜悪なほど自堕落だ……』「裁判長殿！ 自然界には、新しい生物学的な種族、即ち、ホモ・コスミカスを創造しようとするわたしの意志を抹殺することのできる手段は何も存在しないのです！ わたしの計画が犯罪であり、わたしのプログラムが遂行できないものであり、わたしの思想が不道德だとわたしに説得できる知性はこの世に存在しないのです。わたしが生物学的な種族の完成について述べているのだとすれば、いったいどの点が誤りであると言いきれるのでしょうか？ 自己充足的なものについて、知性の新しいレベルについてわたしは話しているのです！ わたしは宇宙全体に住むことになる超人間的な存在

在であるブチブリ人について話しているのです。人間は自ら自分の可能性の限界を踏み越えることを望まないのです。それはなぜなのでしょう？ わたくしはそれを研究しているのです。需要と消費の遺伝子に追い込まれてしまった者たち、かれらはわたくしの助けを借りてこの農奴の隷属状態から解放されるべきなのであります。そこにはなんらの障害もないのですから。かれらに足りないのは強い希求と探求、そして成功への確信だけなのです。あなたがたのベルナツキイは書いているではありませんか。『ホモ・サピエンスは意識の完成ではない。完全な思考器官の所有者ではないのだ。それは存在の長い連鎖の中間にある一つの輪にすぎない。だが、存在の連鎖は過去を有し、そして、間違いなく未来もまた有することだろう！』ツイオルコフスキイはまたこう続けているのです。『有機体の進歩は途切れることなく続いてきた。その進歩が人間で途切れてしまうことはあり得ない』もしわたくしの計画を支持してくださるなら、裁判長殿、あなたの前には永遠の未来が立ちあらわれることでしょう。それがいつのことなのかはわかりません。たった今であるかもしれません。今日この日かもしれませんし、あなたの一生のうちのいずれかの日であるのかもしれません。あなたに希望を託し、偉大なる事業に誇りを持って、わたくしの証言を終えることにいたします」「きみ、まったく気の利いたことを言われましたな」当惑したように裁判長は述べた。「どう申せばよろしいのか？ 困りましたな！ 訴訟の審理を続けなくてはなりませんまい。事態はまだはつきりとはしておりません。検事殿、どうか、あなたのご意見をお聞かせください」検事は唇を突き出して、椅子に座ったまま出席者をじろりとにらめまわすと、わたしの方をなにやら憎々しげに見やって、腹の上で手を交叉させると、大きな声で話し始めた。

「皆さん！ わたくしは仕事柄、精神病院を訪れることがたびたびございます。そうして、わたくしは、自分のことをモーツァルトやナポレオン、ヘーゲル、スターリン、イエス・キリストの弟子、ジリノフスキイであると思い込んでいる精神病患者に一度ならず会わなくてはなりませんでした！ わたくしどもはカラマーノフ氏の相貌に、やはりまたそうした偏執狂的な状態を読み取るものであります。法廷の審理を続けるために、わたくしは精神鑑定の必要を強く主張するものであります。わたくしたちが裁こうとしている人物が病人であるのか健康な被告であるのかを知る必要があると考えます」「まったく、なんて素晴らしい考えなんだ！」原告が席から飛び上がった。「わたくしは検事殿の考えに完全に賛同いたします！ ついでに所得証明書も手に入ればいいんだ」「裁判長！」弁護士が椅子から立ち上がった。「わたくしの手元には、わたくしが弁護を引き受けた被告が全く健康であることを確認した精神科医の判定がございます。この書類を提出してもよろしいでしょうか？」「どうぞ。この件についての追加資料とします。検事殿、もう終わられたのでしょうか？」「いいえ、終わっておりません！」「では、どうぞ……」「われわれは皆この手の証明書の値段は充分承知しております！ それを発行した診療所の名前を言ってください。そうすれば、わたくしがこの医学的判定のためにお支払いになった額を言い当ててみましょう。偽造文書です！ が、ともかくもわたくしの意見を続ける必要があるかと考えます。ではまず、われわれの前に若者がおります。書類上この男は三十三ということになっておりますが、実際は、三十歳です。三十年のうちの六年間は収監されてました。こういった市民が法廷で信頼を呼ぶことなどできましようか？ わたくしはあなたがたにお聞きしたい。モスクワの一清婦人が人

類の遺伝子の修正が必要だと宣言するなどということをお聞きになったことがあるでしょうか？ いかがです？ この問いを誰でも構いませんが、わが祖国の市民にしてご覧なさい。おそらく、誰もがきつぱりと異口同音に、否、と応えるに違いありません！ 尊敬すべき皆様、この種の権利の主張の馬鹿馬鹿しさ、異常さは明白であります。ロシアは既に千年以上の歴史を有し、そのうちの四百年は帝国でありました。そうしていま、二十一世紀のはじめに、赤毛のみすばらしい人間が、確かに背は高く体つきも丈夫そうですが、教育もない人間が、突然われわれの財産、伝統、宗教、風習、そして遂には、われわれの料理をも一掃することを夢見ていると宣言しておるのです！ ロシア人がウオツカやジャガイモやニシンなしでどうして生きながらえることができましよう？ キャベツのはいったピロシキなしで？ ボルシチなしで？ われわれの前に噴き出たのは、皆さん！ でき損そこないなんだ！」「裁判長殿！ 抗議します。このような罵言は法廷の審理では禁じられております」弁護士が再び椅子から飛び上がった。「検事は常に訴訟手続きの規則を踏み越えようとしております」「検事殿、通常の語彙をお使いになるように、お願いします！ それでは、お続けください！」「失礼しました。問題の本質に戻ることにしましょう。カラマーノフ氏は一度ならずロシア市民をむりやり消滅に向かわせる方法を見つけ出そうと考えました。ある時は、どうやら何か魔法の力を借りて、すべての人間を八十歳まで老化させようとしたり、海外の秘密技術を用いてすべての女性から出産能力を奪おうとしたり、突然、密かに、海に向こうから来た毒でわがロシアの全住民を毒殺しようとしたくんだり、ロシアのすべての男性に断種法を施し、生殖器官の代わりに『デリケートなおもてなし』のためのクリームを生産す

る分泌腺を植え込むことを宣言したり」法廷内には抗議の声が上がった。が、誰かぱちぱちと手をたたいた者もあった。「あるいは、わが豊穡なる地球を他の民族に手渡さんとして、われわれすべてを宇宙へと移住させようとしたのであります。もしもカラマーノフが知恵を欠いているのであれば、つまり、間違いでないとするれば、必ずやどこかの敵のシナリオのもとに行動しているに違いないのです。必ずやそれは、海外の敵でありましょう。あちら、海外では、イワン三世のころから肥沃で広大なわが土地を虎視眈々と狙っているのです。わが国の黒土地帯を、石油やガスの鉱床を、そして、ウラルやコルイマーの金を狙っているのです。皆さん、この男はスパイなのです。正教を信ずるわが祖国の敵の手の中で踊る傀儡、破壊分子なのです！ こうした状況はこの男の行為をいっそうゆゆしいものとし、ロシア刑法の条文に該当させることになるのです。裁判長！ わたくしはこの男の過失をすべて数え挙げたわけではありません。まず、この男は人間とネズミと豚を生物学的基礎として新しい存在を創造するというコンセプトを考案しました。『ネズミからプチブリ人を造形』しようとしたのです。この行為は一七七条『違法事業』に該当し、五年以内の禁固刑に相当します。被告は自分を超人的な存在であると考えました。この哲学の宣伝活動は『人種的反目』の条項によって処罰されます。自分の実験のために金銭を節約するため、この男は死体を穴の中に投げ入れるよう要請しました。この要請は二二四条『死者の身体、及び、死者を葬る土地に対する冒瀆』に該当します。量刑は五年以内の禁固刑が想定されます。カラマーノフは、瀆信者であり、神を認めないばかりでなく、信者を嘲笑い、その陳述は差別的で、人間の権利と自由そして利益を破壊するものであります。わが刑法には、このような罪を犯

した者を五年以内の刑に処するといふ一三六条が存在します。この男はまた、偉大なるロシア語を禁止する事を望んでおります。世界文学の秀作の数々を生み出した言語、ドストエフスキヤトルストイ、シヨロホフ、プーシキンの言語であるロシア語を禁じようというのです。この行為は刑法一四八条『信教の自由の権利の実現の阻止』に抵触します。この条項に違反した者には三カ月以内の刑が科され得るのです」わたしは反駁しようと思つたが、すぐに思いなおした。『法廷の審理は朝まで続くんだ。やれやれ』わたしは胸をなでおろした。『しかるべき判決が下されるかもしれない……』『裁判長殿！』わたしは裁判長に向かって言つた。「数分間、外に出ることをお許しください。少々息苦しいのです！」「いけません。何人も法廷を出ることは許されません。ここにお残りになるように。さもなければあなたに手錠をかけ、警備員をつけなくてはなりません」「わたくしにはこの男が清掃人として働いていただけなのか、おおいに疑問に思われます」不安な面持ちで原告は述べた。「わたしはこの男がかなりの財産を所有していると確信しております。どこに保管しているのか白状させるべきです！」「こいつはわたしが外に出て自分の財産の保全を確認しようとしてもしていると考えているのだろうか？ やつらの馬鹿さ加減にはまったくあきれてしまう！」ふとこう考えた。「わたくしの依頼人の病的な反応のいくつかは検事殿の感情の昂りに原因があるように思われます」わたしの弁護士が椅子から飛び上がった。「どうか感情的になりませんよう。弁護士殿、お願いいたします」裁判長は自分の頭の上の灰色の髪をきちんと直した。「法廷をしきっているのはわたしです。どうかわたしの権利の侵害を企てないように願います」法廷内には軽い笑い声が起こった。そのあと誰かが何度か咳をした。またある者は言い放った。

「カラマーノフの片をつける時だ」何人かが大声で喚^{わめ}いた。「続けてください。まだ何も明らかになっていないんです！」その時、地区警察署長の声が聞こえた。「皆さん、われわれはいたい誰を裁こうとしているのでしょうか？ カラマーノフは、この男はうすのろなのです。精神科医の判定など信ずるところは何もありません。わたしはこの男をこの何年か追跡調査しています。こいつは酒はやらない、女を連れ込むこともない、それに、変態たちと関係するでもない。こういう行動は人間的であるとはいえません。この男が何者であるのか、かれ自身に聞いてみようではありませんか。どの種族に属しているのか？ 法律はわが祖国の市民のために書かれているのです。つまりですね、ロシアの人々のために書かれているんです。ですが、この男は誰なのでしょう？ 自分をプチブリ人と呼んでいるのです。科学アカデミーにでも照会したほうがいいのではないのでしょうか？ そうして、この『プチブリ人』がいったいどんな存在であるか説明させればいいんです。この国の民法、あるいは刑法をこの男に適用する権利がわれわれにはあるのでしょうか？ まったくのところロシア人は太古の昔からヒューマニズムの理想で有名ですからなあ。ひょっとして、この伝統の枠内で、あまりにも月並みなやり方だが、まずはこの男を檻^{おろ}の中にでも入れて飛行機に乗せて、ナターリア・ドゥーロヴァの動物劇場にでも送り込むべきなのだ。ナターリアのところにはエキゾチックな動物がごまんといるし、動物たちは外に出たいなんて思わないんだ。食料は充分にもらえるし、獣医の検診もあり、自由で、管理者の検閲なしで劇場を訪れる人々と話ができるし、法律が動物たちをちゃんと守ってくれている。形成途上にある生物学的種の存在にとってこれ以上の環境が望めるだろうか？ それに、わたしには純粋に人間として次

のような点に興味をいだいておるのです。このカラマーノフに何かはしいものはあるのだろうか？ タバコでしょうか？ 最前、この男はタバコはやらないと申しましたね。女たちでしょうか？ 女たちはこの男にとってはなんでもないことも確認済みです。ウォツカでしょうか？ 残念ながら、酒はやりません。それでは、われらがカラマーノフはいったい何を恋しがるのでありましょうか？ 似^え非科学の問題について考えたり、思索したりしたがるのでありましょうか？ 人類の終焉について夢想することなのでしょうか？ こいつには鉄の檻の中で頭を悩ませさせておけばいいんだ、そうでしょうか？ それの何が悪いんです？ 空理空論のためにはもってこいの場所なんだ！ それに、この男には豊かな経験があるのです。この男が刑務所ですごしたのは一年なんてものではなかったはずです。裁判長殿、学者たちに鑑定を依頼するために審理を中断するとうわたしの提案をどうお考えになりますでしょうか？ われらが被告のもたらすものは何か？ この男はどんな種族に属するのか？ それ以上に、わたしは急いで風呂に行きたいのです。なにしろもう一週間も風呂にはいつておらんのです。仕事に忙しいのです！ ところでこの男の持ち物をわが警察署にお渡しくださらないでしょうか。うちの電子機器はかなり時代遅れなんで」「抗議します！」わたしの弁護士は椅子から飛び上がりながら、叫んだ。被告の身元はロシア連邦のパスポート、パスポート番号4503120347で証明されておりますし、労働手帳でも確認されております。カラマーノフ・ワシーリイ・ダニローヴィチの出生証明書やその他のロシアの様式の書類もこの件のファイルの中に綴じてあります。清掃人カラマーノフのすべての財産は、国の帳簿に記載されております。よって、手渡すものなど何もございません」「それじゃ、コンピ

ユーターは、実験室はどうなんだ？」「審理の枠内でお話しくださるようお願い申しあげます」憂鬱そうに裁判長は言った。「それでは、弁護人のお話を伺うことにしましょう。どうか訴訟の本質に即してお話しくださいますよう」この瞬間わたしは地区警察署長が机の下で親指を人差し指と中指の間から出す例の侮蔑のしぐさを両手でして、それをまっすぐ弁護士に向けているのに気付いた。「裁判長殿！ ご列席の紳士淑女の皆様！」弁護士は厳かに話し始めた。わたしは思わずまわりを見回したが、法廷には淑女なるものは一人もいなかった。『これはどういうことだ？ 職業的な決まり文句だろうか？ それとも自分が何を話しているか、わかって話してるのか、男性の衣服の下に女性の身体が隠されているとでもいうのだろうか？ どうも人間というものにはいつも何かちょっとした不快なことで驚かされる！』そう思うあいだにも弁護士は話し続けていた。「ロシアでは全男性のうちのおよそ百万人ほどが常に刑務所に入っております。しかしながら、だからといってこれは刑務所の修繕はやめて、狼や熊などの猛禽類もうきんのための檻や劇場を急ぎ構築して、囚人たちを猛獣たちと一緒にしなくてはならないことを意味するわけではありません」その時、弁護士は地区警察署長の中指と人差し指の間から覗いている親指を見て、神経質そうに頭を左右に振ると、言った。「わたくしは特にわが証人のことをお話し申しあげておるのです。この男こそ動物園の檻の中に住むべきではないのでしょうか」「抗議します！」席から立ち上がりもせず、検事は言った。「おまえこそ、弁護を依頼したやつと一緒に動物園に行くべきだ。わたしがおまえさんがたに乾パンを持っていつてやろうじゃないか、ハッハッハ！」警官が言い放った。「法廷の秩序が守れないのですか？ 弁護人は礼節を守ってください。さもないければ発言の機会を取り下

げます！」いくぶん弱々しげに裁判長は言った。「お続けください。しかし礼儀正しくおねがいします。ところで、法廷の秩序を守るのは出席者すべての問題です！ おわかりいただけましたね！」「ワシリーイ・カラマーノフは仕事の基本的な場所で肯定的に評価されております」弁護士は続けた。「いかなる労働法規の違反も雇用者の記録として残されてはおりません。また、わたくしの手元には二つの奨励記録がございます。一つは記念日に関するものです。新生ロシア十周年記念の前夜に、カラマーノフ氏は千ルーブリの報奨金を受け取りました。もう一つの報奨金はわが国の前大統領の退任に関して贈られたものです。いくつかのスポンサーが、前大統領が永遠に後にする道を掃き清める首都の中央区のすべての清掃人に対して、それらの道からすべての痕跡を掃き取ったものに報奨金を、それぞれ三千ルーブリずつ贈ると申し出たのです。その報奨金の受賞者の中の一人がカラマーノフ氏なのです。労働手帳にはそれに関する記録がございます。被告の税金滞納記録の不在も本件の参考資料として綴じ込んでいただくようお願い申し上げます。これらの文書が原告の不健全な好奇心を満たしてくれるものと希望します。また、国会図書館の証明書によりますと、カラマーノフ氏は登録期間中に千五百冊以上の本を読んだとのこと。つまり、氏は一週間に二、三冊の本を読んでいたということになります。氏が選んだ書物の作者は普通の図書館では探し得ないものなのです。閲覧室の職員の証明した書籍のリストも本件のファイルに綴じ込んでいただくようお願いいたします。カラマーノフ氏はロシア語、英語、ドイツ語で書かれた書物を研究いたしました。その書物の著者の九十七名は国内外の指導的な遺伝学者たちです。八十三名は有名な物理学者、七十五名は数学者と天文学者、六十五名は生物学者、五

十九名は化学者、四十六名は歴史学者、三十七名は哲学者、二十九名は経済学者、二十一名は人類学者、十七名は医学・解剖学者、九名は動物学者、八名は古生物学者です。それに加えて、世界文学の本が百冊以上、科学雑誌と科学論文集からの論文等々となっております。これまで挙げました数々の書籍を氏は数回借り出しています。このような勤勉な読者を無学の人物とみなすことは可能でありましょうか？ 無教育な悪党、無教養な清掃人と呼べましようか？ 氏は未だかつて一度も人間の知性とホモ・サピエンスの身体的可能性を現代化することを夢想していることを隠しだしてはおりません。それに、みなさん、われわれもまた自分たちの子供が自分たちより聡明で、豊かで、健康であるように望んでいるのではありませんか！ 氏は自分の清掃人のあばら家の静寂の中でたった一人で、ちなみに孤独は氏にとっては変わることはない同伴者なのでありますが、われわれの願いを聞きつけたかのように、このテーマについて独自に考え始めたのであります。しかも科学的にです！ しかしながら氏の行動は認識上の計画に留まっているわけではありません。具体的な行動には一歩も踏み出してはいないのです。わが祖国の法を守る一市民として、氏は当法廷に出頭し、法的な土台に基づいてこの偉大なる事業を為す権利を自分に与えてくれるようわれわれに請願してあります。裁判長殿、氏は個人的に願っておるのです、自分に人間的な素材の改革に着手する免許を与えてくれるようにと。氏はすべてが成功裏に進むと信じているのです。ホモ・サピエンスの代わりに、変容した存在ホモ・コスミカスが登場する、われわれがどうあがいても解放されることのなかった先祖から持ち越された欠陥を持たないホモ・コスミカスが来ることを氏は確信しております。教会も憲法も高潔な思想の宣伝もわれわれ

にこれほどはつきりとした結果は出してくれなかったのです。考えてもみてください。六千五百年前に北と南のエジプト王朝が創られ、その後統一されました。帝国はおよそ四千年の間存続しました。ファラオや古代エジプトの神官たちが人間たちに徳性の基盤を教え込もうとしました。四千年の間、つまり、四十の世紀と百六十の世代の間、啓蒙の努力は続きました。が、かれらは失敗したのです。エジプト帝国は崩壊し、その民は完全に消滅し、他の種族に取って代わられたのです。そして現在ではエジプトの民を見つけ出すことは不可能です。ただ一つ残された手段は、DNAによってミイラを復元することだけなのです。千年少し前にこの地にアラブ人がやって来ました。かれらは再び新しい文明を創り上げます。やはり、同じ人間的な素材の上です。何のために？ 結末は早くからわかっていたはずですよ！ 五千五百年前にモヘンジョ・ダロ帝国が創られました。その支配者は偉大なるハラッパ文化を作り出しました。そうして人間の欠陥をなくすことを夢見たのです。それで行ったのでしょうか？ 帝国は千五百年間存続しました。十五世紀、六十世代にわたって続いたのです。が、何もできませんでした。そして、この地にアリア人が押し寄せました。モヘンジョ・ダロは破壊され、この世に存在しなくなり、その民は絶滅し、文化は発掘された遺跡のかげらの中に保存されているのみなのです。五千年前にはチグリス川とユーフラテス川の間にアッカド帝国が創られました。幾人かの歴史学者はこの繁栄した帝国の中にエデンの園、つまり、天上の森があったのではないかと考えています。この帝国は千年来ちよっと存続しました。おおよそですが、四十世代にわたって善の価値と道徳とを植え付けようとしてしました。この消耗戦は何物も生み出しませんでした。帝国は略奪され、滅ぼされました。住

民は消え去りました。三千五百年前にはウラルトゥ帝国が創られました。この帝国は七百年あまり存続しました。この帝国の目指したのことも同じでした。三十世代の者たちが真の価値を理解しようと努めたのです。が、蛮族の襲来に会って、帝国は敗北し完全に破壊されました。ウラルトゥ民族の遠い子孫はダゲスタン族の中にだけしか見出すことができません。プラトンの同時代人は悪を征服しようと願いました。が、何にもなりません。かえって、悪が増大しただけだったのです！ ローマ帝国の市民は民族の文化を向上させようとしていました。が、それもまた完全な失敗に終わりました。何も得るものはなかったのです！ イエス・キリストの弟子や信奉者たちは、もうほとんど二千年の間、人間たちをその欠陥から救済する奇跡を信じ続けています。それで、どうだったのでしょうか？ 何か得たものはあったのでしょうか？ 人間の道徳を向上させるためにいったい何冊の本が書かれたことでしょうか？ どれだけの祈りが捧げられたことか、教会やシナゴグやモスクでどれだけの儀式が行われたことか、このテーマでどれほど講演がなされ、どれだけの詩や歌や音楽が捧げられたことか！ それで、人間の何が変わったのでしょうか？ 道徳的な状態は？ 人間の遺伝子構成は？ その知性は？ その心は？ 何か変わったのでしょうか？ 人間は以前よりも法を守るようになったのでしょうか？ いいえ！ 以前より博愛的になったのでしょうか？ いいえ！ 以前よりも知識欲が増したのでしょうか？ いいえ！ 人間という種族を心から愛するようになったのでしょうか？ 答えはやはり、否です。人間は自分たちを永遠の生命に近づけるために何事かを為したのでしょうか？ いいえ！ 宇宙に移住したいと願ったのでしょうか？ これも、否です。人間は以前より善良になり、希望を持つようになり、読書欲や知識欲を持つようになったのでしょうか？ いいえ！ 違います！ まったくそうではないのです！ そうして、現在の文明の程度から考えてみると、人間たちが変わる可能性はまったくなくのです！ 古代エジプト人たちは自分たちが永遠の存在であると信じていました。モヘンジョ・ダロの市民は自分たちの国は不滅だと考えたのです。アッカド帝国の国民は自分たちを不朽の民族と呼びました。ウラルトゥの住民は自分たちを不滅だと信じたのです。古代ギリシア人は自分たちを悠久だとみなし、ローマ人もまた、自分たちを不朽だとみなしました。ロシア人もまた自分たちを永遠の中に見ているのです。なんと残念なことでありましょう！ この考えには、この未来のない希望の中には、知性のかけらも存在しないのです。パピルスや羊皮紙を見てご覧なさい。パピルスや羊皮紙は知性のある者たちを簡単に納得させることでしよう。つまり、古代エジプトからわれわれの時代まで三百という世代交代がありました。アトランティスの時代からは六百世代が、クロマニヨンの歴史が始まってからは二千世代が交代しました。そうして、なんら決定的な結果は出ていないのです！ 最も優れたものがどのように努力しても、最も戦闘的なものがどれほど果敢に戦っても、最も高潔なものがどれほど努力しても、目に見える成果は何もないのです。人間はカルメル山や、クロマニヨン、チグリス川とユーフラテスの川に挟まれた地にあった時とまったく変わっていないのです！ 自分たちでは生物学上の種を変えることができないのです。裁判長殿、ワシーリイ・カラマーノフを信じようではありませんか。氏が道路の清掃人になったのは偶然ではないのです。氏は、人類をその欠陥や遺伝子構成の弱点から解放しつつ、『清掃人』としての活動が続けることを望んでおります。氏はこの方面での仕事を新

なり、読書欲や知識欲を持つようになつたのでしょうか？ いいえ！ 違います！ まったくそうではないのです！ そうして、現在の文明の程度から考えてみると、人間たちが変わる可能性はまったくなくのです！ 古代エジプト人たちは自分たちが永遠の存在であると信じていました。モヘンジョ・ダロの市民は自分たちの国は不滅だと考えたのです。アッカド帝国の国民は自分たちを不朽の民族と呼びました。ウラルトゥの住民は自分たちを不滅だと信じたのです。古代ギリシア人は自分たちを悠久だとみなし、ローマ人もまた、自分たちを不朽だとみなしました。ロシア人もまた自分たちを永遠の中に見ているのです。なんと残念なことでありましょう！ この考えには、この未来のない希望の中には、知性のかけらも存在しないのです。パピルスや羊皮紙を見てご覧なさい。パピルスや羊皮紙は知性のある者たちを簡単に納得させることでしよう。つまり、古代エジプトからわれわれの時代まで三百という世代交代がありました。アトランティスの時代からは六百世代が、クロマニヨンの歴史が始まってからは二千世代が交代しました。そうして、なんら決定的な結果は出ていないのです！ 最も優れたものがどのように努力しても、最も戦闘的なものがどれほど果敢に戦っても、最も高潔なものがどれほど努力しても、目に見える成果は何もないのです。人間はカルメル山や、クロマニヨン、チグリス川とユーフラテスの川に挟まれた地にあった時とまったく変わっていないのです！ 自分たちでは生物学上の種を変えることができないのです。裁判長殿、ワシーリイ・カラマーノフを信じようではありませんか。氏が道路の清掃人になったのは偶然ではないのです。氏は、人類をその欠陥や遺伝子構成の弱点から解放しつつ、『清掃人』としての活動が続けることを望んでおります。氏はこの方面での仕事を新

しい方法でなされることと思います。称号も肩書きもなく、財政機構や警察組織の公的な報告なしにです。氏に調査と創造の委任状を与えようではありませんか。新しい生物学上の種族、ホモ・コスミカス、もしくはプチブリ人の創造を委任しようではありませんか。われわれの誰もが、心の内では自己の完成への強い要求を感じているのです。しかし、外から押されないことには前進できないのです。文明の歴史は千年以上にわたって、人間は自分たち自身ではそれをする事ができないのだという単純な真実を証明しているのです！ このテーマについての議論は既にし尽くしたかと考えます。被告は判決を待っているのです！ 遺伝学者たちの世紀に共に歩み、走り、また、飛翔しようではありませんか。かれらにわれわれを治める権利を与えようではありませんか。わたくしは個人的にカラマーノフ氏の成功を信ずるものであります！」「弁護士殿、よくやってくださった！ これでかれらもわたしを理解してくれるだろう、わたしが行動することを許してくれることだろう」わたしは心の中で拍手喝采を送った。その瞬間わたしはそう信じたくてたまらなかったのだ。が、その時、検事は自分の鉄製の齒冠だらけの口を少しも隠そうとしないうで、あからさまにあくびをした。そうして、大儀そうに手を挙げると言った。「裁判長殿、わたくしどもが法廷の審理の場にいるのか、それとも演劇鑑賞でもしているのか、わたしにはとんともわかりません。少し発言の機会をいただけませんか？」「どうぞお話しください！」「カラマーノフ氏がロシア人の否定的なもののみを見ているとすれば、氏にわれわれロシア人に関する実験を任すことなどできるでしょうか？ この男のロシア人に対する見方はあまりにも否定的かつ主観的なので、このような男がどうしてわが社会に出現できたのか不思議でなりません。われわれ

れにも良いところはあります！ いや、美点は他の多くの外来の欠点よりもよほど多いのです。例えば、この男は劇場マネージャーが贈られた花の白鳥をチーフ・プロデューサーに手渡さなかつたからといって、ボリショイ劇場の仕事を放り出しました。これはまた何という理由でしょうか！ 笑止千万であります！ この男は劇場管理部が、ユーリイ・グリゴリエフが天才的なバレエが披露できるように、すべての条件を整えたことにどうして注意を向けないのでしょうか？ 国立ボリショイ劇場のような巨大な芸術機関を管理することは、たいへん骨の折れることなのであり、とてつもない才能が要求されるものなのです。劇場の労働者全員が成功裏に仕事を進められるようにした管理者たちの才能にどうして気付かないのでしょうか？ あの花の白鳥が何だというのです？ カラマーノフの頭の中には、全く意味をなさないこの一事だけが刻み込まれているのです。この男はまた、映画監督で俳優のミハイロフを嘲笑あざわらいました。が、どうしてこの男はミハイロフの非凡な才能に頭を下げないのででしょうか？ 考えてもみなさい、この男はこの監督のために靴を八足も買ったんですよ！ どんな代物しろものであつたのか、品質はわかりませんがね！ それで、ミハイロフは自分の娘の靴を受け取つたのでしょうか、それとも家政婦にやつたのか、ゴミ箱に投げ捨てたのか？ だいたい靴がミハイロフの手に落ちたのか、それともよそ者の手に渡つたのかも、わかっていないではありませんか？ それとも、才能のある人にありがちなように、金のことをつい忘れてしまったのかもしれませんが。そもそもミハイロフにとって八百ドルくらい何だつていうんです？ 誰だつてうっかり何かを返すことを忘れることは、よくあることではありませんか。わたし自身もしばしば借金を返済することを忘れるんですよ。だからといって、

別段それが人々にヒステリックな反応を起こさせるものでもないんです！　ですから、折りをみて金を返すように言われるんです。ミハイロフはいくつも素晴らしい映画を作ったし、その映画はわが国の観客に愛されているのです。しかしながら、これについては一言もないのです。まるでそんな映画は存在しないともいうように。このカラマーノフは何らかの先入観に満ちているのだ！　ここで論議されているような危険な実験をこの男に任せるなんてことはできない。ヤウザ河畔の劇場を例にとってみましょう。ゲオルギイ・ネリユーボフは、ロシアの劇場芸術の一世紀を画した人物です。その人物が花を持ち込むことを禁じたなんて！　これはネリユーボフ自身のしたことでしょうか？　それとも消防隊員が邪魔立てしたのでしょうか？　それとも警備員でしょうか？　最近のモスクワではいくつ爆破事件が起きていることか！　一週間前にもチエチエン共和国の大統領が爆死させられたではありませんか！　あちこちの劇場で花の構築物を引き回さなきゃならない理由がどこにあるんですか？　他の市民たちと同じように花束を持つてくるなら、問題など起こりはしないんだ！　だが、もしもネリユーボフが花のワイングラスを持ち込むことを禁じたとしたらどうでしょう？　かれはアーティストなんです。花のワイングラスがウォッカやポートワインを連想させたかもしれないのです！　もしかしたら、一週間ぐらい酒をやめようとしていたのかもしれないんだ！　事はそんなに簡単ではないんだ！　いったいどういう理由であの臭い花を持ち込むのが許されなかったのか真相はわからないのです。ロシア人を一面的に判断することはできないんです。わたしたちに披露されたのはほんの一握りの有能な人々の逸話だけ。そうして性急に出された結論はというと、人間の遺伝子を変えなくてはならないというので

す。カラマーノフ氏にお尋ねしたい。あなたはどのようにしてご自身の遺伝子構成を変えようとお考えにならないのか。あんたは三十歳にもなる。それで、何をなし得たというんだ。何だか本をお読みになったそうだが、本当に読んだんですか？　それとも女子学生たちをちらちらと見ていたんですか？　どうなんですか？　スカートの下でも覗きこんでいたんじゃないのか！　おまえには何か学問的な仕事や活字になった論文とか、公開で講演なんかしたことがあるのか？　おまえは、いままでの人生で何にも成し遂げてはいないじゃないか。おまえの労働の道具は、箒ほうきなんだ！　箒をおまえから取り上げようなんて誰もしやしないんだ！　どうかモスクワの中庭や通りの美化に励んでくれたまえ。ゴミを回収し、鉢植えの花をあちこちに飾り立て、芝生を刈り込んでくれたまえ。だが、そういうことは自由を拘束されていたって結構うまくできるもんなんだぞ。刑務所や収容所の中だな！　だが、ロシア人の遺伝子の変換なんていう危険で何の役にも立たない企画をおまえなんかにはやらせるもんか！　そうだ、外国人の遺伝子を変えてみたくはないか。そしてたらわたしは断固反対の立場を撤回するがね。無料ただで忠告もしてやろうじゃないか。ポーランド人から始めろってね。断固としてポーランド人から始めるべきだ！　それともラトビア人のほうがいいかもしれない。おまえの処方箋だったんじゃないか。やつらがロシア語を小学校教育の課程から追い出したのは？　違うのか？　おまえはわが同胞たちのプチブリ人化を願ひ、やつらは、すべてのロシア語話者のラトビア人化を願っているんだ。おまえたちの間の関係は実に奇怪だ。まったく大いに疑わしい！　おまえがロシアの法治圏内でこのファシスト的な実験を行うことを禁ずるようにわたしは当法廷に要求する。おまえの選択はこれだけだ。自分の考えを捨てるとい

う誓約書を提出するか、国外に出て行くか、それとも新しい契約を結んで北ドヴィナ川にでも長期出張に出掛け、森林伐採をするかだ。そこでなら、生活そのものがおまえの頭から遺伝子だのサイバネティクスだのを追い出してくれるわ。以上！」自分の重要性を誇示し終えた検事は満足そうにやりと笑うと、『いたずら者め、どうなるか見ていろ！』といわんばかりに指でわたしを脅して見せて、また沈黙に戻った。その歓喜に満ちた様子はおれは胸が一杯なんだと語っていた。プチブリ人を侮辱しながら、検事は知性を破門したのだ。まるで知性を足の下に投げつけ、踏みにじり、どなりつけていたようだった。『われわれには固有の知恵がある。他のものなんか何も必要ないんだ！』わたしは黙って、他のことを考えていた。審理の出席者全員の様子を窺うのはそれほど簡単なことではないとわかった。警官の姿勢と身振りは絶えず変わり、その指は秘密の暗号や謎めいた形を作るなどといった複雑な操作をし続けていた。検事はにんまりと笑ったり、何本か皺がよった額をぴんと張り詰めたり、驚いたように目をぐるぐる回したりして、まぶたは眉毛にくつついていた。風貌全体が検事は虚栄心という欠点を持っていると証言しており、鼻は既に高々と上げられていた。弁護士は何事かを休みなく書き付けていたが、時々反論のために椅子から立ち上がった。が、時に自分が何を言おうとしていたのか忘れてしまったかのように、忘我の風情で立ちすくんでしまうのであった。裁判長は落ち着いているように見えた。裁判長はただ審理の参加者全員を目で追って、注意深く眺め回してばかりいた。が、時々まるで秘められたものを見つけ出し理解し覚え込もうとでもいうように、自分の虫眼鏡を調査対象に向けた。そのあと、何か記号を書き入れると、また新しい調査事項を見つけ出すのであった。こうした事すべて

に人間的な滑稽さが充分に透けて見えた。だがかれらのこうした様子はわたしには少しも面白くなかった。かれらはプチブリ人の設計者としてのわたしを心配させたばかりだった。審理の出席者を観察しながら、わたしは突如いままで思いもなかった懷疑をいだいたのだ。『昔からの素材はどうもできが悪い。果たしてわたしはプチブリ人を創ることができるのだろうか？』わたしは思った。『この審理の間、これだけの騒いでおきながら……突然何の結果も生み出さないとわかったら？』その時スפשツェフ氏がわたしのそばに近寄り、耳元でささやいた。「おまえ、何のためにこんな事をしているんだ？ 科学や生物学的な刺激を与えるためだなんて言いっこなしだ。そんな空口上なんて聞きたくもない。いくら稼ぐつもりなのか白状しろ。そしたら全面的に支持してやるぜ。だが、ただでは働かないぞ。おれはどんなことであれ、二十パーセントはいただくことにしている。ちょっと考えてみるんだな。そして、手で合図してくれ。待ってるぞ！」スפשツェフ氏がわたしのそばから離れるや否や、わたしは耳ざとく、わたしの鼻先に投げられたらしい原告の反論を聞きつけた。「どうやら、会社でもぶったてようという気なんだ。菩提樹の錠剤で住民たちから銭をかき集めようってんだ。分け前だけでも取り分けてくれるように願いたいもんだ！」『こいつ、何を言ってるんだ？』わたしは驚いた。『何から二十パーセント取ろうというんだ？ 遺伝子構成の容量からか？ しかしどうやってそれを計算するんだろう？ それにどうやって手渡すんだ？ なんだか馬鹿げた要求だなあ。それに錠剤だなんて。やつはいったいどうしたんだろう？』どうやらわたしが審理に参加した者たちに移したいと思った思想や感覚をともに考えたり感じたりしている者はいないようだった。わたしに向けられていたのは、わたし

の無邪気な従兄弟^{いとこ}たちの暗くて、皮肉っぽい、要求に満ちた視線だった。不可解な感覚が淀んでいった。あいつらはわたしを侮辱したいのだろうか。それともどこかの商業的な企画で使いたいのだろうか？　そして、ホモ・サピエンスが未だに成人していないというニコライ・フォードロフの考えを思い出した。わたしは微笑んだ。プチブリ人の我慢強さが、一斉に流れ出る非難のすべてに耳を傾けさせた。「主要な証人に発言を許可します」裁判長は述べた。「警察署長、どうかお話しください」「わたしどもの部署にはコンピューターがありません。この町の犯罪は増加しております。そこで、わたしが思いますに、カラマーノフに罰金を課して、電子機器を没収するとはできないのでしょうか。確かにこいつのコンピューターは古いが、地区担当のわれわれの業務には充分です。また、被告は自分の生物学研究室を持っているということです。生物学と刑法学は、似通った職業であります。裁判長殿、もしもカラマーノフに今後遺伝子操作の研究を続けることを禁ずる判決を言い渡されるのなら、法廷決議でやつの備品をわたしどもに移管してくださるようお願いします。わたしどもではガラスびんだとかフラスコなどすべてのものが決定的に不足しておるのであります。ところで、このことについてはもう既にお話し申し上げました。いまは別のことについてお話ししたいと思えます。われらが弁護士先生は先ほどから、何やらずっと書いておられるようです。わたしにはこの方が新聞に風刺^{ヴェスチ}コラムを書いているように思われるのです。想像してもご覧なさい。明日われわれが報知新聞を開いてみると、奇々怪々な世界にわれわれがいるんです。皆さん、この方からわたしがメモを没収することに賛同するという法廷決議を行うことを、お願いしてもよろしいでしょうか？　そうすれば、風刺コラムなんぞが出る

ることはありますまい」「どうか、審理の核心に近付くようお願いします！」ほとんど聞こえるか聞こえないかの弱々しい声で裁判長がささぎった。「じゃあ、弁護士殿はどうするんです？　わたしは風刺の小話の中にはまり込むのは本当にいやなんです。あなたにもそうならないようご忠告しますがね！」「本件の判決が申し渡された後で、わたくしの所に来てください。まだ当法廷に何か言いたいことはありますか？　ただし、本件の本質に関してでありますが」「ありません。これで終わります」「それでは皆さん、御退席くださるようお願いします。カラマーノフ、あなたはここにお残りなさい。法廷の判決を準備するためにきみに少し質問しなくてはなりません。法廷の判決は希望者全員に傍聴を許します」「なんですって？　どうしてわたしたちが出ていかなければならないんです？」検事はいきりたった。「えっ、ロシアには新しい法律ができたのですか？」弁護士は断固として裁判長に駆け寄った。「裁判長は買収されてるんだ！　今に思いがけない事が起こるぞ！」傍らで警察官が呟いた。「もし謝礼がないのなら、上級審に訴えてやる！」スペシフツェフ氏がわたしの耳元までかがみこんだ。「ロシアではこんなふう^{こと}に事は運ばないんだ。おれたちを騙^{だま}したら、闇の掟がおまえを待ってるんだ！　おまえはあいつにいくらやると約束したんだ？」「コンピューターをいいやつに変えてくれ。どっちにしても没収だ！　みんな持っていくぞ！」地区警察署長が言い張った。「今回刑務所に送れなくても、次回こそ必ず森林伐採に送ってやるぞ！　五年間、なんで五年間なんだ？　十年間だ！　いや終身だ！」検事がにんまりと笑った。「頑張ってください。きつといい結果が出ると思えます！」弁護士はわたしの手をぎゅつと握り締めた。そうして、全員出て行った。わたしは裁判長の声を聞いた。「カラマーノフ、きみと話ができるよ

うに、もう少し近くにお寄りなさい！」これはわたしの人生における三度目の裁判だった。空口^{からこう}上はもう空で覚えていた。『ロシア連邦の名において……』だが、裁判長はこれまでとは違う話し方で始めた。「きみの考えには斬新^{ざんしん}さが時々透けて見える。じゃが、あんまり小さいのでその本質をつかむためには拡大鏡を使わねばならんのだ。フランス人の哲学者コンドルセ公爵は一七九五年に自分の著書『人間精神の発展の歴史的素描』の中で書いている。『人類はその発展の段階で、つまり前進的な完成への道で自分たちの生命の長さを常に伸ばし続けており、不死の可能性すら生まれているのだ』と。これについてきみはどう考えるかね？」「裁判長殿、人間たちの中には賢人は少なからずいます。哲学者コンドルセは、その中の一人です。ですが、なんらかの事態を近づけたり実現させたりする精神力を持たずに、ただ予言するのと、この科学的なプログラムを實現させようと試みるのは、全く別のことなのです。コンドルセの同胞ルナンも復活の可能性をあり得るものと見なしました。ルナンは書いています。『絶え間ない進化の段階で宇宙には新しい文明と滅亡した文明の生物が交代で移り住むことになるだろう』と。不死の学説の先駆者の一人ゲルツェンの見解の中にも次のような考えを見出すことができます。『死とは生きた有機体という概念の中にあるのではなく、その外に、それを超越したところにあるのだ』と。また、ラジーシチエフも『おまえの至福と完成とが目標である……』と言っています。ですが、わたしとかれらの違いはわたしがこの問題に实际的に携わることができることであり、また、それを実際にしたいと願い、また实际的に行おうとしていることです。考えてもみてください。プチブリ人が不死を獲得した瞬間、かれらは時間と空間の境界を飛び越えることができますのです。そうして、かれ

らは条件付きで存在することをやめ、肉体的な慰みに溺^{おぼ}れることもなく、物質崇拜や流行を追うこともなくなるでしょう。金銭は意味をなくし、知性が唯一の価値となるでしょう。知性は鎖につながれておらず、極地の防寒帽のように氷に覆われてもいず、ソ連時代のルーブリのように破壊し価値を失ってもいけません。知性は宇宙の無限の空間と対比できるでしょう。裁判長殿、物質には終わりがありません。この簡単な考えがあなたには当の昔からわかっておられるはずです。ほとんどすべての哲学者たちが知的な探求の末に『その時』が来ることを予言しました。が、わたしはかれらの仕事を全く知らないまま、生まれながらに自分の使命を認識していたのです。違いはここにあるのです。どうかわたしに行動することを許してください。多くの者が新しい遺伝学的、進化論的可能性を語りました。デカルト、オーギュスト・コント、プリーストリー、ラジーシチエフ、ソロヴィヨフ、ゲルツェンなどです。しかしながら、このワシーリイ・カラマーノフだけが——もちろん、あなたの許可を得た上ですが——この偉大なる事業を実際のものとすることができるのです。わたしの内なる世界の希望が遠大なる計画の設計を可能にしてくれるのです」裁判長はしばらく沈黙を守っていた。その後、ゆつくりと話し出した。「あなたは、知性的といわれる人間は二千世代の間ある一定の発展の経路を辿ってきたといわれました。ですが、この期間は非常に短く、ほとんど無に等しいではありませんか！ 一方、神経中枢系の萌芽が初めて現れたカンブリア紀から、現代の水準という脳髓の発生までは実に五億年以上を要しました。この経過こそがわれわれを遠く、地質時代の深部へと誘ったわけではありませんが。ですから、人間にそれほど多くのことが要求できるものでしょうか？ 人間はまだゆりかごの中どころか、母親

の胎内にいるのです！　どうかお聞かせ願いたい。あなたはどのようにしてそんなに興奮して、非科学的で、いらいらしているのでしょうか？　あなたの願望を分析してみると、こんな結論が浮かびます。あなたは人間を完成させるのを希望しているだけではなく、自然そのものに戦いを挑もうとしていると。どうやら物質にはそれ自体の作業予定表が存在しているようです。たとえばあなたがプチブリ人であっても、その予定表に介入するのはそれほど賢明なことでしょうか？　それはまるで、物質の最初の産物の一つである、宇宙の知性への挑戦のように見えます。と言うよりはむしろ、あなたはご自分で全宇宙と喧嘩をなさろうとしているのです。それは、木の葉が木と、髪の毛が人間と、牙がイノシシと、羽毛が鳥と喧嘩をするようなものです。結局のところ、それはどれほど将来性のある科学的なことなのでしょう？　あなたご自身、一人の人間の人生の中で、地球の人口動態学的な構図がどれほど大きな変動をこうむっているか観察なさることができると思います。白人、あるいはコーカサス人の人口がユネスコの統計で二〇〇〇年に地球上の全人口の二十五パーセントを占めているとすれば、二〇二五年にその数は十三パーセント、二〇五〇年には、実に九パーセントまで減少するのです。これは物質自体に、全宇宙規模ばかりではなく、その構成要員である人間たちに、とてつもない変化が生じていることの証ではないのでしょうか？　カラマーノフさん、あなたは確か一定の行程を辿る履歴書バスについてお話しになりましたね。もしあなたが新しい行程をご提案になるのなら、わたしはもうあなたと議論しようとは思いません。ですが、あなたは運送の手段も定かではない乗り物に乗客のすべてを乗り移らせようとなさっています。それは賢明なことでしょうか？　車の途方もない速度で人間たちが

滅び去ってしまうことはないでしょうか？」裁判長殿！　時間とは、まず第一に調和なのです。

今日、すなわち二〇〇四年の三月末の視点から時間を評価するとすれば、過ぎ去った時間は停滞した創造へのプロセスに他なりません。もし未来を覗いてみると、破壊の時代が見えるのみのなのです。物理的な大変動だけではなく、世界の外観の変化も見えます。創造と破壊の間に常に現在が存在するのです。現代の多くの哲学者たちと環境の思索者たち——環境哲学者たち——の最も大きな誤りは、かれらが人間を有機体の物質の一部と同一視していることなのです。つまり、あなたの言葉を借りれば、人間を木の葉もしくは木の葉の葉脈としか見なさないことなのです。ある者はかれらをジャガイモに喩え、またある者は、ブーツやわれわれを取り囲んでいる他の生き物に喩えたりしています。熟しすぎたキャベツが腐るように、人間たちも腐っていく。これがかれらの意見です。即ち、かれらはクロマニヨン人たちを『一つの天体の可能性』の中に加えたがっているのです。最も重要な物質、知性の分配を受けなかった他の生物学的な種族たちと同じリストの中に加えたがっているのです！　かれらは知性にすこしも価値を認めず、人間を、宇宙の中の中けらだに見なしているのです。かれらの場所は、地球のみ、いや自国が独立国家共同体の中だけであり、それ以外にはないと考えているのです。どうしてこのような命題に賛成することができるのでしょうか？　どうしてこんな馬鹿げた考えに辿り着くことができるのでしょうか？　確かに、身体を虫けらに喩えることはできます。地球自体も、やはり虫けらにすぎないんですから。また、地球だけではなく、太陽系全体も限らない宇宙の中にあっては虫けらに等しいのです。ですが知性は違います！　知性とは独自のもののなのであり、大切に育て上げなくてはならないので

す。そうすれば知性はすべての無限の物質を征服することでしょう。プチブリ人カラマーノフはあなたがたに新しい真実を開いてみせましょう。人類の生物学上の種は物質そのものの構成部分であり、物質と共に発展していくのです。物質の後でも前でもなく、物質の右でも左でもなく、一定の間隔をおいてでもなく、時間と空間における間隔をおいてでもなく、平行して、共に、一つの全体として発展して行くのです。人間は物質が知性的であると同じくらいに知性的なのです！しかし、人々の間の知性の容量はあまりに不平等なのです。エネルギー効率が大きく異なっているのです。もちろん、自然界自体もそうなのですが。ですから、わたしにはあなたがた一人一人の知性の成分を増大させる義務があるのです」「ちよつとお尋ねしてよろしいですか？物質における知性の不平等というお話の意味がわかりかねるのですが」裁判長が口をはさんだ。「人々についてのお話ならあなたのご意見に賛成することはできるのです。あなたの知能の平均に關してのお話はよく覚えております。ですが……物質となると？」「月は、物質の一部ですね？そうです！宇宙的な発展と完成のプロセスにおいて月の果たす役割は実にわずかなものです。そして、その逆に、太陽は、驚くほどのエネルギー効率を有しているのです！宇宙にはモスクワとプチブリとを結ぶ道路の上より、ずっと多くの寄生虫たちが自由にさまよい歩いているのです。まったく役に立たない、いくつかの死んだ星を何の役にも立たない人間たちに比することができます。特に流行の文化や流行歌を追う者らについてはこれがあてはまるのです。かれらも光を発してはいますが、その光は意味を持たないのです。その光は他のものを暖めることも照らし出すこともないのです。しかし、裁判長殿、未来を覗いてみようではありませんか。すべて

の無意味なもの、一見原始的と見えるものの中にも素晴らしい建築材料を見出すことができるのです！もしも地球に住むものたちの知性が宇宙の知性と等しいとすれば、誰にも自分自身を変える権利が授けられているのです。いまのところ、何億人もの地球人の中からたった一人の私しか発生しておりません。唯一のホモ・コスミカスです。遺伝子学者たちに人間たちを自由に操作させようではありませんか。そうすれば三十年後にはあなたもかれらの世界が変わり始めていることをお感じになることでしょう！人間たちから私、すなわちプチブリ人が生まれ始めるのです。そうして、過去の哲学者たちや予知能力者の著作のすべてが文化的な基盤となり、そこから新しい生物学的種族、ホモ・コスミカスが成長し始めるのです。どうか最初の実験を実行に移す許可だけでも与えてください。わたくしがモスクワのフルンゼンスカヤ河岸通りに人類の遺伝子操作のセンターを開いてみせましょう。知恵を憎悪する人間たちがロシアには幾人いることでしょうか？例えば、知識人を羨む流行を追う若者たちはどうでしょうか？ご存知ですか？かれらはみんな密かに、そしてまた公然とわたくしにかれらの知性を育ててくれるように頼んでいるのです。その行列は果てしがないように見えます」「そうかもしれない。まったくそのとおりかもしれない」裁判長の表情は翳^{かげ}った。裁判長はなぜか自分の虫眼鏡を鏡のように覗き込みはじめた。そうして、自分の髪^{かみ}をちよつとなおして、目をこすると、顎^{あご}をなでた。「あなたの仮説の中には文化の実際的な発展に矛盾するところがあります。例えば、宗教です。あなたはどのようにして宗教を認めようとしないのでしょうか？あなたは聖書は選ばれた者たちのために書かれたとお考えのようだが、決してそんなことはないのです。聖書はすべての者のために書かれておるのです！」――

抗議します！ わたしは思わずドイツ語で口をはさんだ。「ルターが何に対して反対したのか、あなたはご存知なのでしょうか？ ルターを何よりも苦しめたのはバチカンが聖書をドイツ語に翻訳することを禁じたことなのです。つまり、十六世紀まで聖書はラテン語でのみ出版されていたのです。ヨーロッパで、選ばれた知識人や聖職者以外の誰がラテン語で書かれた聖書など読むことができたのでしょうか？ 普通のドイツ人やフランス人やイギリス人がラテン語を知っていたとでもいうのですか？ また、ロシアでこの禁止が解かれたのはいつだったのでしょうか？ 一番最初のロシア語の聖書がこの世に出たのは十九世紀後半になってからではありませんか！ わたしが言いたいのはこのことなのです。裁判長殿、地球の住民たちはその固有の発展の段階で時代によって様々な事象を崇拜してきました。それは太陽であったり、海や岩壁、草木、星、そして神であったりしたのです！ ソフォクレスやホメロスは自分の著作をキリスト教の生まれるずっと以前に書き著しました。で、かれらの著作の内容に何か反キリスト的な考えや呼びかけがあったのでしょうか？ それにまた、ソ連の作家たちは自分の著作を反キリスト教の教義ドグマに基づいて創り上げたのでしょうか？ ショーロホフを例にとりましょう。素晴らしい作家ですが、無神論者です。しかし、瀆神とくしん的なところは何も見出せないではありませんか。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教や他の宗教は、知性の発展のための知性の集中的な訓練なのです。知性の基本的、倫理的な基礎なのです。それはまた、意識の成長のための包括的な肥料なのです！ もしあなたのお仲間が心や思考の中から神をなくしたら、知性はこれほど高く飛翔することができたでしょうか？ いいえ！ できなかったのです！ 宗教こそが自分自身と世界との認識の深奥を開いてみせたの

です。そうして、キリスト教のルネッサンスは過ぎ去ってしまいました、あなたがたの多くは心の中に今後何十世代にもわたって『匿名のキリスト教』を大切に保存していくのです。わたしにとって宗教とは、知性の成長のための学校であり、プチブリ人の誰もが立ち寄ってもいい大学なのです。が、それ以上ではないのです！ もしプチブリ人が新しい生物学的種族を、その成員の一人一人が神的能力を有するように創りあげようとのぞむなら、宗教は新しいホモ・コスミカス個々人の私ヤイとなることでしよう。もし私が神ヤイとなることがないなら、宇宙でのしかるべき場所を占めることはないでしょう！ このわたしの希望はこの遠大なる計画の中でこそ実現されなくてはならないのです。あなたはこの計画をどれほどご理解くださり、またどれくらい賛同してくださることでしよう？ 一見したところこの計画は理解しやすいところが少ないように見えます。ですが、推測したりする必要はないのです。知性がちゃんと指し示してくれるでしょう。しかし、わたしが私ヤイを語るとき、それは愛他主義でも利己主義でもないのです。プチブリ人の哲学はニコライ・フョードロフの思想に似通っています。『自分のためにでも、他人のためにでもなく、みんなと共にみんなのために生きるべきである！』ですからわたしはあなたの判決をいただくことなくに焦っているのです。「少し考えてみてください。人類はその大部分が同じ語彙を使い、同じ感情を味わい、今あなたがお話しになったのと同じ道徳的問題について考えているのです。わたしたちの間にどんな違いがあるのでしょうか？」裁判長はなにか押し殺したような調子で訊ねた。「あなたがたはご自分の問題を神様になすりつけてしまわれた。何かあるとすぐに——例えば、取引の前とか、ご婦人とのデートとの前とか、仕事の面接の前とか、サッカーの試合の前とか、

カジノでの遊びの前とかといった生活のあらゆる出来事の前に——あなたがたは神にむかって助けを求めて祈るのです！　このようにしてあなたがたは自分自身を見失ってしまったのです。もし誰かが心の中に神を持つとういうなら、何も反対することはありません。ですが、あなたがたは生活のすべての面で、まるでお助け棒のように神を持つとうと望んでいるのです。つまり心と体の奴隷になってしまわれたのです。固有の私^ヤ、これも神があなたがたに贈られたものなのですが、その固有の私^ヤなしではあなたがたはプチブリ人にとって全く取り得のない存在となってしまうわたのです。神はあなたがたを自分の姿と同じように創り上げました。神はあなたがたに心も与えられたのです！　こうして地上の住人は全宇宙の中の特別な存在となったのです。すべての存在の父なる神はあなたがたの祈りにどんなにうんざりしていることか。いつも神に助けを求めるのをおやめなさい。そうして知性を独自に所有なさることです！　ご自分の私^ヤを見出だすことです！　そうすればあなたがたはご自分の父なる神を認識されることでしょう！　神とは、すなわち私^ヤなのです。何よりも人間たち自身のために、避けられないもの、進化的に有害なものを取り除くことをあなたに納得させることがわたしにできるでしょうか？」「何からお始めになりたいのですか？」「周囲を見回しながら、ほとんどささやくように裁判長は訊ねた。「もう既に何かご予定になつておるのですか？」「わたしは人間たちの遺伝子構成の中から物質的な豊かさを追い求める遺伝子を取り除くことから始めようと思います」「で、その次は？」「精神的な要求の遺伝子の全権を拡張します。かれらの知性が充分な速度で発育するためにです」「で、まだあるのですか？」「あなたはわたしの計画をよくご存知のほずです！　わたしに法廷の許可をください。わたしが考

えたことすべてを実行することをどうか信じてください！」「最後の質問です。弁護人によって提出された精神科医の鑑定は、お買い取りになったのですか？」「あなたはどのように決めてしまわれたのですか？」「わたしは緊張して耳をそばだてた。「もうこんな時間です。たぶん、判決を下すために少し席をはずしたほうがよさそうです。わたしの合図で審理の参加者すべてを議場に呼んでください。そしたら、判決を申し渡すことにしましょう！」わたしは美術館の中庭に出た。暗くてひんやりしていた。クレムリンの鐘が時を告げた。朝の三時きっかりだった。わたしはじりじりとして判決を待ち始めた。一刻も、早ければいいのだが！」

(二〇〇四年三月から五月、モスクワにて)

ドストエフスキイの作品が少し前に亀山郁夫の翻訳で現代の日本にブームを巻き起こしたが、ドストエフスキイに比肩できるような作家は現代のロシアにはいないのだろうか？『罪と罰』を英語から重訳して日本に初めてドストエフスキイを紹介した明治の作家・内田魯庵に不眠不休で作品を読ませたような牽引力を持つ作家を現代のロシアに求めるとすれば、いったい誰がその名に値するのか？このような疑問を持つ読者がいるとすれば、アレクサンドル・ペトロヴィチ・ポチョムキンという名のロシアの現代作家と、その作品『私^ヤ』（原題『Я』）という平凡な題名の付された中編小説が、その回答を与えてくれるに違いない。

二〇一三年の初めにロシアの雑誌『社会のエリート』に載ったインタビューによると、映画『戦艦ポチョムキン』と同じ家族名を持つこの作家が、ポチョムキンと名乗り始めたのはソヴィエト連邦崩壊前後の一九九〇年代初頭のことで、それまではクタテラツゼという父親の義父の家族名を使っていた。アレクサンドルは、ソ連軍の将校である父とドイツ人の母親のもとに、一九四九年、グルジアはアブハジア自治共和国の首都スフミで生まれた。母親は第二次大戦後ロシアに残ったドイツ人捕虜からなる勤労軍の一員として戦後のロシア再建のために一九五三年まで働いた。母親がドイツに戻った後、父親はすぐに亡くなった。帰国に際し、幼いアレクサンドルをドイツに伴うことを許されなかった母親は、彼

をソ連版の孤児院である「子供の家」に残さなくてはならなかった。その後アレクサンドルは祖母の手に戻り十七歳までをアブハジアで過ごしたが、日々の食べ物にも欠くという辛酸を舐めた。幼年期から少年期までの苦い経験は、『私^ヤ』の中に色濃く投影されているようだ。青少年収容所^{コロニ}に収容されることこそなかったが、子供の家にあった作者の経験は「パチンコでツグミを撃ったり、夕暮れにコルホーズの農場で盗んだキャベツの芯をかみ続ける少年カラマーノフ」として『私^ヤ』の中に再現されているのかもしれない。ポチョムキンというのは、祖母の最初の夫で、軍医であった人の家族名である。

現在、ポチョムキンはロシア科学アカデミー経済研究所主任研究員、そして、モスクワ大学の教授という肩書きを持つ学者である。また、成功したビジネスマンという顔も持っている。もともと大学ではジャーナリズムを専攻し、『コムソモール・プラウダ』紙の特派員として七年間働いた。が、一九七〇年代の末に国際赤十字社の助力で、妻とともに母親の住むドイツに渡り、ボン大学で経済学を修めた。これが第一の転換期である。いくつかの独ソ共同事業に参画したりして、ドイツで十六年ほど過ごした後、ロシアに戻ってきたのが一九九〇年代初頭で、第二の転換期にあたる。ボンではまた少年のころ祖母とともにタバコのプランテーションで働いた経験をもとに、モルダヴィア、アゼルバイジャン、殊にグルジアで採れる香り高い高品質のタバコを海外のタバコ会社に輸出する会社を設立して成功をおさめている。さて、ロシアに戻るとポチョムキンはモスクワ大学で経済学の博士号をとり、大学で教え始めた。そのポチョムキンが作家として作品を書き始めたのは一九九〇年代の後半から二〇〇〇年にかけてのことで、『私^ヤ』の原作『Я』は二〇〇四年に出版されている。つまり、略歴からすれば、ポチョムキンは三度、自分の人生行路を転換したことになる。

実業から転じて、作家という「虚業」に自分の後半生を費やした人として、即座に頭に浮ぶのは夏目

漱石で、漱石は『吾輩は猫である』で三十八歳でデビューしてから十年間に十編余の長編を書き上げた。ポチヨムキンもまた、漱石のように大学の教授職を投げ打つことこそなかったが、『私』の他に『離反者』(二〇〇三)、『悪霊』(二〇〇三)、『賭博者』(二〇〇四)、『机』(二〇〇四)、『偏執狂』(二〇〇五)、『人間廃止』(二〇〇七)、『隷属』(二〇〇九)等の中・長編小説を続々と書き続けている。最新作は『ロシアの患者』(二〇一二)である。

小説の冒頭は往々にして多くの重要な情報を含むものである。小説『私』第一ページ目で明らかにするのは、主人公の名前がワシーリイ・カラマーノフであることで、その名字に既にドストエフスキイの影響が見て取れる。カラマーノフという名字から連想されるのはドストエフスキイの長編『カラマーゾフの兄弟』で、カラマーゾフの綴りの中の一字を変えればカラマーノフとなる。ロシアのある批評家の言を借りれば、『現代資本主義社会に生きる主人公は、『ポケット(金)』の意味を持つ、カラマーノフと命名されなければならなかった』のである。次に明らかにするのは、『まるで誰かの賢明な声が神秘的なくらみでも秘めているかのように、このわたし、辛酸をなめつくしてうちひしがれた三十歳の男ワシーリイ・カラマーノフに、あの秘密の使命を遂行し、急いで自己実現すべきだとささやいたのだ』と、カラマーノフが自分の内面に自分とは別の第二の声を聞く人であることだ。さらに、カラマーノフという名の一人称の語り手「わたし」は「私」とは別個の存在であることで、「わたし」は「固有の私の探求」に三十年の人生を捧げてきたのである。「わたし」ではない「私」とはいったい誰なのか？そして、「わたし」の下した「ある決断」とは何なのか？ 第三ページ以降からは、「わたし」がその「決断」にいたった長い道のりが段落の一つもない異常に長い独白によって連綿と語られる。そして、「わたし」による「私」の探求とはいったい何か、「ある決断」とは何かという一種探偵小説的な興味で

読者は三ページ以降のカラマーノフの人生に耳を傾けることになる。この探偵小説的な趣向もドストエフスキイの得意としたところであることは、大学生ラスコーリニコフの金貸しの老婆の惨殺という犯罪から贖罪への物語である『罪と罰』が、昭和初期に探偵小説の翻訳を多く掲載した雑誌『新青年』に、探偵小説として紹介されていたことからわかることである。『カラマーゾフの兄弟』が父親殺しの犯人は誰かという探偵小説であることは言うまでもない。

さて、カラマーノフの独白は文体の特殊さにもかかわらず読者を惹きつける不思議な牽引力を持っている。冒頭の数ページを読み進めた読者はカラマーノフがありきたりの哀れな孤児にとどまらないことを知らされる。「五歳の時、父はフィンランド人の女性旅行者を強姦し、その夫にひどい肉体的な危害を加えた。北方の隣人と自らの祖国の市民にソヴィエトの司法機関の絶対性と厳格さを示すために、共產党の掟の女神は父に最高の刑を宣告した。父は銃殺された。すると、近所の人々はわたしを『変質者の末裔』と侮蔑的に呼びはじめた。六歳の時わたしは母を失った。母はこうした家族の恥辱のあと麻薬、つまり、近所の空き地のどこにでもはえていたケシの実を砕いたものに急激に依存するようになった。そして二十八歳の時、ケシの実の碎片の過剰服用であるアヘン中毒で死亡した。その時このような家族の歴史を知る人々がみな——それは町の大多数だったが——わたしを『忌々しいガキ』と呼び始めた。」カラマーノフは六歳にして両親を失った哀れむべき孤児ではなく、異常な両親を持った軽蔑すべき、憎むべき孤児として周囲の大人たちから排除されて育つ。ここにドストエフスキイの『虐げられた人々』のネリーをはじめとする「子供の涙」のモチーフを読み取ることもできる。が、ポチヨムキンのカラマーノフには『虐げられた人々』の薄幸な少女ネリーを救った小説の語り手イワンは現われず、「いったい自分以外に誰が孤児を守ってくれるのか！」と自己防衛の姿勢を早くから身につけるのだ。カ

ラマーノフ少年の自己防衛は次第に周囲への攻撃に変わり、地元の人々の楽しむサッカーの試合を妨害して青少年コロニーに入れられてしまう。そして、コロニーでは、冤罪により農場でただ働きをさせられたあげく、農場主の屋敷への放火未遂によって、ついに未成年犯罪者の入る収容所^{ライゲリ}に送られる。

『私』は二〇〇六年にフランスの老舗アシエット社から翻訳が出されており、カラマーノフ青年の生い立ちを記した小説の前半部分は「十九世紀のロシア文学を髣髴とさせる」文体で主人公の自己の覚醒が記されていると賞賛された。また、ロシア国内でも「これほど痛ましく、悲惨な少年時代の描写を久しく目にしていない」、中でも、「動物たちによって生まれて初めて愛情表現を知る主人公」の描写は詩の領域に入っているなどと絶賛された。が、前半の写実的なカラマーノフの少年時代の物語の核心は、主人公が周囲の大人たちに徹底的に排除され、カラマーノフもまた周囲の大人たち、正しくは人間たちを排除して、孤独の中で自らの思想を育て上げていくことにある。さらに重要なのは、その思想を育てる方法が「外見は人間と似ていながら非人間というステータスを捜し求める、経験によって賢くなった固有の私^ヤという存在」と「わたし」との間の対話であったことだ。小説の冒頭で自分の中に自分とは違う第二の声を聞く人の正体がここで明らかになる。バフチンによってドストエフスキイ文学の核として指摘された対話によるポリフォニーの状態をここで想起してもいい。小説『私』^ヤの中では、本来他者となされるべき対話は、自分の中のもう一人の「私^ヤ」との果てしない対話として小説を動かしていく原動力となるのだ。カラマーノフの独白は、この時から内省的、哲学的な色合いを強めていく。

後半は「十六歳で（書類上では、ほぼ十九歳）」で「自由の身になった」カラマーノフ青年が知識を求めて首都モスクワに旅立つところで幕が開く。舞台にも、また、カラマーノフの語りにも変化が現われる。「私^ヤ」との対話は、時に鮮烈で、示唆的な夢と形を変えて続いていく。モスクワに着いたカラマ

ーノフはワレンチン・セーロフ美術館の清掃人になり、ロシア国立図書館（旧国立レーニン図書館）の向かいの半地下室の清掃道具置き場に住居を定める。清掃の仕事が終わるや、カラマーノフ青年はすべての物質的な欲望に背を向けて図書館で読書に没頭し、思索にふける。ドストエフスキイの「地下室人」の登場である。ここで我々は、『私』という小説がソ連邦が解体し、ロシアが共産主義から資本主義へと移行する時代の変わり目に書かれたことに注目しなければならない。ポチョムキン^ヤは現代の「地下室人」カラマーノフを今のロシアではとうていありえないほど禁欲主義者な生き方をする若者として描いた。小説の後半で「人間の世界の誘惑を忘れ、見せかけの派手さに注意を払わず、贅沢を無視し、高位顕職を軽蔑し、富には興味を持たず、女性の前では心を閉ざし、賞賛には耳を貸さず、外見を屁とも思わず、この世の強者にも擦り寄らない、こんなロシア人がいるとでもいうのか？」とカラマーノフ自身にも自嘲させるほど、物質的な欲望を全否定する若者として描いた。カラマーノフは人間の欲望に際限がないゆえに、全人類を憎むのである。つまり、ポチョムキンはカラマーノフの反人間的な生き方を反資本主義的な生き方と等価のものとして描いたのだ。ここに『私』に込められた痛烈な社会風刺がある。資本主義的な生き方に狂奔するロシアの人々に作者は厳しい批判をあびせる。と同時に作者はロシアの人々の貧困も正確に描き出す。「現在、ロシア人労働者は年平均で八百ドル以上は受け取っていない」という経済学者でもあるポチョムキンの示す数字はロシアの現実を冷酷につきつける。ポチョムキンはロシアが資本主義経済の円熟期には程遠いことを百も承知で、カラマーノフを反資本主義者に設定した。さらに驚くべきことに、ポチョムキンはカラマーノフに新しい人類の創生という、ロシア人だけではなく全世界の人々を否定する目的を持たせた。現代の「地下室人」カラマーノフは人類Ⅱホモ・サピエンス（知性の人）に対するプチブリ人Ⅱホモ・コスミカス（宇宙の人）を創成を願い、プチブリ人の輪郭

を詳細に描き出すために、資本主義的な生き方を全否定して国立図書館で遺伝子学を研究していたのである。

社会批判だけを目的に書かれていたとしたら、『私』という小説はそれほど成功していなかったかもしれない。プチブリ人の創生のために遺伝子学を究める一方で、「地下室人」カラマーノフ青年は、孤独の中の「私」との対話に一旦終止符を打ち、「地下室」を出て、自分が否定しようとした人間たちを観察する旅に出る。ロシアのある批評家によると「さながら現代のドン・キホーテの如く」人間たちに立ち向かっていくのだ。小説の後半部分では、人間嫌いのカラマーノフ青年が、勇を鼓して、軍人、女性ブローカー、舞台俳優、政治家、映画監督、新聞の編集者たちと次々に接触していく過程を、ある時は悲劇的に、ある時は喜劇的に描き出す。この描写はロシア国内でも「我々が求めていた現代の英雄がそこにいる」との賞賛を得た。写実主義的な描写による陰鬱な前半とはうって変わった後半の喜悲劇は、ドストエフスキイがロシア文学の祖としたゴーゴリの作品『死せる魂』でチチコフが帳簿上だけ生存している農奴を買い集めるためにロシア各地を遍歴するという見立てを髣髴とさせる。ただ、カラマーノフとの接触で描かれるロシアの各界のエリートたちの描写は、その接触が短いだけに類型的になっ

てしまっていることは否めない。

ロシアではポチヨムキンの作品にドストエフスキイ的なモチーフを指摘する批評家は多い。そうした批評家の一人レフ・アンニンスキイは、ドストエフスキイの登場人物とポチヨムキンのその間に一つだけだが、大きな違いを見いだす。アンニンスキイは言う。「ドストエフスキイにあつてはロシアの文化を刺し貫く思想が、その主人公たちに理性を喪わせるほどの愛の熱狂と切り離せないものであるのに対し、ポチヨムキンにあつては（主人公たちによる）議論への熱狂は理性的な性格をもつだけで、個人

的に愛情という物質をもたないのだ」と。そして、なぜ、現代の我々に理性を絶対的に信奉するカラマーノフのような英雄が必要なのだろうか、という根源的な問いを発している。だが、小説『私』を読み終えた我々は、主人公カラマーノフがどれほど「愛」を渴望したのかを知っている。主人公に全人類を憎むように仕向けたのは、母への愛を見出そうとした女教師に残酷に裏切られたからである。主人公が理性だけを信奉し、知性人という嘘名をもつ人類の絶滅を望むようになったのも、犬や豚という人間以外の動物によってしか愛を与えられなかったからである。そして、人類観察の旅に出た主人公がすべての人間たちに絶望しそうになった時、ふと故郷プチブリが心に浮び、自分の中に人間に対する寛容さが芽生え、「ある機能を持った臓器としての心臓ではなく、何かを感じ取るものとしての心」が開かれたと作者はカラマーノフに悟らせるのだ。議論に満ち、知性を絶対視するかに見えるこの一編の小説の底を流れるのは「愛を感じる人間の心」の覚醒の物語である。ポチヨムキンの主人公カラマーノフの議論への熱狂は愛への熱狂と表裏一体をなしている。

そして現代の最もドストエフスキイ的な小説『私』は『カラマーゾフの兄弟』同様、裁判の場面で幕を閉じることになる。しかも、その裁判は「わたし」という主人公の作り出した想像上の人物らの議論の応酬からなるのだ。ここにいたってカラマーノフの頭の中で繰り広げられる対話は見事にポリフォニーを織り成すことになる。裁判の場面はまたゴーゴリの『狂人日記』のポプリーシチンが失恋のショックで自分をスペインの王様であると思い込んで精神病棟に叩き込まれたことを想起させ、「すべては狂気の為せる業である」という複線が織り込まれているようにも見える。裁判の結果を待ち焦がれるカラマーノフに裁判長は言う、「最後の質問です。弁護人によって提出された精神科医の鑑定は、お買い取りになったのですか？」と。ポプリーシチンは最後まで自分の正気を疑わなかったが、カラマーノフは

果たして、自分の正気をいつまで保つことができるのだろうか？

『Я』の翻訳が出版されたフランスでは、日本でも作品がいくつか翻訳されている現代ロシアの人気作家ヴィクトル・ペレーヴィン（一九六二年生まれ）、ウラジーミル・ソロキン（一九五五年生まれ）とポチヨムキンの名前を並べ、ペレーヴィン、ソロキンが親プーチン派らによる出版妨害を受けたのに対して、「貧しい虐げられた少年が矯正施設での過ごすうちに、超人類という新しい種族を創り上げる人」という驚異的な望みを懷くようになり、果ては、ソヴィエト連邦同様、現代ロシア社会に生きる人間たちすべてに絶望するなどという内容の小説が『われら』という新組織に編入された『プーチン親衛隊』の妨害行為にあわなかったのはロシア社会に健全な思想が育ちつつある事の証であろうか」とした記事をヴォーグ誌が載せている。

ポチヨムキン氏の出版社から「現代の最もドストエフスキ的な作家とされるポチヨムキンの作品を日本語に翻訳紹介してくれる人を探している」として、『私』『人間廃止』『隷属』の三つの作品が添付されたメールが大学のメール・ボックスに入っているのを、私が見つけてからもう一年半が過ぎようとしている。メールを受け取った頃、私はシドニー大学での日本語レクチャラーの任期を終え、息子と主人の住むブリスベンに戻って仕事を探していた。私はこれまで二十年余にわたって日本語を教えてきた。また翻訳研究を十年余も続けている。今まで英語を習い、ロシア語を習い、日本語を教え、ロシア文学の翻訳を研究してきた私が、まだやり残していることは翻訳の実践である、そう思って私は翻訳をすることにした。翻訳をしている間、私が研究対象とした二葉亭四迷の談話がいくつも頭をかすめた。「ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を会得して、厳しく云へば、行住

座臥、心身を原作者の儘にして、忠実に其の詩想を移す位でなければならぬ」と二葉亭は『余が翻訳の標準』で語っているが、実際翻訳をしていた五ヶ月間は他に何の本も読まずひたすらこの作品の声に耳を傾け続けた。また、二葉亭の翻訳実践にならって、三人称代名詞「彼」「彼女」はできる限り使わず、ロシア語の動詞形については原文の時制をできるだけそのまま再現することをこころがけた。だが、五ヶ月間坐り続けた結果、腫物ができて座れなくなり、私が学んだ日ソ学院長の東郷正延先生の編纂された研究社の露和辞典は真つ二つに裂けてしまった。

出版にさいしては群像社の島田進矢氏にはひとかたならずお世話になった。島田氏はまたオーストラリア滞在二十五年で少々調子の狂い掛けていた私の日本語とロシア語に根気強くおつきあいくださった。心からお礼申し上げます。なお、原書では二十七歳になっている冒頭の主人公の年齢を作者の指示により三十歳に変更したことを一言付け加えておく。また、この小説に出てくる地名は、新しい人類の発祥の地であるプチブリも含めて、すべて実在のものである。これは作者ポチヨムキンが遺伝子による新人類の創造を願う主人公を現実的に描こうとしたことを表わしている。さらに、ポチヨムキンは、遺伝子による新人類の創造とは作中人物の超現実的な空想ではなく、作者自身の実現可能な理想であり、また信念でもあるとインタビューで述べている。

（コックリル浩子）

群像社ライブラリー 32

ヤー
私

2013年11月28日 初版第1刷発行

著 者 アレクサンドル・ポチョムキン

訳 者 コックリル浩子

発行人 島田進矢

発行所 株式会社 群 像 社

神奈川県横浜市南区中里1-9-31 〒232-0063

電話/FAX 045-270-5889 郵便振替 00150-4-547777

ホームページ <http://gunzosha.com> Eメール info@gunzosha.com

印刷・製本 モリモト印刷

Александр Потёмкин (Aleksandr Potemkin)

Я (Ya)

I

Copyright © A. Потёмкин, 2004

First Japanese edition published in 2013 by Gunzosha.

ISBN978-4-903619-45-3

万一落丁乱丁の場合は送料小社負担でお取り替えいたします。

アレクサンドル・ポチョムキン

1949年、アブハジア自治共和国の首都スフミで生まれる。幼い頃に父と死別、戦後のソ連でドイツ人の母と共に暮らすことができず孤児となる。大学でジャーナリズムを専攻して卒業後は新聞の特派員として働いたあとドイツに移住し、事業家として成功をおさめた。1990年代初頭にロシアに戻り、モスクワ大学で経済学の博士号を取得して教授となり、小説も書き始める。2004年にみずから経営する出版社から刊行した『私』は2006年にはフランス語に翻訳されて高く評価された。ロシアでもポチョムキンの作品にドストエフスキイ的なモチーフを指摘する批評家が多く、『悪霊』、『賭博者』、『偏執狂』、『人間廃止』などの作品を次々と発表し、ロシアの現代作家のなかで独自の地位を得ている。最新作は『ロシアの患者』（2012）。

訳者 コックリル^{ひろこ}浩子

愛知県立大学卒業、高校教員を務めたあと、日ソ学院（現 東京ロシア語学院）、モスクワのプーシキン記念ロシア語研修所でロシア語を学び、1988年からオーストラリア在住。クィーンズランド大学で博士号取得、シドニー大学などで日本語を教え、現在はクィーンズランド大学名誉研究員。共著に『日本の翻訳論—アンソロジーと解題』（法政大学出版会）がある。

オデッサ物語 バーベリ 中村唯史訳

オデッサを支配した偉大なギャングたちの伝説、虐殺された鳩の血とまぶしい太陽の鮮烈なイメージに彩られた少年時代のユダヤ人街の記憶。20世紀はじめにロシアで熱狂的支持を受けたバーベリ。黒海沿岸の国際都市から生まれたロシア文学のもうひとつの世界。

ISBN4-905821-40-1 1800円

眠れ ペレーヴィン 三浦清美訳

コンピューターゲームの世界に入りこんだ官庁の職員、自我に目覚めて成長しはじめる倉庫、死の意味をめぐって怪談話をつづける子供たち……麻薬的陶醉の世界からチベット仏教までとりこんで哲学的な幻想世界へと飛翔する、20世紀末以降ロシア文学の話題をさらいつづける作家のデビュー中短編集。

ISBN4-905821-41-X 1800円

滅びの都 ストルガツキイ 佐藤祥子訳

万人の幸福を目指すために作られた実験都市に国を捨てて集まってきた人間たちをまきこんで続発する奇怪な事件。人工的な国際社会で大統領補佐官にのぼりつめた主人公の運命は？ ストルガツキイ兄弟最後の長編。

ISBN4-905821-42-8 2000円

虫の生活 ペレーヴィン 吉原深和子訳

人が虫をじっと見ていると虫の姿は人に変わり人は虫になる。地球はフンコロガシに押されるフンの球。虫たちの対話が引き出すこの世界の姿はかぎりなく小さく深い。現代ロシアを代表する気鋭の作家がきわめる愛と冒険にあふれた虫の世界！

ISBN4-905821-44-4 1800円

ざわめきのささやき ナールビコワ 吉岡ゆき訳

月並みな表現で成立するのは水準以下の人間関係。言葉そのものがエロスを堪能するときに男と女の新たな関係と均衡が生まれる。新しい散文世界を生む女性作家が父と子と一人の女性をめぐってえがきだす恋愛小説の極限。

ISBN4-905821-43-6 1800円

詩集石/ エッセイ 対話者について マンデリシュタム

早川真理訳 20世紀はじめのロシア詩の「銀の時代」をになった詩人の第一詩集。言葉を石として積み上げる詩の建築で時代の亀裂に垂直に立つ世界文明を思い描いた詩人の作品とツェラン、ブロッキイらその後の20世紀詩人たちの光源となったエッセイを併録。

ISBN4-905821-45-2 1800円

オード クーチク たなかあきみつ訳

「この作品は生態系のカタストロフをめぐる思索であり、盛期ロシア古典主義の詩学と疎外という現代的な音色が息をのむほど融合している」とブロッキイに評された長編詩。古典的詩法を蘇らせながら現代詩に新たな空間を切り開いた海への謳歌。

ISBN4-905821-46-0 1500円

巨匠とマルガリータ (上・下) ブルガーコフ 法木綾子訳

公園の無神論談義が文学界の頭目の首をチョン斬ることになると話はにわかに二千年の時を超え総督ピラトと囚人イエスの対話をたぐりよせる。モスクワに舞い降りた悪魔とともに巨匠を救うマルガリータの愛。ロシアを揺さぶり世界の注目を集めた20世紀屈指の傑作。

上巻 ISBN4-905821-47-9 1800円

下巻 ISBN4-905821-48-7 1800円

リス 長編おとぎ話 **アナトーリイ・キム** 有賀祐子訳
獣の心にあふれた人間社会で森の小さな救い主リスは四人の美術学校生の魂に移りながら、生と死、過去と未来、地上と宇宙の境目を越えた物語を愛する人にきかせる。折り重なる言葉がうみだす幻想的世界。 ISBN4-905821-49-5 1900円

アフマートヴァ詩集 白い群れ／主の年 木下晴世訳
戦争と革命の嵐が吹き荒れるなか幾多の苦難を詩と共に生きぬいたロシアを代表する女性詩人。詩の叙情性が圧殺されてゆく時代を前に、自らの精神的営みを言葉に紡ぎだしていった初期二篇。 ISBN4-905821-61-4 1800円

詩集トリスチア／エッセイ 言葉と文化ほか **マンデリシュタム**
早川眞理訳 過去の言葉を死に追いやる新しい時代。その文化的な飢餓状況のなかで、ロシア文学の原点プーシキンから古代ローマのオウィディウスまでも現代化してみせる詩の「発掘力」を示した第二詩集と言葉論。 ISBN4-905821-62-2 1800円

ヴェロニカの手帖 **アイギ** たなかあきみつ訳
生まれてすぐのまだ語り出す前の娘と、言葉が生まれる前の世界のふるえを知る詩人が共に過ごした最初の半年。そのかけがえのない時に交わされた視線と微笑と沈黙に捧げられた詩と絵の掌編。 ISBN4-905821-63-0 1500円

私のなかのチェーホフ **アヴィーロフ** 尾家順子訳
チェーホフから作家としての力を認められ、夫と子どもの面倒を見ながらチェーホフとの交際を続けた女性がつづる文学と恋と友情の回想。微妙な関係がチェーホフ作品の人間喜劇のように人生を浮かび上がらせる。チェーホフの手紙、本邦初訳のアヴィーロフの短編も収めた新編。 ISBN4-905821-64-9 1800円

春の奔流 ウラル年代記① **マーミン＝シビリャーク**
太田正一訳 ヨーロッパ・ロシアの辺境ウラル山脈の山間をぬって走る急流で春の雪どけ水を待って一気に川を下る小舟の輸送船団。年に一度の命をかけた大仕事に蟻のごとく群がり集まる数千人の人足たちの死と背中合わせの労働。息をのむ緊張感が目の前に繰り広げられるロシア特有のルポルタージュ文学。 ISBN4-905821-65-7 1800円

現代ウクライナ短編集 藤井悦子 オリガ・ホメンコ編訳
ロシア文化発祥の地でありながら大国ロシアのかげで長年にわたって苦しみを強いられてきたウクライナ。民族の独立をめざすなか、みずからの言語による独自の文学を模索してきた現代作家たちが、繊細にまた幻想的に映しだす人々と社会。現代ウクライナを感じる選りすぐりの作品集。 ISBN4-905821-66-5 1800円

裸の春 1938年のヴォルガ紀行 **プリーシヴィン** 太田正一訳
人間社会が一気に暗い時代へなだれこむとき、生き物に「血縁の熱いまなざし」を注ぎつつける作家がいた。雪どけの大洪水から必死に脱出し、厳しい冬からひかりの春へ命をつなごうとする動物たち。自然観察の達人の戦前・戦中・戦後日記。 ISBN4-905821-67-3 1800円

それぞれの少女時代 ウリツカヤ 沼野恭子訳

体と心の変化をもてあましながら好奇心いっぱい大人の世界に近づいていく、ちょっとおませな女の子たち。姉にいじわるをしたり、女の先生に恋心をいだいたり……スターリン時代末期のソ連で精一杯生きていたそんな少女たちの素顔をロシアで人気の女性作家が小さな物語につむぐ。

ISBN4-903619-00-1 1800円

魔女物語 テッフィ 田辺佐保子訳

昔からロシアでおなじみの伝説の妖怪魔物が現代人の心に忍び込んで、世にも妖しい物語が生み出されてくる！ モダンでおしゃれなユーモア短編で20世紀初頭ロシアの人気作家となり、革命後は亡命先のパリで活躍を続けた女性作家の不思議な魅力あふれる連作短編集！

ISBN978-4-903619-11-8 1800円

アレクサンドル・プーシキン／バトゥーム

ブルガーコフ 石原公道訳 社交界の花だった妻をめぐるトラブルから決闘で死んだロシアの国民的詩人プーシキンの周囲にうごめく人びとのドラマと、若きスターリンを主人公に地方都市バトゥームでの労働運動を描いて最終的に上演を許可されなかった最後の戯曲を新訳。

ISBN978-4-903619-15-6 1500円

プロコフィエフ短編集

サブリーナ・エレオノーラ／豊田菜穂子共訳 突然歩き始めるエッフェル塔、キノコ狩りの子どもと一緒に迷いこんだ地下王国……。ロシアを代表する作曲家が書いていた不思議な魅力にあふれた11編を日本で初めて紹介。日本滞在中の日記もおさめた「目で聞き耳で読む」世界！

ISBN978-4-903619-16-3 1800円

猫の町 ナリ・ポドリスキイ 津和田美佳訳

猫の記念碑が建てられるほど猫をこよなく愛していた町で人間が猫に襲われ猫インフルエンザのウィルスが見つかり、町は検疫で封鎖され町の住人は猫殺しにはしりはじめた…。感染パニックにおちいる現代社会を30年前に予見していたミステリー小説。

ISBN978-4-903619-17-0 1500円

ルイブニコフ二等大尉 クプリーン短篇集

紙谷直機訳 ルイブニコフと名乗る日露戦争からの復員軍人。これは日本人スパイにちがいないとにらんだジャーナリストは、男のしっぽをつかもうと街を連れ回すが…。表題作ほか、死と日常の同居する生活の真の姿を描いた佳作四編をおさめた短篇集。

ISBN978-4-903619-20-0 1800円

宇宙飛行士 オモン・ラー ペレーヴィン 尾山慎二訳

月にあこがれて宇宙飛行士になったソ連の若者オモンに下された命令は月への片道飛行！ アメリカのアポロが着陸したのが月の表なら、ソ連のオモンは月の裏側をめざす。ロシアのベストセラー作家が描く奇想天外、自転車乗りの宇宙旅行。

ISBN978-4-903619-23-1 1500円

寝台特急 黄色い矢 ペレーヴィン 中村唯史・岩本和久訳

子供の頃にベッドから見た部屋の記憶は世界の始まり。現実はいつも幻想と隣り合わせ。私たちが生きているこの世界は現実か幻想か。死んだ者だけが降りることのできる寝台特急に読者を乗せて疾走するペレーヴィンの初期中短編集。

ISBN978-4-903619-24-8 1800円

アダムとイヴ／至福郷 ブルガーコフ 石原公道訳

毒ガスを使った世界戦争が勃発したあと、わずかに生き残った人間たちは何を選択するのか？ タイムマシーンで23世紀の理想社会に迷い込んだ人間たちが巻き起こした混乱から脱出する試みは成功するのか？ ブルガーコフが描く二つの未来劇。

ISBN978-4-903619-31-6 1500円

俺の職歴 ゴーシチェンコ作品集 ロシア文学
翻訳グループ クーチカ訳

革命で激変した世の中で、ひしめきあって暮らす労働者や都会に流れ込んできた地方出身者は、つっぱって背伸びして生きていた。どこにでもいそうなドジなオジサンたちや奥様気取りのオバサンたち。そんなロシア庶民の日常を独特の語り口で描いた人気ユーモア作家の日本初の作品集。

ISBN978-4-903619-33-0 1500円

森 ウラル年代記② マーミン＝シビリャーク

太田正一訳 ユーラシアの心臓部ウラルでは鳥も獣も草木も、人も山も川もすべてがひとつの森をなして息づいている…。きびしい環境にさらされて生きる人々の生活を描いた短編四作とウラル出身作家ならではのアジア的物語を二編おさめた大自然のエネルギーが生んだ文学。 ISBN978-4-903619-39-2 1300円

クコツキイの症例 ある医師の家族の物語 ㊤㊦ **ウリツカヤ**

日下部陽介訳 墮胎が違法だったソ連で多くの女性を救おうとした優秀な産婦人科医が患者だった女性と娘を引き取って生まれた家族。だが夫婦の関係は次第に歪み、思春期に入った娘は家を出る…。家族につきつけられる生と死の問題を見つめたロシア・ブッカー賞受賞の話題の長編。

ISBN978-4-903619-42-2 / -43-9 ㊤ 1800円 ㊦ 1500円